

エジプト・アラブ共和国 アブ・シール南地区における
丘陵頂部および周辺遺跡の調査

(課題番号:10041036)

平成10年度～平成11年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(2)）研究成果報告書

平成12年3月

研究代表者 吉 村 作 治
(早稲田大学人間科学部教授)

はしがき

研究組織

- 研究代表者：吉村 作治（早稲田大学人間科学部教授）
研究分担者：菊池 徹夫（早稲田大学文学部教授）
研究分担者：高橋龍三郎（早稲田大学文学部教授）
研究分担者：近藤 二郎（早稲田大学文学部助教授）
研究分担者：高宮いづみ（早稲田大学文学部講師）
研究分担者：秋山 慎一（早稲田大学商学部講師）
研究分担者：長谷川 奏（早稲田大学理工学総合研究センター講師）
研究分担者：白井 則行（會津八一記念博物館助手）
研究分担者：長崎 潤一（札幌国際大学人文社会学部助教授）
研究分担者：中川 武（早稲田大学理工学部教授）
研究分担者：西本 真一（早稲田大学理工学部助教授）
研究分担者：柏木 裕之（日本学術振興会特別研究員）
研究分担者：森 啓（東北大学総合学術博物館教授）
研究分担者：井龍 康文（東北大学大学院理学研究科助教授）

研究経費

平成10年度	9,100千円
平成11年度	7,800千円
計	16,900千円

研究発表

(1) 学会誌等

Yoshimura, S. and Takamiya, I. H., "Waseda University Excavations at North Saqqara from 1991 to 1999", *Abusir and Saqqara in the Year 2000*(forthcoming).

Kashiwagi, H., "Architectural style and construction order of the monumental building of Khaemwaset", *Abusir and Saqqara in the Year 2000*(forthcoming).

Yoshimura, S. et. al., "Waseda University Excavations at North Saqqara: A Preliminary Report on the sixth season, July-September 1997", 『エジプト学研究』第8号(印刷中)

Yoshimura, S. et. al., "Waseda University Excavations at North Saqqara: A Preliminary Report on the fifth season, July-September 1996", 『エジプト学研究』第7号, 5-28頁, 1999年3月

吉村作治他

1998 「早稲田大学第4次アブ・シール丘陵頂部発掘調査概報」 『ヒューマンサイエンス』 vol. 10, No. 2, pp. 117-130.

1999 「早稲田大学第5次アブ・シール南丘陵頂部発掘調査概報」 『ヒューマンサイエンス』 vol. 11, No. 2, pp. 93-107.

(2) 口頭発表

吉村作治・高宮いづみ、「エジプトの最先端考古学—「ダハシュール北遺跡」「アブ・シール南遺跡」など—」、『古代オリエント世界を掘る（第6回西アジア発掘調査報告会・報告集）』、日本西アジア考古学会、1999年12月、62-66頁

吉村作治、「エジプト最先端考古学—ダハシュール北遺跡、アブ・シール南遺跡—」、『古代オリエント世界を掘る（第5回西アジア発掘調査報告会・報告集）』、日本西アジア考古学会、1998年12月、62-66頁

吉村作治・齋藤正憲、「第8次アブ・シール南丘陵頂部遺跡発掘調査（日本オリエント学会第41回大会発表要旨）」、『オリエント』42巻2号(印刷中)

柏木裕之、「古代エジプト・アブ・シール南丘陵頂部から検出された石造建造物の建築的特徴について（日本オリエント学会第41回大会発表要旨）」、『オリエント』42巻2号(印刷中)

(3) 出版物

吉村作治他、『エジプトを掘る—それをめぐる様々な学問分野—』、第14回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会、2000年1月

高宮いづみ、『古代エジプトを発掘する』、岩波新書、1999年4月

序文

文部省科学研究費補助金の助成を受け、継続してきた発掘調査は、昨年の夏期調査によって8回に及ぶ発掘調査を実施し、いくつかの重要な成果を挙げた。特筆すべきものとしては、第19王朝の高名な王子カエムワセトが建てた石造建造物と第18王朝に年代づけられる日乾煉瓦で作られた建物址を掘り当てたことであろう。前者の建造物は、歴史にその名を残した人物に関わる点において極めて重要であるだけでなく、建物自体が一風変わったつくりをしており、建築史学における意義もはかり知れないものがある。カエムワセト王子は古建造物に深い造詣を持っていたとされ、後世において賢人として語り継がれた人物であり、彼の歴史観や建築観に直に接することができたことは、われわれにとっても望外の喜びであった。

一方、ここ2、3年の調査では、後者の建物址の周辺の調査が主たる課題であった。この建物は残念ながら非常に残り具合が悪く、辛うじて全体プランをつかめるだけであった。しかし、周辺の発掘調査によって、この建物が壮大な建造物であったことが明らかとなった。周囲の地山を基壇状に削り出したその建物は、朽ちやすい日乾煉瓦で作られていたにもかかわらず、かつては石造建造物に匹敵する、あるいはこれを凌駕するものであったことが分かってきたのである。

日乾煉瓦遺構の周辺の発掘調査によって出土した遺物も素晴らしいものであった。トトメス4世の名を刻んだ美しい一連の石碑（ステラ）は、歴史的な意義が深いことは言うに及ばず、その美術史的な価値も極めて高いものである。また、色鮮やかな彩画片や、膨大な数のファイアンス製のタイルは、この建物がかつて美しく飾られていたことを彷彿とさせる。

この日乾煉瓦の建造物は、出土遺物の観察によって、第18王朝中期に建てられたものと考えられる。当然、われわれが最初に手がけた石造建造物が建てられた時にすでに、この建物がそびえていた可能性が考えられる。これまでは、カエムワセト王子が孤立した丘陵の頂部を建造用地に選んだ理由として、ピラミッドを一望に収めることのできる、その眺望が第一の理由として考えられてきた。しかし、ここ2年間の調査の結果、王によって建てられた可能性のある、この日乾煉瓦の建造物の存在が大きく作用していたことを考慮せざるを得なくなった。いずれにしても、当アブ・シール南丘陵頂部遺跡は、第18王朝から第19王朝にわたって機能したことが明らかになったのであり、同地域の研究史に新たな一頁を加えることとなった。

本報告は、以上のような成果をとりまとめたものであり、こうしたとりまとめができたことは、アブ・シール南丘陵頂部遺跡の調査が大きな区切りの時期を迎えた今、意義深いことと言える。区切りというのは、発掘調査が一定の回数を重ね、遺跡の全貌を考える時期ということの他に、遺跡の保存修復を真剣に考えるべき時期にきたという意味を持っていると考えている。われわれの手がけた遺構は、その残存状況は極めて悪いものの、歴史的には第一級のものである。従って、その保存の問題を避けて通ることは許されないとの認識を持っている。

遺跡の保存修復については、近年大きくクローズ・アップされている一方で、その時間的・資金的負担によって、必ずしも成功を取めたものばかりではない。世界的な関心が集まるであろうエジプトでも遺跡保存ともなれば、なおさら難しい問題が出てくるであろう。つまり、この作業によって、われわれの真価が問われることになるが、10年にもわたってこの遺跡に向き合ってきたという実績がわれわれにはある。調査チーム一丸となってこのハードルを乗り越えたいものである。そして、そうした時はじめて、来るべき21世紀を乗り越えられる研究組織が確立することになると期待している。

なお、本報告は、研究代表者及び研究分担者が、それぞれの担当箇所を執筆した。また、編集については、研究組織を代表して、吉村作治がこれにあたった。

アブ・シール南丘陵頂部遺跡第7次発掘調査成果報告

1. 第7次発掘調査及び出土遺物の概要

1. 調査組織

1998年7月8日から9月19日の日程で、アブ・シール南丘陵頂部遺跡の発掘調査が行なわれた。これは、1991年より継続して行なわれてきた調査であり、今回で第7次の発掘を迎えた。

隊員構成は以下の通りである。

隊長: 吉村作治 早稲田大学人間科学部教授

隊員:

- 〈考古班〉 近藤二郎 早稲田大学理工学総合研究センター客員講師
 - 高宮いづみ 早稲田大学文学部講師
 - 秋山慎一 早稲田大学商学部講師
 - 齋藤正憲 早稲田大学本庄高等学院講師
 - 白井則行 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程2年
 - 家原弥生 早稲田大学大学院文学研究科修士課程3年
 - 馬場匡浩 早稲田大学大学院文学研究科修士課程1年
 - 〈建築班〉 柏木裕之 日本学術振興会特別研究員
 - 遠藤孝治 早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程1年
 - 佐藤雅彦 早稲田大学大学院理工学研究科修士課程1年
 - 〈地質班〉 井龍康文 東北大学大学院理学研究科助手
 - 〈測量班〉 内田賢二 株式会社ジェック
 - 〈記録班〉 狩野吉和 有限会社フレンズ
 - 小峯昌二 株式会社アイビス
 - 〈渉外〉 西川厚 早稲田大学古代エジプト調査室嘱託
 - Mohamed Ashry 株式会社アイビス
 - 〈準隊員〉 青木美千子 早稲田大学第一文学部史学科考古学専修2年
 - 高橋寿光 早稲田大学第一文学部史学科考古学専修2年
- 担当インスペクター: Sabry Farag

2. 調査の目的と方法—発掘区の設定—

前回調査までに、第19王朝のカエムワセト王子に帰せられる石造建造物の発掘が概ね完了している状況にあった。さらに、第5次発掘調査では、石造建造物の西側には日乾煉瓦による家屋（以下「日乾煉瓦家屋」と呼ぶ）が、北西の高台には日乾煉瓦遺構（以下「日乾煉瓦遺構」と呼ぶ）が、それぞれ検出されていた。後二者の日乾煉瓦による建造物については、これまでにその一部が確認されているのみであった。今次調査では、以上の状況を鑑み、日乾煉瓦による遺構の規模を確定することが重要な課題として認識されていた。したがって、発掘区は主に西側と北側とに拡張された（図1）。

なお、北側への拡張に際しては、第6次調査時に検出されていた石材列（以下「ペイブメント」と呼ぶ）の延長を確認するとともに、建造物創建当時の地形形状を確認することも併せて目的とされた。

3. 発掘の経過及び検出遺構（図2）

3-1. 石造建造物西側の発掘及び検出遺構

ここでは、①日乾煉瓦家屋の西への延びを確認し、家屋を完掘すること、②既に南東コーナーが確認されている日乾煉瓦遺構の南壁及び南西コーナーを確認すること、が目的として掲げられていた。まずは第一の課題をクリアすべく、3Eグリッド及び2Eグリッドの発掘より着手した。ここは、第5次調査の段階で既に発掘調査が進められてきたが、南北方向に幅2mのベルトがグリッド西端に残されていたところである。まずは、これらの除去より発掘を開始した。

ベルトの除去に続いて、発掘区はさらに西へと拡張され、結果的に、新たに2の部屋と1つの付属施設が検出された（図2, 3）。第5次調査の終了までに、空間 a ~ f という形で既に検出されていた部分を呼称していたので、これに続けて、Room g、Room h、Room i という名称を付し、発掘を継続した。以下、発掘の経過を報告する。なお、部屋名称については、図11を参照のこと。

上層の攪乱層を取り除くと、溶けた泥煉瓦により構成される堆積が現れた。さらに掘り進めると、その下からは、形状を留めた泥煉瓦と天井材（植物の圧痕を有する泥塊）の堆積が認められた¹⁾。これらは、泥煉瓦家屋の倒壊の過程を物語る重要な堆積とされ、建築班を中心として、その観察・図化が試みられた。詳細については建築班の報告に譲る。

Room g は第5次調査で既に出土していた Room c と壁体により仕切られていが、仕切壁の中央付近に開口部が設けられていたようであり、したがって、Room g へは Room c より出入りしたものと推測される。一方で、その南側の Room h へと続く開口部が設けられていた痕跡は認められていない。Room g と Room c を分ける仕切壁は、その南端付近で、煉瓦が張り出す形で積まれており、壁龕のような機能を有していた可能性がある。しかし、何かが埋められていた明瞭な痕跡は認められていない。また、一部破壊されていたものの、床は泥を塗って仕上げられていた。なお出土遺物としては、倒壊泥煉瓦の下から土器片がややまとまって出土した

1) 天井材については、すでに第5次調査において出土が認められていた[吉村他 1999:97-98]。これまでのところ、こうした天井材はすべての部屋の覆土に認められるわけではなく、Room c, g, i に限定されている。このことから、一部の部屋にのみ屋根が架けられていたものと推測される。

他は、出土遺物は認められない。

Room h は、発掘区の関係で既にプラスター²⁾を塗布した空間の存在が認められていたが、今回の発掘調査によってその全貌が明らかになった。すなわち、1 m×2 m程の空間が煉瓦1枚分高く造られており、その空間にのみプラスターが塗られていたのである。Room h の西側（プラスターの塗られた箇所以外）では、むしろ床面の仕上げは粗雑であった。

Room h と Room b とを仕切る壁体については、その南端部分が幅20cm程開かれており、Room b へと通ずる通路を成していたことが分かる。

また、Room h の南壁の西部では、石灰岩を用いた敷居が造られていたことが判明した。これまでに、Room c の南東コーナー付近に造られた入り口部分と併せ、この家屋が2つの入り口部を有することが判明した。基本的な構造は同一であるが、軸受けの設け方に差異が認められる。すなわち、Room c の敷居には、向かって右側に軸受けが穿たれているのに対し、今期調査で検出された Room h の敷居では、向かって左側に軸受けが設けられているのである。

Room h からは、供物卓と無装飾のステラが検出された他は、目立った出土遺物はなく、さらに Room g で認められたような土器片はあまり出土していない。これが機能の差を示すのか、残存状況の違いを示すのかについては、現在不明である。

Room i は中央付近に築かれた壁体により、南北2つの空間に分けられる。1 m×1 m程の北側の空間では、明瞭な床面は検出されなかった。また、南側の空間は、その南端を示す壁体が検出されておらず、全体の規模は不明である。南側の空間ではその北東部に長方形の掘り込みが検出された。この掘り込みの性格は不明であるが、その覆土中より比較的多数の土器片が検出されている。この掘り込みは深さ40cm程で終結し、その北側面は、床面と同様に泥を塗って仕上げられていた。その底面は岩盤に至っていた。

以上の結果、当家屋は、Room c 及び Room g より構成される一角と、Room h 及び Room b で構成される一角とで成り立っていたことが判明した。基本的に2室で一つの単位を構成していたと考えられる。また、全体としてはこの2つの単位が集合した形で家屋を構成し、さらに両者は直接的に行き来することができない点が注目される。

さらに、Room c の南側には、前庭のような形で Room a が続き、Room g の西側には Room i が付属している。但し、Room g と Room i は直接的には連結されてはおらず、このことから Room i は独立した施設（倉庫のような施設?)であったことが推測される。

日乾煉瓦家屋の北側では大きな攪乱坑が認められた。日乾煉瓦家屋の建てられたダツカを壊してさらにその下の岩盤まで到達する攪乱であった。興味深い点は、その攪乱坑の断面の観察によりもたらされた。すなわち、攪乱坑を大規模な版築により埋め立て、日乾煉瓦家屋を建てるスペースを確保したかのような状況が示唆されるのである。攪乱坑の規模や形態、性格等は、現在不明であるが、日乾煉瓦遺構との関わりも注目される。来期の大きな課題の一つである。

2) ここでは仕上げに用いられている、肌理が細かく、より強固に固定される漆喰をプラスターという呼称を便宜上用いている。その詳細については科学分析等で確認する必要がある。

なお、発掘の過程で、3 Eグリッド南西コーナー付近には、大型の石材を並べた配列が認められた。発掘時には2つの石材が残されるのみであったが、周囲に残された痕跡からは、少なくとも4つの石材が並べられていたことが分かっている。地山直上に乗っていたものの、その軸線は日乾煉瓦家屋のそれと一致しておらず、築造時期、性格については不明である。写真記録及び位置記録を済ませた後、これらの石材は除去された。

また同地区の発掘では、日乾煉瓦家屋の発掘に伴い、高台の日乾煉瓦遺構の南壁の検出を目指しての発掘も行なわれた。これは、主に2 Fグリッドにおける発掘である。残念ながら、この周辺は大きく攪乱を受けており、南壁の検出には至らなかった。いくつかの攪乱坑の発掘により、現代の遺物が検出され、このことから、同地域の攪乱は現代の軍事基地設営に伴うものであったことが分かる。

そこで、1 Fグリッドへとさらに発掘を拡張し、日乾煉瓦遺構の南壁或いは南西コーナー部を検出し、日乾煉瓦遺構の規模を確定することが目指された。ここでも、攪乱の影響は大きく、南壁及び南西コーナー部の検出には至らなかった。しかし、西壁の一部が検出され、全体の規模が確定した。建築班による計測に基づけば、東西22mの規模を測る建造物であることが明らかとなった。

3-2. 石造建造物北側の発掘

石造建造物の北側では、以下の3つの作業が行なわれた。

- ①石造建造物北側の地山形状の確認（0 C、0 Bグリッド）
- ②「ペイメント」の延長の確認（9 E、9 Dグリッド）
- ③日乾煉瓦遺構の北東コーナーの検出（9 Fグリッド）

以下、それぞれの作業の経過と、その結果検出された出土遺構について概観する。

①石造建造物北側の地山形状の確認（0 C、0 Bグリッド）

石造建造物の北側は、これまでも発掘を試みていたが、今期調査でも継続して発掘調査を試みた。

すでに、石造建造物外壁基礎レベルまで掘り下げてあったが、未だ黄色の細砂層が厚く堆積している状況にあり、元来の地形を推測することはできなかった。そこで、今期調査では0 Cグリッドを中心に更なる掘り下げを行ない、旧地形の把握を目的とした。この作業は、石造建造物の更なる理解にも貢献するものであることが期待された。

あまりにも土量が多く、今期中にグリッド全域で掘り下げを完了することはできなかった。0 Bグリッドより傾斜して落ち込むダッカ面上までの発掘を行なって、全体の作業は終了した。ダッカ上の堆積状況は、ダッカ直上に赤褐色荒砂層（地山由来と考えられる）が堆積し、さらにその上に石灰岩チップ層が堆積、そのさらに上層には、厚く黄色の細砂層が厚く堆積するという基本層序が確認された。チップ層は石造建造物北側外壁と接する形で堆積しているものである。その形成が石造建造物造営後であることは確かであるが、どのくらい

後なのかは不明である³⁾。しかし少なくとも、この石灰岩チップ層が形成された時点での丘陵頂部の地形は、現状見られるものとは大きく異なっていた可能性が高いと言えよう。

このダッカはポルティコ前面及び北側で既に検出されている地山面上に堆積するものと思われるが、後述するように、サブ・トレンチの範囲では、地山の存在は認められていない。つまり、地山面とダッカとの境界は明らかにされていないのである。来期以降の課題である。

最後に2 m×5 m程のサブ・トレンチを穿ち、ダッカ以下の堆積状況の理解が目指された。結果、部分的ではあるが、ダッカの下には20cm程の黄色細砂層が堆積しており、さらにその下には、岩盤が確認された。今期確認された岩盤のレベルは、今期の発掘前のレベルより2 m程も低く、元来の地形より考えると、3 mあまりも低い。このことから、石造建造物は大きく落ち窪んだ旧地形を大きく埋め立てて建造用地を確保している可能性を示唆している。これは、石造建造物北側外壁が入念に造られていたことと呼応していよう。来期以降、さらに状況が明らかにされることが期待される。

また、サブ・トレンチを入れ、ダッカを一部掘り崩した際、彩色プラスター及び土器片が検出された。これらは新王国時代の遺物であると考えられ、しかも後世の遺物が混入している様子は認められない。したがって、このダッカは新王国時代に形成されたものであると推測される。現状想定されるのは、このダッカが石造建造物造営に伴って形成された可能性であり、そうであるならば、以後ダッカを掘り進めていくと、第18王朝の遺構や遺物が検出されることも考えられる。これも、来期以降、明らかにされるべき課題と言える。

今期の発掘調査によって、少なくとも、サブ・トレンチの地点では、地山層の存在が認められず、直接岩盤に至った点も注目されよう。1. 元来地山が露出していたのか、2. 本来岩盤上に堆積していたであろう地山層が人為的に取り除かれたのか、については、現時点では不明であるが、仮に後者であるとすれば、この周辺で堅坑などが検出される可能性もあろう。

OBグリッドでは、地山面までの発掘を今期中に完了することができた。多くのレリーフ断片の出土があったものの、石造建造物に関わる施設は検出されなかった。

②「ペイブメント」の延長の確認（9E、9Dグリッド）

第6次発掘調査において、性格不明の石畳（通称「ペイブメント」）が検出されていた。このペイブメントはODグリッドを中心に検出され、一部1Dグリッドに及んでいた。南の端は検出されていたものの、さらにグリッドを越えて北方へと伸びていることが確認されている。

今期調査では周辺のグリッドをさらに北に拡張し（9E、9Dグリッド）、ペイブメントの北端を検出し、全体の広がりを検出することが目的とされた。第6次発掘調査と同様に、地山傾斜面上に厚く堆積する泥煉瓦層の除去を当該グリッド全域で行ないつつ、ペイブメントの検出に努めた。ここでは、日乾煉瓦遺構の検出及び、地山傾斜面に日乾煉瓦遺構と関わる施設が存在するか否かを確かめることが、同時に目指された。

3) こうした石灰岩チップを用いる工法については、第4次調査の時にその状況が明らかにされた、ポルティコの東側で検出されたダッカとの関連が想起される[吉村他 1998:121]。しかし、ポルティコの東側ではより細かなチップを泥とともに叩き締めて、ダッカを作り出しており、全く同一ではない点を注意すべきであろう。

発掘を進めた過程では、第6次調査と同様に、末期王朝時代に比定される遺物群が多数出土した。ファイア
ンス製品（アミュレット、容器片）や銅製品が中心を占めるが、特に目立った遺物は完形のナオスである。銘
文からは、このナオスが末期王朝時代に比定されると考えられる（後述）。これらの遺物を含む堆積層の年代
を決定する上で重要な情報であろう。また、末期王朝時代に比定される、比較的保存状況の良い土器群も検出
されている。

ただし、地山傾斜面上には、日乾煉瓦遺構に関わる施設は検出されなかった。現状では、地山傾斜面は、建
造物創建当時、剥きだしの状態を呈していたと考えざるを得ない。

なお、今期の発掘の結果、パイプメントは全長25mにも及ぶ大規模な建造物であることが判明した。また、
9Eグリッド以北にもパイプメントがさらに続くことも明らかになった。この遺構の全貌把握は、さらに来期
調査へと持ち越されることになった。

③日乾煉瓦遺構の北東コーナーの検出（9Fグリッド）

9Fグリッドでは、地山をカットして形成された高台の傾斜面上に厚く堆積する泥煉瓦層を除去する作業と
ともに、日乾煉瓦遺構の北東コーナー部の検出が目的とされた。これは、日乾煉瓦遺構の形状を明らかにする
とともに、この遺構の南北規模を確定するためである。日乾煉瓦遺構は表層直下にその基礎部だけが辛うじて
残されている状態にあり、数cmの堆積を除去するだけで事足りたので、比較的容易に目的を達成することが
できた。

結果、日乾煉瓦遺構南北25mを測ることが判明した。同建造物の西側壁体基礎部の一部が検出されたことと
併せ、全体の規模がおよそ25m（南北）×22m（東西）であることが知れた。また、1.1mの幅を有する突部
が規則的に壁体の外に付されていたことも明らかとなった。この突部について、「パレス・ファサード」を形
成するものとこれまでは推測されてきたが、間隔と規模からはそうした状況は想定され得ない。むしろ、バツ
トレスのような機能が想定されよう。

0F、1Fグリッドを中心に、日乾煉瓦遺構の内部の発掘も行なわれた。ここも、僅かな堆積を発掘し、比
較的速やかに発掘を終了させることができた。しかし、今回の発掘では、煉瓦遺構の内部には、仕切りなどの
建造物の痕跡は認められなかった。現状では内部は土砂により充填されていたと想定せざるを得ない。来期以
降、0G、9Gグリッドが発掘されることにより、何らかの知見が得られることが期待される。

また、日乾煉瓦遺構の北東コーナー部では、円形のピットが検出された。日乾煉瓦を壊して穿たれたそのピ
ットから、遺構の性格・年代などを決定する手がかりが得られることが期待されたが、遺物の出土には至らな
かった。

このように丘陵頂部には、カエムワセト王子の石造建造物に匹敵する規模の建造物がもう1基建てられてい
たことになる。測量班の指摘よれば、この日乾煉瓦遺構の規模は、石造建造物の西側遺構部分（ポルティコを
除いた部分）とほぼ一致すると言う。このことは、両者の密接な関係を暗に示すものであり、今後、日乾煉瓦
遺構の性格を見極めることで、石造建造物に対する理解が一層深められることが期待される。

9Fグリッド北東コーナー部付近では、地山傾斜面を下ったところに煉瓦による配列が認められた。これは
第5次調査次に1Eグリッドにおいて確認された煉瓦配列に呼応するものである可能性もあるが、現状では、
その建造時期や性格は不明である。なお、周辺からは焦土と思われる暗紫色の細砂の堆積が認められた。周辺

で火を使った活動が行なわれた可能性が指摘されるが、少なくとも、煉瓦配列の形状そのものからは、この施設が元来炉として機能していたとは考え難い。

4. 出土遺物の概要

4-1. レリーフ (図5～10)

4-1-1. 壁面装飾

第7次発掘調査では、総計102点のレリーフが出土した。これらは、O Bグリッドにおける発掘によりもたらされた。出土位置より推測される限り、ポルティコ北班部を飾っていたものが大半を占めるものと考えられる。

特に目立った出土例は、いわゆる「湿地」の場面に分類されるものである。AK07-O616はパピルスの茂みに遊ぶ水鳥を刻んだものである。また、AK07-O888は捧げ物をする2柱のハピ神が描かれている。ハピ神が供献する先にはパピルスの茂みとそこで卵を温める鳥やマングースなど(?)が描かれており、これらの神々が何に對して供物を捧げているかは不明である。第2次調査時に検出された大型ブロック(カエムワセトが女神に捧げものをする様子を描いたもの)に登場する人物よりも小さく描かれているおり、特殊な形で図像に組み込まれていたことが推測される。

なお、今次調査において「湿地」の場面の断片が多く検出されたことで、このモチーフがポルティコの南壁と北壁の両方に刻まれていたらしいことがより明瞭に推測されるに至ったが、同時に南北差も明らかになった。すなわち、これまでに出土していた、南壁を飾っていたと推測される断片には、魚のモチーフが頻繁に登場するのに対し、今夏に検出された例では鳥のモチーフが多く検出されたのである。したがって、南壁には魚、北壁には水鳥という使い分けが存在した可能性が高いのである。こうした表現方法が盛んに用いられたのか否か、類例を集めてみる必要があるが、カエムワセト王子の獨創性が反映されているとすれば、極めて興味深い資料となる。少なくとも、ポルティコの南半部と北半部では異なった異なったモチーフを刻んでいた可能性が示唆されよう。

なお、供物の場面を表す断片も多く出土した(41点)が、これらは小断片が多く、これまでの解釈に変更を迫るような有益な断片は少なかったように考える。しかし、ケケル・フリーズを刻んだ断片(AK07-A629, A630, A631)は注目される。結論を導くにはさらに検討が必要であるが、これまでに「浅浮彫」に分類された例(古王国時代のブロックの再利用と考えられる)とは異なって、比較的深い彫りを呈している。カエムワセト王子の石造建造物の壁面装飾に、ケケル・フリーズの装飾帯が組み込まれていた可能性を考慮に入れる必要ができたと言える。

4-1-2. ナオス

9 Eグリッドからは完形のナオスが出土した(AK07-O408)。祠堂を象った正面には、2柱の神々(向かって右がオシリス神、向かって左がプタハ神)が銘文とともに刻まれていた。神像の顔面にはピンク色のプラスターが塗布され、その上に黒色顔料で眉などが加筆されていた。これが何を意味するのか(転用の可能性を示唆するのか否か)は不明である。また、ブロック側面にはイシス女神(右側面)とハトホル女神(左側面)それぞれ刻まれていた。こちらは比較的浅く彫られ、繊細な印象を与えている。羽を広げた2柱の神は、このナ

オスを守護しているかのようである。

このナオスは、上層ではあるが、末期王朝時代の遺物を多く内包する堆積中より検出されており、これらの遺物の年代を決定する上で重要な示唆を与えてくれるものと思われる。

4-2. ステラ

これまでもいくつかのステラが検出されていた。今回検出された例（AK07-O104）は完形品で、トトメス4世がソカリス神に供献する様子を描いたステラであり、これまでに出土したトトメス4世銘の刻まれたステラと同様のスタイルで刻まれている。同じ意味合いを有するステラと解釈できよう。なお、このステラには一部青色の顔料が残されており、元来彩色を施されていたものと推測される。

もう1点完形のステラが検出された（AK07-A625）。こちらは、かなり平滑に表面が仕上げられているものの、レリーフは全く刻まれていない特殊なステラであった。このステラは一見、未完成の状態のまま放置されたもののように思われるが、出土位置（3E日乾煉瓦家屋 Room h プラスター床直上）周辺からは、丘陵頂部で製作されたことを示す痕跡（すなわち工具や石灰岩チップ片）は検出されていない。日乾煉瓦家屋は第19王朝以降に比定される可能性が高く、したがって、このステラはそれ以前に製作されたものが、当該の場所に持ち込まれた可能性が示唆される。なお、この「未完成の」ステラは、他のトトメス4世の銘の刻まれたステラとほぼ同じ規格を有することから、これまでに検出された一連のステラ（上述 AK07-O104を含む）と同様のものと見做すこともできよう。これは、トトメス4世の銘を有するステラが第18王朝に製作された可能性をも示唆していよう。

4-3. ファイアンス製品

4-3-1. ファイアンス製タイル

タイルについては、これまでに観察されていたような断片が多く検出された。しかし、復原については難航しており、現状に新たな知見をつけ加えるような断片の出土には恵まれていない。今後、新たな断片が出土するとともに、詳細な復原作業を継続してゆく必要があるだろう。

4-3-2. ファイアンス製アミュレット

第6次発掘調査に引き続き、日乾煉瓦遺構の周辺より多くの末期王朝時代に比定される諸遺物が出土した。これまでと同じく、これらの中心を占める遺物がファイアンス製アミュレットであった。特に目立ったタイプは「ウジャトの眼」を象った小像である。ウジャトの眼のアミュレットは第6次調査から継続して出土しており、日乾煉瓦遺構の東～北方を中心に密な分布を示している。少なくとも、日乾煉瓦遺構の北東コーナー部分が、末期王朝時代の丘陵頂部における人間活動の一つの中心であったことが示唆される。

今期の発掘調査により、アミュレットについては、その出土のピークを過ぎたものと考えられる。一応のメドがついたことが推測される。高台の北側斜面、南側斜面、西側斜面よりの出土が限られているのである。今後、データを整理を進める過程で、何らかの傾向が抽出されることが望まれる。

4-3-3. ファイアンス製容器

またファイアンス製容器も検出された。これも、第6次調査よりの継続である。容器片については小断片が多く、器形を復原できる例は少数に限られる。残りの良いいくつかの断片（AK07-O536, O545）は小型碗に復原されるものと思われる。また、小壺に復原されるもの（AK08-O642）は、その胴部には押圧によって銘文が作り出されているが、判別は不可能である。

4-4. 彩画片

彩画片に関しては小断片を含めると、242点が検出された。これは第5次調査から続く傾向である。器物を描いた断片（AK07-A309, A552他）や植物を表現した断片（AK07-O049他）などが注目されよう。

他に目立ったモチーフとして、有翼獣を描いた断片（AK07-O041, O042, O043, O046他）が注目される。第6次調査及び第7次調査の際に出土したこれらの彩画片は、体長70cmにも及ぶ大柄の四つ足動物を描いている。黄色地に赤色の斑点を持つ動物で、背中には翼が描かれている。詳細については別項に譲るが、日乾煉瓦遺構を飾っていた壁画にこうした宗教的なモチーフが含まれることは意味深いであろう。加えて、赤地に青色の斑点を持つ動物の一部と思われる断片（AK07-O045, O110, O194）も出土しており、この有翼獣と対をなすモチーフが描かれていた可能性も指摘される。

4-5. 銅製品

銅製品については、前回調査出土分も併せて、比較的大型の断片を中心に、錆落としを試みた。その結果、いくつかの断片についてはその本来の形が推測されるまでに清掃できた。

目立った銅製品として、コイン（AK07-O015, O033）や銘文が残された板状の銅製品（AK07-O051, O122）、シチュラ（AK07-A152, A154）、あるいは銅製の鏃（AK07-O681, O717, O729）などを挙げるができる。また、ともに高さ8 cmほどを測るオシリス神像（AK07-A094）や冠を象った小像（AK07-A098）なども注目される。銅製の神像については、この他にもいくつかの小断片が認められ、多くの神像がこの遺跡に残されたことを窺わせる。

残念ながら、単体で決定的な年代の基準となる例は認められていないが、今後、類例を検索してゆくことで、何らかの結論が導き出されることが期待される。

4-6. 木製品

木製品で目立ったものは、木製のウシャブティ(?)である。近藤二郎氏の指摘によれば、第17王朝に比定されるという。他に、明確に同時代に比定される遺物が出土していないので、明言はできないが、日乾煉瓦遺構の造営年代を考察する上で、無視できない情報であろう。

4-7. 土器

4-7-1. 日乾煉瓦家屋出土の土器

第5次発掘調査時には、日乾煉瓦家屋からは、全く遺物が出土しなかった。しかし、今回西半部に発掘を拡張した結果、いくつかの部屋より土器片が出土した。土器片と床面の間には砂が挟まるものの、日乾煉瓦家屋

の性格、年代等を考察する上で重要な遺物であると認識されたため、発掘終了後の整理作業において、優先課題の一つに数えられた。

4-7-2. 土器集中

第5次発掘調査において日乾煉瓦家屋の北側より土器集中が検出されていた。今期調査ではこの続きと思われる土器群が検出された。これら土器集中は新王国時代に比定されることが推測されており、石造建造物或いは日乾煉瓦遺構との関わりで、非常に重要な資料を形成するものと考えられた。しかし、期待された程の数量が検出されたわけではなく、これまでの見解に大きな修正を迫るものではないことが推測される。

4-7-3. 0 E、9 E、9 F 泥煉瓦層出土の土器

日乾煉瓦遺構北東コーナー周辺の、地山傾斜面に流れ込むように堆積する層位からは、多量の土器片が出土した。これらは、末期王朝時代に特徴的な（或いは新王国時代には見られない）器形を多く含み、かつファイアンス製品とともに出土したことから、末期王朝時代の土器群と推測された。付近より出土したナオスも、このことを裏付けていよう。

また、AK07-A191には黒色顔料による彩文が見られる。何かの動物を描いたこうした彩文土器は、コプト時代に類例が知られる [Petrie 1909:Pl. LII]。

2. 出土遺構

1. 概要

本稿は、エジプト・アブ・シール南地区の丘陵頂部で実施された第7次発掘調査のうち、建築に関する調査を整理、報告するものである。建築班は、建築的な観点から遺構や遺物の分析を主たる責務とし、柏木裕之（日本学術振興会・特別研究員）、遠藤孝治（早稲田大学大学院博士後期課程1年）、佐藤雅彦（早稲田大学大学院修士課程1年）の3名がこれにあたった。調査は前回までに出土した遺物の整理作業、丘陵頂部の発掘調査、さらに今期出土の遺物整理、の大きく3つに分けて進められた。以下、これに沿って報告したい。なお本章は3-2-3. 日乾煉瓦遺構の節を遠藤孝治が担当し、他を柏木が執筆した。

2. 前回調査までの出土遺物の整理、分析

前回までに出土した遺物はサッカーラ考古事務所協の倉庫と、丘陵頂部に保管されている。発掘調査に先立つ7月中には、倉庫内に保管された建造物に関わる遺物を対象に、整理、分析を行い、発掘調査開始後は丘陵頂部に保管された建材を中心に観察、分析を行った。

2-1. 木片

今調査では第4次から第6次までに取り上げた木片について観察をおこなった。なお第5次の木片についてはすでに基本的な整理作業が終了しており、それを踏まえて実測等を補完した。

第4次から第6次を通して、出土した木片はそのほとんどが石材の連結に使われた鼓型のクランプであった。これまでのところクランプはポルティコと外壁で用いられたことが確認されており、出土した位置もこれに対応していた。本遺構の石材は後世に再利用を目的とした収奪が行われており、おそらくその際に不要となるクランプは周囲に捨てられたと考えられる。クランプの出土位置はその行為を反映しているものといえる。クランプは2つの石材の上面に穿たれた穴の中に納められ、隙間には土器片や石灰岩チップ、あるいはモルタルが詰められた。そのため石材が自然に倒壊したならば、中央で半裁された状態を呈するはずであり、本遺構から出土した中に中央から半裁された破片が含まれているのはこのためと考えられる。一方完全な形で検出されたクランプ片も多数検出された。自然の倒壊でこのように完全な形を保つとは考えにくく、むしろ意図的にクランプを取り外し、周囲に廃棄した可能性が高い。これは石材収奪の際、壁体がまだ立ち上がっており、これを破壊しながら石材を運び出したことを示唆しているといえる。今時調査では全クランプのうち当初の規模がある程度推測できる遺物のみを考察の対象にし、実測、分析を行った。以下に観察したクランプを列挙する（第5次については考古班第5次報告参照）

<クランプ片：一覧>

AK04-A083	外壁北：一部	長さ不明、厚さ15mm
AK04-A243	外壁南あるいはポルティコ南側壁：完形	長さ210mm、厚さ14mm
AK04-A246	外壁南あるいはポルティコ南側壁：完形	長さ212mm、厚さ13～15mm
AK04-A257	外壁南あるいはポルティコ南側壁：完形	長さ220mm、厚さ15mm
AK04-A329	外壁南あるいはポルティコ南側壁：完形	長さ215mm、厚さ15mm
AK04-A335	外壁南あるいはポルティコ南側壁：完形	長さ220mm、厚さ15mm
AK04-A336	外壁南あるいはポルティコ南側壁：一部	長さ不明、厚さ15mm
AK04-A382	外壁南あるいはポルティコ南側壁：完形	長さ226mm、厚さ35mm
AK04-A386	外壁南あるいはポルティコ南側壁：完形	長さ210mm（推定）、厚さ19mm
AK04-A387	外壁南あるいはポルティコ南側壁：完形	長さ228mm、厚さ35mm
AK06-O038	外壁南：完形	長さ180mm、厚さ20mm
AK06-O044	外壁南：一部	長さ不明、厚さ11～17mm
AK06-O053	外壁南：完形	長さ210mm、厚さ35mm
AK06-O107	外壁北：一部	長さ不明、厚さ25mm
AK06-O108	外壁北：完形	長さ180mm、厚さ35mm
AK06-O109	外壁北：完形	長さ175mm、厚さ18mm
AK06-O115	外壁北：一部	長さ約200mm（推定）、厚さ25mm
AK06-O117	外壁北：完形	長さ180mm、厚さ20mm
AK06-O167	外壁南：一部	長さ不明、厚さ17mm
AK06-O168	外壁南：一部	長さ不明、厚さ18mm
AK06-O177	外壁南：完形	長さ150mm、厚さ15mm
AK06-A639	：一部	長さ 厚さ

これらから伺われる傾向は、長さは210mm 前後と180mm 前後の2種類に分かれること、板状の薄い木材が多いこと、である。特にポルティコから検出されたクランプが比較的厚みをもっていたことを想起すると、板状を呈したクランプは外壁に用いられていた可能性が指摘されよう。場所によってクランプの種類が異なっていた可能性が考えられ、建造の違いを示す例として注目される。

クランプ以外の木片については第5次において用途不明ながら興味深い木片が観察された。一つはおそらく土饅頭型に復原される木片の一部で、断片の観察からは中央に一辺約5 cm の方形のほぞ穴がすばまった側から穿たれていた。この穴が貫通していたのか、あるいは途中で止まっていたかについては不明である。この木片の機能についても現在分析中である。

第6次に検出されたクランプ以外の木片としては、日乾煉瓦家屋から小枝の一部が検出されている。おそらく日乾煉瓦家屋の天井下地材として使われた小枝と考えられる。いずれも本格的な加工の痕跡は認められず、自然の枝のままであった。

2-2. 倉庫内大型石材の観察

倉庫内に収納された大型石材は、レリーフの刻まれた石灰岩とヒエラティック・インスクリプションの記された石材に大別され、いずれもレリーフ面や記載文字のトレースなどの資料化が済んでいる。しかしながら石材に関する情報については必ずしも十分とは言い難く、第2次調査整理作業で石材の規模が計測されたにすぎない。

発掘調査ではこれまでに多数の石灰岩ブロックが検出されているが、攪乱が著しく、当初の位置を把握できない場合が多い。その中であってレリーフは当初の位置を想定できる可能性が高く、重要な資料である。そこで第6次調査までに運び込まれた大型のレリーフを観察、資料化する事にした。作業は時間の関係から、発掘調査開始前に第4次調査以後の石材を、発掘調査終了後に今期出土分と残る石材について行った。

2-3. 泥モルタルの観察

2-3-1. 第6次出土大型泥モルタル片

9Eグリッド東側5mからは第6次調査において大型の泥モルタルが検出された。出土位置からみて高台の日乾燥瓦遺構の部材と考えられる。厚さ約35mmの泥がコの字型に周り、外側3面には白色のプラスターが1mmから5mm程度の厚さで塗られている。興味深いことにその上に再び20mmから25mm厚の泥が周り、やや厚めに白色のプラスターを下地として黄色を帯びた細粒状の仕上げモルタルが塗られている。隅はいずれも丸みを帯び、むしろ円弧に近いほどである。断面の観察の結果、3面の仕上げのうち一方の側面では、内部の白色モルタルが再び外側に向いていることが分かった。

一方泥モルタルの内部では日乾燥瓦があたっていたと思われる痕が認められたが、整然と積む、あるいは敷き並べられた状態ではなく、むしろ乱雑に入り込んでいた印象が強い。

現時点ではこの泥モルタル片が建造物のどの位置を占めていたのかを特定するに至っていない。少なくとも一度改変が行われたことは確実であり、泥モルタルだけでなく、これが備わっていた建造物自体の改築を示す事柄として興味深い。

2-3-2. 彩色泥モルタル片

彩色を伴う泥モルタルは、石造建造物の西側に築かれた日乾燥瓦の遺構に起因するものと思われる。今調査ではそのうち、これまでに検出された彩色泥モルタル片のうち、立体物について断面形状のトレース、写真撮影を行った。残念ながら小片である上、出土点数が限られているため全体の復原には至らなかったが、なお分析を進め日乾燥瓦遺構の性格の解明に役立てるつもりである。

2-3-3. 第5次西側日乾燥瓦造家屋c室出土の天井痕付き泥モルタル片

第5次調査では石造建造物の西側、日乾燥瓦家屋c室内の床直上から天井下地材の圧痕が明瞭に残る泥モルタルが多数検出された。いずれも厚さ2～5cmの泥で、一方の面は平坦に、他方の面に下地が残っていた。圧痕は太さ約5mmから2cm程度までの葦や茎が同一方向に並べられている状態を示しており、それらを束ねた紐の痕も観察された。これらの痕跡から、比較的細い植物を約5mmの縄を用いて直径約4cmに束ねた下地材が想定された。

一方平坦な面には彩色などは観察されず、表面の様子などからこの面は天井の内側の面ではなく、屋根面と判断された。

2-4. 石造建造物・奥室内の花崗岩ブロック

石造建造物の中央部・奥室からは2点の花崗岩ブロックが検出されている。一点にはレリーフが刻まれ、銘文を担当した考古班の分析や平面全体の検討から花崗岩碑として奥室の西壁に据えられていたと考えられている。もう一方の花崗岩については整形された平坦面をいくつか有するものの、レリーフなどの装飾は認められていない。さらに前者の銘文付き花崗岩ブロックの下敷きとなって検出されたため、作業上の安全等に配慮し十分な検討が行われてこなかった。

この2点以外に第4次調査では石造建造物北側から銘文の刻まれた花崗岩片が検出されている。摩耗が激しく銘文は不鮮明であったが、カエムワセトの名を読みとることができ、また文字列の幅などが奥室から検出された花崗岩ブロックと酷似しているため、両者は同一個体と判断された。この花崗岩ブロックを調査した西本真一助教授により両者が接合する可能性が指摘され、今次調査ではこの確認作業も合わせて行われた。確認作業はこの花崗岩ブロックの割れた面をシリコンを用いて型をとり、これに石膏を流し込むことで割れた面を再現した。その後奥室に横転している花崗岩ブロックの該当する面に石膏を当て、検証する手順で進められた。接合具合を確認したところ、両者は必ずしも密着したわけではなかったが、少なくとも矛盾を示す点は見あたらなかった。第4次調査で検出された花崗岩は奥室から数十メートル移動されており、その間にいくらか欠損した可能性を考慮すると、この二つの花崗岩は接合すると見なして差し支えないだろう。これにより花崗岩碑の横幅は約160cmと復原され、これは花崗岩碑が据えられていたと考えられる奥室西壁の規模とも一致する。今後は高さの割り出しと具体的な設置状況の復原が課題といえる。

設置状況の復原においてはレリーフの刻まれた花崗岩ブロックの下敷きになって発見された、無装飾の花崗岩の検討が不可欠である。出土状況から判断して銘文付きの花崗岩ブロックとセットになって据えられていた可能性が高く、両者を総合的に考える必要がある。現在このブロックの役割として一種の台が挙げられるが詳細は不明である。今時調査では作業の安全性に配慮して、このブロックの詳細な観察は行わなかった。次回以降に、上に乗った銘文付き花崗岩を取り除いて資料化をはかる必要がある。

2-5. 再利用石材の分析

これまでの調査から石造建造物を構成していた石材は、ほぼすべて周囲に存在していた古い建造物からの再利用であることが分かっている。しかしながらその入手先の特定は未だ十分ではない。今次調査では本遺構で使用された石材のうち、古建造物の痕跡が認められる建材を対象に分析をすすめ、また周囲の古建造物を訪れることによって石材を実際に観察し比較考察を行った。以下概略を報告したい。

2-5-1. 第5次出土のポルティコ柱礎石

ポルティコの北側半分は、床敷石がすべて取り除かれ、周囲からそれらの断片と思われる石材が多数検出された。このうちポルティコの外側、北西から出土した未完成の柱礎石2点は半円形平面をし、曲面をなす部分に風化した面が認められた。柱礎石はこの風化した曲面を削って作り出そうとしており、この風化は古い建造

物で生じたものと判断された。すなわちこの曲面は旧建造物における形状を保っている可能性が高く、これを手がかりに搬入先の特定作業が進められた。建築班の遠藤より、サフラー王（第5王朝）ピラミッド葬祭殿の外周壁笠石からの転用の可能性が指摘され、その確認を行った。

作業は出土柱礎石2点の外形を透明フィルムにトレースし、サフラー王ピラミッド葬祭殿内に倒壊している外周壁笠石に重ね合わせて行われた。その結果、柱礎石に残る風化面の曲率とサフラー王の笠石と一致し、また風化の状態にも共通点が見られた。この作業には地質・古生物班の井龍博士にも加わって頂き、微化石の視点から二つの石材は基本的に同一との回答を得た。そのためこの柱礎石はサフラー王の葬祭殿・外周壁の笠石から転用されたと結論づけられた。

ポルティコには合計16本の柱が林立していたと考えられるが、すべての柱礎石がこの笠石を転用したわけではない。笠石の場合、外形は半円形を呈するが、ポルティコに残る柱礎石では当初直方体であった可能性が高い石材が用いられている。また風化面も二つの柱礎石の接合面に認められ、むしろ壁体を構成していた石材であった可能性が高い。しかしながら風食の様子は類似しているため、同じ外周壁の壁体部が用いられた可能性が高いが、なお検討を要するといえる。

2-5-2. ポルティコ石材の転用先について

石材の搬出先を調査する過程で、ポルティコの柱材と酷似する石材が発見された。場所はウナス王のピラミッド葬祭殿参道の南側で、斜面に散乱していた。周囲には発掘の廃土と思われる土砂が堆積しており、これらとの関係は定かではない。今後は時間の都合で十分な調査が実施できなかったが、石材の転用先の解明に繋がる資料として注目される。来期以降本格的に調査することが望まれる。

2-6. その他

すでに観察の終了した柱小片、及び日乾煉瓦は、倉庫内の収納スペース事情と相まって今回丘陵頂部に戻すことになった。作業は8月2日の午後行われ、丘陵頂部北側に集められた日乾煉瓦の脇に、収納箱22個に分けて移動した。

3. 発掘調査（図1, 2）

3-1. 石造建造物

石造建造物の発掘調査はこれまでに6回を数え、全体規模や構成が把握できるまでに至っている。第7次調査では石造建造物のうち遺構の保護の観点から部分的な試掘に留まっていた北外壁の内側（南面）について精査が行われた。

この部分は石造建造物を取り囲む外壁のうち、北側の壁体にあたり、外側（北面）が堅固な石組みで築かれている。一方それと対を成す南面ではこれまでのところ同様の石組みは認められず、上面からみる限り、石灰岩の小片を壁体の列と垂直に約2m間隔で並べられている様子が観察された。こうした石列の構築時期と役割についてはこれまでのところ不明である。

またポルティコの北側壁の北側部分の発掘も行われ、ポルティコを構成していた石材が多数検出された。建築的には未完成のアバクスが出土し、柱の構築手順の解明に重要な資料となった。また第4次調査でポルティ

この前面から出土した、古王国時代のレリーフ大型ブロックについてもこの移動に伴って各面を観察することができ、未完成のアーキトレーフと判断された。詳細は3-3において記したい。

3-2. 日乾煉瓦建造物（図3）

3-2-1. はじめに

第5次調査において石造建造物の西側域から日乾煉瓦による遺構が2棟検出された。一つは石造建造物の北西の高台に築かれた「日乾煉瓦遺構」で、もう一つがこの南側、別の言い方をすれば石造建造物の西側に造営された「日乾煉瓦家屋」である。いずれも部分的な発掘にとどまり、全体規模や性格については不明のままであった。これらを明らかにする目的で、第7次調査は2つの日乾煉瓦建造物を対象に調査が進められた。以下では、二つの日乾煉瓦建造物について概要を報告することにした。なお第5次に仮称した名称をそのまま用いることにする。

3-2-2. 日乾煉瓦家屋

第5次調査では石造建造物の西側から「日乾煉瓦家屋」と仮称する遺構が検出された。すでに5つの空間が確認され、それぞれにはaからfまで名称がつけられている。このうち、a、b、cおよびe室の4つの空間は壁で区切られた部屋を形成し、dは日乾煉瓦家屋とその北側の日乾煉瓦遺構との間をfはe北側斜面を指し示している。

a室及びe室についてはほぼ発掘が終了したのに対し、c室は西側の一部が未検出で、またb室については西側にさらに別の部屋が接続していることが確認されていた。

今次調査ではこれらの検出を行うため、発掘区を西側に拡張して作業を継続した。その結果、c室を完掘し、c室およびb室の西側から新たに2つの部屋（g室、h室）を検出することができた。以下c室を含め3つの部屋について報告する。

3-2-2-1. c室

発掘の結果、c室は東西4.6m、南北2.6mの規模を持つ長方形の部屋であることが分かった。c室の床は日乾煉瓦が敷き詰められていたが、こうした仕上げは他の部屋では認められなかった。そのためc室がもっとも入念に仕上げられた重要な部屋であったことが理解される。

またc室とa室の間には石灰岩の敷居が残され、内開きの木製扉による出入り口が設けられていた。敷居は3つの石灰岩を並べて作られていたが、両端の二つはかつて一つの敷居を形成していた石材であり、これを割って間に小片を挟んだと推測される。一方敷居の上に積まれた日乾煉瓦の壁体には改築した痕が確認できず、そのため敷居は当初から3つの石材で構成されていたと判断された。すなわち別の建物で用いられていた石灰岩製の敷居を再利用し、その際長さが不足したため間に石材を挟んだと考えられる。この挟まれた小片の側面には石造建造物で広く観察される粒状の風化面が認められた。これは日乾煉瓦家屋と石造建造物の建造時期が近いことを示唆しているものとして注目される。また再利用された敷居と類似した敷居が北側の日乾煉瓦遺構から出土している。日乾煉瓦家屋に使われた泥煉瓦や泥モルタルのなかには、この日乾煉瓦遺構のものと思われるものが混じっており、敷居もまたここから転用された可能性が指摘されよう。このことは日乾煉瓦家屋造

この前面から出土した、古王国時代のレリーフ大型ブロックについてもこの移動に伴って各面を観察することができ、未完成のアーキトレーフと判断された。詳細は3-3において記したい。

3-2. 日乾煉瓦建造物（図3）

3-2-1. はじめに

第5次調査において石造建造物の西側域から日乾煉瓦による遺構が2棟検出された。一つは石造建造物の北西の高台に築かれた「日乾煉瓦遺構」で、もう一つがこの南側、別の言い方をすれば石造建造物の西側に造営された「日乾煉瓦家屋」である。いずれも部分的な発掘にとどまり、全体規模や性格については不明のままであった。これらを明らかにする目的で、第7次調査は2つの日乾煉瓦建造物を対象に調査が進められた。以下では、二つの日乾煉瓦建造物について概要を報告することにしたい。なお第5次に仮称した名称をそのまま用いることにする。

3-2-2. 日乾煉瓦家屋

第5次調査では石造建造物の西側から「日乾煉瓦家屋」と仮称する遺構が検出された。すでに5つの空間が確認され、それぞれにはaからfまで名称がつけられている。このうち、a、b、cおよびe室の4つの空間は壁で区切られた部屋を形成し、dは日乾煉瓦家屋とその北側の日乾煉瓦遺構との間をfはe北側斜面を指し示している。

a室及びe室についてはほぼ発掘が終了したのに対し、c室は西側の一部が未検出で、またb室については西側にさらに別の部屋が接続していることが確認されていた。

今次調査ではこれらの検出を行うため、発掘区を西側に拡張して作業を継続した。その結果、c室を完掘し、c室およびb室の西側から新たに2つの部屋（g室、h室）を検出することができた。以下c室を含め3つの部屋について報告する。

3-2-2-1. c室

発掘の結果、c室は東西4.6m、南北2.6mの規模を持つ長方形の部屋であることが分かった。c室の床は日乾煉瓦が敷き詰められていたが、こうした仕上げは他の部屋では認められなかった。そのためc室がもっとも入念に仕上げられた重要な部屋であったことが理解される。

またc室とa室の間には石灰岩の敷居が残され、内開きの木製扉による出入り口が設けられていた。敷居は3つの石灰岩を並べて作られていたが、両端の二つはかつて一つの敷居を形成していた石材であり、これを割って間に小片を挟んだと推測される。一方敷居の上に積まれた日乾煉瓦の壁体には改築した痕が確認できず、そのため敷居は当初から3つの石材で構成されていたと判断された。すなわち別の建物で用いられていた石灰岩製の敷居を再利用し、その際長さが不足したため間に石材を挟んだと考えられる。この挟まれた小片の側面には石造建造物で広く観察される粒状の風化面が認められた。これは日乾煉瓦家屋と石造建造物の建造時期が近いことを示唆しているものとして注目される。また再利用された敷居と類似した敷居が北側の日乾煉瓦遺構から出土している。日乾煉瓦家屋に使われた泥煉瓦や泥モルタルのなかには、この日乾煉瓦遺構のものと思われるものが混じっており、敷居もまたここから転用された可能性が指摘されよう。このことは日乾煉瓦家屋造

営時の日乾煉瓦遺構の状況を検討する上で重要な資料と考える。

発掘調査ではc室の西側内部に日乾煉瓦が堆積していたが、煉瓦の方向やモルタルなどから、一部は北側の壁体が内側に倒壊したものと判断された。c室の北壁は東側が良好に残存するが、外側にあたる北面ではこの東から西にかけてかつて斜めに水が流れた痕が観察された。北壁の東側は煉瓦の表面の傷みも少なく、比較的早い段階で砂に埋もれていたことが推察される。おそらくこうした堆積の違いにより雨水が東側から西側の丘陵の崖に向かって流れるような状況を生み出した、と考えられる。

3-2-2-2. g室

g室はc室の西側に位置する小部屋で、東西2.1m、南北2.6mの規模をはかる。c室のおよそ2分の1という点が計画方法を示唆している。床面には泥が張られ、日乾煉瓦は敷かれていない。発掘調査では部屋のなかから屋根を形成していた泥片が多数出土しc室と同じ屋根が架けられていたと推察される。これを裏付けるようにc室との間には開口部が設けられ、連続した構成であったことが分かる。この開口部には敷居は見あたらず、扉などのない簡単な構成であったと考えられる。興味深いのはこの開口部が日乾煉瓦によって封鎖されていることであり、その時期は不明であるが二つの部屋の使い方や機能が変化したものと思われる。加えて平面を見る限り、g室にはこれ以外に外部と連絡する開口部は見あたらず、c室との開口部を封鎖した後のこの部屋の使い方についても興味を惹く。いずれも今後の課題である。

周囲の壁はいずれも煉瓦の短辺幅の厚さで、内面には泥モルタルが塗られていた。ただしc室との境の壁にはバットレス状の張り出しが認められた。また北側の壁では再下段に石灰岩ブロックが据えられている箇所が認められた。いずれも現在分析中である。

3-2-2-3. h室

h室はb室の西側に位置する。東西2.5m、南北2.5mの矩形の部屋で南側に外と結ぶ出入口を持ち、東側にb室と繋ぐ開口部が設けられている。すなわちh室とb室の2室は強い関係を持ち、こうした2室構成は先のc室とg室との関係と共通である。加えてg室がc室の約半分の規模であったように、ここでもb室がh室の約半分である点は興味を惹く。またb室から先にはどの部屋にも繋がっていないことから、この2室が独立した構成を採っていることが分かる。

b室との開口部からは石灰岩製の小型の軸受けと細長い板状の石灰岩が検出されている。そのためここには扉が備えられていたと見なせるが、一方でc室やh室の開口部とは明らかに作りが異なっており、扉を備えた開口部が当初の計画であったかどうかについてはなお慎重に検討する必要がある。

この部屋の北東隅からは煉瓦一段分高くなったベンチ状の遺構が検出された。東西1.1m、南北1.8mの広さを持ち、上面は平坦である。南側には厚さ煉瓦半枚分の障壁が建てられ、高さ約80cmと復原された。一方西側には壁はない。上面と南側の障壁、東側及び北側の壁には硬質の白色プラスターが均一に塗られていた。彩色は確認されていない。この種のプラスターは日乾煉瓦家屋の中でもこの部分だけに限られ、特別な目的を持った空間であったことは疑いない。この上からは無装飾の石灰岩ステラが検出された。ステラの規模はトトメス4世の名が刻まれた石灰岩ステラと酷似しており、その関係が注目される。

この部分以外では床面は泥を張っただけの簡単な作りと判断された。硬質の白色プラスターの存在から浴室

や作業場など、水を利用した空間の可能性が考えられたが、排水溝などの施設は確認されていない。

この部屋からは他に作りの粗い供物卓やベットの足を置く台に使われるような台状の石灰岩などが出土した。今後それ以外の遺物や、類例を検討しながら、この部屋の性格を詰めていく作業が必要である。

3-2-2-4. その他

この他に g 室の西側から東西 1.4m、南北 2.6m ほどの空間を作るように日乾煉瓦が並べられているのが確認された。最下段の煉瓦が残存するだけであり、調査では i 室と仮称したがどのような機能を有していたのか、詳細は不明である。この空間の中程に東西方向に煉瓦が並び、南北二つに分けられている。

日乾煉瓦家屋の南側は岩盤が露出しており、家屋部分のほうが下がっていることがわかった。これが家屋の建立にあたって平坦面を作り出すために地面を削ってできたものなのか、あるいは既に何らかの理由で平坦面があり、これを利用するようにして家屋が築かれたのかについては周囲の発掘をさらにすすめてから見極める必要がある。

3-2-3. 日乾煉瓦遺構

3-2-3-1. はじめに

調査の焦点であるカエムワセトの石造建造物北西には、この丘陵頂部における発掘調査の当初から地表面近くで日乾煉瓦の目地が視認され、何らかの施設が存在したのではないかという推測がなされていたが、1996年度の発掘調査により初めて壁体基礎部の残存が確認されたことにより、遺構の存在が確かなものとなった。また、周辺からはアメンヘテプ 2 世王の名が押印されたスタンプ付き煉瓦や、トトメス 4 世王の石灰岩製ステラに加えて、青色彩色の土器片も出土していることから、この地域に石造建造物よりも 100 年以上古い時代の日乾煉瓦造の建物が存在したことが指摘されている。これらの遺物の出土位置を勘案すると、おそらくは石造建造物北西に位置する日乾煉瓦遺構が最も有力な候補として挙げられる。この日乾煉瓦遺構に関しては、1996年度の調査において、石造建造物北西側の周辺施設として観察と記録が行われたが、次の 1997 年度の調査では石造建造物南側と北側の未掘部分に多くの時間が割かれたために、日乾煉瓦遺構自体は発掘調査が一時中断されていた。今期調査は、この日乾煉瓦遺構の範囲と性格を明らかにすることを主要目的の一つとして行われた。以下では、検出遺構の現状について述べ、建築学的視点からの考察を加えたい。

3-2-3-2. 検出遺構の現状

・全体について

石造建造物の北西に位置する日乾煉瓦遺構は、1996 年度の発掘調査によって建造物南東隅の壁体基礎部を構成する煉瓦列が確認されている。遺構が築かれた場所が石造建造物よりも自然地形が高いだけでなく、残存する煉瓦列の外側にあたる東面と南面の地山が人工的に削られて急な斜面を形成していることから、仮に「高台の日乾煉瓦遺構」という呼び方をしている。また、この地区は丘陵内において最も自然地形の高い地点にあたり、建物の選地にあたってこうした立地条件を十分に考慮していたものと思われる。この高台の平坦面は遺構南東隅部から北西方向に広がっており、遺構も地形に応じて北と西に伸びていることが予想されていた。今期調査は、遺構の東側と南側の地山傾斜面上に堆積した覆土および崩落煉瓦を除去しつつ確認されていた南東隅

や作業場など、水を利用した空間の可能性が考えられたが、排水溝などの施設は確認されていない。

この部屋からは他に作りの粗い供物卓やベットの足を置く台に使われるような台状の石灰岩などが出土した。今後それ以外の遺物や、類例を検討しながら、この部屋の性格を詰めていく作業が必要である。

3-2-2-4. その他

この他に g 室の西側から東西 1.4m、南北2.6m ほどの空間を作るように日乾煉瓦が並べられているのが確認された。最下段の煉瓦が残存するだけであり、調査では i 室と仮称したがどのような機能を有していたのか、詳細は不明である。この空間の中程に東西方向に煉瓦が並び、南北二つに分けられている。

日乾煉瓦家屋の南側は岩盤が露出しており、家屋部分のほう下がっていることがわかった。これが家屋の建立にあたって平坦面を作り出すために地面を削ってできたものなのか、あるいは既に何らかの理由で平坦面があり、これを利用するようにして家屋が築かれたのかについては周囲の発掘をさらにすすめてから見極める必要がある。

3-2-3. 日乾煉瓦遺構

3-2-3-1. はじめに

調査の焦点であるカエムワセトの石造建造物北西には、この丘陵頂部における発掘調査の当初から地表面近くで日乾煉瓦の目地が視認され、何らかの施設が存在したのではないかという推測がなされていたが、1996年度の発掘調査により初めて壁体基礎部の残存が確認されたことにより、遺構の存在が確かなものとなった。また、周辺からはアメンヘテプ2世王の名が押印されたスタンプ付き煉瓦や、トトメス4世王の石灰岩製ステラに加えて、青色彩色の土器片も出土していることから、この地域に石造建造物よりも100年以上古い時代の日乾煉瓦造の建物が存在したことが指摘されている。これらの遺物の出土位置を勘案すると、おそらくは石造建造物北西に位置する日乾煉瓦遺構が最も有力な候補として挙げられる。この日乾煉瓦遺構に関しては、1996年度の調査において、石造建造物北西側の周辺施設として観察と記録が行われたが、次の1997年度の調査では石造建造物南側と北側の未掘部分に多くの時間が割かれたために、日乾煉瓦遺構自体は発掘調査が一時中断されていた。今期調査は、この日乾煉瓦遺構の範囲と性格を明らかにすることを主要目的の一つとして行われた。以下では、検出遺構の現状について述べ、建築学的視点からの考察を加えたい。

3-2-3-2. 検出遺構の現状

・全体について

石造建造物の北西に位置する日乾煉瓦遺構は、1996年度の発掘調査によって建造物南東隅の壁体基礎部を構成する煉瓦列が確認されている。遺構が築かれた場所が石造建造物よりも自然地形が高いただけでなく、残存する煉瓦列の外側にあたる東面と南面の地山が人工的に削られて急な斜面を形成していることから、仮に「高台の日乾煉瓦遺構」という呼び方をしている。また、この地区は丘陵内において最も自然地形の高い地点にあたり、建物の選地にあたってこうした立地条件を十分に考慮していたものと思われる。この高台の平坦面は遺構南東隅部から北西方向に広がっており、遺構も地形に応じて北と西に伸びていることが予想されていた。今期調査は、遺構の東側と南側の地山傾斜面上に堆積した覆土および崩落煉瓦を除去しつつ確認されていた南東隅

部の煉瓦列の北方および西方への延長を迫り求め、並行して遺構の平面構成を確認するために高台上面の全面的な清掃が南側のグリッドから北に向かって進められた。また上面清掃に先駆けてこれまで利用していたガード小屋を取り壊して、別の場所に新設した。この高台のほぼ全域には、地表層として地山と全く同様な赤褐色砂礫層が固くたたきしめられていた。これはおそらく近年の軍事的活動により地表面が平坦に均されたために形成されたものと推測される。遺構東側部分の煉瓦列は、この赤褐色砂礫層を地表面からわずかに10cm 近く掘り下げたところで検出された。煉瓦列は、壁体の基礎部が数段残存するだけであったが、1E から0E を越えて9F グリッドまで伸び、9F グリッドにおいて西に向かって直角に折れていることが確認された。煉瓦列の外側にあたる東面は、地山が削られて急な斜面を形成していたが、この斜面もまた残存する煉瓦列に対応して9F グリッドで折れて西方にまわっていた。従って、この地点を遺構の北西隅部と見做すことができそうである。9F グリッドにおいて西側に折れた煉瓦列は、コーナーからわずかに1 m 近く伸びたところで土嚢と石材による矩形を呈した軍隊の施設により切り込まれていた。さらに、9F グリッドは東側半分のみが今期の調査において発掘されたばかりであるため、この煉瓦列の西方への延長は、今後の調査による検出作業が待たれる。煉瓦列外側の東斜面には煉瓦が厚く堆積していたが、煉瓦自体を傾斜面に据え付けていたらしい痕跡は認められなかった。これらの煉瓦は全て高台の方から崩落したものと考えて良いだろう。また、斜面には他に何らかの仕上げを施した様子もなく、地山は当初から剥き出しであった可能性が高い。建物のアプローチとなる施設もこちら側には存在しなかったようである。東側の地山傾斜面からは、トトメス4世の完形ステラの他、戸口まわりの部材やかたて建物を飾っていたと思われるファイアンス・タイル片や彩色プラスタール片などの多数の遺物が出土した。タイル片や彩色プラスタール片は、泥煉瓦崩落層直下かつ地山傾斜面直上において纏まって検出されているが、こうした出土状況は、かつて高台の上にあった煉瓦建造物の構造を解く重要な鍵を与えてくれるように思われる。その他、9E から9F グリッドにかけては、第三中間期から末期王朝時代に比定される遺物が集中的に検出されている。これらの遺物は日乾燥煉瓦遺構が崩壊した後に、高台側から投げ落とされたようである。しかしながら、当該時期に属する大規模な遺構が高台の上に存在した形跡は見つかっていない。斜面に堆積した大量の煉瓦の除去に当たっては、煉瓦スタンプの有無に細心の注意が払われたが、泥モルタルに反転して残るものが一点確認されただけであった。遺構南側では、南東隅部から西方への延長として南壁の煉瓦列が検出されることが期待されたが、日乾燥煉瓦家屋側に続く地山斜面上において厚い崩落煉瓦堆積が認められた他には、何一つ煉瓦列の痕跡が見つかっていない。2F グリッドでは、丁度、南壁煉瓦列の延長が位置すると思われる箇所において、地山を大きく穿った円形の窪みが認められたが、この窪みからは銀の食器皿などの現代遺物が見つかっているため、おそらく近年の軍事的活動に伴う授乱を受けたことが予想される。東側斜面と同様に、南側でも地山を人工的に削って斜面を形成していたように思われるが、南面では赤褐色砂礫層の堆積と本来の地山との区別が困難であり、これまでのところ明らかな傾斜面は確認されていない。遺構の南西コーナーもはっきりと確認されていないが、2G グリッドは崖となって急激に落ち込んでいるため遺構はこれ以上、西に伸びる可能性は低い。これを裏付けるように1G グリッドからは、丘陵の崖に沿うかたちで遺構の西壁を構成していたと思われる煉瓦列が、東壁と同様に表層にあった赤褐色砂礫層を10cm 近く掘り下げたところで検出された。この煉瓦列もまた壁体最下層の数段がわずかに残存するだけであり、1G グリッドの南方および北方ではすでに煉瓦が消失してしまっている。高台の地表を覆う赤褐色砂礫層の除去は、2F ～2G、1E ～1G、0F と全面的に行われたが、時間の制約もあり、1G グリッドよりさらに北側の発掘は来期以降の調査に持ち越

された。

奇妙なことに、これまでのところ東側の煉瓦列と西側の煉瓦列を連絡する内壁の存在が認められていない他、床面の仕上げ、柱礎などの痕跡もまた全く見当たらない。一方、旧石器時代における自然礫の採掘坑らしき穴が至るところで確認されており、それらの位置の記録が行われた。また、1F グリッドにはまだこれまで利用していたガード小屋の基礎が埋められたままである。以上のようにして、遺構の南東隅と北東隅に加えて西壁の位置が明らかにされたことにより、おおよその規模を推定することが可能となった。すなわち、遺構の平面形状を最も単純なかたちとして矩形に想定するならば、煉瓦列の南北方向の内法寸法は21.8m (42Rc = 22.05m)、東西方向の内法寸法は18.9m (36Rc = 18.9m) と見積もられる。煉瓦列の幅は四周とも約1.5m と測定されるため、外法寸法では約25m (48Rc = 25.2m 南北方向) × 約22m (42Rc = 22.05m 東西方向) という規模になり、また煉瓦列の外側に広がる地山の傾斜面も含めるとさらにひとまわり大きなものとなる。遺構は隣接するカエムワセトの石造遺構と異なって南北方向に長いが、ほとんど正方形に近い形状とその規模が、石造遺構のボルティコ部を除いた西側部分に極めて類似する点が注目される。

・細部について

煉瓦列の幅は、遺構の南東隅部付近において東壁は1.50m 程、南壁は1.55m 程を測り、おおよそ煉瓦四枚分である。東壁はIE から北にいくと幅1.40m 程に窄まり、煉瓦三枚半分程になるが、この幅は対になる西壁とほぼ等しい。一方、北壁の幅は北東隅部付近を見る限り、少なくとも1.50m を測るようである。煉瓦は、いずれの壁体においても小口面を外側に向けて並べられる傾向が強く、外側の煉瓦積みにおいて通常なされるような小口層と長手層の連続ははっきりとは認められない。煉瓦は単調に平置きされてはおらず、小端立てにして並べられた煉瓦が至る所で見られる。おそらくこれは、基礎部の構法として知られる煉瓦の積み方であり、緩やかな起伏のある地盤において水平を取りつつ煉瓦を縦に置いたり横に置いたり工夫をした結果と思われる。遺構には、少なくとも三種類の異なる大きさの煉瓦が混在して用いられているようである。すなわち、長辺が約40cm、約35cm、約30cm のものが確認されている。こうした状況の原因については、今後、各サイズの煉瓦の割合や、それらの配置についての考察を巡らすことで明らかにしていきたい。また、この遺構においても団子状の泥モルタルが確認された。東側の煉瓦列においては、内側の煉瓦を慎重に一直線状に並べている様子が認められたが、外側は煉瓦が削り落された地山傾斜面に崩落しかけているために明瞭ではない。一方、1996年度の調査により、南東隅部の外側には南側と東側に幅1.10m、奥行40cm 程の張り出しが付くことが分かっており、その表面に灰白色のプラスターが塗布されていることなどから、パレス・ファサード風の外観を有していた可能性が指摘されている。そこで今期調査では煉瓦列外面において凹凸が見られるかどうか注意深い観察が進められた結果、三箇所においてもかつて張り出しがあったらしいことが明らかにされた。現状の平面図に従うと、張り出しには別の煉瓦が隣接しているが、明らかに当初は張り出しを形成していたものと思われる。張り出しの幅はいずれも1.10m 程であり、この値は遺構南東隅部において明瞭に確認される張り出しと矛盾がない。さらに西壁部分で認められた張り出しもまた寸法が一致し、東壁における張り出しと対称関係の位置にあることからこの遺構全面にかつて張り出しが付けられていた可能性は高いと言えよう。新しく確認された3つの張り出しには、灰白色のプラスター仕上げは認められなかった。遺構南東隅部から東側煉瓦列の外側では、元々は張り出しの付いた煉瓦列を取り囲むように煉瓦が付加されている様子が観察された。これは特に、

遺構南東隅部の張り出し部分と東側煉瓦列の中央付近で顕著である。付加された煉瓦の奥行きは少なくとも煉瓦一枚半分程と見積られる。また、煉瓦の配列からは、壁体内側のラインから煉瓦三枚半分ほどのところで煉瓦の外面を揃えて並べているらしいことが視認されており、一旦このラインで壁体の外面が仕上げられた可能性が高い。煉瓦列の外側は削り落とされて急斜面を形成しているが、煉瓦は基本的には平坦な地山の上に据えられている一方、後から付加されたと思われる縁端部の煉瓦や張り出しの煉瓦は削られた斜面に迫り出しており、地山を削った後に設置されたようである。斜面に迫り出して設置されたこれらの煉瓦は、泥煉瓦片と砂や礫などを用いて平坦に嵩上げする地業が施されていたが、構造的に脆弱であるためにほとんどの煉瓦が斜面に崩落しかかっていた。以上のようにして煉瓦の付加が行われた理由については詳しいことが分かっていないが、南東隅部において、仕上げとして施された灰白色のプラスターを覆い隠すように煉瓦が据えられていることから、一連の施工における手順の差というよりもむしろ、ある程度時間をおいて何らかの改変が行われたと考えることができよう。しかしながら付加された煉瓦の大きさと質について、元々の煉瓦列の煉瓦と明らかな違いが見られないなどの不審な点もあり、この時間差がどの程度のものであったかは現時点不明と言わざるを得ない。

煉瓦が内側に突出して配置されている部分が東側で確認された。この突出した煉瓦は内壁の存在を示唆するようでもあるが、これまでのところ0F グリッドからは赤褐色砂礫層の他に特別な痕跡が認められていない。一方、1G グリッドの西壁近くに散乱する煉瓦の一部が対応するようにも思われるが定かではない。煉瓦列の北東隅部には、規模85×75cm 程の矩形の穴が穿たれていた。遺構の隅部に当たることからファウンデーション・デポジットのための穴という期待が持たれたが、土器片以外に目立った遺物は出土していない。穴の周囲の煉瓦配列を見る限り、煉瓦を置く以前から、この部分の地形が窪んでいたことが窺われる。9F グリッドにおける北側の地山傾斜面を降りたところでは、波形を呈する煉瓦列が検出された。完形ではない煉瓦がモルタルを用いずに並べられただけであり、構造的強度は全く持ち得ていない。地山傾斜面のふもとを取り巻くように築かれているものの、高台の上の日乾煉瓦遺構との関係は不明確である。一方、この煉瓦列を境にして北側からは焦土の広がりが見られ、何らかの関連が指摘される。

煉瓦列南東隅部から地山の稜線上に築かれた煉瓦列とそのすぐ西側にある煉瓦構造物については、今期調査において再度、詳細な観察と記録を行った。これらの煉瓦構造物はいずれも石造建造物の掘り肩を埋めた詰め土の上に築かれているため、少なくとも石造建造物よりも新しいということが分かっているが、高台の日乾煉瓦遺構との関係は不明確である。いずれの場合も約30cm の長さの小型煉瓦が多く利用されている点の特徴である。稜線上にある煉瓦列では、ヴォールト屋根を造る際に用いられる溝の付いた特殊煉瓦が組み込まれている様子が認められた。これは、手近にあった煉瓦を再利用してこの煉瓦列を築いたことを示唆しているように思われる。

また石造建造物の北西隅部を取り囲む煉瓦列とやや異なる角度で据えられた煉瓦列についても観察が行われた。両者の煉瓦列に明瞭な切れ目は認められず、また用いられた煉瓦にも違いが見られないことから、連続した作業工程の中で築かれたように思われる。煉瓦列の外面はいずれもきれいに揃えられているが、内面は粗野に積まれた状態である。両煉瓦列の内側からは多量の煉瓦片が検出されており、それらは意図的に充填されたようにも見受けられる。以上のことから、この煉瓦構造物を昇降路のような施設と見なすことができそうであるが、詳しい復原を行うに当たってはさらなる検討が必要である。西側煉瓦列の内側には穴が煉瓦を穿って設

けられていたが、穴の内部からは何も出土していない。この穴の用途・目的および掘られた年代については明らかではない。

今期調査では、石造建造物北西コーナー部の精査も進められた。詳細は「石造建造物」の項においてすでに述べられているが、精査の結果、高台にある日乾煉瓦遺構の周囲にかつては溝が掘られており、その溝の上から石造建造物北壁の基礎トレンチが掘られて、壁が立てられていることが明らかにされた。石造建造物北壁の詰め物の下には、泥煉瓦や高台の日乾煉瓦遺構の壁面を飾っていた白色の仕上げモルタルなどが風成の砂層と混在して認められている。従って、日乾煉瓦遺構の崩壊が多少進行した後に、石造建造物の建設が開始されたと結論付けることができよう。石造建造物北壁トレンチの下から新たに確認された溝は、削られた地山傾斜面の形状に沿って北と西に向かって伸びているようであるが、煉瓦家屋 i 室の北側で確認された岩盤の掘削抗が、高台にある日乾煉瓦遺構の南側を走る溝の一部に相当するものと推察される。また、この溝の一直線上に石造建造物北壁の深いトレンチが位置することが注目されるが、両者の溝が一度に掘られたものかどうかは現時点では不明である。i 室北側の掘削抗内では厚い風成の堆積が穴の底部から詰まっている様子が観察されるため、この日乾煉瓦遺構周囲に設けられた溝は壁体の基礎トレンチのようなものではなく、建物に付随して意図的に掘られて、そのまま溝として利用されたものと考えられる。

3-2-3-3. 考察

これまでのところ原位置にて確認された遺構は、壁体の基礎部とその外側の削られた地山傾斜面だけであるが、今期調査により、およそその規模（約25×22m）が推定されたこと、当初、煉瓦三枚半程の壁厚で張り出しを持つ外壁を築き、その後で外側から煉瓦一枚から一枚半分ほどの積み増しを行なったらしいこと、地山傾斜面を取り囲むように溝が掘られていたことなど、前節「検出遺構の現状」において述べてきたことが共通の了解事項として明らかにされた点は大きな成果であったと言えよう。周辺からは夥しい数のタイル片や彩色プラスチック片が検出されており、これらで飾られた壮麗な建築がかつてこの高台の上に存在したことは明らかと思われる。そこで本節では、この高台にある日乾煉瓦遺構の当初の姿に迫るとともにその性格についても建築学的視点から可能なかぎり考察を試みることにしたい。

煉瓦壁の外側に設けられた張り出しについてであるが、これまでの調査により張り出し5つが確認されている。壁に凹凸を持つ構造としてパレス・ファサード風の外観を呈していたのではないかという指摘がなされているが、残存状況から見て凸部と凹部が同一間隔で連続するような構造であった可能性は低い。またパレス・ファサードを施した煉瓦建造物というとまずもって初期王朝時代のマスタバが想起され、古王国時代の幾つかのマスタバ墳や中王国時代のピラミッド複合体における周壁、そして新王国時代でもテーベの岩窟墓において幾つか例が知られている。さらにアブ・シールにある末期王朝時代の大シャフト墓でも上部構造の周壁に凹凸を採用しているなど、古代エジプトでは長く流行した建築形式の一つと言える。しかしながら、私見の限りでこれらのパレス・ファサードは、壁体の基礎部においては凹凸を付けずに煉瓦を積み、それを土台として装飾的な扱いで壁面に設けられることが普通のようなものである。従って、こうした観点からも当該の煉瓦遺構にパレス・ファサードを想定することは難しいように思われる。確認された5つの張り出しの位置に着目すると、まず遺構南東隅部に張り出しが付き、そこから10.9m（張り出し同士の内法寸法）のところと、さらに4.9mのところとに設けられている。この間には後補の煉瓦列が観察されるが、当初から張り出しを設けていた様子は窺え

ない。そこで張り出し同士の間隔を4.9m と仮定すると、間隔10.9m からそれらの中間に想定される張り出し一つ分の幅1.1m を差し引いて2で割った値(4.9m)と全く矛盾しないことが分かる。また同じ仮定によりさらに北に4.9m の位置に想定される張り出しは、丁度遺構の北東隅にあたることになり、遺構南東隅で観察されている張り出しと同じように北側にも張り出しが設けられていた可能性は寸法的見地からも高いと言えよう。西壁にある張り出しもまた矛盾なく東壁のそれと対称の位置に設けられているが、東壁と同等の割付けが西壁でもなされたと思われる。一方、南壁に関しては遺構が残存していないために想像に頼らざるを得ない。こちら側にもかつては張り出しが存在したと思われるものの遺構自体の東西寸法と南北寸法が異なるため、東壁から測定された4.9m という張り出し同士の間隔を南壁に当てはめることができない。仮に1.1m 幅の張り出しが隅部のものも含めて5つ南壁に配されていたとすると、張り出し同士の間隔は4.1m と算出される。

※ このように、ある一定の間隔をおいて張り出しを持つ壁体となると、構造的強化を目的としたバットレスか、あるいは城塞建築における稜塗のようなものが考えられる。いずれの可能性が高いかどうかは、この煉瓦建造物自体の性格についての考察を通して最終的に判断すべきである。張り出し幅1.1m は約2キュービットに相当するが、しかし張り出し同士の間隔4.9m は9.333キュービットとなり、完数で換算することが難しい。このことは張り出し同士の間隔を最初に9.333キュービットと設定したのではなく、壁体に設ける張り出しの数によって全長を均等割するという設計がなされたことを示唆するように思われるが、古代エジプトにおける日乾煉瓦建築の設計方法に関する重要な問題の一つとして、今後もさらに詳しい検討を行う必要がある。

※ 次に失われた上部構造についてであるが、遺構の周囲からは、夥しい量の崩落泥煉瓦や彩色プラスター片やタイル片の他、戸口の敷居や脇柱を構成していた石灰岩製の建築部材や、リントルあるいはアーキトレーブや天井の断片と思われる裏面に丸太や小枝などの圧痕が残る彩色泥モルタル片が検出されている。検出遺構の現状平面を見ると、あたかも周壁だけが造られた建築のようであるが、上記した数多くの建築断片はかつてこの高台に壮麗な上部構造が存在したことを強く示唆している。しかしながら、前節「検出遺構の現状」で述べたように、残存する煉瓦列の内側において、東西あるいは南北の壁体を連絡する内壁が存在しないこと、床面を泥あるいは石敷きで仕上げたらしい痕跡がないこと、広いスパンに天井を架け渡す際に必ず必要とされる柱を設置した跡が認められないことなど不審な点は少なくない。そこでこうした状況を矛盾なく説明する一つの可能性として、床面が現在よりも高い位置にあって、そこに上記した建築断片から構成された上屋建物が存在したのではないかという推測がなされる。すなわち、検出された煉瓦列を外壁としてその内側に土砂などを充填した基壇を設けて、その上に彩色プラスター片やファイアンス・タイル片で飾られた上部構造が建てられたものと考えられよう。

※ 18王朝期にあたる日乾煉瓦造の基壇状建物という点、ディール・アル＝バラースやテル・アル＝ダバアにある18王朝初期の遺構例や、マルカタ王宮内にあるプラット・フォーム、マルカタ南の「魚の丘」、コム・アル＝アブドーのアメンヘテプ3世時代の基壇建物址、アマルナにある砂漠の祭壇、コム・アル＝ナーナの中央基壇などいくつかの類例が挙げられる。いずれも基壇の上に何らかの上屋建物を有していたことが推測されており、状況はアブ・シール南丘陵遺跡の場合とほとんど一致するようである。一方、建物の立地条件に着目すると、今回検出された遺構は、サッカーラからアブ・シールの中間に位置する孤高の丘の頂上に建設されており、周囲を一望することのできる極めて特殊な建造物であったと結論付けることが可能であり、こうした観点からもある程度、建物の機能と性格に関する解釈の幅を狭めることができよう。

また今期調査では、煉瓦列周囲の地山傾斜面の下に、建物を取り囲むように溝が掘られていたらしいことが分かり、結果として石造建造物よりも高台の日乾煉瓦遺構の方が建造年代が古いということが明らかにされた。この溝の詳細については来期以降の調査成果が待たれるが、同じように建物の周囲の地形を削って溝を掘った類例としては、ヌビア地区のブーヘン遺跡に見られるような要塞建築が差し当たり想起される。ブーヘン等の要塞建築では周壁にバットレス状の張り出しが認められることも注目される。さらには、先に挙げたディール・アル＝バラースやテル・アル＝ダバア遺跡の基壇状建物もまた砦的性格を持っていたという推測がなされている点が興味深いところである。これらの砦建築と比べると、アブ・シールにおいて検出された遺構の規模ははるかに小さいものとなるが、辺境の地にあるという立地条件と想定される建物の形態からは、比較的小さな砦的性格を有した施設がかつてアブ・シール丘陵頂部に存在したという指摘が可能と思われる。高台にある日乾煉瓦建物の発掘は継続中であり、基壇状の建物ということであれば、当然、上に登るためのアプローチの存在が推測されるが、今後の発掘調査で何らかの痕跡が確認されることを期待したい。

石造建造物に先立つ日乾煉瓦建物が丘陵頂部における最も高い地点を意図的に選地したことはもっともらしいことであろうが、しかしここに初めて建築物を築いた人物が、煉瓦スタンプやステラから認められるアメンヘテプ2世王やその息子トトメス4世王であったかどうかは定かではない。検出遺構において数種類の煉瓦が混在して用いられている状況は不可解であり、煉瓦の再利用が行われたことを示唆しているようでもある。また、一部の煉瓦は後から付加されていることや、塗り直しがされた彩色泥モルタル片が出土していること、彩色プラスター片に種類があるということなどからは、明らかにいくどか建物の改変や補修が行われたことが指摘される。建物の規模や軸線の一致など、カエムワセトは自身の石造記念建造物を築くに当たって、すでに高台に存在した日乾煉瓦建物を強く意識していたことが窺われるが、彼の時代においてこの日乾煉瓦建物がどのような姿で立ち残り、どのように解釈されていたかについては詳しいことが分かっていない。今後は、個別の建物に対する考察と同時に、王朝時代における丘陵頂部の利用開始年代がどこまで遡れるのかという問題から、高台の日乾煉瓦建物とカエムワセトの石造建造物が丘陵頂部においてどのような状況で存続し、崩壊に至ったのかという遺跡全体の歴史的過程について、遺構、層位、出土遺物などのあらゆる検討を通して総合的な解釈がなされることが望まれる。

3-2-3-4. まとめ

高台に築かれた日乾煉瓦建物は、わずかな煉瓦列とその周囲の削られた地山の形状が残るだけであったが、今回の調査によりおおよその規模（約25×22m）が推定された。建築学的視点による注意深い観察を基にした考察の結果、遺構は辺境の地に建てられ、周囲を一望することのできる基壇状の建物であったという可能性が指摘された。また石造建造物との切り合い関係からは、高台の日乾煉瓦建物の方が建造年代が古いということが明らかにされた。両建造物は規模および軸線が一致するため、カエムワセトがすでに存在していた高台の日乾煉瓦建物を強く意識していたことが窺われる。この日乾煉瓦遺構の調査は継続中であり主に北側部分が未発掘であるが、今後も遺構の詳細な観察と記録を続けるとともに、無数の彩色プラスター片や、多様な形態の見られるファイアンス・タイル、土器片などあらゆる出土遺物に対する個別の考察が進められることで、建物のより具体的な姿と性格に迫ることが可能になるとと思われる。

3-3. 出土遺物

3-3-1. 未完成アバクス

これまでの発掘調査で出土したアバクスは、方形のアバクス部分と柱頭の最頂部が一つの石材で作られ、出来たものである。今回検出された未完成アバクスもまた同様の形式を採り、方形のアバクス部分は一辺が740mm、高さは210mm、一方柱頭の最頂部は直径は約700mm、高さは100から120mmであった。

方形をしたアバクス部の側面はよく整形されており、くぼみをモルタルで埋めている箇所も認められた。また上面及び側面には鑿やインクによるガイドラインの類は観察されなかった。上面ではモルタル痕は検出されなかったが、側面が整形されている状態から考え、積み上げられ、その上にアーキトレーフが架け渡されていたと考えられる。

一方下側の柱頭部分は断面が六弁形を呈しておらず、円柱を形成していた。表面は粗く、正確な円をなしていない。そのためこのアバクスは六弁形に至るまでの未完成状態を示していると判断された。

既に発掘調査を通じて未完成柱材や未完成柱礎石が検出されている。これらに共通する特徴は柱身の断面が円形をなしている点である。これは柱はいったん断面が円となるような形状に作られ、その後細部が削り出されていったことを示唆しているものといえよう。今回検出された未完成アバクスもまた同じような特徴を有しており、この仮説を裏付ける資料とすることができる。柱の構築方法の研究は、一材から削る出す形式についていくつか論考が示されているが、本遺構のように石材を積み重ねる形式については未だ不十分である。この発掘調査によって得られた資料によって、この分野の研究が深化することが期待される。

この未完成アバクスはポルティコの北側から検出されたが、この他にも未完成石材は北側から多く出土している。本遺構は倒壊後、大規模な攪乱を受けていることが明らかとなっているが、レリーフブロックの出土分布を見る限り、当初の位置をおおむね反映していることが指摘されている。そのためこれを援用するならば、ポルティコは北側が未完成であったとすることができるかもしれない。逆に言えばポルティコは南側から作業が進められていた可能性が高いといえよう。このようにポルティコ内部の作業の進め方が示された事例として注目される。今後はレリーフの作業等も含めた総合的な建設手順を描く必要があると考える。

3-3-2. アーキトレーフ

第4次調査ではポルティコの中央やや東側から大型の石灰岩ブロックが出土した。この石材には古王国時代の彩色レリーフが施され、その上を肌理の細かいピンクプラスターが覆っていた。そのため周囲の古王国時代の建物から再利用された石材であったことは確実であったが、時間の都合と保存の事情により移動をしなかったため、下側の面を観察することができなかった。そのため、この石材がポルティコのどの部材であったのかははっきりしなかったが、今次調査において石材を移動することが決まり、詳細を観察することができた。

石材を転がして下面を観察したところ、両端に石材があたった痕が確認され、アーキトレーフと判断された。両端の石材があたっていた部分の面積は、出土したアバクスの面積の半分にほぼ対応し、またその距離も柱間から算出したアバクス間と正確に一致した。その結果、この面がアーキトレーフの下面にあたり、レリーフの施された面は側面であったことが分かった。すなわちレリーフの面を削り落とすことをせず、逆にプラスターで覆い隠す手法が採られていたといえる。

一方レリーフ面の反対側は未完成のまま放置されていた。この面は、旧建造物ではレリーフの裏面であった

ため整形されず、レリーフ面とは平行になっていない。そのため本遺構において整形する必要があるわけだが、半分だけが削り落とされ、残りはそのままであった。奇妙なことに、削り落とされた部分は窪みにモルタルを詰めるなど入念に仕上げられていた。一部削り落としていない部分があるにもかかわらず、最終的な仕上げがなされている点は興味深い。その理由は不明であるが、何らかの事情によって作業の継続が困難になり、急いで取り繕ったように思われる。

この石材は長手を南北方向にして出土した。この方向はアーキトレヴの方向と一致している。そのためこの向きのまま架け渡されていたと仮定すれば、レリーフ面は西側になり、未完成の面が正面を向いていたことになる。結果的に未完成部分が正面を向くことになったが本来は仕上げられていたはずであり、プラスターで覆ったレリーフ面よりも石材を削って仕上げた面を正面に据える方が自然のようにも思われる。加えて、この場合南側半分が仕上げられていたことになり、南側の方が先に作業が進められていたとする前節の可能性とも矛盾しない。さらにポルティコの中央部分近くから出土している点を生かすならば、少なくともアーキトレヴは南側から中央付近まで整形されていたといえるかもしれない。

またレリーフの背面には全体をほぼ四等分する線の両端辺りに溝が刻まれていた。この溝の深さは最終的に仕上げられる面の近くまで届いており、建造に際して穿たれたと考えられる。ポルティコが丘陵の崖際に位置し、十分な石材搬入斜路が取れなかったであろうことを考えた場合、アーキトレヴのような石材はロープを使ってつり上げられたと思われる。観察された溝はこのロープを架けるために作られた可能性が指摘されよう。

このアーキトレヴの上面にはモルタルが残存し、この上に石材が載せられていたことは確実である。上面が平坦に整形されていないことや、幅70cm に対し高さが64cm 程度で断面が正方形にならない点などいくつかの問題点はあるが、おそらく天井材が載せられていたと推測される。

3. 出土遺物

1. インスクリプション (図4)

1-1. はじめに

7次・8次調査に於いて、インスクリプション関連では、①インクで石材上にヒエラティックで書かれた文書、②7次調査で発見されたナオス、③いわゆるプロスキュネーマという3種類に大きく分類することが出来ると思われる。従来調査では①のヒエラティック文書が大きな役割を占めてきたが、7・8次調査では従来までの調査では見いだされていなかった②ナオスと③プロスキュネーマが見いだされた。これはカエムワセトが建てた石材建造物とは明らかに後の時代のものであり、当該建造物がどのようにして放棄されていったのかを知る上で大きな鍵を握るものと考えられ、独立した項目で述べるのが適当と考えられる。

また8次調査では、今後の復原作業に向けて従来検出され、大丘上に保管されていたインスクリプションのナンバーを再チェックする作業を並行して行った。作業自体は半ばまでしか進まなかったが復原作業の過程では不可欠な基礎作業である。しかし、作業それ自体を述べることは、あまり意味があるものとは思えないので、ここでは出土遺物に焦点を絞り、上で指摘した分類に沿って述べていってみたい。

なお、過去2回の発掘調査で得られたインスクリプションの資料は、主に第7次調査で出土したものであり、本稿では、第7次調査及び第8次調査で出土したインスクリプション関連の資料を合わせて記述することとする。

1-2. インクで石材上にヒエラティックで書かれた文書

7次のインスクリプションは、外側外壁に関連する箇所からの出土が大部分であり、他は攪乱による文字の一部断片を除いては見いだされていない。また8次調査においては、発掘区が北に拡張したのに伴い、いわゆる石造建造物に直接関連したヒエラティックは攪乱によるものを若干数見いだされたに過ぎない。両調査次において、インクで書かれたヒエラティックインスクリプションはその数こそ少ないものの、これまでの発掘によるヒエラティックインスクリプションの読みを確定するものや、これまでの発掘による解読を補強するうえで、侮れない意義を持つと思われる。

従来までの考察によって、我々の遺構に関連したヒエラティックインスクリプションは、おおまか以下のように纏められるであろう。

当該遺構を建造した労働者の組織を表すものと推定される、右班と左班の2つの班構成があり、それぞれの班に属する人物によって、行われた何らかの活動を示した記録であると思われる。これは当時の労働者の組織が具体的にほとんど知られない今日にあって、彼らの組織を解明する上で極めて重要な史料となるものと推定される。具体的に遺物をあげると銘文が明瞭に読めるものに関して、次のもの挙げられよう。

AK07-O863 Axt 3 zw 3///// 「アケト3月、3日/////」

AK07-A010 zw 10 + PN(不可読)「10日///人名であることは確実だが解読不能///」

AK07-A085 /// Axt zw /// 「アケト///月、///日」

AK07-A220 ///Axt zw 4 pA-nHzy + マーク「アケト///月、4日ペアネヘシ(人名)」+ マーク

AK07-A333 冒頭の部分は日付で、10日と読めると思われる。これはヒエラティック文字の形状からしても、コンテキストからしても、確実である。次のサインは班銘部分に相当するが、日付は10日であるのか一の位の数が加わるのか判然としない。しかしスペースの関係上、一の位の数は入らないと公算が高い。班名は決定詞の一部しか残っていないので右班、左班のいずれでも可能であり、判別不能である。その後 ini「つれてくる、もたらす」と読めるサインが認められる。

もしこの読みが正しいとするならば、日付+班名+ ini というパターンを持つと銘文ということになる。ini の後に何も欠損がないとするならば、主語+動詞 ini の状態形となり、「当該日にある班が連れてこられた」という意味となる。また ini の後に何らかの欠損があったと考えるならば、ini + in + 人名が書かれていたと推定される。つまり ini の不定詞+動作主(agent)という構文に、日付を付けた記述であると解釈出来る。こうした動詞 ini を含んだ例は4次調査時にも見いだされており、この動詞の存在が、本遺構を構成する石材の運搬に関わると解釈して正しいならば、ここに記された人名が石材の運搬に関わった人物であると解釈するのが適切であろう。しかしもし関わった人物が問題であり、班が問題であったのではないことをも示唆するものであると解釈してよいならば、問題の班構成と人物との関連を考察する上で、一つの手がかりを与えてくれるものとなる。

AK07-A334 ///wnmy//// 「////右班////」

AK07-A501 ///zmHy/// 「////左班////」

AK07-A507 Nb-wa 「ネブワア」(完形で人名のみ)

AK07-A591 ///zmHy/// 「////左班////」

AK07-A617 zmHy pA-nHzy 「左班ペアネヘシ(人名)」

AK07-A642 Axt 2 zw 5 + titile?+ pA-zA ////(pA-zA-nzwt)「アケト2月5日//タイトル?//ペアサアネスウト(人名)」

AK07-A643 nA////(nA-HrH) 「ナアヘレフ(人名)」

この例は石材の下に見られるブロック上に書かれたものであって、いわば原位置を留めているものであり、上にある石材を取り上げない限り、冒頭の文字しか読みとることは不可能であるが、明瞭であり、人名の nA-HrH で誤りないと思われる。

AK07-A650 zmHy pA-zA-nzwt 「左班ペアサアネスト」

AK08-O841 zw 18 pA-nHzy 「18日ペアネヘシ」

12から19日の記述に関して、日付と名前のみしか記載しない書記がいることは別稿で既に指摘したが、ここで改めて出土するに及び、筆跡を詳細に観察した結果、同一の書記の手によると考えるのがよいという結果を得た。

この事実は、少なくとも同一の日に書記が複数存在したと考える根拠となり、労働者組織あるいはそれを管理する書記の組織を知る上で一つの手がかりとなろう。7次・8次のインクで書かれたヒエラティック・インスクリプションをまとめると以下の通りである。

班別に関連して：

wnmy（右班）：1例

zmHy（左班）：4例

人名に関連して：

pA-nHzы：7次調査2例；8次調査1例

nb-waw：7次調査例1例

pA-zA-nzwt：7次調査2例

nA-(HrH)：7次調査1例

日付に関連して：今期においてもアケト季以外の季節は見いだされず、読める限りにおいてはアケト2月と3月の例であり、1月および4月の例は見いだされていない。一方、今期の出土遺物中には赤で書かれた文字と認識しうるものはなかった。

このようにみえてくると、7次・8次の調査に於いては、インクで書かれたヒエラティック・インスクリプションに関する限り、新たな人名や目立った発見こそなかったが、従来の見解を大筋で裏付けるものであり、従来の読みを確認するものであった。

1-3. ナオス（AK07-O408）

7次の調査では本遺構で始めてナオスが発見された。石灰岩製で、非常にもろく劣化しており、元来の石灰岩石材の層理面に沿って割れており、層理に沿って平行に剥がれている印象を受ける。ほぼ完形で発見されたものの、表面の2柱の神の顔が破損してしまっていたが、その後修復された。

向かって左側がプタハ神、右側がオシリス神（あるいはアトゥム神？）と思われる神像が彫り出され周囲に銘文が彫られている。正面と両側面に装飾が施され、上面、下面、裏面に装飾はない。右側面には頭に日輪をいただいた角をつけた、牛頭をして左手に mAat の羽根を持ち手を広げて守りのしぐさをしている女神の姿が描かれ、添え書きとして Hwt-Hr nb//// 「ハトホル、////の主」が読みとれ、手を広げているのがハトホル神であることがわかる。左側面には頭に日輪をいただいた角を持ち、右手に mAat の羽根を持って手を広げて守りのしぐさをしている女神の姿が描かれており両側面からナオスを護るようなしぐさをしている。装飾上には添え書きとして mwtNTr wr zty 「神の母、玉座偉大なりし者」と書かれている。ここで描かれている神が誰であるのか問題があるところであるが、「神の母」という表現はイシス女神に付されることが多いので、ここに書かれた図をイシス女神の図と解釈することも可能であろう。

銘文の主なものはナオス周囲の銘文と神像の周囲に彫られているもので、本質的にはほぼ同様の文言が繰り返

返されているものと思われる。銘文自体は corruption が多く部分的に読みが困難な部分がある。以下の訳は現状での訳案であり必ずしも最終結論ではない。

銘文は以下のように読める。

Htp-di-nzwt n ptH zkr nb wzir nTr aA nb r-zTAW

「王がプタハ・ソカル・オシリス、大いなる神、ネクロポリスの主に与えた供物」

in m??n-m?? wi Hp tm pA-Sri-n-immn Sri-ii-zn?? / mAa xrw??

「... (前半は文にならない) ...ハビにしてアトゥムであるパアシェリエンアメン、.....」

pA-Sri-n-immn は明らかに人名であるが、その後の文言はそのまま読めば ii zn となるが、文の一部として解釈することも不可能であるし、人名としてもランケの人名辞典には類例が見あたらない。解釈はいくつか考えられるどれがもっとも妥当であるのか現状では判断できない (下記参照)。

wzir zA Hr

「オシリスなるサアホル」

zA n Hr という具合にいわゆる間接属格で血縁関係を表すと解釈すると、「ホルスの息子」ということになり、しかもその後で人名が続くはずであるが、適切な字句が見あたらない。そのためにこの字句自体が人名であり、すなわちサアホルという人名であると解釈をしておく。

wzir nb Ddw nTr aA nb AbDw zty xnty n pr-nzwt

「オシリス、ブシリスの主、大いなる神、アピュドスの主、王宮の先頭の座を占める者」

Ddw のあとの縦長サインは nTr aA を意図したものと解釈するのが妥当であろう。このナオスが末期王朝に属すること (下記参照) を考えると、この読みが最も可能性が高い。その後の nb の後の縦長二本線は向かって右側のサインが線刻単に刻まれているのに対して、右側のサインは周囲だけを線刻として彫り込み中心を空けている。一方コンテキストから考えても、nb AbDw と読むのが最も妥当な読みであろうと思われる。

xnty n pr-nzwt と読むか、xnty につく phonetic complement と解釈して xnty pr-nzwt と読む解釈と二通り考えられるが、意味に変わりはない。

Hp tm pA-Sri-n-immn ii di. f wdpw. f ra nb kA. f-nfr

「アピスにしてアトゥムであるパアシェリエンアメン (人名)、彼が、彼のカーが美しくあるように、... 供物を毎日与えますように」

パアシェリエンアメンという人名の後の文字列はここでは上記と異なって、と読める。そのまま読めば ii zn となるが文にならない。他の解釈方法として、そのサインの前の子供のサインまでを人名であると解釈し

て Sri-ii-zn という人名であり、pA-Sri-n-imn と Sri-ii-zn との間に zA 「～の息子」という語句が省略されているととって「シェリイイセンの息子ペアシェリエンアメン」と解釈するか、あるいは ii と zn が縦長サインであるということから、書記は mAa xrw を書こうとしたものであると解釈すれば「ペアシェリエンアメン---声正しき者---」と解釈することも可能である。しかし目下のところ、どの方法で解釈するのが最も妥当であるのか、判断しかねる。主語の後に述語動詞が願望を表す意味で現れるのは、26王朝時代頃言語の特徴である。これを仮に wdpw と読んでおいたが、ほかに t Hnqt prt-xrw. f 「パン、ビール、彼の言葉による供物」と解釈することもできる。いずれにしても供物を捧げることには違いない。末尾の kA. f nfr は末尾に現れた prospective zDm. f で目的の意味を表すと解釈するのがよからう。

imAxw pA-di-nt zA kA nb

「祝福された者、ペアディネイト、カアネブの息子」

DHwty di Hp

「ジェフウティ・ディ.....アピス」

このナオスの銘文はいわゆる年紀はない。従って、年代を直接示唆するものはないが、人名には流行り廃れがあり、絶対的な年代決定ではないもののある程度有効な年代決定の手段であろう。このナオスで見られる確実な人名は以下の通りである。

pA-di-nt:ペアディネイト

pA-di+神名というパターンは末期王朝以降しばしば見受けられる人名である。具体的にみていくと末期王朝時代に最も多く、ギリシャ時代には稀になる人名である。

pA-Sri-n-imn:ペアシェリエンアメン

pA-Sri-(n)+神名というパターンは第21王朝以降見受けられる人名であるが、pA-Sri-n-imn という人名はランケの人名辞典ではギリシア時代とされている。同様のパターンとして、pA-Sri-n-Azt、pA-Sri-n-inpw、pA-Sri-n-itm という人名もみられる。しかしこれらの人名を具体的にみていくと、もちろんギリシャ・ローマ時代にも用例はあるものの、もっとも頻繁にみられるのは、26王朝においてであり、この名前のパターンが最も多く知られる地域はジェベライン付近出土の初期デモティック文書である。

kA-nb:カアネブ

kA-nb という人名はランケの人名辞典にはみられない。しかしこの人名は別読みの可能性として nb-kA と読んだ可能性もあり、この nb-kA という人名は、中王国時代の女性(CGC 20521[b])にみられるものの、本例にはあてはめるのは、他の銘文の様式から見ても無理があるところから、現在類例はないと考えた方がよからう。

このように人名をみてくると、少なくとも末期王朝時代であることは確実であると思われる。学界一般に広義の末期王朝時代に関する人名資料は非常に遅れているのが現状ではあるものの、少なくとも資料的に見る限

り26王朝末から27王朝時代時代に流行した人名と同様な人名が本遺構出土のナオスに見られると判断するのが妥当であろう。従って、人名から見る限り、このナオスの年代は広義の末期王朝時代時代に属するものと考えるのが妥当であり、あえて限定すれば26王朝から27王朝時代ころを推定するのがよいだろう。

1-4. 7次・8次調査出土のいわゆるプロスキュネーマ

いわゆるプロスキュネーマというのは神殿のまわりに足跡などを神殿などの周辺に刻みつけたり、墨で書き付けたりして、だれそれがここへやってきたということを記したものであり、神殿に通常はいることが出来ない人たちが、残したものであると解釈されてきた。しかしこうしたプロスキュネーマはそれ自体が地味であり、特に銘文の上で読めるものもほとんどないところから、従来あまり顧みられることのなかった。そのため、報告例が極めて限定された範囲のものでしか行われておらず。この本来の目的や、年代決定に関しては問題が山積しているといわねばなるまい。従って、ここではかかるプロスキュネーマが当該遺構に存在した事実を指摘するに留めることとしたい。

AK07-A641 足形 右足25.5 cm; 左足24cm

AK08-F058 足形

AK08-F059 馬

AK08-F062 格子

従来の見解ではプロスキュネーマはリビア王朝時代のテーベ地区に限ってみられるとされていた。しかしカスティリオーネの踏査によりプトレマイオス朝まで広く見られ、地域的にもヌビアからトゥナ・エル・ジェベルに及ぶと考えられ、北限が中部エジプトであると考えられるようになってきていた。しかし、近年の報告でサッカーラ地区でもホルエムヘブのトゥーム・チャペルでその存在が指摘され、我々の遺構でも明らかにプロスキュネーマが認められるところから、プロスキュネーマはエジプト全土にわたると考えた方が妥当であろうと判断するのがよいだろう。最も広く知られているのは足形をしたものであるが、どのような種類のものがどのようにあり、どのような意味を有するのかは今後の考察に期待されるところである。

2. レリーフ (図5~10)

2-1. はじめに

1991年に始まった第1次発掘調査以来、本遺跡からは、おびただしい数のレリーフが刻まれた石灰岩の断片が出土してきた。その数は、第6次発掘調査終了までで、1350点にのぼる。当初からこれらの断片は、そこに描かれるモチーフの内容や描写のスタイルに基づいて、元来石造建造物の壁面を飾っていた装飾の一部であると認識されてきた。さらに、断片には繰り返しカエムワセトの名前・称号および姿が刻まれており、ここからこの石造建造物がラメセス2世の第4王子カエムワセトに深く関連するものであることが明らかになっている。

発掘調査開始当初から、こうしたレリーフが刻まれた石灰岩の断片を対象とする研究の目的は、まず石造建造物の壁面装飾の復原にあった。古代エジプトにおける建造物の壁面装飾の内容は、通常装飾が施された空間に対する当時の人々の認識と深く関連し、その空間の使われ方や意義を推測する重要な手がかりを提供するこ

とが知られている。石造建造物の築造目的を明らかにするためには壁面装飾の全体像を知る必要があるが、カエムワセトの石造建造物は、すでに壁面が完全に壊されていた。そこで、当該遺跡において、まず壁面装飾の復原が最初の課題となってきたのであった。

レリーフが施された断片は、主に石造建造物周辺の攪乱層内に堆積していた。第6次発掘調査終了までに、石造建造物周辺部（すなわち最も密にレリーフが刻まれた断片が分布していた地区）の発掘調査が完了し、そこから検出された断片を基に、壁面装飾の概要が推測されるに至っていた。しかし、全ての断片が検出されたわけではなく、未だ装飾の概要が明らかではない部分も少なくなかった。

第7次発掘調査の際には、石造建造物の北方地区を発掘している。この調査の結果、ポルティコ北壁の壁面装飾復原に大きく貢献する断片数個をはじめとして、従来不明であったモチーフ解明の手がかりとなる断片がいくつか出土した。本稿では、第7次発掘調査出土のレリーフ断片について、概要と復原に関する従来の知見に貢献した点を中心に報告する。

2-2. レリーフ断片の資料作成

第1次発掘調査以来、レリーフが施された断片について、下記のような資料が作成されており、第7次発掘調査出土品も同様に資料化された。基本的な資料は、写真、フィルム・トレース、石材観察記録、および出土位置記録から構成される。各断片ごとに台帳が作成され、観察事項、作業進行状況、および収納状況の記録がデータベースを使用して管理された。

2-3. 壁面装飾の復原

これまでバラバラになった断片から元来の壁面装飾を復原するために、レリーフ断片の分類、出土位置の分析、および類例の検討が行われてきた。レリーフ断片を各種属性に基づいて、元の壁面装飾に対応する場面に分類し、断片の出土位置から元来の壁面における位置を推測した。さらに、モチーフの欠損部分を類例を参照することによって補うことを試みている[高宮他 1995:13-29]。

第6次発掘調査までに出土したレリーフ断片の分析から、石造建造物の壁面は次頁のようなモチーフで飾られていたことが明らかにされている。

こうして壁面装飾復原の枠組みは概ね想定されてきているが、これまで検出された断片の大半は、ポルティコ南半部、長方形室、および奥室に属し、特にポルティコ北半部の装飾を復原するための資料が欠如していた。第7次発掘調査によって石造建造物北側から検出された資料は、このポルティコ北半部の壁面装飾復原に役立つことが期待された。

2-4. 第7次発掘調査出土のレリーフ断片概要

第7次発掘調査期間中に、石造建造物の北側（グリッド0B, 0C, 0D, 0E）および西側（グリッド0F, 1F, 2F, 3F）において広範囲に発掘調査が展開された。これらのグリッドのうち、特に最も石造建造物に近接するグリッド0Bにおいて大型レリーフ断片数点が検出されたほか、周辺から散発的に断片が出土している。第7次発掘調査の際に検出されたレリーフ断片の総数は、102点であった。

グループ	石質	タイプ	サイズ	深さ	モチーフ
グループ A 「花崗岩製偽扉」	花崗岩	沈め浮き彫り	座像高425mm	5mm	カエムゼト座像 他
			文字幅70-80mm	5mm	銘文（縦書き）
グループ B 「石灰岩製偽扉」	石灰岩	沈め浮き彫り	人物像高400mm*	12mm	カエムゼトとソリスの船
			文字幅65mm	12mm	上部銘文（縦書き）
			文字幅130mm	7mm	下部銘文（縦書き）
グループ C 「カエムゼト大型立像」	石灰岩 多孔質	高浮き彫り	人物像高1800mm*	4-6mm	カエムゼト大型立像
			文字幅136mm	4-6mm	銘文（縦書き）
グループ D 「供物奉納」	石灰岩 良質	高浮き彫り	人物像高1200mm*	4-6mm	神々に供物を捧げるカエムゼト
			文字幅120mm	4mm	銘文（縦書き）
			文字幅120mm	4mm	銘文（横書き）
グループ E 「湿地」	石灰岩 良質	高浮き彫り	人物像高 600mm*	3mm	湿地、ハピュルス船、カエムゼト
グループ F 「神々の行列」	石灰岩 多孔質	高浮き彫り	人物像高300mm	3mm	神々の行列
			文字幅55mm	3mm	銘文（横書き）
グループ G 「大型横書き銘文」	石灰岩 良質	高浮き彫り	文字幅144mm	3mm	銘文（横書き）
グループ H 「地鎮祭」	石灰岩 良質	高浮き彫り	文字幅3.5mm	1.5mm	銘文（縦書き）
グループ I 「未完成」	石灰岩 多孔質	高浮き彫り	—	3mm	未完成
グループ J 「浅浮き彫り」	石灰岩 良質	高浮き彫り	—	0.5-1mm	図像、銘文

*印の付された数値は、現物では採寸できずに、断片より推定復原されたことを示す

第7次発掘調査で出土したレリーフ断片は、概ねこれまで行われてきた壁面装飾の枠組みの中で理解できたが、ポルティコ北半部の装飾内容をはじめとして、従来の知見にいくつもの新たな詳細情報をもたらしている。そこで、以下に建造物の壁面別に、第7次発掘調査で検出されたレリーフ断片について報告する。

2-4-1. 「石灰岩製偽扉」（ポルティコ西壁）

ポルティコ西壁は、建築学的考察から導き出されたところによると、中央の入り口を挟んで南北に分かれ、南北それぞれ幅約9.0m、高さ約4.8mの規模を持つ。第6次までの発掘調査によって検出されたレリーフ断片を分析した結果、ポルティコ西壁はその大きな部分がパネル装飾を持つ偽扉を並べたような装飾で飾られてい

たことが明らかになっている[Takamiya and Yoshimura 1997:74-77]。ポルティコ西壁南部の復原によれば、偽扉の下部にはパネル装飾の間にカエムワセトの名前と称号を含む大型の銘文が縦方向に刻まれ、上部にはソカ神の聖船にナトロンを捧げるカエムワセトの姿が描かれていた。この部分のレリーフは沈め浮き彫りで施されていることから、他の場面の断片とは容易に判別が可能である。

ポルティコ北部から出土したレリーフ断片にもパネル装飾と沈め浮き彫りを施したものが多数含まれていたことから、ポルティコ西壁北部にも南部と類似した偽扉のような装飾が施されていたことはほぼ確実であった。第7次発掘調査の結果、計7点の石灰岩製偽扉に属すレリーフ断片が検出された。これらはほとんどが小断片であり、出土地点はポルティコ近くに集中している。これらは主に偽扉下部のパネル装飾部に属し、パネルの凹凸の間にヒエログリフが刻まれている。AK07-O847には「hr」の文字が、AK07-O720には「n」と「tp」の文字が読みとれる。従来の知見に大きな情報は加わらないが、他の年次に出土した断片と接合を試みることによって、情報を増加させられる可能性があるであろう。

2-4-2. 「供物奉納の場面」(ポルティコ北壁上段)

ポルティコ北壁は、建築学的考察から導き出されたところによると、幅約5.0m、高さ約4.8mの規模を持つ。ポルティコ南壁面装飾考察の結果、すでにポルティコ南壁面の装飾は上下2段に分けられ、上段には「供物奉納の場面」が描かれていたことが明らかになっている。上段の高さは、166cm前後と推定されている。この場面のレリーフ断片は、比較的高く彫り出された美しい高浮き彫りと身長120cmくらいの人物像およびそれに対応する供物やヒエログリフのサイズから、比較的明瞭に識別される。おそらく北壁面においても同じような場面が描かれていたことが期待されたが、これまで北壁面上段の装飾に該当することが確認された断片数は著しく少なく、装飾の内容についてほとんどわかっていなかった。

第7次発掘調査の際に、ポルティコ北部周辺から計41点の「供物奉納の場面」に所属する断片が検出された。これらの多くはポルティコ北壁面を飾っていたと考えられるものの、いずれも小断片であり、これまでの知見に大きな情報を加えることはできない。AK07-O727やO803に人体の表現が認められ、AK07-O689やO774にキルトの表現が認められることから、キルトをまとったカエムワセトを含む人物像が描かれていたことが確認された他、AK07-O886をはじめとする多数の断片から、ヒエログリフの銘文が刻まれていたことが追認されたのみである。

2-4-3. 「湿地の場面」(ポルティコ北壁下段)

A) 「湿地の場面」の復原

ポルティコ南壁の下段には、第6次発掘調査までに出土したレリーフ断片の分析から、湿地にパピュルスのボートを浮かべ、その上で女神に供物を捧げるカエムワセトの姿が描かれていたことが明らかになっている。上段と下段の高さが同じであるとすると、下段の高さは概ね166cm程度である。ポルティコ北部周辺からも水の表現を刻んだレリーフ断片が出土していたことから、おそらくポルティコ北壁下段にも類似の描写があったことが推測されていたものの、断片数が限られていたため、場面内容の詳細は不明であった。この場面に所属する断片は、やや浅めの高浮き彫りと水辺の表現の描写から判別される。

第7次発掘調査の結果、「湿地の場面」に属すと思われるレリーフ断片が計20点出土した。これらのうちグ

リッド0B から出土した断片には大型のものがいくつか含まれ、これまで詳細がわからなかったポルティコ北壁の壁面装飾復原に大きな進展をもたらすことになった。

大型断片 AK07-O616, O888, O890は、この場面の概要を把握するための重要な資料である。これらの大型断片ならびにその他多くのパピュルスの茂みの描写から、北壁の「湿地の場面」の広い面積がパピュルスの茂みとその中を飛び交う鳥類の描写によって占められていたことが推測される。また、AK07-O812の断片からは、パピュルスの茂みが水の上に描かれていたことが知られる。さらに AK07-O616はパピュルスの茂みの左側に銘文帯が存在したことを、AK07-O888は茂みの右側に豊穡を人格化した男神が複数描かれていたことを示す。第4次調査の際に、ポルティコ北部からパピュルスの船を表した断片が検出されていることから、男神群はパピュルスの船の上に立っていた可能性が高い。

上記大型断片から、男神の詳細を復原することが可能である。男神はそれぞれ頭に男神特有の長い鬘をかぶり、顎髭を付けている。腹部はふくよかに出っ張り、腰に短いキルトもしくはエプロンをまとっている。こうした描写は、古王国時代以降繰り返し豊穡を人格化した男神の描写として用いられており、多くの例ではナイル神ハピを表している。男神の身長は、残存部から推定して、45cm 前後と考えられる。男神たちはそれぞれ手に供物卓を持って、前方に差し出している。出土断片には残存していないものの、供物卓は伝統的なヒエログリフの「htp (供物)」形を呈していると思われ、供物卓中央にウアス杖が描かれている。供物卓と共にウアス杖を運ぶ描写も、古王国時代から一般的であった。供物卓の上には何も載せられていないが、下には生命の印アंक、ロータスの花とつぼみ、鳥が下げられている。

供物卓を捧げ持つ男神たちは、いずれも2人一組で描写されており、AK07-O888および O890に第8次発掘調査で検出された AK08-O565が加わって、3断片に一組ずつ同一描写に所属しない男神が残存していることから、北壁下段には少なくとも3組の男神が描かれていたことが確実である。1組の男神群の描写が最小約25cm の幅を要するので、男神が上下に重ねて描かれていない限り、3組の男神の描写は、幅75cm の壁面を占めることになる。男神左側にあるパピュルスの茂みの描写とあわせて、1m 以上の幅の範囲が復原されたことになるであろう。

ポルティコ北壁下段における湿地の描写内容についても、だいぶ詳細が明らかになってきた。AK07-O812が示すように、水の上にパピュルスが繁茂する様子が場面の中心になっていた。パピュルスの茂みの中には多数の鳥類が描かれている。中には巣の中で卵を暖める鳥の描写も見られ、鳥類の他に、マンガースが描かれていることが特筆されるであろう。第4次発掘調査の際に、ロータスの花が浮かぶ水の中を泳ぐ水鳥の図が描かれた大型断片が検出されていることから、パピュルスの茂みの周囲には豊富な水が描かれていたと考えられる。

上記のように、第7次発掘調査出土のレリーフ断片からは、ポルティコ北壁下段の「湿地の場面」は、水の上に繁茂するパピュルスとその中を飛び交う鳥類、およびおそらくパピュルスの船に乗って供物を捧げ持つ豊穡の男神群の描写で構成されることが明らかになった。こうした湿地とパピュルスの茂みの構図は、貴族たちのスポーツ描写の一環として、古王国時代以来頻繁に墓室壁画のモチーフとして用いられてきたが、パピュルスの船上で神々との交流の構図が描かれている例は極めて稀である。

B) 南北壁面の構図比較

前述のように復原されたポルティコ北壁下段の構図を、すでに復原されていたポルティコ南壁下段の構図と

比較することは重要である。いずれも「湿地の場面」を描いており、当初は概ね南北対象の構図と推測されていたが、今次調査出土レリーフ断片を考察した結果、各所に非対称の部分が認められたためである。この非対称性はおそらく他の場面の復原にも大きな影響を与えるであろう。

まず、南北「湿地の場面」の構成要素を比較してみる。水の描写、船の存在（ただし、北側については確証がない）、パピュルスの茂みの描写、供物卓の存在については、いずれも両者に共通しており、どちらも湿地における供物運びの行為を描いていることは確実である。しかし、各描写の内容、ひいては描かれている行為の内容と性格については、大きく異なる可能性がある。以下に、詳細を比較してみたい。

南北壁面の最大の違いは、供物卓を捧げる人物にあるといえる。南壁においては、供物卓を運んでいたのはカエムワセトであり、カエムワセトと対峙して受け取り手として描かれていたと思われるのは、名前不明の女神であった。一方、北壁においては、供物卓を運んでいるのは男神群であり、受け取り手の姿はこれまでの出土断片には認識されていない。運び手の違いは、この場面の描写内容の性格を大きく左右すると思われる。カエムワセトが供物卓を運んでいる南壁の描写は、神々に対するカエムワセトの供物奉納場面と理解されるのに対して、男神群が供物卓を運ぶ北壁の描写は、豊穰を人格化した男神による自然の恵みの授与を描いた場面と理解されることになる。

この違いは、建造物の性格理解にも影響を与える可能性がある。当該遺跡の石造建造物は、王子カエムワセトによって築かれ、壁面装飾の描写で王子が神々と並ぶ主役となっていることおよび奥室西壁に据えられていた花崗岩製偽扉に刻まれた銘文内容から、王子本人を記念する建造物である可能性が推測されてきた。カエムワセトが受け取り手となる構図と捧げ手となる構図の存在は、この建造物がカエムワセトの居所と認識されていたと同時に、神の御座としても認識されていた可能性を示唆するであろう。

このような描かれた行為の意味の違いの中でも、図像の方向性にはある種の統一が認められる。南北壁面いずれにおいても、供物を運ぶ者が建物の外側に描かれている点である。カエムワセトが運び手である南壁面においては王子が左側に位置し、男神群が運び手となる北壁面においては、男神群が右側に位置しており、いずれの場合も運び手が建造物の外からやって来たように描写されている。このように供物が外側から建造物内部に持ち込まれるように描写される方法は、墓においても神殿においても一般的であった。運び手が外からやって来るという一貫性が受け入れられていることは、おそらく先のように建造物の性格認識と深く関わっているであろう。ただし、ここでは南壁の構図をカエムワセトが女神に供物卓を運ぶとして論じてきたが、この状況そのものを描いた断片は出土しておらず、カエムワセト、女神、供物卓の位置関係から運び手が推測されていて、図柄としてはやや不自然ながら、運び手が女神であった可能性も排除しきれない。そこで、南壁「湿地の場面」の別の復原案について、後に詳しく論じることにした。

南北壁面におけるもう一つの違いは、両壁面において頻繁に描かれる自然の恵みの種類にあるようである。南壁面については、これまでの発掘調査の結果、魚類が描かれた断片が多数検出されてきたが、鳥類を描いた断片は稀であった。一方、北壁面については、第7次発掘調査出土例からも明らかなように、鳥類を描いた断片が多数であるのに対して、魚類を描いたものは稀である。この偏り現象を残存状況のみに帰すことは困難であり、魚類優勢の南壁と鳥類優勢の北壁という、対照的な構図の存在が認められるであろう。この違いは、運ばれる供物の内容にも反映されている可能性がある。南壁面のカエムワセトが捧げ持つ供物卓からは魚類が下がっている（魚類が供物卓の下に描かれるのは珍しい例である）のに対して、北壁面の男神群が捧げ持つ供物卓

からは鳥類が下がっている。したがって、南壁面においては魚類が泳ぎ回る環境の中で、カエムワセトが収穫物である魚類を女神に捧げ、北壁面においては鳥類が飛び交う環境の中で、神々が収穫物である鳥類を運んでいる構図が描かれていた可能性がある。ただし、南壁近くからは鳥類と手が一緒に描写された断片が出土しており、鳥類を下げた供物卓を運ぶ場面が存在した可能性は残されている。

南北両壁面の残存状況は極めて断片的であり、「湿地の場面」の構図の全体像は不明瞭であるが、魚類が水中に生息し、鳥類が水上に生息する動物である限り、南北両壁面の間で水とパピュルスの茂みが占める部分の描き方、すなわち構図全体がやや異なっていた蓋然性が高いであろう。

南北両壁面では人物像の大きさもやや異なっていた。南壁面のカエムワセトと女神が概ね身長60cm程度と推測されているのに対して、北壁面の男神群は、残存部位から推し量って、身長が45cm前後であったと思われる。したがって、人物像の大きさは北壁面の方が小さく、南壁面と同じように1段構成と仮定した場合、男神群の上下に別の図柄を描く空間が広く残されていたことになるであろうし、2段構成も不可能ではないであろう。この人物像の大きさの違いも、全体の構図に影響された結果であると推測される。

C) 南壁「湿地の場面」の復原再考

先述したように、北壁「湿地の場面」の概要が出土断片に基づいて復原された結果、従来考えられてきた「湿地の場面」の復原についても再考の必要が生じた。これまで、南壁「湿地の場面」は、湿地に浮かべたパピュルスの船（2隻と推定される）の上で、カエムワセトが対峙する女神に供物卓を捧げている構図と理解されてきたが、実際に大型ブロックに残されていたのは、カエムワセトと女神の腰から下の部分および供物卓の下から下がった供物のみであった。手の部分が残存していないため、カエムワセトと女神のどちらが供物卓を手にしていたかは推測の域を出ていなかったものの、供物卓がカエムワセトの近くに描かれており、両者のポーズを想定復原すると、カエムワセトが供物卓を持っている方が図像的に妥当であると考えられたことから、この復原案が導かれた。しかしながらこの復原案は、南壁面装飾の内容が明らかになった現在、南北壁面における「湿地の場面」の内容が矛盾するという上記のような問題を生じさせた。そこで、もう一つの復原案を提示し、その場合の場面内容解釈についても述べておきたい。

もう一つの復原案とは、南壁「湿地の場面」において、供物卓を運んでいるのは女神であり、受け取り手がカエムワセトであったというものである。この復原案に基づくと、南北両壁面の「湿地の場面」において、いずれも神々がカエムワセトに自然の恵みをもたらすという一貫した内容の構図が描かれていたことになるであろう。

一方、この復原案では、図像の建造物に対する方向性が統一を失うことになる。南壁面において神々は建造物の内側方向から外側にいるカエムワセトに供物卓を運び、北壁面においては建造物の外側方向から内側に供物卓を運ぶことになるからである。ただしこの場合も、神々は左側から、という一貫性があることは指摘しておく必要があるであろう。

方向性に一貫性を欠くか否かは、当該石造建造物の壁面装飾復原において、かねてから重要な問題となってきた。事実、長方形室と奥室においては、たいていカエムワセトが建造物の奥に位置して、神々がそれを訪ねる構図になっている。それに対して、ポルティコにおいては、南壁面の「湿地の場面」と「供物奉納の場面」の中で、カエムワセトが建造物の外側から内側を向く構図の存在が確認されている他、「石灰岩製偽扉」の上

部では、中心に位置するソカルの船に左右から対峙するカエムワセトの姿が描かれていた。図像の方向性の問題は、建造物の性格と関連して、今後も壁面装飾の復原考察の中で慎重に考慮すべき問題である。

D) カエムワセトと供物卓を運ぶ場面

カエムワセト王子については、当該遺跡以外からも豊富に資料が出土し、他に王子に関連する記念物の出土例も少なくない[Gomà 1973]。そしてそれらの記念物の中には、時に供物卓を運ぶ場面が描かれていることがある。ここで最後にこれらの類例について簡単にまとめ、本遺跡から出土した「湿地の場面」の性格付けを試みてみたい。

供物卓を運ぶ人物もしくは神が描かれたカエムワセト関連のレリーフは、少なくとも本遺跡出土例以外に2点知られている。そのうち1点は現在ウィーン博物館に所蔵されるレリーフ断片 (Nos. 5081-3および5095-7 [Komorzinski 1959-1960:67-73; Gomà 1973:Cat.35]) であり、もう1点はおそらくファイユームから出土したカイロ博物館所蔵のステラ (JdE. 89060[Gomà 1973:Cat.54]) である。

ウィーン博物館所蔵のレリーフ断片は、Gomà によっておそらくサッカーラのセラペウム出土と推測され、大きく3つのグループに分かれる。第1群は入り口周りの建材に施されたレリーフ、第2群と第3群は壁面のレリーフであり、これらははは接合しないものの、同じ建造物に属していたと考えられている。

第1群の入り口周りのレリーフ (Nos. 5095-7) には、入り口の脇にラメセス2世のカルトウーシュを含む縦方向の銘文があり、「ホルス、強き雄牛、マアトに愛されし者、両国土の支配者、ウセルマアトラ・セテプエンラー、王冠の支配者、ラメセス、生命を与えられし者、ロ・セチャウの支配者ソカル神に愛されし者、全ての生命を…」[Kitchen 1979:880]と読みとれる。その両外側には供物を運ぶ男性の像が少なくとも3段にわたって描かれていて、各段に「汝に(収穫物を)与える」の銘文と、カエムワセトの名前と称号「セム神官、王の息子」が記されている。人物像も銘文も一部しか残存していないため、供物を運ぶ人物を特定するのは困難であり、銘文に名前が記されるカエムワセトであるとも神々であるとも解釈することが可能であるかも知れない。しかし、残された人物像の顎には長い顎髭が描写されていることは注目すべきであろう。カエムワセトもしばしば顎髭を付けた姿で表されるが、長い顎髭の例は知られていないと思われる。この顎髭を重視すると、ここにおいて供物卓を運んでいるのは、神々である可能性が高い。ただし、通常このような供物卓を運ぶ男神は、ハピ神の例に見られるように、豊穰を表現してふくよかな胸と腹をしている場合が多いが、出版された限りではこの描写は確認できないし、腕が2本とも描かれている点は、本遺跡出土の男神、第2群の男神群、カイロ博物館所属のステラに描かれた男神と異なる。したがって、神々であるとしたら、カエムワセトの例の中では変わった例かもしれないが、腕に関しては同時期に類例がないわけではない。

第2群の壁面のレリーフ断片 (Nos. 5081-2) には、男神2柱、女神1柱の姿が描かれている。先頭の男神の頭上には「アケメヌ(?)」、2番目の男神の頭上には「大いなる緑」、3番目の女神の頭上には「メメト」の名前が記されており、神々の後ろにはカエムワセトの名と称号を含む銘文が刻まれている。2人の男神の胸と腹はふくよかに出っ張り、3神とも供物を載せた卓を差し出している。最初の男神の名は「ナイル河、神々の父」を表し、2番目の男神はファイユームのモエリス湖を人格化した神、3番目の女神はおそらく水源を人格化した神と解釈できるという[Seipel 1993:182]。解釈の詳細については諸説があるが、いずれナイル河周辺の水に関わる神々と考えられるであろう。

第3群のレリーフ断片 (No. 5083) には、供物を運ぶ一人の女神の姿が残されている。「ナイル河の増水」、「大いなる緑 (モエリス湖)」、「メメト (水源)」の単語を含む銘文が女神の頭上と後ろに刻まれており、第2群と同じくナイル河周辺の水に関わる神々が供物卓を運ぶ姿が描写されていたと思われる。残された女神の頭部には麦の穂が描かれていて、麦の穂を人格化した女神と考えられる。

ファイユーム出土のステラは、両面にレリーフが施されている。片面には父ラメセス2世、王子および神の姿が表され、ラメセス2世の治世おそらく32年に、カエムワセトが「大いなる緑」と呼ばれるモエリス湖の化身のために像を作ったことを記す銘文が刻まれている。裏面には、供物卓を差し出す「大いなる緑」の男神と、それを崇拜するカエムワセトの姿が向かい合わせに描かれている。神は「私の中にある全ての良きものを汝に与える」と述べている。

上記のように、本遺跡以外から出土したカエムワセトに関連する供物卓を運ぶ場面において、ナイル河や水と深く関わる神々が供物卓を運んでいるようである。受け手は必ずしも明示されていないが、少なくともファイユーム出土のステラにおいては、明らかにカエムワセト自身が受け手である。したがって、カエムワセトに関連する他の供物卓を運ぶ場面を参照する限り、本遺跡の石造建造物南壁面の「湿地の場面」においても、供物卓を捧げているのが女神であり、受け取り手がカエムワセトであるように復原することが妥当になるであろう。

ナイル河周辺の水や穀物を人格化し、豊穰を象徴する神々として表す方法は、古王国時代以来古代エジプトの神殿においてしばしば認められ、J. Baines によって "Fecundity Figures" の名称で呼ばれて体系的な研究も行われている [Baines 1985]。カエムワセトはこの構図を好んで用いていた可能性が高く、本遺跡の石造建造物においても、自らのために自然の恵みがもたらされることを望んで、壁面に描いた蓋然性は高いであろう。ただし、これにあわせた復原案によって、通常供物は外からもたらされるという規則が破られることの説明が必要となる。

今次発掘調査の結果、ポルティコ北壁に使用された石材についても、南壁と異なる特徴が認められた。南壁の石材は、40cm 四方のほぼ方形に近い石材であったが、北壁には幅が50cm を越える横長の石材がしばしば用いられていたことが明らかになった。石材の形態の違いも、今後北壁の装飾を復原していく上で重要な手がかりとなる。

2-5. ポルティコその他の場面

これまでの考察から、ポルティコ壁面には上記以外にもいくつかの場面が存在したことが知られているものの、それらの正確な配置については明らかになっていない。第7次発掘調査の結果、大型のヒエログリフが高浮き彫りで刻まれた断片がいくつか出土しており、これらはおそらくポルティコ北部のいずれかの壁面を飾っていたと思われる。

2-6. 「神々の行列の場面」 (長方形室南北壁面)

長方形室南北の壁面は、建築学的考察結果に基づけば、それぞれ幅約4.7m の規模を持つ。これまでの考察の結果、南北の壁面は、いずれも奥室方向 (西方) に向かって歩く身長45cm くらいの神々の行列が、数段にわたって刻まれていたことが明らかになっていた。比較的浅い高浮き彫りで刻まれていることおよび図像の大

きさから、この場面に属す断片が判別できる。

第7次発掘調査の結果、南北少数ずつの「神々の行列の場面」に属す断片が検出された。AK07-O898は神の姿が左を向いていることから、北壁面に属していたことが知られる。男神の頭部とその後ろの神が手に持つウアス杖の先端が残されている。表面にはギリシア文字のグラフィティが刻まれており、同じようにグラフィティが刻まれた既出の北壁面断片と近接する位置にあったものであろう。AK07-A117は、男神の脚の部分であり、右側を向いていることから、南壁面に属していたと判断される。

2-7. 「浅浮き彫り」(再利用石材)

本遺跡から出土するレリーフのうちには、高さ1～2 mm程度の浅い彫りのものが含まれており、仮に「浅浮き彫り」と呼称してきた。「浅浮き彫り」の多くは、図像のスタイルおよびヒエログリフの書法から、古王国時代に彫られたものであり、当時の建材を再利用したために本遺跡に持ち込まれたと考えられてきた。しばしば石造建造物の装飾には見られない彩色を伴うことが特徴である。

第7次発掘調査の際にも、計13点の「浅浮き彫り」が検出された。このうちモチーフが明らかな例として、AK07-O739およびA578の大型ケケル・フリーズが挙げられる。元来古王国時代のピラミッドに付属する神殿もしくは墓の上部を飾っていたと思われる。浅浮き彫りのケケル・フリーズは、過去の調査の際にもいくつも検出されている。

AK07-O893は内容が極めて興味深い断片である。上部に描かれたバスケットは、底が平らになっていて、棒のような物の上に描かれている。この図柄はセド祭りに上エジプト王が用いた輿の表現と同じである。本遺跡に近いアブ・グラープにあるニウセルラー王の太陽神殿の一角には、セド祭りを描いた部屋が築かれており、こうした輿が何度も描写されていた[Bissing 1905:Bl. 18-20]。また、その下に残存するヒエログリフは、右側が「imy-khnt」、左側が「hry-hbt」の称号を表す可能性がある。現物で詳細を確認する必要があるが、これらの称号はしばしばセド祭りの登場人物たちが帯びていたものであり、ニウセルラー王の太陽神殿では、輿を担ぐ人々が後者の称号を持っていた。上記のような解釈が妥当であるとすると、この断片はアブ・グラープの太陽神殿から搬入された物であることになり、当該遺跡において石造建造物に再利用されていた石材の搬出場所がレリーフによって確定された最初の例になるであろう。ただし確認のために、後日両者の詳細な彫り方やサイズを比べてみる必要がある。また、将来アブ・グラープの壁面装飾を検討することによって、カエムワセトがいかなる状態から再利用石材を持ち出したのかがわかるかもしれない。

2-8. 小結

これまで述べてきたように、第7次発掘調査出土のレリーフ断片は、これまでの出土数に比べれば少数であるが、特にポルティコ北壁「湿地の場面」を中心に、石造建造物の壁面装飾の復原に貢献する部分があった。壁面装飾の全体的な復原は、今後も試行錯誤のうちに進められて行くであろう。

また、「浅浮き彫り」に分類された再利用石材の中に、最初の建造物の特定を可能にするような手がかりが得られたことも重要である。すでにカエムワセトの石造建造物に使われた石材の大半が、古い建造物からの転用であり、組織的に運ばれたことが知られていたが、今後採石地を特定した上での研究が進められるであろう。

3. ステラ

アブ・シール南丘陵頂部遺跡からは、数多くの新王国時代の遺物が出土している。石造建造物の造営者である第19王朝ラメセス2世の第4王子であるカエムワセトと第18王朝のトトメス4世に関連する2つの大きなグループに大別される。特にトトメス4世に関連する遺物では、トトメス4世のステラが特徴的なものである。

第1～6次までに小型ステラ1点（AK05-O701）を含め13点のトトメス4世に関連すると思われるステラが出土している。

第7次調査では、2点のステラが出土した。そのうちの1点（AK07-A625）は、未完成で表面には文字や図像などの装飾が施されていないものであるが、大きさは高さが42.6cmで幅31cm、厚さが6.2cm～7.5cmであり、王と神々とは向かいあった他のステラと類似した規模をもつことから、トトメス4世のステラと関連すると推定されるが確証はない。この未完成ステラは、石造建造物の北西に位置する日乾煉瓦建物のRoom hから出土したものであり、上部は円形に加工されているものである。出土状況などから詳細は不明であるが、未完成ステラを再利用したものと考えられる。

第7次調査では、0E地区の砂層から発見されたソカリス神とトトメス神とを描いたステラ（AK07-O104）がある。石灰岩製のステラで、完形のものである。大きさは、高さが43.2cmで幅28.7cm、厚さが6.7cm～8.2cmである。表面には、向かって右にトトメス4世が立ち、右手にはヘス容器、左手には灯明を持っている。王は額に聖蛇ウラエウスを付けたネメス頭巾を被り、腰布を身につけている。向かって左には、頭上に日輪を戴き、ハヤブサの頭をしたソカリス神が立っている。ソカリス神は、左手にウアス杖を、そして右手には生命を象徴するアंकを持っている。中央上部には、縦書きでトトメス4世とソカリス神の説明が刻されている。トトメス4世の上部には、"*ntr nfr Mn-hprw-R^c di 'nh*" 「善き神、メン・ケペルウ・ラー、生命を与えられん。」一方、ソカリス神の上には、"*di.f 'nh(w) nb snb(w) nb Skr nb shmw*" 「彼は、全ての生命と健康を与える。ソカリス神、セケムウの主。」ステラの下段には、横書き1行で以下のような銘文が刻されている。"*ntr nfr Mn-hprw-R^c mry Skr shmw*" 「善き神、メン・ケペルウ・ラー、セケムウのソカリス神に愛されしもの。」ソカリス神は、サッカーラという地名の語源になった神であると考えられている。このステラの図像や文字には、部分的に青色顔料が付着しており、かつて図像の輪郭や文字の内部が青色に塗彩されていたと推定される。

4. 土器（新王国時代）

4-1. 出土土器の概要

第7次調査及び第8次調査では、多数の土器断片が出土している。これらは出土位置によりおおきく2つに大別される。まず第一には丘陵頂部より出土した土器群であり、第二に丘陵斜面より出土した土器群である。前者は、新王国時代の建造物と直接的に関連すると推測されるものの、後世の土器群の混入が認められること、現代における激しい攪乱を受けていることから、小断片が多く、極めて保存状況が悪い。ただし、いくつかの土器片には青色顔料による彩文が施されており、新王国時代に製作され、用いられた土器群が含まれていることを明瞭に示唆している。混入や攪乱の影響の少なく優良と判断されるコンテキストから出土のものに考察を絞るならば、有益な情報を引き出せるものと期待された。第7次調査における日乾煉瓦家屋出土の土器、第8次調査における東側溝出土土器などがこれにあたる。

一方、後者の丘陵斜面出土の土器群は、頂部出土のものに比べ、残存状況が良い。出土量も多く、出土土器の7割近くを占める。これらの土器群は、器形を復原することが容易な大型断片を多く含んでいることから、ランダム・サンプリングによって器種組成の大まかな傾向を把握することが可能である。ただし、第8次調査で出土した土器資料については、記録作業が十分には進んでいない。すでに作業の進んでいる第6次調査出土のもの、第8次調査出土のものについては、類似した器形が多く出土しており、一群の土器と考えて良いであろう。本稿では、西側斜面については、第6次調査で出土した土器群を中心に、第8次調査の例をいくつか加えることで、西側斜面出土土器の全体像を推し量る材料としたい。

本稿では、第7次調査に関わる出土土器として、日乾煉瓦家屋出土の土器群について報告する。西側斜面及び東側出土土器については、第8次調査の成果報告の中で触れることとする。

4-2. 日乾煉瓦家屋出土の土器群 (図11)

第7次発掘調査で検出されたのは、Room g, h 及び i の3室である。特にまとまった土器群が検出されたのは Room g 及び Room i であり、発掘終了後の整理作業では、この2室より出土した土器群についてデータ取得を試みた。結果、Room g からは20点、Room i からは27点にのぼる土器群が識別された(表1)。

Room g からの出土土器の全容は次の通りである。

まず目立つのが「甗(こしき)」と想定される土器である。多くの穿孔が穿たれており、これらは焼成前に付けられたものである。赤色顔料で縁取られており、同様の土器がディーラ・アル＝メディーナより報告されている[Nigel 1938:pp. 156-159, Pl. II]。その例(K. s. 50. a.)では、穿孔を持つ「間仕切り」(?)として、皿形土器の内面に貼り付けられている。当遺跡出土の例も、割れ口が広がって終わっており、さらには全体として円形ではなく多少ゆがんでいることなどから、口縁部ではなく、大型の皿形土器に付された「間仕切り」であった可能性が指摘される。

その他、小型の皿が1点、灰皿のような特徴的な小皿が1点、口径30cm 前後を測る大型皿形土器が8点検出された。8点の皿形土器のうち、6点は赤色顔料による口縁部が縁取られている。また、小型の高坏である。極めて薄い器壁を有し、胎土も良く精製されている。高坏は一般的な器形ではないが、いくつかの報告例がある。しかし、本遺跡で出土した例ほど細い坏部を有する例は少なく、僅かに、サッカーラの墓地区よりの報告例を挙げることができる[Aston 1997:Pl. 121-168]。但し、同報告書では搬入品として扱われており、注意が必要である。すなわち、当遺跡出土の例も、搬入品あるいはそれを模倣して造られたものである可能性を勘案する必要がある。

一方、壺形土器も8点観察された。1点が彩色を施されている他は、彩文は施されていない。8点の壺形土器のうち、6点はいわゆる漏斗状頸部土器である。

Room i からは、既述したように、27点の土器が出土している。内訳は、小皿3点、大型の皿8点、碗1点、鉢1点、壺形土器10点、小型壺形土器1点、蓋と思われる断片が1点、それぞれ検出されている。その他、混入(泥煉瓦に混和材として混入した土器片か?)と思われる断片も2点認められた。

大型皿形土器のうち、3点には口縁部に赤色顔料による縁取りが認められる。また、漏斗状頸部壺が9点認められ、内2点には、いわゆる青色彩文土器であった。両者は器形、さらには線文を基本とする点において、類似しているものの、その色使いについては全く異なった様相を呈している。

以上、日乾煉瓦家屋出土の土器は、全体としては、①漏斗状頸部土器が出土したこと、及び②青色彩文土器が出土したことから、新王国時代の土器群であることは間違いないであろう。さらに③口縁部に赤色顔料による彩文帯を有する皿型土器、及び④「甑（こしき）」の存在は、これらの土器群が、第19王朝であることを示唆しているようにも思われる。これは、現状考えられている、石造建造物の付属施設としての機能とも矛盾しないであろう。

5. 土器（末期王朝時代）

5-1. 第6/7次調査出土の末期王朝時代の土器の概要

まず、0E、9E グリッドの泥煉瓦遺構の東斜面からまとまって出土した末期王朝時代の土器に絞って概要を報告する。0E、9E グリッドの泥煉瓦遺構の周辺は、第6次と第7次にまたがって発掘が行われた箇所、第7次調査出土分については、調査終了後に遺物整理の時間が十分にとれなかったため、あまり進んでいないが、第6次調査出土分については、ある程度進めることができたので、ここでは第6次調査出土分と第7次調査出土分をまとめて報告したい。

すでに去年の段階で、0E グリッド泥煉瓦遺構周辺出土の土器群には、末期王朝時代に特有の土器が多数含まれているらしいことがすでに推測されていた。その推測を確かなものにするためにも、今年の整理作業では、できるだけ多くの土器を図化して、土器のレポトリを明らかにする必要がある。そしてそうすることによって、土器の年代を確定させるとともに、それらの土器がどのような用途に使われていたのかという問題の検討から、当時の丘陵頂部でどのような人間の活動が行われていたのかを考えることを目的とした。

これらの目的のために、膨大な量の土器片の中から必要な個体が抽出され、資料化された。概して当遺跡出土の土器は残存状況が非常に悪く、小片が多いが、そうした中から、残存状況が比較的良好で、類例を参照すれば、年代が特定できそうな特徴のある個体が抽出され、資料化が進められた。ただし、残存状況が良好な個体はそれほど多くはなく、特に大型の土器は時間の制約もあって、接合して復原するのが難しいため、資料化ということでは、どうしても後回しになりがちで、資料化されたのは、完形か、完形に近い土器の他、資料化が簡単で、小片からでも全体像が窺える小型から中型の土器に偏ってしまったことは否めない。従って、こうしてできあがった土器のレポトリにもある程度の偏りが生じているわけで、土器の年代やそれらの土器を使った当時の人々の活動内容まで考えるには、これだけではまだ不十分であるが、差し当たり、わかる限りのことだけまとめたい。

5-2. 第6/7次調査出土の末期王朝時代の土器の年代

土器の年代決定に関しては、すでに年代がわかっている類例との比較検討に拠るしかないので、いろいろな報告書をあたって類例を探したが、図に調査年次別に載せてある、今期調査中に図化できた土器全点のうちの半分は類例が見つからず、年代を特定できなかった。類例が見つかって、年代は、ただ単に Late Period としか報告されていないものも多かったが、より細かい年代が特定されている類例から判断すると、いくつかの土器は大体、第26王朝から第30王朝の間、暦年代で言えば、B.C. 7世紀から B.C. 4世紀前半の間に年代づけられるようである。第3中間期まで遡るものやブトレマイオス朝時代まで下るものはなさそうである。類例が見つかった遺跡は、メンフィスとサッカーラの他、東部デルタ地域のタニスやテル・エル＝マスクータなどで、

上エジプトの遺跡からは類例を見つけれなかった。このことは、末期王朝時代の土器は上エジプトと下エジプトでは全く様相が異なるという最近の研究結果とも一致している。類例が見つからなかった土器については、他に年代決定の決め手がないため、何とも言えず、これらの土器が見つかった層に末期王朝以外の他の時代の遺物が混入している可能性も全く否定はできないが、その可能性を検証する資料も持ち合わせていないので、とりあえず現段階では、図に載せた土器は全て同じ末期王朝時代のものと考えておくことにしたい。そして、それを前提にして、次にこれらの土器の用途の検討から、当時の丘陵頂部での人間の活動についても少し考えてみたい。

5-3. 第6/7次調査出土の末期王朝時代の土器の用途

● 図に載せた土器は、大きく食卓器、調理器、貯蔵器、特殊器に分類できる。食卓器というのは、図12、図15、図16のそれぞれの上段の方に載せてあるような碗、鉢、皿などである。鉢の多くは、図12-11, 12, 13, 14, 15や図15-3, 4, 6のように器壁が途中で屈折した綾付鉢 (Carinated bowl) で、こうした土器は末期王朝時代によく見られるようである。また、図12-20, 21のような器壁が垂直に立ち上がる大型の浅い皿も末期王朝時代によく見られるようであるが、当遺跡出土のものは、他の類例と比べると、かなり口径が大きいのが特徴である。この土器はパンを焼くための型である可能性もある。

● 調理器には、壺、甕などがある。これらには、図13-1, 2, 3のように、頸部を持たず、全体では卵形になりそうなものや、図13の残りのように、明瞭な頸部と円筒形の胴部を持つものなどの他、図14-1のように全体が球形に近くて、2つの把手を持つものなどがある。これらの土器は、器外面の胴部から底部にかけて煤で真っ黒になっていることから、煮炊きに使用された調理器であると判断できる。

● 貯蔵器としては、図15-14, 15や図16-19のようなアンフォラがある。図15-14は、残存状況は良くないが、おそらくフェニキア型アンフォラ (Phenician Amphora) と呼ばれているもので、ほぼ直角に張り出した肩部の直下に把手が付くと思われる。これは末期王朝時代に特有のものである。図16-19の胎土はエジプトでは未知のものであることから輸入品と考えられるが、これもまたパレスティナ産である可能性がある。

● 調理器か貯蔵器かは定かではないが、特異な甕として、図14-4や図17-1のように口縁に押圧装飾を施したものがあつた。このような口縁装飾を持つ甕の類例は全く見当たらなかった。

● 特殊器には、ベス形容器、器台 (pot stand)、香炉 (brazier)、トーチなどがある。図15-13のベス形容器は、耳と腕と髭の一部しか残存しておらず、容器上部は欠損しているが、全体ではおそらく長い頸部を持つ壺形土器になると思われる。

● 器台には、図14-12, 13, 14, 15のようなリング形の器台がある。1点のみ、規格の小さいものがあるのを除いて、他はほぼ同じような規格・形態である。器形自体に大きな特徴はなく、このような器形はいつの時代にも見られるため、器形のみから年代決定することはできないが、末期王朝時代にはこのような規格・形態のリング形器台は多く見られるらしいことが多くの報告書から窺われる。これらが何を載せたのかは明らかではない。この他、図17-5のような円筒形の器台もある。ただし、これは上部が欠損していて、本当に器台であるかどうかは不明で、器台ではなく、香炉や灯台である可能性もある。図14-6, 7と図17-3は香炉である。このタイプの香炉は、以前の調査では図17-3のような鏝以下の部分が出土していたのみであったが、第6次調査で初めて、鏝よりも上の穿孔された器壁が出土した。こうした香炉も末期王朝時代に特有のものである。トーチというの

は、図14-9, 10, 11で、短脚のものと同脚のものがあり、いずれも内面が煤で真っ黒になっていて、灯火器として使用されたことが窺える。以前の調査では自立させることのできない先細りの柄の付いた、明らかに持ち用と思われるトーチは多数出土していたが、完形の自立型トーチの出土は第6次調査が初めてである。こういうトーチもまた、末期王朝時代に特有のものである。

また、用途はよくわからないが、やはり末期王朝時代に特有のものに、図12-22, 23, 24のようなビーカー形土器がある。これらの土器の内面には、どれにも煤が薄く帯状に付着しているのが見られるが、何に使った結果、このような痕が残ったのかは明らかではない。類例でも、こうした煤の付着が見られることが報告されているが、やはり用途は不明とされている。

6. 末期王朝時代における丘陵頂部での活動

このように当遺跡出土の末期王朝時代の土器のレパトリーを見渡してみたところで、それでは、この当時の丘陵頂部で行われていた人間の活動についてどのような推測が成り立つかということ、それはかなり難しいと言える。というのは、当遺跡出土の末期王朝時代の土器群と類似のアセンブリッジを持つ遺跡を探してみても、多くの遺跡が末期王朝時代も含めていくつかの時代にまたがっており、末期王朝時代の土器の報告は散発的であるため、個別には類例を見つけることはできても、アセンブリッジとしては捉えにくく、全体的な比較ができないからである。個別に類例が見つかったのは、墓地遺跡出土のものもあれば、神殿址や住居址出土のものもあるため、類例だけでは末期王朝時代当時の丘陵頂部で行われていた人間の活動について判断のしようがない。

そこで、類例に拠らずに推測してみても、この当時の丘陵頂部が礼拝施設か何かとして機能していて、供物奉納のような活動が行われていたにしても、あるいは、例えば、監視所やサッカーの墓地管理事務所などとして使用されていたにしても、そこで使用された土器のアセンブリッジにどのような違いが生じるかということ、あまり大きな違いはないように思われる。あの丘陵頂部にいた人が儀式などに携わる神官だったとしても、あるいは監視所の監視員だったとしても、あのような砂漠奥部の孤立した場所に人が駐在しているためには、まず飲料水が必要で、もっと長くいるならば食べ物も必要になり、夜もいるならば、明かりも必要であろう。従って、水を貯めておく甕や煮炊きのための容器や灯火器などは、丘陵頂部がどのような人間の営みに使われていると、あっても不思議ではないものである。皿や鉢のような食卓器にしても、壺やアンフォラのような貯蔵器にしても、バス形容器のような一風変わった容器にしても、どれ1つ取っても、それが奉納品か日用品かは一概に判断しにくく、例えば香炉のようなものにしても、宗教儀式などにしか使わないとは言いきれないので、これだけで当時の丘陵頂部での活動内容について推測するのは難しいと言える。当時の活動内容についてさらに推測を進めるためには、土器以外の末期王朝時代の遺物も合わせて考えていく必要がある。

また、末期王朝時代の土器がこれだけ出土しているのに、同時代の遺構がこの周囲で全く見つからないことも当時の活動内容について推測することが難しい理由の1つとなっている。末期王朝時代の土器は、0Eグリッドの泥煉瓦遺構の東斜面に堆積した泥煉瓦の崩落層に混じって出土しているようなので、それらの土器は、その泥煉瓦遺構が崩壊して東斜面へ流出したのに伴ってか、あるいはその前後の時期にあそこに堆積したと考えるのが妥当なところと言える。いずれにせよ、末期王朝時代当時の活動の舞台は、あの周辺にあったと考えて良いが、あの泥煉瓦遺構がある小高い方にあったのか、あるいは通称ペイメントが出土している低く

なっている方であったのかについては何とも言えない。小高い方は、あの泥煉瓦遺構の残存状況を見てもわかるように、ほとんど地山まで削られてしまっているため、今後、遺構が見つかる可能性は少なく、望みがあるとすれば、まだ発掘が完了していないペイブメントの周辺しかない。ともかく、現時点で遺構が見つからない以上、遺物の検討が全てにならざるを得ないわけで、その意味でも今後さらに検討を続けていく必要があるだろう。

7. その他遺物

7-1. ファイアンス製タイル

第7次発掘調査によって、計325点のファイアンス製タイルが出土した。前回第6次発掘調査までの出土点数が500点あまりであることを考えると、出土点数は大きく増えたことが分かる。

形状をとどめた例をみると、様々な形のタイルが組み合わせられて用いられていたことが分かる。すなわち、羽形(?, 図18-1~3)、丸形(図18-4, 5)、三角形(図18-6~8)、菱形(図18-9, 10)、方形(図18-11~24)などの形状のタイルが観察されている。また、おそらく焼成後に、特定の曲線を求めてカットされた痕跡を有するタイルも認められる(図18-27, 28など)。これらは、タイルを並べた時に生じた余白を埋めるために調整されたものである可能性が指摘される。さらに、施釉面に溝状の彫り込みを有するタイルも認められた(図18-33)。現状では、この彫り込みは象眼の痕跡であるとの推測をたてているが、この溝に何が充填されていたかについては、不明である⁴⁾。テーベのトトメス3世の葬祭殿より出土したファイアンス製タイルでも、同様に象眼の痕跡を有するものが報告されている[Ricke 1939:Taf. 10]。同葬祭殿出土の例では、ヒエログリフの文字が象眼されているが、当遺跡出土の例には、これまでのところ、意味のある形状を伝えるタイルは見つかっていない。

これらのタイルは、その出土位置が日乾煉瓦遺構の周辺に集中することから、この日乾煉瓦の遺構を飾っていたものと推測される。これまでのところ、これらのタイルは特定の建築部材に伴って出土しておらず、個々のタイルがあたかも剥かれて破棄されたかのような出土状況を呈している。従って、かつてこれらのタイルがどのように用いられていたのかについては、結論を下すことは困難な状況にある。

しかし、僅かに報告されている例を参照すると、例えば、天井や軒を飾っていたものや(マルカタ、アメン神殿)、柱頭に埋め込まれていた例(アマルナ[Petrie 1894:Pl. VI])などが知られており、当遺跡出土のタイルもこのような使われ方をしていたものと推測される。

7-2. ファイアンス容器(図19-1~6)

ファイアンス容器片は130点出土している。その多くが小断片であるが、16点の口縁片の他、図19-1~4の計

4) マルカタのアメン神殿では、天井の装飾にこうしたタイルが用いられていることが知られているが、ここでは、王名を象眼で作りだされており、彫り込みには金が充填されている。当遺跡でも金箔の出土が認められるものの、ファイアンス製タイルとの直接的に結び付いて出土した例は残念ながら、これまでのところ認められない。

4点の器形を把握することができた。また、図19-5, 6のように銘文帯を有する容器片も2点出土している（銘文の内容については不明）。容器片の多くは、日乾煉瓦建造物の北東部にあたる9E グリッド「黒色シルト層」および「泥レンガ層」と呼ばれる王朝末期の遺物包含層から出土している。図19-1, 2に類似した遺物が近隣の遺跡であるアニマル・ネクロポリス（聖獣墓地）周辺から出土している他[Martin 1981: pl. 8, no. 1092, 1100]、図19-4の類例がプトレマイオス朝期の容器にも認められる[Spencer 1996: pl. 74, no. 42]。さらに、図には示さなかったが、9E グリッド「黒色シルト層」から出土した容器片が、第26王朝にのみ製作されたことで知られる'New Years frask'と呼ばれるフラスコ形容器に特徴的な装飾帯を有していることが明らかになった[Friedman 1997:138, 229]。以上のことから、7次出土のファイアンス容器中、上記の2層から出土したものについては、おおむね末期王朝時代からプトレマイオス朝にかけての王朝末期に年代付けられると考えて差し支えないであろう。

7-3. アミュレット（図19-7～24, 図20-1～2）

アミュレットは断片を含めて80点出土している。1次調査以来、丘陵頂部の様々な場所からアミュレットは出土しているが、とりわけ7次調査出土分は6次調査に引き続き局所的に集中して出土する傾向が認められた。また、様々なバリエーションをもった「ウジャトの眼」と呼ばれるアミュレット片が大量に出土した点でも特筆される。

アミュレットがまとまって出土したのは、日乾煉瓦遺構の北東部にあたる9E, 9D グリッドと、同遺構の南部にあたる2F, 3E グリッドの2箇所である。遺構北東部での出土層位は、先述の「黒色シルト層」とその下層にあたる「黄色砂礫層」が中心で、王朝末期に見られる土器やナオス、ファイアンス容器などが共伴遺物として見られる。遺構南部では「黄色細砂層」、「黄褐色砂礫層」の2層からの出土が目立った。原位置で出土したアミュレットが無い点、王朝末期の遺物が日乾煉瓦遺構北東部に集中している点から、それらが日乾煉瓦遺構が位置する高台にかつて設けられた王朝末期の施設でアミュレットが使用され、後世の破壊活動が原因で高台の北東部を中心に流れ落とされたものと推察される。

形状が判別できるアミュレットでは、トキおよびヒヒの頭部を有するトト神（図19-7, 8, 14, 計3点）、プタハパテク（図19-9, 計1点）、イシス女神（図19-13, 計1点）、ホルスを抱くイシス女神（図19-11, 12, 計3点）、豚（計1点）、ウジャトの眼（図19-15～24, 計53点）など様々な種類が確認されている。中でもウジャトの眼は断片を含めて出土例が53点と際だって多いだけでなく、その形状に多彩なバリエーションを有することで特筆される。ミュラー-ヴィンクラー[Muller-Winkler 1987]によって提示されたウジャトの眼の分類基準を参考に整理作業を進めた結果、合計13タイプが確認された。この13タイプの中には、第22王朝から第25王朝にかけて頻出するタイプや、第25王朝にのみ見られるタイプ（図19-19～24）が含まれている。

出土アミュレットの多くは、エジプト全土において王朝末期を中心に使用されたアミュレットと大きな差異は認められないようであるが、とりわけ近隣の遺跡であるアニマル・ネクロポリスの神殿域、およびその周辺の末期王朝時代の墓出土アミュレットに形状、製作技法が極めてよく似ている[Martin 1981: pl. 7; Giddy 1992: pls. 47-55]。

7-4. ビーズ

ビーズは37点出土している。いずれもファイアンス製で円形および管型の小型ビーズが中心となっており、胸飾りなどの装飾品の一部と思われる。目立った点として、10点のビーズが0E グリッドの「泥レンガ崩落層」から、ファイアンススタイル、彩色プラスターとともに集中して出土していることが挙げられる。

7-5. ガラス製品

ガラス製品は、容器片が2点出土している。1点は容器の口縁片で、もう1点は底部片である。青あるいは緑色の色調を有している。これまでの調査で出土したガラス製品と同様に、2点ともグレコ・ローマ時代において主流となった吹きガラスの技法が用いられている。

7-6. コイン・ブロンズ製品 (図20-3~8, 図21-1~6)

コイン・ブロンズ製品は、コインが5点、ブロンズ製品が55点で、合計60点出土している。その中で錆落とし作業を終えているのは比較的大型断片で、なおかつ形状が判る23点である。コインを除く7次出土ブロンズ製品は、種類の豊富さという点から近隣のアニマル・ネクロポリスの神殿域から出土したブロンズ製品と並んで、メンフィス地域における王朝末期のブロンズ製品の好例として位置づけられる。アブ・シール出土のブロンズ製品は、神殿などの神聖な場所への奉納品あるいは祭具として知られる遺物と、実用品としての性格を有する遺物の2つに分けられるが、圧倒的に前者の数が多い。

前者に属する遺物は、まず神像の類で、7次には完形のおシリス神像(図20-3)をはじめ女神像の頭部の一部と思われる日輪部分(図20-4)や、神像の脚部が2点(図20-5, 6)、その他に錫杖と思われる遺物(図20-8)も出土している。神像は、いずれも脚部にソケット状の突起がついており、本来は何らかの物体に神像を差し込んで使用されたと推測される。この他、アテフ冠の半分に相当する部分を象ったブロンズ製品(図20-7)があり、類例から判断すると神殿への奉納品であった可能性が高い。その類例はテル・アル＝バラムンの神殿址出土のブロンズ製品で[Spencer 1996: pl. 75, no. 60-62]、これらは全て第26王朝のプサメティコス1世から第30王朝のネクタネボ1世(あるいは2世)の治世に使用された神殿の中庭、および通路付近から出土している。さらに小断片のため図には示さなかったが、「シチュラ(Situra)」と呼ばれる水あるいは牛乳などの液体を入れ、祭具あるいは奉納品として用いられた遺物が、アブ・シールから胴部2点、底部1点の計3点出土している。これらシチュラの類例は、サッカーラのアニマル・ネクロポリス付属神殿内出土遺物に多数認められ[Green 1987: 66-115]、報告によると同遺跡出土シチュラは、末期王朝時代からプトレマイオス朝にかけてこの地の神殿に訪れた巡礼者によって奉納されたものらしい[Green 1987: 66]。図21-1~3の矢尻は、本来実用品として使用された可能性もあるが、先述のテル・アル＝バラムンの神殿址[Spencer 1996: pl. 75, no. 65, 66]や、アヌビエイオンとして知られるアニマル・ネクロポリス内の神殿域[Jeffreys and Smith 1988: fig. 77, 77/21]からの類例が報告されていることをふまえると、奉納品あるいは祭具として使用されたと考えたほうが妥当であろう。

実用品として知られるブロンズ製品では、唯一「重り('weight')」が出土している(図21-6)。これは、物品の計量の際に用いられた重りの一種で、先述のテル・アル＝バラムン遺跡の居住地址[Spencer 1996: pl. 75 no. 64]、およびナウクラティス[Petrie 1886: pl. 21, no. 36]といった居住地址から類例が知られている。

この他用途が不明な出土遺物として、2点のブロンズ製銘板（プラーク）が挙げられる（図21-4, 5）。どちらも裏面が平らなことから、おそらく木製の物体などにはめ込まれる形で使用されたと推測される。図21-4の銘板には「ルパート・ハアティア・スメル・ワァティ」と書かれている。「ルパート」は「伯爵」と訳され、「実際に持っている官職が高いこと」を意味し、「ハアティア」は「世襲貴族」と訳され、「スメル・ワァティ」は「唯一の友」として訳される。図21-5の銘板には「プタハ・ヘム・ネチェル」というプタハ神の神官職の称号が記されている。

以上が7次に出土したブロンズ製品の概要であるが、これらブロンズ製品は9D、9E、9F、0E、0G グリッドといった日乾燥瓦遺構の北東部周辺に集中して出土する傾向を示している。出土層位は、先述のファイアンス容器やアミュレットが多数出土した層およびその下層が中心となっている。上記で述べたブロンズ製品の大半が、同じ日乾燥瓦建造物北東部から出土したナオス、アミュレットと並んで奉納品としての性格を有すると思われることから、末期王朝時代からプトレマイオス朝にかけての丘陵頂部での活動は、一種の神聖な建物を拠点としたものとして想定可能のように思われる。活動期間は、王朝末期の遺物が複数の層位にわたって出土している点から、短期間というよりはむしろ一定期間にわたる継続的なものであったと推測できる。

コインについては、ローマン・コインが1点、イスラーム・コインが3点出土している。図には示さなかったが、ローマン・コインはその規格から判断して紀元後1世紀末のトラヤヌス帝政期から2世紀のハドリアヌス帝政期の間年代付けられる可能性が高い。

7-7. 骨・石・アラバスター製品

出土総点数は74点であるが、その内訳は動物骨と思われる骨片が一括遺物を含めて29点、貝片（製品）が3点、アラバスター片を除く石製品が27点、アラバスター片が容器の口縁片4点を含めて15点である。

この3つに大別した遺物の中でも、石製品に含まれる遺物は種類が際だって多い。9E および0E グリッドからは、大型の石灰岩製容器片（1点）、石灰岩製彫像片（3点）、石灰岩製プレスレット片（1点）の他、ゲーム用のコマと思われる遺物（1点）、サイコロ（2点）、紡錘車（1点）といった生活色あふれる遺物が出土している。これらの遺物の出土層位は複数にわたっており、各遺物の年代推定のためには出土情報の検討が課題として残されている。この他、3E グリッドから検出された日乾燥瓦家屋（Room h）からは未成品と思われる供物卓が1点出土している。

7-8. 木製品（図21-9, 10）

木製品は48点出土している。その中で形状が明瞭に把握できる遺物は6点で、クランプ（千切り、またはかすがい）などの建材と思われる遺物が3点含まれる。それ以外は、一括遺物を含めて全て木片および炭化物で構成されている。

上記の建材と思われる遺物以外の3点の遺物は、シャブティ（図21-9）、木槌（2点）、アミュレットの類と思われるダチョウの二枚の羽を象った木製品である（図21-10）。シャブティは、第2中間期第17王朝もしくは第18王朝初期に年代付けられる私人墓出土のシャブティと材質、成形の点で類似しており[Schneider 1977: 6-8, no. 2. 1. 2. 3; Schlogl et al. 1993: 10, no. 1]、丘陵頂部から出土した第2中間期から新王国時代初期にかけて年代が推定される遺物の初例といえよう。

7-9. 泥レンガ（日乾煉瓦）および泥モルタル

泥レンガ（日乾煉瓦）および泥モルタルは40点出土しており、泥レンガが18点、泥モルタルが21点である。泥レンガは内容物観察用サンプルとして取り上げたものが大半で、1点にのみレンガ表面にスタンプ痕が認められ（スタンプ痕を有するレンガについては別稿で述べられる）、泥モルタルは基本的に彩色面およびスタンプ痕を有するもののみを取り上げた。彩色面を有する泥モルタル（以下「彩色泥モルタル」）ではモチーフが明瞭に判るものは認められなかったが、コーナー片と思われる断片を含む黄や白のといった単色で塗られたもの他、白、赤、黄、青といった鮮やかな色彩で表面が仕上げられた断片も認められた。これら彩色泥モルタルは、出土層こそ様々であるが出土地点はいずれも日乾煉瓦遺構周辺部で、彩色プラスターとともに同遺構の壁面を装飾していたと思われる。

7-10. ランプ・土製品（図21-7, 8）

ランプ・土製品は4点出土している。1点がランプ片で、残る3点がテラコッタ（土製像）片である。ランプ片については図に示さなかったが、動物柄のメダイオン装飾が認められることから、紀元前1世紀のプトレマイオス朝から紀元後1世紀の帝政ローマ期に年代付けられる可能性が高い。

テラコッタ片の中には「イージス」と呼ばれる日輪を頂く女神の頭部と胸飾りからなる遺物が含まれている（図21-7）。このイージスは、新王国時代末期以降に見られる遺物で、通常金属製品としてアミュレット、奉納品、あるいは神像に付属品のいずれかの用途で用いられた[Schneider:136]。アブ・シール出土のイージスの場合、女神と胸飾りの背後が欠損しており、元来その背後につながる部分があったことが想定されるが詳しくは不明である。また、材質が通常のイージスとは異なり、土製であることから、この遺物はテラコッタが普及するようになったプトレマイオス朝付近に年代付けられる可能性がある。その他、図21-8のように頭部が欠損した二人の女性のテラコッタ片も出土しているが、現在のところ類例は見つかっていない。

7-11. まとめ

その他遺物のうち、新王国時代の遺構に関わるものとしては、ファイアンス製のタイルの出土が目を惹いた。こうしたタイルが、建造物のどの部位を飾っていたかについては不明であるものの、ファイアンス製タイル自体が、これまでにはあまり知られておらず、貴重な資料であると評価することができる。こうしたタイルは恐らく、墓地以外で用いられたものと推測され、それだけに、当遺跡の性格を考える上で、重要な判断材料の一つになるであろう。出土した資料の総体を早急に資料化することが望ましい。

一方、ファイアンス容器、アミュレット、ブロンズ製品などの遺物は、丘陵頂部で営まれた王朝末期以降の人間活動について、より多くの情報を提供してくれている。ファイアンス容器では、多数出土した容器片の中でも'New year's Flask'と呼ばれるフラスコ形容器が第26王朝にのみ製作された容器で、年代決定の指標の一つとなりうること、そしてアミュレットではある程度の幅をもちつつも年代決定の指標となるウジャトの眼が存在すること、ブロンズ製品については神像、シチュラといった祭具あるいは奉納品の性格を有する遺物が存在することを主に述べた。これらの王朝末期に年代付けられる遺物は、ブロンズ製品に代表されるように、祭具あるいは奉納品の色合いが強い傾向にあるといえるだろう。ただし、アミュレット、ファイアンス容器については墓への副葬例も報告されている。丘陵頂部での活動期間は、王朝末期の遺物が複数の層位にわたって出

4. 地質学的見地よりみたアブ・シール南丘陵遺跡の石材

1. はじめに

ピラミッドをはじめとする古代エジプトの建造物の多くは石材を用いて作られている。これらの石材がどこに由来するものかを特定するためには、石材に関する地質学的・古生物学的・地球化学的な観点からの検討が必要不可欠である。

我々は、最近数年間にわたり、早稲大学古代エジプト調査室に協力して、アブ・シール南丘陵遺跡において何種類の石材が用いられ、それぞれがどこに由来するかについて検討を行ってきた。検討過程においては、アブ・シール南丘陵遺跡のみならず、ギザ、アブ・シール、サッカラ、ダハシュールの遺跡における石材の材質と用途についても知見を収集した。また、カイロおよびその周辺都市の地質に関して、セメントや石材用の採石所を中心に調査を行った。以下にその検討結果を報告する。

2. アブ・シール南丘陵一帯の地質の概要

アブ・シール南丘陵遺跡は、アブ・シールピラミッド群の南方約1.5km、サッカラのセラペウムセラペウムの北西約1kmの丘陵頂部に位置する。この遺跡周辺の地質は、下位より中部始新統、下部鮮新統、上部鮮新統および現在の砂漠堆積物よりなる。

中部始新統は、単層の厚さが十数cm～数十cmの泥質石灰岩・石灰質泥岩互層を主体とし、細粒砂岩を伴う。下部鮮新統は二枚貝・ウニ等の生物骨格が密集した石灰岩（コキナ）よりなり、アブ・シール南丘陵遺跡の丘陵地からその西方にかけての一带に中部始新統を不整合に覆って分布する。アブ・シール地域に分布する最上部層は上部鮮新統の礫岩である。この礫岩は中礫ないし大礫大のフリントを含み、下位層を不整合に覆う。アブ・シール南丘陵の建造物は、この礫岩を削って建てられている。

3. アブ・シール南丘陵遺跡でみられた岩石の特徴とその用途

これまでの調査において、アブ・シール南丘陵遺跡から次の9種類の岩石を採取した。それらは、1. 灰白色Wackestone、2. 含貨幣石rudstone、3. 灰色Wackestone、4. 暗茶褐色石灰質細粒砂岩、5. 含大型有孔虫rudstone、6. コキナ、7. 淡赤褐色粗粒砂岩、8. カコウ岩類、9. 緑色岩、である。

以下に、それらの岩相や含有化石等を記載するとともに、推定される由来を記述する。

3-1. 炭酸塩岩（石灰岩および石灰質砂岩）

アブ・シール南丘陵遺跡を構成する岩石のほとんどは石灰岩である。それらの大部分は中部始新統の石灰岩であるが、岩相や含有化石から判断して、複数の異なる地域のものが用いられている。これらを大別すると、

中部始新統ヘルワン相（ツラ地域）の石灰岩（1. 灰白色wackestone）、中部始新統カイロ相（ギザ地域）の石灰岩（2. 含貨幣石rudstone）、アブ・シール南丘陵遺跡現地の中部始新統に属する石灰岩（3. 灰色wackestone、4. 暗茶褐色石灰質細粒砂岩）、産地不明の始新世石灰岩（5. 含大型有孔虫rudstone）に分けられる。さらに、アブ・シール南丘陵遺跡の鮮新統に属する石灰岩（6. コキナ）もみられる。

3-1-1. 灰白色wackestone

産状および岩相：アブ・シール南丘陵遺跡の建造物では、灰白色から乳白色を呈する緻密な石灰岩が石材として多く用いられている。この石灰岩はbioclastic wackestoneに区分される。一般に塊状・無層理であるが、まれに弱く成層する。非石灰質碎屑物の含有量は極めて少ない。肉眼で識別可能な大型化石はほとんど含まれず、まれに二枚貝の印象化石がみられるのみである。鏡下では極細粒砂～細粒砂大の底生有孔虫・浮遊性有孔虫・貝形虫・二枚貝・巻貝などの生砕物が認められる。大部分の生砕物の骨格は、粗粒な方解石で置き換わっており、moldic porosityは認められない。また、基質のミクライトは粗粒なモザイク状の結晶（microspar）に変化している。本石灰岩からは*Coccolithus pelagicus*、*Cribocentrum reticulatum*、*Cyclicargolithus floridanus*、*Reticulofenestra* spp. などの中期始新世を示す石灰質ナノ化石が産出した（図22）。

由来：アブ・シール南丘陵一帯、ツラ、ヘルワン、モカッタムには炭酸塩岩が広く分布し、それらは産出する石灰質ナノ化石より中部始新統に含められる（図22）。しかしながら、ツラ付近に分布する灰白色 bioclastic wackestoneのみが、岩石の色、組織、生砕物の種類および淘汰度、非石灰質粒子の含有量、化学組成、続成に関する特徴のすべてについて、本石灰岩と一致した。よって、本石灰岩は古来より石切場のあったとされるツラ産のものであると判断される。

3-1-2. 含貨幣石rudstone

産状および岩相：アブ・シール南丘陵遺跡に残されている石灰岩の中に、大型有孔虫 *Nummulites gizehensis* を大量に含む石灰岩がある。この石灰岩は、先述の灰白色wackestoneに比べ圧倒的に少ない。しかし、本石灰岩製の一辺が約50cm、全長が2mに達する角材状～直方体状の大型石材も見出されることより、本石灰岩が建造物のいずれかの部分に用いられたことは確実である。本石灰岩は塊状・無層理のrudstoneであり、その生砕物の大部分は*N. gizehensis*によって占められ、その他に底生有孔虫、巻貝、二枚貝、ウニなどが含まれる。*N. gizehensis*をはじめとする大型有孔虫の殻室内部のような粒子内空隙や粒子間には、長径が20～150 μ mのドロマイトの自形～半自形の結晶が多く認められる。ドロマイトの量は全岩重量の約40%に達し、本来粒子空隙を充填していたミクライトはほとんど認められない。

由来：中部始新統の示準化石である*N. gizehensis*は、カイロ相やヘルワン相でも産出することが知られている。しかし、本石灰岩と岩相やドロマイトの化学組成が一致するのはギザ地区のピラミッド台地に露出する*N. gizehensis*を含むrudstoneのみである。ギザ地区にみられる石灰岩はモカッタム層に含められ、ほぼ同じ層準の地層が古来からの採石場として有名なカイロ市街東部のモカッタムにも分布する。しかし、モカッタムで見られる*Nummulites* spp. を多産する石灰岩はドロマイト化をほとんど被っておらず、石灰質ナノ化石などの微化石を普遍的に産出する点で、ギザの石灰岩と大きく異なる。以上より、本石材は、ギザ地域のモカッタム層

由来のものと結論される。

3-1-3. 灰色wackestone

産状および岩相：遺跡内では、先に述べた灰白色wackestoneに似るが、より灰色～黄褐色を帯びた石灰岩が見出される。この石灰岩は、灰白色wackestoneほど丁寧に面取りされていないが、角材状もしくは板状に整形され、石材として利用されている。また、遺跡の建造物の壁の間には、この石灰岩の岩塊や岩砕が他の岩石とともに充填物として用いられている。本石灰岩は bioclastic wackestone に分類されるが、石英を全岩の4～10%含む。本岩は弱く成層し、風化面はやや剥離性を呈し、灰白色wackestoneよりもろい。大型化石はほとんど発見されないが、生痕化石(?)が認められることがある。生砕物は極細粒砂～細粒砂大で、淘汰は非常によい。底生有孔虫や二枚貝が認められたが、生砕物の多くは細かく断片化しているために、それらがどのような生物に由来するか特定することができなくなっている。基質は粗粒なモザイク状のmicrosparである。

由来：本石灰岩は、岩相および産出する石灰質ナノ化石が一致することより、アブ・シール南丘陵遺跡の東方一帯に露出する始新世石灰岩に由来するものと推定される。本岩はツラ産の灰白色wackestoneに似るが、非石灰質砕屑物(石英粒子)を含み、生砕物がよりよく淘汰されているなどの点で区別できる。また、本岩はツラ産の石灰岩に比べて風化しやすく、岩石の表面が板状に剥離しているものが少なからず見受けられる。

3-1-4. 暗茶褐色石灰質細粒砂岩

産状および岩相：本岩は暗茶褐色～褐色を呈する石灰質細粒砂岩である。非石灰質砕屑物の主体を占めるのは石英粒子であり、それらは、細粒砂～中粒砂大で、よく淘汰されているが、円摩度は低く、基質(ミクライト)に支持された状態にある。試料により多寡があるが、カキなどの二枚貝片が含まれ、ウニも伴ってみられる。本砂岩には明瞭な層理面は認められないが、鏡下では石英粒子と生砕物が弱い定向配列を示す。本岩には加工された形跡は全く認められず、岩塊のまま遺跡の建造物の壁の間の充填物として用いられている。

由来：遺跡周辺では、鮮新世石灰岩(コキナ)の下位に位置する始新統に茶褐色を呈する石灰質細粒砂岩がみられ、場所によりカキなどの二枚貝片を豊富に含む(例えば、図23の地点J、図24の柱状図J)。遺跡で見出される石灰質砂岩は、この砂岩と岩相および含有化石が類似しており、おそらくこれに由来すると推定される。なお、同様の茶褐色細粒砂岩はダハシュールにも分布しており、有名なスネフェルの赤色ピラミッドはこの砂岩を用いて建造されている。

3-1-5. 含大型有孔虫rudstone

産状および岩相：本石灰岩は数種類の大型有孔虫を含むrudstoneである。白灰色を呈し、灰白色wackestoneほど緻密・堅牢ではないが、灰色wackestoneほど脆くない。遺跡内にはこの石灰岩製の約60cm角、長さ約3mの角材があり、それは丁寧に面取りがなされている。よって、本石灰岩が石材として建造物のいずれかの部分に用られたことは疑いがない。本石灰岩の生砕物のほとんどは大型有孔虫によって占められ、他に底生有孔虫やウニが伴ってみられる。底生有孔虫の殻の長軸の方向がよく揃う部分があるが、その方向は他の部分における配列方向と斜行しており、全体としては一定の方向を向かない。また、本石灰岩には細粒砂大の石英粒子が

含まれるが、その量は全岩重量の2%に満たない。

由来：現在までの野外調査において、本石灰岩と岩相および含有化石の一致する石灰岩を見出していない。

3-1-6. コキナ

産状および岩相：本岩は二枚貝（カキやホタテガイ）、巻貝、ウニなどの遺骸（生砕物）が密集した石灰岩（コキナ）である。一般に岩塊の内部まで著しく風化しており、赤褐色を帯びた黄灰色を呈する。含まれている生砕物は淘汰が悪く、円摩度は低い。本岩は非常に多孔質で、生砕物の間の空隙はミクライトやセメントで充填されていない。本岩は遺跡の建造物の壁の間の充填物としてのみ認められる

由来：アブ・シール南丘陵遺跡およびその西方の丘陵地には、中部始新統を不整合に覆ってコキナが分布する。このコキナは、その層位的位置および岩相より、ギザのピラミッド台地の南方を模式地とする下部鮮新統コム・エル・シェール層（Kom El Shelul Formation [Said 1990]）に含まれる。遺跡の壁間に充填物として用いられているコキナは岩相より、明らかにコム・エル・シェール層に由来するものである。

3-2. 淡赤褐色粗粒砂岩

産状および岩相：本遺跡内でわずか1試料であるが、淡赤褐色～淡赤灰色を呈する粗粒砂岩が発見された。この砂岩はよく円摩された極細粒砂～極粗粒砂大の石英粒子からなるオーソコーツァイトで、長径1 cmに満たない石英の亜円礫を含む。非常に弱く成層しており、礫が比較的多く含まれる部分がある。

由来：本砂岩は岩相より、エジプト南部からスーダンに分布する白亜系ヌビア砂岩に由来すると判断される。本遺跡の北方に位置するウナス王のピラミッドの東側葬祭殿では、ヌビア砂岩に由来すると判断される礫岩製の円柱がみられる。よって、本遺跡では現在ヌビア砂岩製の石材は全くみられないものの、本来は同砂岩が石材として少なからず用いられていた可能性が指摘される。

3-3. カコウ岩類

産状および岩相：アブ・シール南丘陵遺跡内および周辺には、石灰岩などに混じって、カコウ岩（角閃石—黒雲母カコウ岩）の石材および岩砕が見出される。花崗岩製の最大の石材は、一辺が約70cmの角柱で、非常に丁寧に面取りがなされており、ヒエログリフの碑文が書かれている。また、人頭大までのサイズの岩砕が丘陵の南側斜面に散在する。

由来：このカコウ岩は、角閃石—黒雲母カコウ岩で、ギザ地区のカフラー王ピラミッドなどの基底部に化粧石として利用されたものと全く同じである。これらのカコウ岩の岩石学的特徴は、アスワンから南方にかけてナイル川東岸に沿って分布するカコウ岩類と一致し、アスワン地域の採石場・加工場の存在や、船でナイル川を北上して運搬されたという歴史的事実と符号する。このカコウ岩の放射年代は、Rb/Sr法で 591 ± 10 Ma [Hashad et al. 1972] を示し、先カンブリア時代最末期に形成された基盤岩の一部で、エジプトにおける新时期カコウ岩類に含まれる。本遺跡内のカコウ岩は、ヒエログリフの書かれた大型石材を除けば、人頭大からこぶし大、あるいはそれ以下のサイズである。これは、建造物の建築よりも後の時代に、カコウ岩が再利用される際に、整形のためあるいは運搬の便を図るために、大型石材がこの場で砕かれたことを示唆する。

3-4. 変塩基性岩

産状および岩相：本遺跡内でわずか1試料であるが、暗緑灰色を呈する変塩基性岩が発見された。本岩には弱い片理が認められる。造岩鉱物として、アクチノ閃石、黒ウンモ、緑簾石（クリノゾイサイト）、石英、長石を含む。原岩は安山岩～苦鉄質安山岩質の溶岩あるいは凝灰岩と考えられる。

由来：本岩はわずか1試料が得られたのみであり、今回の検討では由来を特定するに至らなかった。

4. 結論

- (1) アブ・シール南丘陵遺跡の建造物に用いられている石材は、炭酸塩岩（石灰岩および石灰質砂岩）、砂岩、カコウ岩および変塩基性岩である。
- (2) 遺跡からは6種類の炭酸塩岩が見出され、うち4種類が石材として用いられている。それらは、ツラ産の灰白色wackestone、ギザ産の含貨幣石rudstone、アブ・シール南丘陵遺跡付近の中部始新統に由来する灰色wackestone、産地不明の含大型有孔虫rudstoneである。また、アブ・シール南丘陵遺跡周辺の上部始新統石灰質細粒砂岩および下部鮮新統石灰岩（コキナ）も、壁と壁の間を充填する岩塊として用いられている。
- (3) カコウ岩は角閃石—黒雲母カコウ岩で、アスワン産で、ギザ台地のピラミッドに用いられているカコウ岩に一致する。
- (4) 砂岩はエジプト南部からスーダンに分布するヌビア砂岩に由来する。変塩基性岩の産地は不明である。これら2種の岩石は試料数が少なく、建造物のどのような部分に用いられていたかは不明である。

5. Summary

A Preliminary Report on the Seventh Season of Waseda University Excavations at North Saqqara (from 11 July to 17 September 1998)

1. Major purpose of this season

The Abusir-Saqqara Project of Waseda University has been continued at the top of the hill far into the desert of the North Saqqara since December 1991. The previous excavations uncovered a large stone building ascribed to the Prince Khaemwaset, the fourth son of the Ramesses II.

The mission continued to work at the site during the seventh season with a view to elucidate several architectures around the monument of Khaemwaset.

The major purposes of the seventh season were as follows;

- 1) to elucidate the dimensions, structure, construction date, and nature of a large mud brick structure, which was located to the northwest of the stone structure during the fifth season.
- 2) to complete excavation of a mud brick house, which was located to the west of the stone monument, and partially excavated during the fifth season.
- 3) to elucidate the original ground surface of the outcrop, especially in the area to the north of the stone monument, and strata above, on which a limestone pavement was excavated during the sixth season.

For attaining these purposes, we extended the excavation area northward and westward.

2. Structural remains

2-1. Mud brick structure

Although the mud brick structure was poorly preserved, we succeeded in detecting foundations of the north-east corner and western side of the outer wall(or outer limits) of this structure. It was proved that the mud brick architecture was rectangular in plan. Its dimension can be estimated at 25 m(north-south) by 22 m(east-west). In the area surrounded by the outer wall, no architectural traces could be found. Since the upper part of this structure had been completely levelled by later human activities, the function and date of the structure can be inferred only after full examination of objects from this area.

2-2. Mud brick house

Excavation of a mud brick house, situated on the west of the stone monument, was completed by the end of this season. The house is relatively small, consisting of four rooms and two annexes. It has two entrances, each furnished with stone thresholds. The wall is very thin, but several rooms were roofed, because a large amount of mud roofing fragments was uncovered.

Objects from this house were relatively small in number. The western part of this house, which was newly excavated in this season, yielded a lot of pottery sherds. They are obviously dated to the New Kingdom. A non-inscribed stela was found lying just on the surface.

2-3. Limestone pavement

A continuation of a limestone pavement, which was detected to the north of the stone monument during the sixth season, was located further in the north. The excavation clarified that masonry of this pavement was set on brown sand debris, which is in turn deposited on another layers. It seems that the pavement is later than both of the mud brick structure and the stone monument.

3. Finds

During this season, a large number of objects were found. Objects of any importance were recorded for future study.

One of the most conspicuous finds is a Naos(Fig.4), uncovered on the eastern side of the mud brick structure. It measures 46×32×18cm. The front is in the shape of a shrine, in which two Gods, Osiris and Ptah, were sculptured. On the right and left sides of the naos, reliefs of two

Goddesses, Isis and Hathor, are finely carved. From its prosopography of inscriptions, the Naos can be dated to the late Dynastic Period (more exactly sometime between the Third Intermediate Period and Ptolemaic Period).

We also found faience and bronze objects in the same area. Some of them can be dated to the Late Dynastic period. The collections of Late Period pottery vessels were also uncovered in this season. During the last two seasons, we have excavated a lot of objects which can be dated to the Late Period. These objects indicate some activities on the hill in the Late Period.

A fine Stela is one of the most outstanding objects from this season. On the surface of the stela, Tuthmosis IV, offering to the God Sokaris, is depicted. We have already uncovered similar stelae, fourteen in number, from this site.

Limestone blocks and fragments with relief decoration are also uncovered. The most conspicuous group belongs to a marsh scene, depicting a papyrus thicket, birds and animals in the waterside. The largest block yields a scene in which two figures of god Hapi make offering towards a papyrus thicket (or a person behind it). These are supposed to have decorated the north wall of the portico.

4. Non-destructive scientific analyses of finds

We also tried to introduce several non-destructive scientific analytical methods for the objects from the site. The elemental constituents were determined by PIXE (Particle Induced X-Ray Emission) and XRF (Fluorescence X-ray) methods. In this season, we analyzed painted plasters, faience objects and pottery sherds from previous seasons.

Although the detailed reports will be published after the reexamination of the data in Japan, we believe that the fruitful information would be given.

アブ・シール南丘陵頂部遺跡第8次発掘調査成果報告

1. 第8次発掘調査及び出土遺物の概要

1. 調査組織

1999年7月14日から9月25日の日程で、アブ・シール南丘陵頂部遺跡の発掘調査が行なわれた。今年で8回目の発掘調査を迎えることもあり、丘陵頂部の発掘調査にある程度の目処をつけることを目的に、発掘を中心とする調査であった。

隊員構成は以下の通りである。

隊長：	吉村作治	早稲田大学人間科学部教授
隊員：		
<考古班>	高橋龍三郎	早稲田大学文学部教授
	近藤二郎	早稲田大学文学部助教授
	高宮いづみ	早稲田大学文学部講師
	秋山慎一	早稲田大学商学部講師
	齋藤正憲	早稲田大学古代エジプト調査室研究嘱託
	白井則行	早稲田大学会津八一記念博物館助手
	家原弥生	早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程1年
<建築班>	中川 武	早稲田大学理工学部教授
	西本真一	早稲田大学理工学部助教授
	柏木裕之	日本学術振興会特別研究員
	河崎昌之	和歌山大学システム工学部助手
	佐藤雅彦	早稲田大学大学院理工学研究科修士課程2年
	尾方大輔	早稲田大学大学院理工学研究科修士課程1年
<測量班>	玉西邦洋	株式会社ジェック
<記録班>	笹岡 剛	スチール・カメラマン
	小峯昌二	株式会社アイビス
<渉外>	西川 厚	早稲田大学古代エジプト調査室嘱託
<準隊員>	青木美千子	早稲田大学第一文学部考古学専修3年

高橋寿光 早稲田大学第一文学部考古学専修3年

田辺真吾 早稲田大学第一文学部考古学専修2年

担当インスペクター: Khaled Mohamed Mahmoud

2. 調査の目的と方法—発掘区の設定—

今期調査では、丘陵頂部の遺構分布の全容を把握することを目的に、以下の3つの目的が掲げられた。

- ①日乾煉瓦遺構の完掘。ここでは、当該遺構の全体を発掘することで、遺構の全体像を明らかとし、併せて、入口施設やその他の付属施設の有無を確認し、遺構の方向性に関わる情報を取得することが目的とされた。
- ②石造建造物北側の発掘調査。昨年度の調査に引き続き、旧地形を把握することで、建造物の解釈の手がかりを得ることを目的とした。
- ③丘陵頂部西側斜面の発掘。第6次調査の際に西側斜面からは良好な遺物群の出土が認められており、これからは日乾煉瓦遺構と関わるものが推測されていた。頂部における日乾煉瓦遺構の残存状況が極めて悪いことが推測されたので、同地区の発掘によりもたらされるであろう出土遺物は極めて有益であると推測されていた。

以上の目的を達成するために、発掘区は主に北側と西側へと拡張された(図1)。

3. 発掘の経過及び検出遺構(図2)

3-1. 日乾煉瓦遺構周辺の発掘調査及び検出遺構

昨年までの発掘調査によって、日乾煉瓦遺構については、北東コーナー、東側壁体、南東コーナー及び西側壁体の一部が検出され、北西コーナー周辺の発掘を残すのみとなっていた。同遺構の全体的な確認作業が今期調査の目的の一つに掲げられていたので、発掘区を北西方向に拡張した。

発掘調査の結果、遺構検出が期待されたところでは、大きな攪乱坑が穿たれており、日乾煉瓦遺構は大きく破壊されていることが判明した。発掘の過程で、現代に据えられたと考えられる土嚢列も検出されており、さらには現代の諸遺物も検出されている。1970年代を中心とする軍事施設の建造に伴って、こうした攪乱坑が形成されたものと思われる。結果的に、新たな遺構部分の検出には至らなかった(図25~27)。

ただし、日乾煉瓦遺構の北西コーナー近くで、石灰岩製の柱礎石が検出された。直径約70cmを測るこの礎石は、一材で造り出されている。カエムワセト王子の石造建造物における柱礎石の直径とは異なること、さらに2つの石材を合わせて造られていることを考え併せると、今期検出された礎石は日乾煉瓦遺構の部材と考えられようである。同様の柱礎石は日乾煉瓦の建造物に伴って出土することが多い。今後、この建物の復原を試みる際には、柱を伴う復原案を提示する必要がある。

日乾煉瓦遺構北東コーナー付近では、日乾煉瓦で造られたスロープが検出された(図28)。南北4m、東西2mを測るこの遺構は、堆積状況から日乾煉瓦遺構が少なくとも一部倒壊した後に造られていることが分かっている。この遺構については、同じく日乾煉瓦遺構南西コーナー部分で検出された同様のスロープとの類似が指摘され、石造建造物から石材を搬出する際に利用されたものとの推測がなされている。この想定が正しいな

らば、石造建造物ないしは日乾煉瓦遺構で用いられた石材を後世において搬出したと考えられる⁵⁾。

遺構北端部は大きく破壊されており、東側及び南側に比べて明瞭ではないものの、やはり同様に周囲の地山を削り、建物本体を際立たせる工法が採用されているらしいことが推測された。なぜならば、日乾煉瓦遺構の北壁体に沿って、溝状の掘り込みが穿たれていることが平面から観察されたからである。溝内の覆土を完全に取り除くには至っていないので、結論を提示することはできないが、日乾煉瓦の南側及び東側の状況もこれと一致しており、以下のように考えることができる。すなわち、この日乾煉瓦遺構は、西側側面については自然地形が急激に落ち込んでおり、人為的な掘削の痕跡も認められていないものの、南側、東側、北側については地山を削っていたものと推測されるのである。箇所により程度の差があるものの、全体として建物本体を浮き立たせたいという意図をもってこのが建造されたことは確かであろう。

なお、北側溝の覆土を一部除去したところ、焼け土が厚く堆積していることが認められた。焼成施設の痕跡は認められないものの、何らかの火を伴う作業がここで行なわれた可能性が高い。ここからは、焼け土の性格を決定するような遺物の出土はこれまでのところ認められていないが、出土した土器片のなかには新王国時代に特徴的な外反して終結する口縁をもつ皿形土器が認められた。

3-2. 石造建造物北側の発掘調査

石造建造物北側の発掘では、ペイブメントの全貌を把握することが第一の課題として掲げられた。昨年までの発掘調査では、日乾煉瓦遺構の東壁に平行して伸びていることが確認されていたが、両者の関係は不明瞭であった。そのため、発掘区をさらに北側へと拡張し、このペイブメントがどこに向かって伸びているのかを確認することとなった。仮に、日乾煉瓦遺構を囲むようにペイブメントの延長が検出された場合、両者の密接な関連を指摘することができ、この施設の解釈に欠かせない情報となる。

結果的に、ペイブメントの延長部分は、石材1点を除いては確認されなかった(図29)。その石材は、ペイブメントの延長線上に位置し、このことから、この施設が日乾煉瓦遺構の周囲に巡らされたものではないことが確認された。なお、ペイブメントの北側では、地山堆積が表層下すぐのところ検出された。ペイブメントはこの地山の高まりに続いているように観察され、このことから、地山レベルが高かった同地区ではペイブメントを設置する必要がなかったという仮説が導かれる。表面に残された擦痕と合わせ、この施設が石材搬出に用いられたことを示唆していよう。すなわち、ペイブメントの残された部分は風成による砂層が厚く堆積しているがために、足場を造り出す目的でペイブメントが敷かれたと推測される。一方で、石造建造物から離れたところでは、地山が高いレベルで残されており、重い石材を搬出する際に支障をきたさなかったために、ペイブメントを構築する必要がなかったであろう。

5) 今期調査のうちに、石造建造物の石材がエレミア修道院の近くで再利用されていたことが分かっており(詳細は後述する)、石造建造物の石材が後世に搬出されたことが実証された。なお、同じエレミア修道院ではトメス4世の銘の刻まれたブロックも出土していることが知られているが[Bryan 1991:157-158]、上述のように当遺跡よりの石材搬出が実証されたので、メンフィスより運ばれたとされる当該石材が我々の遺跡から持ち出された可能性も指摘され、極めて重要である。

以上、ペイブメントが石材搬出に用いられたとの推測を得るに至ったが、そうであるならば、この施設は石造建造物が建てられた後に構築されたことになる。これを確認するべく、続いてペイブメントの除去を行ない、下層の状況を確認することとした。この作業によって、さらに下層から日乾煉瓦遺構あるいは石造建造物に伴う施設や遺物群が新たに検出されることが期待された。

ペイブメント直下の堆積には、場所により違いがあるものの、石造建造物寄りでは、厚く風成の堆積が認められた。このことは、足場を確保するという上述の仮説を裏付けているように思われる。ただし、石造建造物から離れ、地山レベルが高いところにも、ペイブメントが敷かれる場合もあり、そうした箇所では、地山堆積の直上にペイブメントが乗っている状況が確認された。

ペイブメントの除去に伴って、石造建造物北側に厚く残された風成による砂層堆積を除去する作業を進めた。昨年の発掘によってOCグリッドで地山地形が大きく落ち込んでいることが確認されていたが、1D、0Dグリッドについても地山以上の堆積を除去した。これは、さらに広い範囲で旧地形を確認することを目指しての作業である。

結果的に9D、0D、0Cグリッド及び9B、9Cグリッドの南側半分の掘り下げを完了することができた。9C、0Cグリッドの中央部分において、ほぼ南北方向に深いワディが走っていることが確認された。なお、現況では、このワディは石造建造物の北西部分の下にもさらに続いていることが推測される。すなわち、石造建造物を建てる段階では、急激に落ち込んだ地形条件を示していたと考えられ、そうした悪条件のもとで石造建造物が建てられた可能性が高い。このことから、石造建造物を建てる際に、日乾煉瓦遺構が建ち残っており、それを壊すことなく、さらにその規模や軸線を手本としたことが推測される。ワディが残されていたと考えた場合、石造建造物を建てる際の最良の用地は、日乾煉瓦遺構が建てられていた場所だからである。カエムワセトがこの丘陵頂部を自らの建物を建てる場所を選んだ時、日乾煉瓦遺構の存在が大きく作用したことは間違いないであろう。

日乾煉瓦遺構周辺の発掘調査が進んだことにより、明らかにされた重要なポイントは、この建物が大規模な地形改変を伴うことが明らかにされたことであろう(図26, 27)。特に日乾煉瓦遺構東側で顕著であったが、日乾煉瓦遺構の周囲の地面を削り、2mあまりも建造物本体を浮き立たせた工法が採用されていることが確認された。さらに、日乾煉瓦遺構東側を掘り下げたところ、幅2m、深さ1.5mほどの溝(あるいは濠)が検出された。これにより、日乾煉瓦遺構が溝を伴う建造物であることが判明した。今期の発掘調査では、南北方向に7mほどを掘り上げたのみであるため、この溝が建物の周囲を巡っていたのかどうかについては、結論を下すことは現在不可能な状態にあるが、建物の北側及び南側で確認されている状況からは、建物の周囲を溝が回っていたと推測される⁶⁾

6) 北側では地山レベル以下30cm程を掘り下げたのみなので、詳細は不明であるものの、地山は日乾煉瓦遺構の北壁に沿って落ち込んでいる。また南側では、石造建造物西側に存在する日乾煉瓦家屋のレベルで発掘を止めているために、ここでも結論は保留せざるを得ないものの、日乾煉瓦遺構と家屋の中間に掘り込まれた攪乱坑の覆土を取り除いた限りでは、岩盤が掘削され、少なくとも一部では、溝状に掘り抜かれている状況が確認されている。

このように、調査の進展により、日乾煉瓦遺構本体の状況は不明な点が多いものの、その周辺において、建物の形態を探る重要な情報を得ることができた。すなわち、建物は周囲の地山を掘削して「基壇」状に浮き立たせ、なおかつ、「基壇」の裾に溝を穿った形態を持つことが判明したのである。

こうした形態を有する建造物の報告例は少ないのではないだろうか。管見の及ぶところでは、ブバステイスのバステト神殿[Arnold 1992:209]やアマルナで検出された建物址[Peet and Woolley 1923:pl. XXX]などが挙げられる。いずれも神殿建築に伴うものであり、おそらく象徴的な意味あいを持つと想定され、注目される⁷⁾。

3-3. 丘陵西側斜面の発掘調査

丘陵西側斜面からは、膨大な数の遺物が出土した。第6次調査の時に出土した遺物と内容的に大きく変わることはなく、彩画片、プラスター片、ファイアンス・タイル、彩文土器、土器などが出土した。また出土量も多く、全般に残存状況の良好な遺物が目立ったが、これも第6次調査より続く傾向である。

発掘の過程で、オーバー・ハングした岩盤を屋根部に利用し、積み石を伴う簡素な遺構が検出された。この積み石遺構は、不整形の石材を、粒子の粗いモルタルで繋ぎ合わせて造られており、人為的に造られたことは確実である。しかし、遺物が殆ど出土せず、その機能を特定する情報を極端に欠いている。関連する施設も検出されておらず、現状ではその機能について結論を下すことはできない。堆積状況から判断する限り、遺物を多く含む崩落層が形成された後に、この遺構が造られたと判断される。遺物を含む崩落層は新王国時代以降に形成された可能性が高く、したがってこの施設の造営年代も比較的新しいものとなる。また、この遺構がヒュッテのような役割を果たしていたとした場合、西側斜面に岩窟墓等を造った際の見張り小屋や休憩所といった目的に利用された可能性が想起されるが、この施設を造った時には、崩落層によって岩盤が露出していたとは考え難く、この可能性は排除される。測量及び作図を済ませ、来るべき研究に備えた。

また、今回の発掘によって、南北20mにわたって西側斜面の状況が明らかとなったが、北寄りでは岩盤の崩落が激しいのに対し、南側ではより良好な岩盤が露出していた状況が観察された。いまだ岩窟墓等の遺構は検出されていないが、今後周辺を掘り進むことで、こうした遺構が検出される可能性は少なくないと考えられる。

3-4. 丘陵頂部以外での調査 (図30)

今次調査では、ウナス王の参道脇に認められる石材の確認、記録作業を行なった。これらの石灰岩ブロックは当遺跡の石造建造物に用いられた石材である可能性が指摘されており、確認の必要があった。結果的にレリーフ3点（うち2点は接合し、供物供献の場面の神を表現したもので、もう1点は石灰岩製ニッチの一部であ

7) 溝を伴う建物としては、砦のような建物が想起される。この場合には、防御の目的で溝が穿たれたと想定される。しかし、当遺構の場合、ステラや彩文土器が出土しており、さらに、彩画により壁面が装飾され、石造の柱礎石を有する精巧な造りからは、前線基地のような機能は想定し難い。加えて、その規模を考えると、外部からの進入防堵目的を果たしたとは考えにくい。砦として建造され、その要素を残している可能性は排除できないが、やはり、我々の遺跡の場合、神殿建築として設計された（あるいは利用された）ものと考えられよう。

った)及び柱材12点が認められた。レリーフについては、石造建造物のポルティコを飾っていたものと考えて良く、さらに柱材の規格も当遺構で見られるものと一致している。これらの石材の出土地点はウナス王のピラミッドの参道南側斜面であり、エレミア修道院の南東の外れに相当する。我々の遺跡で用いられた石材は、この柱礎石の基礎の充填材として用いられたものが、崩落したものと推測される。この柱礎石がいつ据えられたかは不明であるが、エレミア修道院が機能していた時期に一致するものと思われる。

発掘調査によって、新王国時代が終わった後も、丘陵で人間が活動し続けたことが判明しているが、そうした活動うちに石材を運び出す行為が含まれることが確実となった。堆積状況や出土遺物から、いくつかの画期をもって、こうした活動が営まれたことが分かっている。少なくともある時期には、石造建造物の石材がエレミア修道院に向けて搬出されたのである⁸⁾。

また、石材が認められた場所と丘陵の間にはいくつものピラミッドが立ち並び、古王国時代の墓域が広がっている。単に石材取得を目的とした場合には、近くのピラミッドやマスタバ墓から石材を転用したほうが効率が良く、わざわざ丘陵の石材を運ぶことの説明を見つけることは難しい。むしろ、あえて我々の遺跡の石材を用いる積極的な理由が存在した可能性は高い。後世において丘陵が特別な意味を持っていたと推察されるのである。

4. 出土遺物の概要

第8次発掘調査では、2400点あまりの遺物を取り上げた。以下に、それらの概要を述べる。

4-1. レリーフ

35点のレリーフの刻まれた石灰岩ブロックが、主に石造建造物北側における発掘によってもたらされた。特に注目されるのは、ケケル・フリーズの刻まれた大型ブロックである (AK08-O716)。彫りが深いこと、及び表面にプラスターによる彫り損じの補修が見られることから、古王国時代の建物からの再利用石材とは言い難く、カエムワセトの石造建造物を飾っていたものと判断される。昨年度の調査によっても、ケケル・フリーズの装飾がこの建物を飾っていたことを示す断片が出土していたが、この大型ブロックの出土によって、その可能性はますます高いものとなった。なお、このブロックはその出土位置からポルティコ北半部に収まるものと考えられるが、南半部及びその周辺を掘った際には、こうした断片は出土しなかった。北半部のごく一部を飾っていたものと推測される⁹⁾。

8) トトメス4世の銘の刻まれた石灰岩製の梁材がエレミア修道院で再利用されていたとの報告がある[Bryan 1991:157-158]。当遺跡の石造建造物の石材がエレミア修道院まで運ばれていることが確認された以上、日乾煉瓦遺構で用いられた石材が再利用されている可能性も高いと言える。詳細については、次章(出土遺構)を参照のこと。

9) 祠堂の中の玉座に掛ける王像などが刻まれ、その頂部にケケル・フリーズの装飾が施されていた可能性が指摘される。

4-2. 碑文資料

出土遺物のうち、最も注目されるのは、トトメス4世のステラである。日乾煉瓦遺構の東側で出土したこのステラは、トトメス4世がネフェルテム神に供献する場面を描いたものである。トトメス4世のステラは、これまでに10点以上出土しており、特に昨年出土したソカリス神に供献する様子を刻んだステラと、規格と彫り方の点において酷似する同様のステラはギザのスフィンクスの周壁からの出土が知られるが[Hassan 1953:95]、作風を同じくする、2柱の異なった神に供献するステラがセットで検出されている[Hassan 1953:Pls. XLI, XLIII]。ソカリス神とネフェルテム神を描いた2枚のステラも対をなして奉納された可能性が高い。

また、トトメス4世関連の遺物として、スタンプ付き泥煉瓦3点、封泥2点が注目される。トトメス4世の銘を刻んだ一連のステラと併せて考えると、この丘陵がトトメス4世の活動の舞台となっていた可能性はますます高いものとなった。

4-3. 彩画片

彩画片では、スクロール文や動物文の大型断片が出土している。詳細については、別項に譲るが、特に注目されるのは、牛の顔の一部(AK08-A556)や外国人の衣服と思われる表現(AK08-A602)、スクロール文(AK08-A606)などが挙げられる。牛を表現した断片では、身体が赤色顔料で塗られ、青い斑点が施されていた。前回調査において、同様の表現をした断片が検出され、有翼獣と対になる動物が描かれていた可能性が指摘された。今次調査で出土した断片は、その動物が牛である可能性を示唆しており、興味深い。規格の点でも、大型のモチーフであることが判明したことも大きな成果と言えよう。一方、スクロール文を残す断片は、白と黒を交互に配するボーダーにより上下を囲まれたものであり、いわゆるフリーズ装飾を成していたことが明らかかな断片であった。

4-4. ファイアンス製品

4-4-1. ファイアンス製タイル

今次調査でも多数のタイルが検出された。第7次発掘調査で出土したものと同様のタイルが出土しているが、特に注目されるのは、縦8cm、横16cmを測る大型のタイルが検出したことである。こうした大型のタイルはこれまでに出土しておらず、装飾形態を考える上で、極めて重要な情報を得ることができた。

また建造物をいかに飾っていたかという問題を考える時、東側溝出土のタイル群が注目されよう。このコンテキストより出土したものは、1点を除いて、厚さ5mmほどのもので構成され、他の場所で見られるような厚さ1cm以上のタイルは認められなかった。少なくとも、日乾煉瓦遺構の一部がこうした薄手のタイルを主体とする装飾で飾られていたことは確実であろう¹⁰⁾。

10) 溝の最下部からもこうしたタイルが出土している。このことは日乾煉瓦遺構の外側をこうしたタイルが飾っていたことを示唆している。一つの可能性として、これらのタイルのうち一部がステラと組み合わせられて、壁面にはめ込まれていたことが想定される。

4-4-2. ファイアンス製アミュレット

上層の末期王朝時代以降の遺物を含む堆積層からは、80点のアミュレットが出土した。今次調査では、下層の層位を掘り進めたために、アミュレットの出土は比較的少数に留まっている。注目されるのはホルスに授乳するイシス女神を象ったほぼ完形のアミュレットである（AK08-O017）。

第6次調査の際に顕著に見られたウジャトの眼を象ったアミュレットの出土点数は減少したようだ。なお、全体として簡略化されたものが多く、傾向に若干の変化が想定される。詳細な定量分析が必要であろう。

4-5. 銅製品

日乾煉瓦遺構南西コーナー付近では、完形のブロンズ製の小像が2点出土した。1点はオシリス神、もう1点はイムヘテブを象ったものであるらしく、注目される。また、棒状の銅製品も1点出土している。

今次調査では全体で81点の銅製品断片が出土しているが、これらのうちいくつかは儀式用小壺（シチュラ）に復原されるものと推測される。良好な残存状況を示すいくつかの例では、何柱かの神々が3段にわたって連続的に描かれ（AK08-O961）、またアメン＝ミン神を表現した断片（AK08-O970）も認められた。極めて類似したシチュラが、サッカーラの聖獣墓地区の主神殿の発掘報告書の中で多数掲載されている〔Green 1987:pp. 74-104〕。なお、それらは紀元前6世紀から2世紀あたりに年代づけられており、注目される。

4-6. 石製品

石製品でもいくつか注目される遺物が出土した。石灰岩製の枕が2点出土した〔Fischer 1980:686-693〕。2点ともに長方形の一边に窪みを持たせたタイプの枕である。こうした形状の枕は古王国時代に顕著に見られる「単純タイプ」であるが、中王国時代あるいは新王国時代にまで類例が認められるとされる〔Fischer 1980:687, 689〕。

また、小型の偽扉ないしはニッチを模した石製品が2点出土した。1点は明らかに偽扉を象ったものと判断される。こうした偽扉は単独で奉納されることが報告されている〔Petrie, Mackay and Wainwright 1910:pl. xxxiii〕。年代としてプトレマイオス朝が想定されているこの石製品は〔Petrie, Mackay and Wainwright 1910:44〕、高さ50cm以上を測り、当遺跡のものと比較するとより大型であるが、こうした偽扉を奉納する慣習が広く行なわれていたようである〔Jeffreys and Smith 1988:pp. 31-32, pls. 15a, b〕。

石灰岩製の小像も注目される。男根を勃起させた男性を表現したもので、高さ3.4cmほどの小さな彫像である。赤色顔料によって彩色を施された痕跡を留めている。男根崇拜と関わって製作されたと考えられよう〔Jeffreys and Smith 1988:p. 33〕。同様の小像はアヌビエイオンの居住区より出土している〔Jeffreys and Smith 1988:pp. 33-34, pls. 20a-d, 21a, b〕¹¹⁾。

4-7. 土製品

3点の土製品が出土した。特に注目されるのは、日乾煉瓦の北側の地山直上テラコッタが検出されたもので

11) やや大型の類例が聖獣墓地、主神殿域で出土している〔Martin 1981:pl. 28〕。

ある（AK08-0118）。人物の顔の部分とベス神を象った断片が一緒に出土した。これと似た土製品は聖獣墓地、主神殿域で報告されている¹²⁾

4-8. 土器

土器では、良く精製された胎土に青色の顔料を主体として彩文を施された、いわゆる青色彩文土器が関心を惹く。同様の土器は第6次発掘調査時にすでに出土していたが、さらにいくつかの優良な資料が追加されることとなった。無文の土器については、出土量が多く、全貌を把握するには至っていないが、第6次調査出土分と大きく内容が異なることはなさそうである。

西側斜面からは、多量の土器が検出されており、十分な記録を取得することが難しい状況にある。今次調査に関しては、層位取り上げに重点を置いたので、今後層位を限定しつつ、アセンブリッジを明らかにしてゆく必要があろう。

5. 第7次、第8次調査のまとめと課題

この2年間の発掘調査によって明らかにされたことを、以下にまとめてみたい。

石造建造物周囲の発掘調査では、これまでにその全貌が明らかにされていなかった日乾煉瓦家屋の完掘が第一の成果として挙げられる。この建物は、石造建造物と軸線を一致させていることや、石造建造物に用いられていたと推測される石灰岩を利用していることから、カエムワセトの石造建造物に付属施設と推測されてきた。第7次発掘調査によってもたらされた出土遺物は、この建物が新王国時代に利用されていたことを示しており、上述の仮説と矛盾しない。

しかし、日乾煉瓦家屋の性格については、なお、検討の余地を残している。出土遺物が極めて限定されており、十分な手がかりを得ていない状態にある。今後、発掘記録の詳細な考察、さらには同時代資料との比較検討によって、さまざまな可能性を絞り込んでゆきたい。

石造建造物の北側でも、発掘の進行に伴い、興味深い情報を得ることができた。第7次調査及び第8次調査の際に、厚い堆積をかなり取り除くことができたために、石造建造物を創建した当時の状況を推し量る情報を得ることができた。すなわち、石造建造物北側では旧地表面は大きく落ち込んでいたことが確かめられたのである。これは、石造建造物の中心部からほぼ真北に向けて深いワディが伸びていることに由来するものと思われる。石造建造物内で確認されている地山レベルと、第7次調査で検出された岩盤との比高差を考えると、石造建造物の北側では大規模な版築による嵩上げの後に、この建物が営まれたと推測される。

このことは、石造建造物がかなりの労力を投下して、建設用地を確保したことを示している。ここで注目されるのは、北西に検出された日乾煉瓦遺構との関係である。石造建造物を建造する際に、先行する日乾煉瓦遺

12) 聖獣墓地、主神殿域で出土しているものは、勃起する男根を2柱のベスと2の柱ハルポクラテスが担ぐ様子を表現した彫像である[Martin 1981:p. 29, pl. 23]。この土製品がこのように復原されるかどうかは現状不明であるが、石灰岩製の彫像とともに、男根崇拜を示す遺物である可能性は高い。当該地区における男根崇拜について調べてみることで、年代にかかわる重要な資料となることも考えられる。

構の上に建てることも不可能ではなかったであろう。しかしそうはせずに、石造建造物が日乾煉瓦遺構の軸線を継承し、その規模さえも模倣していることは、前者が後者を強く意識して建てられたことを意味している。このことは、石造建造物が、むしろ多大な労力を必要とする、奥まった砂漠の中の丘の頂部をわざわざ選んで建てられた理由を説明するとともに、日乾煉瓦遺構の重要性をも暗示している。

日乾煉瓦遺構については、第7次発掘調査によって、その全体規模が判明したことが、第一の成果と言えよう（南北約25m、東西約22m）。さらには一定間隔でバットレスが付けられ、堅固な造りを有することが窺われる。また第8次発掘調査では、建物の周囲の地面を削って、基壇状に浮き立たせ、さらにその基壇部分の裾には、幅2m、深さ1.5mの溝が穿たれていたことが判明したのである。この溝が建物の周囲を回る、いわゆる濠をなるか否かは、今後の発掘の進展を待たねばならないが、表面観察からは、その可能性が極めて高い。日乾煉瓦遺構は、その残存状況は非常に悪いものの、本来は壮大な建築様式を誇っていたことが窺われるのである。

周辺から出土した遺物も大変に興味深い。ここ2年の発掘調査によって、トトメス4世の銘を刻んだ完形のステラが2枚出土した。加えて、トトメス4世の銘を伴う封泥やスタンプ付き泥煉瓦がいくつか検出されている。これにより、少なくともある一時期においては、この日乾煉瓦遺構がトトメス4世によって利用されたことはほぼ確実と考えて良いであろう。

また、日乾煉瓦遺構を飾っていた彩画片やファイアンス・タイルが多数出土していることも特筆される。本来この建物は、極彩色の彩色画と鮮やかなタイルで飾られていたのである。大規模な地形の改変に伴う労力と周囲に溝を巡らせる入念さを考え併せると、日乾煉瓦遺構がまさに王の建造物にふさわしい構造を持っていたことが判明したのである。

第8次発掘調査では西側斜面の発掘を行なったが、これは第6次発掘調査よりの継続であった。第8次発掘調査までで、南北30mほどの区画の発掘を完了することができた。簡便な積み石遺構を除いては、施設は確認されていない。明瞭に新王国時代に年代づけられる遺物が地表下1.5m程のレベルまで確認されており、このことは、当該丘陵が、新王国時代にはより切り立っていたことを示唆している。この丘陵頂部が建設用地に選ばれた理由を検討する上で、有益な情報が得られた。

西側斜面からは膨大な遺物が出土し、しかも、丘陵頂部に比べ保存状況が良い点において注目される。今後これらの遺物を詳細に研究してゆくことで、日乾煉瓦遺構についてのより詳細な検討（例えば時期による装飾や遺物の差が認められるかなど）を試みたいと考えている。

その他、第7次調査及び第8次調査では、第三中間期以降における人間活動の痕跡をいくつか捉えることができた。ナオスや土器をはじめとする遺物群が多数出土したとともに、パイプメントやスロープといった施設が認められた。前者には多数の奉納品が含まれることから、何らかの宗教的な活動が営まれたのに対し、後者は石材搬出を目的して造られたものと推測される。王朝時代末期に比定される遺物群は、調査が進展するにしたがって、多様性を増している。第三中間期以降における人間活動がいくつかの画期を持っていたことはおそらく確実であり、今後の調査記録と出土遺物についてのより詳細な検討が待たれる。なお、王朝時代末期において、当遺跡より石材が持ち出されたことは、エレミア修道院の近くで石材が発見されたことによって確証を得るに至っている。

2. 出土遺構

1. 概要

エジプト・アブ・シール南地区の丘陵頂部に築かれた建築遺構は、昨年の第7次調査によって概ね把握することができた。すなわちカエムワセトによる石造建造物と日乾煉瓦による付属家屋、さらに第18王朝中期の王に関わる日乾煉瓦造遺構の3棟を中心に展開し、相互に密接な関係を持っているらしいことが分かっている。第8次調査では日乾煉瓦造遺構の未発掘部分の継続と共に、三者の関係を含めた丘陵頂部全体の編年を描く作業が課題となった。

こうした点を踏まえ、建築班は発掘作業と並行して、これまでに検出された遺構や石材の精査を行い、丘陵頂部全体の復原考察に向けた基礎資料の充実を図った。この任にあたった建築班は中川武（早稲田大学理工学部教授）を班長に、以下、西本真一（早稲田大学理工学部助教授）、柏木裕之（日本学術振興会・特別研究員）、河崎昌之（和歌山大学システム工学部助手）、佐藤雅彦（早稲田大学大学院修士課程2年）、尾方大輔（早稲田大学大学院修士課程1年）の計6名で構成され、現場では考古班の協力の下、柏木が指揮をとった。以下遺構ごとに調査内容の概要を報告したい。なお本章は柏木が執筆した。

2. 石造建造物

2-1. 調査の概要

石造建造物の発掘は第6次調査までによって概ね終了し、次なる課題として遺構の復原、保存修復、さらに最終報告書の出版が挙げられている。特に北西から検出された日乾煉瓦造遺構が石造建造物に何らかの影響を及ぼしたことが分かり、この遺構との関係を念頭に置きながら作業を進める必要が生じた。そこで遺構全体を再度点検する意味を含め、痕跡調査、立・断面図の作成、壁体石材の資料化、天井石材の図化などを行った。

2-2. 痕跡調査

遺構の詳細については出土時に基本的な作業を終えているが、一方で全体の構成が明らかになったことで分かることも少なくない。そこで今次調査では出土遺構の全石材を一点ずつ確認し、痕跡を記録した。

ポルティコでは柱礎石の面が計画の基準になっていた可能性を検証するため、礎石の仕上げに着目して作業が進められた。その結果、柱礎石の位置が実際に石材をおいた位置よりも西側にずれたため、石材が不足する事態が生じていることが分かった。注目されるのは、柱礎石を一回り小さくする方法を採らず、あくまでも当初の大きさにするため、側面にモルタルを増して形づくる状況であり、床敷石にはこれに対応する鑿痕も確認された。柱礎石の大きさが重要な意味を持っていたことを強く窺わせる痕跡といえる。

ポルティコではその他、前面（東面）の観察を行った。南側では風化傾斜面を前面に用い、これを削って仕

上げとしているが、中央部分では風化傾斜面がそのままになっている。一方北側に残る2点のうち、中央部分に近いものでは既に仕上げが施され、すなわち中央部分だけが意図的に仕上げをせずに放置されていることがはっきりした。これは中央部分の東側に導入路のような施設が計画されていたためと考えて差し支えない。しかしながらこれまでの調査ではこうした遺構の存在を示す資料は検出されていないため、最終的に作られたかどうかは不明と言わざるを得なく、結論は保留にしたい。

ポルティコは石造建造物の中でも比較的形状の復原が進んでいるが、最も不明とされるのが南北の側壁の構造である。南側壁は残存状況が悪く、残念ながら十分な資料を入手することができなかった。そこでもう一つの北側壁について調査が進められた。解明すべき課題は壁体の転びと内部構造であり、前者は2-4-1の中で扱いたい。後者の内部構造については観察の結果、大型の石灰岩ブロックを粗く積み、隙間を地業に使った粗砂で埋めるやり方が採られた可能性が高いことが分かった。

前室及び奥室では表面の観察が進められた。かねてより、前室とポルティコを繋ぐ通路状の空間では大型の石材が用いられているのに対し、他の部分では小型の石材が多用されていることや、前室北東隅の壁体と奥室南西隅の壁体では構築技術に違いが見られることが指摘されており、その原因を究明することがテーマとなった。詳細な観察の結果、床敷石の並べ方や刻線のゆがみなど不自然な点が見られ、何らかの改変が行われた可能性が高い。この問題は遺構全体の建立順序に関わる大きな問題であり、改めて詳細に報告したい。

奥室の西壁には花崗岩碑が設置されていたと考えられるが、設置された状態の復原も今期の課題であった。奥室の石材に残るモルタルや鑿痕を細かく拾うとともに、奥室内部の花崗岩ブロックに残されたモルタルとの比較観察をおこなった。その結果、レリーフの刻まれた花崗岩碑は床面から一段高くなった石灰岩ブロックの上に据えられ、その前に花崗岩の台が配置されていたと考えられる。この台は地業土の上に直接置かれていた。

外壁については日乾煉瓦遺構との接点にあたる北西隅を中心に精査を実施し、壁体の外側を囲うように築かれた日乾煉瓦の壁体を実測した。

2-3. 立・断面図の作成

出土遺構の平面図は既に作成されているが、立面および断面は発掘調査の進行によって変化するためこれを待つて行うこととしていた。そこで発掘調査が一段落ついた今次、この課題に着手することにし、立面及び断面を20分の1で作成した。

この作業にあわせて観察も進められ、北側外壁の詰め物では最下層に日乾煉瓦と表面のプラスターが堆積している様子が観察された。また同じ北壁の西隅では、詰め物の最上部に日乾煉瓦が認められ、高台とを繋いだ日乾煉瓦の「橋」の一部であった可能性が考えられる。

2-4. 出土石材の資料化

これまでの発掘調査によって大型の石材が多数検出されている。そのうち柱材については分類が容易なこともあって既に分析が進められているが、他の石材については遺構の全体形状が不明だったこともあり、十分に検討されてこなかった。そこで今次調査では出土石材の観察を行い、復原考察の基礎資料とした。

2-4-1. 壁体石材

出土した石材のうち最も点数の多い石材が壁体であった。石造遺構に築かれた壁体のうちレリーフ装飾のない壁体は、これまでのところポルティコ側壁外面と外壁に限られている。しかしながらいずれもクランプで連結し、用いられた石材も風化傾斜面を持つ再利用石材であるなど、両者には共通点が多いため判別そのものが困難であった。

今次調査では100点を超える壁体石材を対象としたが、そのほとんどが最終仕上げに至っていない。そこでこれらの壁体が仕上げられていたならばどの程度の転びを持つのかを推定し、その角度によって壁体を分類する方法が採られた。

壁体石材を観察すると風化傾斜面を外側にした使い方が多い。これは旧建造物における使い方と同じであり、整形された表面を改めて削って使うことを意味する。風化傾斜面の角度は約81度に収束されるものが大部分を占め、これ以外に66度程度、54度などが見られた。後二者はピラミッドの表装石と考えられる。約81度の傾斜は外壁などでよく用いられる角度であるが、表面の風化の状態や規模などが類似した石材が多く、ある程度まとまった場所から組織的に搬入されたことを窺わせている。これらの石材はこうした角度のまま、すなわち上端が下端よりも引き込む方向で使われていたが、中には上下を逆にし、いわばオーバーハンクするような向きで使われている場合もあった。こうした使い方をした石材は最終的に90度（垂直）に削り落とされる予定であったと判断され、本遺構の壁体の中に垂直な壁体があったことが確認された。

反対に、内側へ転ぶように使われる石材の場合、上面だけに長手に平行した刻線が付けられていた。下面には付けられていないことからみて、石材が積まれた後に付けられたものと判断される。また上面では刻線に沿って縁が削り落とされており、最終的にこの刻線まで表面を削る予定であったと考えられる。この上には次の段の石材が載せられるわけだが、その石の下縁はこの刻線にあわせて置いたと考えるのが自然であろう。つまり、石材の下面は何も加工されていないことから、風化傾斜面の下縁を刻線にあわせて置いたことになる。これにより壁体の転びは上面の刻線と風化傾斜面の下縁を結んだ角度として求められることになり、今次調査において計測を行った。

その結果、いくらかのばらつきはあるものの、約77度に集中するという傾向が得られた。すなわちこの仮説が正しいのであれば約77度の転びをもった壁体の本遺構のなかに計画されていたということが出来る。

先に記したように本遺構の壁体のうち、レリーフ装飾のないところは、ポルティコの側壁外面と外壁である。外壁は基礎の上面に刻まれた鑿線から凹凸を繰り返す形状が一部にあったことが分かっている。これに対応する壁体ブロックも検出されており、いずれも未完成であった。またそれらはいずれも転びを持っておらず、垂直な壁であったと考えられる。

一方、ポルティコの側壁外面の石材は同定されていない。そのため転びの有無も含め不明な点が少なくない。内側に積まれていたレリーフブロックでは風化傾斜面を持った石材が多用されており、また柱材や床石でも同じような傾向が見られるため、側壁外面でもこれらの石材が使われていたと考えて良いだろう。分析の結果導き出された約77度の転びをポルティコに当てはめて見た場合、傾斜が緩やかすぎて壁体の頂部の厚みが失われ、プロポーシオンが悪いことが分かった。また外壁との接合部においても収まりが悪いなど、積極的に用いるべき根拠はないといえる。

そのため現時点では約77度の転びを持つ壁体がどこに、どのような形で用いられていたのかは不明であるが、

少なくともこうした特異な勾配を持つ壁体が存在したらしいことは注目されよう。今後、さらに検討する必要がある。

なお、壁体の分析結果など詳細は、建築班・佐藤雅彦が本資料の一部を用いて著した修士論文の中にまとめられている。参照されたい。

2-4-2. 天井石材

石材の規模や厚さなどから34点が天井と判断された。これらの石材はあまりに巨大であったため、遺構の外へ移動させただけで、詳細な分析は行われなかった。今次調査では全点について5分の1の実測図を作成し、全ての面を詳細に観察することができた。各々の実測図とコメントについては現在整理が進められており、論文として準備中である。そのためここでは概略を述べるに留めたい。

天井石材は大きく2カ所から集中して出土した。一つはポルティコの床面上から東斜面で、もう一つが外壁の北側、ペイブメント（配石遺構）と仮称した遺構の周辺であった。前者がポルティコの天井材であったことは確実であるが、後者についてははっきりしない。ここからは天井材以外にも壁材などが集中して出土し、石材が折り重なるような状況を呈していた。西側には日乾煉瓦遺構が築かれた高台があることから、ここから崩落した可能性も考えられる。

遺構の構成から考えると、天井はポルティコと中央の2室に少なくとも架かっていたはずである。ポルティコの天井については既に特定されているが、中央2室の天井については不明である。これは中央2室近辺から天井材が検出されていないためであり、どこかに持ち去られてしまったと考えられる。そのため上で不明とした天井材は中央2室を覆っていた天井の可能性が挙げられよう。

ポルティコの天井材は、アーキトレヴが東側と西側に2列走ることから大きく2種類に分けられる。一つは背後の壁と西側のアーキトレヴを架け渡すもので長さは1.8m程度である。もう一つが二つのアーキトレヴをまたぐものである。古代エジプト建築では前面のアーキトレヴの上にはコーニス・トラスが載せられ、天井材の小口が隠される形式をとることが多い。ところが発掘調査ではコーニス・トラスは検出されておらず、別の形式であった可能性が高い。出土した天井材の中に2mをゆうに越す大型のものがあり、この一方の先端は下側へ斜めにカットされていた。同様の形式は他にも2点確認され、こうした形式が使われたと判断される。そのためポルティコの天井は先端が斜めにカットされた、庇状をなしていたと結論づけられた。こうした形式は古王国時代の遺構に例があるが、新王国時代ではトトメス3世祝祭殿（カルナク）で用いられている例を除くとほとんど知られていない。ポルティコの柱は古王国時代のプタハシェプセスのmastaba墓を強く意識して作られていることが分かっているが、同様に天井の形式も引用した可能性が考えられ、興味深い。ポルティコの天井の上面は風食が激しく整形の程度や排水溝の有無は確認できなかった。一方側面は平坦でモルタルのみによって接着されていた。

もう一つの天井群は厚さにばらつきが見られ、風食が著しかった。これまでの観察から、上面の長辺側の縁辺部が削り落とされ、同じ石材を隣に並べるとちょうど幅10cm程度の溝が生まれることが指摘されている。またこれに対応すると思われる、断面が凸型をした棒状の石材も検出されていた。今次調査ではこの凸型石材が数点出土し、この石材が実際に用いられたものであることが確実となった。さらに凸面に大量のモルタルが付着した石材が出土し、当初の仮定がほぼ正しいことが実証された。このように石材間に溝を穿ち、そこに凸

型断面の棒状の石材を埋める方法は同時代の神殿で知られているが、棒状の石材はいずれも小さい。さらに注目される点はこの凸型石材の先端を上下どちらか半分削り、互いに「相欠き」としている点である。凸型石材は接続部の目地から雨水が侵入するのを防ぐ目的で使われていると考えられ、これに凸型石材どうしを相欠きでつなぐことで防水効果はさらに高まったと思われる。凸型石材を所定の位置に置くと、その部分が角材のように天井面から垂直に立ち上がることになる。ところが一点だけ一方の角を丸くし、片側だけを蒲鉾状に削った例があった。おそらく雨水を迅速に流すための工夫と思われるが、一方の角だけを削っていることや他の石材では行われない点など不明な部分も少なくない。

また同じ天井材の中には上面に雨水を誘導するためと思われる浅い溝も確認された。こうした方法はクルナのセティ1世葬祭殿などでも報告され、入念な施工が窺われる。

いずれも雨水に対して慎重に施工されているわけだが、逆にいえば、天井面に雨が直接降り注いでいたことを示している。この天井が何処に用いられていたのかははっきりしないが、仮に中央2室であるならば、この上には構築物は載せられていなかったことになる。中央2室だけでなく、遺構全体の形状復原に関わる大きな問題であり、さらに検討する必要があるといえよう。

2-4-3. 花崗岩

今次調査では奥室に横たわっていた花崗岩ブロック2点を移動した。銘文の刻まれた花崗岩は奥室に立て、その下敷きになっていたブロックを遺構外に移した。銘文つきの花崗岩については既に分析が進められているが、銘文の水平垂直を基準にした場合、ブロックの底面は正面に向かって右に傾いていることが分かった。また前後については銘文の面を垂直にした場合後ろ側に隙間が生じることが確認された。これは花崗岩ブロックが奥室の定位置に据えられた後に、銘文が刻まれたために生じたと考えられる。側面に関していえば、銘文の面に向かって右側が欠損し不明であるが、左側にはわずかな凹凸が認められた。これが設置に伴って削られた痕であるのかについてはさらなる検討が必要である。

この花崗岩ブロックの下敷きになっていた、もう一つの花崗岩ブロックは、今次調査の移動によって全ての面を詳細に観察する事ができ、また実測図を作成することができた。表面の仕上げ具合の違いやモルタルの痕跡から、このブロックは直方体の隅と判断されたが、全体の規模や奥室内での収まりかたについては不明である。

2-4-4. その他

今次調査ではこれら以外に柱材、ピラミッド石材についても分析が進められた。柱については既に基本的な分析が終了しているが、構築方法の再確認の意味もあって再度チェックした。柱の長さおよび建造方法については現在、論文を準備中である。

発掘調査では、ピラミッドの表装石と考えられる石材も多数出土した。興味深い点は石造建造物の西側、日乾煉瓦家屋の南辺りからまとまって出土していることと、壁材で見られたような鑿痕や加工が全く見られない点である。また再利用には必ずしも向いていないと思われるピラミッド隅部の石材が少なからず検出されている点も注意を惹く。ピラミッド石材はポルティコの床石でいくつか使われており、上下を逆にし下すばまりにすることで設置を容易にしている。検出されたピラミッド石材もこうした床面への利用が想定されていた可能

性があるが、裏面に整形された痕跡がないため不明である。

またこれらの石材がどのピラミッドであったのかについても検討された。石材の規模や勾配から衛星ピラミッドないし補助ピラミッドであった可能性が既に指摘されているが、具体的に特定することはできなかった。上面及び下面に浅く削った痕があり、これらが共通して見られたことから、限られたピラミッドから搬入された可能性が高い。サッカーラ、アブ・シール地区でピラミッドの研究に携わっている研究者と連絡を取りながら特定作業を進めていきたい。

石材の入手先としてはサフラー王のピラミッド複合体が既に分かっているが、第5次調査の際に外壁の北西から出土した石灰岩ブロック (AK05-B014) についても検討された。この石材は長さ64cm、高さ34cm、奥行き30.5cmの規模をし、両側面は奥行き13cmだけ削られていた。すなわち凸状の平面をしており、旧建造物の可能性としてジョセル王のピラミッド複合体外周壁が挙げられた。そこで実際に遺跡を訪れ確認したところ、外周壁の最も外側のブロックである可能性が高いことが知られた。長さ64cmの凹凸は外壁にも認められ、共通性が注目される。

これら大型石材のうちいくつかについてはカメラマンの笹岡氏により撮影され、報告書の出版に備えた。また大型の石材は発掘区の拡張と分析作業の効率向上から、丘陵の北西に一部移動した。

3. 日乾燥瓦家屋 (図24)

3. 日乾燥瓦家屋

日乾燥瓦家屋は前回調査までに完掘し、基本的な測量も終了している。そのため今次調査ではここから出土した泥モルタル片の分析を行い、実測図を作成した。

また日乾燥瓦家屋の立地について、この家屋部分が平坦に削られていた可能性が前回指摘されていた。今次調査では高台に築かれた日乾燥瓦遺構の周囲が発掘され、周囲を削り落とすことによって矩形の高台を作りだしていることが判明した。さらに、削られた部分が階段状の平坦面をなしており、この部分が日乾燥瓦家屋に対応することも分かった。そのため日乾燥瓦家屋は日乾燥瓦遺構の構築にさいして整地された平坦面を利用して作られた可能性が高いと考えられる。日乾燥瓦家屋と日乾燥瓦遺構との間には幅1m程度の溝が穿たれていることが分かっており、今後はこの発掘をとおして両者の関係を明らかにすることが望まれる。

4. 日乾燥瓦遺構 (図25～27)

4. 日乾燥瓦遺構 (図25～27)

4-1. はじめに

高台に築かれた日乾燥瓦遺構は前回調査によって頂部の3分の2程度を発掘し、アメンヘテプ2世ないしトトメス4世に強く関係した建物であったことが分かっている。出土遺構は残存状態が悪かったが、幅約1.5mの煉瓦列が矩形に廻る形式が想定された。一方、この内部からは遺構は検出されなかったが、周囲から大量の日乾燥瓦と彩色を伴う泥プラスターや白色のプラスター、ファイアンス・タイルなどが出土し、かつて壮麗な建物が築かれたことを窺わせた。

4-2. 出土遺構

4-2. 出土遺構

今次は、残された北西隅と周囲の発掘が行われた。高台をなす頂部からは遺構を形成していたと断定できる日乾燥瓦は検出されなかった。北西隅の発掘では、崩落したと思われる日乾燥瓦が斜面から検出されたが、そ

の数はわずかであった。これまでの調査を通して見てみると崩落煉瓦は東側及び南側の斜面から大量に出土し、特に南東隅に集中していた。日乾煉瓦は完全な姿をしたものが少なく、多くは半裁されていた。さらにこれらを繋いでいたはずの泥モルタルの点数が少なく、自然に壁が倒壊したというよりは、意図的に破壊し、その際不要となった日乾煉瓦を廃棄したように思われる。日乾煉瓦の大きさについては先回の調査で少なくとも3種類が報告されており、今回も同様の結果を得た。日乾煉瓦に押されたスタンプも今回検出されたが、いずれもトトメス4世の王名であった。

高台の斜面の下も広く発掘を行い、特に日乾煉瓦遺構の東側を重点的に調査した。この部分にはパイプメントと仮称した石灰岩の石敷き遺構があったが、記録の後これを取り外し、自然地形の検出を行った。その結果、日乾煉瓦遺構が築かれた場所は当初からマウンド状を呈していたわけではなく、周囲を削ることによってマウンド状に成形したことが判明した。おそらくこの場所は丘陵頂部の中で最も高く、緩やかな丘状を呈していたと考えられる。西側は崖に面するようにいっばいまで迫り出し、東側は緩やかな斜面を削って急峻な面を作り出した。その結果斜面の下には削り取られた部分が段差となって残り、ステップ状になったと思われる。この部分は平坦に均されており、直径20cm程度の穴らしき痕がほぼ中央に認められた以外は遺構が築かれた痕跡は確認できなかった。同じような平坦面は高台の北側及び南側でも形成されていたと考えられる。ただし自然地形の傾斜は東側に比べ、北側や南側は幾分緩やかだったと想像され、そのため東側の平坦面はその先東に下っていくのに対し、北側や南側では平坦面の部分だけがむしろいくらか沈む結果となっている。南側では先に記したようにこの平坦面に日乾煉瓦家屋が第19王朝になって造営されたと考えられる。

さらに、マウンド状に削り出された斜面と平坦面との境には幅約1mの溝が斜面を延長するような形で掘られていた。今次調査では時間の関係で東面の一部を試掘したに留まったが、上面から観察する限り、この溝は西側を除く三方を取り囲んでいた可能性が高い。この溝の最下面は岩盤まで届いていたが、溝の内部からその役割を直接示す資料は得られなかった。

この溝の機能については全体の発掘を待って検討したいが、石造建造物は、日乾煉瓦遺構と軸線や規模などで強い関係が見られ、この建物を意識していた可能性が指摘されている。そのため石造建造物の復原には、日乾煉瓦遺構の周囲に穿たれた溝やマウンド状の形状を考慮する必要があると思われる。

先回の調査では日乾煉瓦遺構の全体規模とともに、南北に長軸を持つ平面形式であることが判明した。そのためこの建物の正面として北側の可能性が指摘されたが、前は時間の都合で確認することができなかった。今次調査でも北側は一部未発掘となったため結論は留保したいが、少なくとも北側にも溝が穿たれていたらしいことは確実であり、本格的な導入路は存在しなかったと考えられる。また時代は不明であるがこの溝を利用した簡単な施設が検出されており、これも北側に本格的な昇降路が築かれなかったことを補完するものと思われる。しかしながら北東隅では北側の溝をまたぐように南北に日乾煉瓦の通路（スロープ）が作られており（図28）、これが日乾煉瓦遺構と直接関係した遺構であるかは別にせよ、北側が昇降路の方向であったことを示唆する遺構として注目される。

そのため現時点では建物の出入り口を特定することはできなかったが、三方を濠状の溝が廻り、残る一方は急峻な崖に面していることから考え、建物の正面と実際に出入り口とは異なっていた可能性が挙げられる。今後出土遺物の分析を進め、建物の機能を明らかにしていく過程で正面の問題を考える必要がある。

日乾煉瓦遺構の北側斜面では敷き詰められた石灰岩が検出された。残存状態は必ずしも良好ではないため、

敷き詰められた範囲や全体の形状、構築時期については不明である。近辺からは同じように石灰岩ブロックを敷いた遺構（ペイブメントと仮称）が出土しているが、これに比べてより入念に敷き詰められており、異なるものと判断された。

4-3. 柱礎石

今次調査で出土した遺物の内、建築的に最も重要とおもわれるのが石灰岩で作られた柱礎石である。これは高台のうえ、北西隅近くから検出された。この辺りからは軍の土囊が見つかるなど攪乱が激しく、遺構と判断される日乾煉瓦などは残されていない。出土した石灰岩礎石はポルティコで見られるものと類似した形をし、下側で直径71cm、上面は直径62cm、高さは14cmであった。柱礎石の周囲には平坦な面が残されていたが、表面の仕上げは粗く、ポルティコのように床敷石の一部を成していた可能性は低いと思われる。上面には直径28cmの円形がごくわずかに立ち上がって残されていた。おそらく柱身の直径と一致するものと考えられ、その太さから木製の柱であった可能性が高いと考えられる。

柱礎石は東側に傾いた状態で検出され、またこの場所は周囲よりもいくらか低くなっているため原位置を保っている可能性は低い。柱礎石の下には日乾煉瓦が挟まれており、また周囲には日乾煉瓦が不規則に散らばっていた。そのためこの柱礎石が高台の遺構の一部を形成していたのかは不明といわざるをえない。しかし、これまでのところ、他にこの柱が築かれていたことを示す遺構は検出されていないこと。出土した地点が高台の上であり、再利用には不向きな柱礎石を別の場所からわざわざ持ち上げたと考えるのは不自然と思われること。さらに柱身が木製であったらしいことはその建物が日乾煉瓦であったことを示唆しているといえるかもしれない。そのためこの柱礎石は高台に用いられていた可能性が高いと思われる。周囲からは植物の茎や紐が出土しており、天井がはられていたことを示している。日乾煉瓦遺構の形状については内部の平面形式が不明であり、また周囲の日乾煉瓦列の内面に仕上げの痕が見られないことなどから、床面はこれよりも高い位置にある、基壇状の可能性が指摘されている。柱礎石はこの問題に手がかりを与える可能性があり、なお検討を続けたい。

5. ペイブメント（図29）

第6次調査では石造建造物の北側から、南北一列に延びる石敷き遺構が検出された。石造遺構の北外壁から8m程度北から始まり、北に向かって延びるこの遺構は、機能や規模が不明であり、説明の都合上「ペイブメント」と仮称した。続く第7次調査では発掘区を北側に拡張し続きを検出した。しかしながら更に北に延びることが確認されたため、詳細は全体の検出を待って行うこととし、今次その課題に取り組むこととなった。

今次調査の結果、残存するペイブメントを全て検出することができ、記録をおこなった。その後一部トレンチをいれて基礎の状態を観察し、その結果を検討した後、石材を取り外した。

ペイブメントは高台の日乾煉瓦遺構の構築に伴って生じた平坦面の縁に沿うように配された。石材を敷くときには既に黄色の砂が堆積し、平坦面がそのまま東に連続するような状態であったと考えられる。そのため北側では平坦な地山の上にはほぼ直接据えられているのに対し、南側では堆積した砂の上に置かれている。そのため北側は南側よりも安定した状態を保っていた。いずれもモルタルなどは使用せず直接据えるやり方であり、強固な基礎は必要とされなかったことが分かる。また南から北に向かって緩やかに上昇しているがこれは地形を反映しているものと考えられる。

石材は南北にほぼ一直線上に並べられているが、正確に置かれたわけではない。残存する南端は石造建造物から約8mの位置であるが、当初の端は不明である。一方北端についても不明であるが、高台の日乾煉瓦遺構に伴う平坦面の北側は、その先下っていくためおそらく、下り始める辺りまで延びていたものと推測される。出土したペイブメントは中程で途切れていたが、当初は連続していたと想像される。ただし途切れている場所が高台の日乾煉瓦遺構のほぼ中心に対応していることから何らかの関係があった可能性が挙げられるが、現時点では不明である。

ペイブメントが敷かれた時期はこれを覆う層の出土遺物などから末期王朝時代が有力とされている。石敷きの下に堆積している砂は厚く、また遺物がほとんど含まれていなかったことから、遺構が放棄されしばらく活動が停止した後に据えられたと考えられる。

ペイブメントとして用いられた石材は石造建造物を構成していたものであったが、例えば天井材の隙間を埋める凸型石材が含まれるなど、あまり形の良くないものが多い。ペイブメントの上からはおびただしい数の石材が検出され、それらが壁体や天井など規模が大きく、形状のしっかりした石材であったことを思い起こすならば、ペイブメントの石材は意図的に選別された可能性が高い。石材間にはモルタルを使用せず、小さな石材を詰めるだけの簡易な方法が採られており、正式な床面や参道というよりは、仮設の施設であった可能性が挙げられる。

石材の上面には南北方向に擦痕が観察された。何本もの筋として残されており、何度かこの上を通ったことが分かる。また石材の端の欠け具合から、南から北に向かって引きずられたと判断された。すなわち石造建造物から丘陵の北方へ移動したことになる。ペイブメントが敷かれたときには、丘陵頂部は風成の砂で厚く覆われていたであろうことを勘案するならば、ペイブメントはそのままでは砂にめり込んでしまい、移動が困難なものを、容易に運ぶために搬送路であった可能性が高いと考えられる。

擦痕が何本も付いていることから複数回運び出されたことは確実であるが、それらは既に失われているため特定することは困難である。今後の課題としたい。

6. 丘陵頂部石材の再利用 (図30)

前回の調査においてウナス王参道の南側にポルティコの柱材と酷似した石材が散乱していることが分かっていたが、時間の関係で十分に検討することができなかった。しかしながらそれらが丘陵頂部の石材であるか否かは、倒壊後の遺跡を知る上で重要かつ興味深い問題と認識されていた。そこで今次調査においてこれらの石材を観察、比較することにし、主として建築班がその作業にあたった。

石材はウナス王の参道南側の斜面に散乱し、斜面の上には花崗岩の柱礎石が原位置を保っていた。柱は斜面に迫り出して築かれたため、基礎には石灰岩ブロックが積み重ねられている。散乱する石材には加工された痕がないため、こうした基礎の石材として使われていたと判断された。周囲には発掘廃土と思われる遺物混じりの土砂が大量に捨てられ、石材の一部は土砂に入り込んでいた。散乱石材は、柱材、レリーフ付き石灰岩、ブロック状に整形された石灰岩に大別され、判別が容易な柱材とレリーフブロックを中心に調査を実施した。調査は表面からの観察に制限されていたため、石材の写真撮影と位置記録を中心に行い、可能なものについてはトレースも行った。

柱材は柱頭柱身合わせ12点を数えたが、礎石は見つからなかった。表面の仕上げや規模が酷似していること

に加え、クランプによる接合や、接着面に風化傾斜面が認められるなど、ポルティコの特徴と一致していた。そのためこれらの柱材はポルティコから搬送されたと結論づけられた。

またレリーフブロックは3点確認され、一点はポルティコ西壁を飾っていたニッチ装飾の一部と判断された。残る2点は接合し、立像の腰あたりの図像であったが、銘文がないため本遺構から運ばれたとは断定できなかった。

いずれにせよポルティコから石材が集中的に運ばれたとすることができる。丘陵から今回調査した場所まではかなりの距離がある上、途中にはピラミッドをはじめ遺構も数多い。そのため石材取得にあたってはそれ相応の理由があったと捉えるほうが自然であろう。一つはポルティコから大量に石材が持ち去られた場合、再利用しやすい壁などは搬入先の表装石として使われ、柱材など利用しづらい形は基礎の詰め石にまわされたという解釈である。この場合、ポルティコ石材の質の良さが搬出の決め手になったと推察される。一方、基礎の詰め石だけに使われたとした場合、この遺跡の石材を利用しなくてはならない特別な意味があったと考えられよう。この建物が後の世まで語り継がれた賢人カエムワセトに関わるものであることに起因するといえるかもしれない。ただしその場合なぜ銘文の付いた石材ではなく柱材であったのか、奥室や前室ではなくポルティコなのかという問題が残される。現時点では決めかねる問題であり、周囲の砂をさらに除いて検証する必要があると考える。

3. 出土遺物

1. レリーフ (図31~33)

1-1. はじめに

1991年に始まった第1次発掘調査以来、本遺跡からは、おびただしい数のレリーフが刻まれた石灰岩の断片が出土してきた。その数は、第7次発掘調査終了までで、1452点にのぼる。当初からこれらの断片は、そこに描かれるモチーフの内容や描写のスタイルに基づいて、元来石造建造物の壁面を飾っていた装飾の一部であると認識されてきた。さらに、断片には繰り返しカエムワセトの名前・称号および姿が刻まれており、ここからこの石造建造物がラメセス2世の第4王子カエムワセトに深く関連するものであることが明らかになっている。

発掘調査開始当初から、こうしたレリーフが刻まれた石灰岩の断片を対象とする研究の目的は、まず石造建造物の壁面装飾の復原にあった。古代エジプトにおける建造物の壁面装飾の内容は、通常装飾が施された空間に対する当時の人々の認識と深く関連し、その空間の使われ方や意義を推測する重要な手がかりを提供することが知られている。石造建造物の築造目的を明らかにするためには壁面装飾の全体像を知る必要があるが、カエムワセトの石造建造物は、すでに壁面が完全に壊されていた。そこで、当該遺跡において、まず壁面装飾の復原が最初の課題となってきたのであった。

レリーフが施された断片は、主に石造建造物周辺の攪乱層内に堆積していた。第7次発掘調査終了までに、石造建造物周辺部（すなわち最も密にレリーフが刻まれた断片が分布していた地区）の発掘調査が完了し、そこから検出された断片を基に、壁面装飾の概要が推測されるに至っていた。しかし、全ての断片が検出されたわけではなく、未だ装飾の概要が明らかではない部分も少なくなかった。

第8次発掘調査の際には、すでに石造建造物周辺の発掘調査が終了していたために、レリーフ断片の出土数は著しく少なく、旧来の知見に加えられる情報は極めて少なかったが、重要な断片を中心に、概要と復原に関する従来の知見に貢献した点を報告する。なお、今次調査中にエレミア修道院東方で確認されたレリーフ断片3点についても、ここに報告を含めた。

1-2. レリーフ断片の資料作成

第1次発掘調査以来、レリーフが施された断片について、下記のような資料が作成されており、第7次発掘調査出土品も同様に資料化された。基本的な資料は、写真、フィルム・トレース、石材観察記録、および出土位置記録から構成される。各断片ごとに台帳が作成され、観察事項、作業進行状況、および収納状況の記録がデータベースを使用して管理された。

1-3. 壁面装飾の復原

これまでバラバラになった断片から元来の壁面装飾を復原するために、レリーフ断片の分類、出土位置の分析、および類例の検討が行われてきた。レリーフ断片を各種属性に基づいて、元の壁面装飾に対応する場面に分類し、断片の出土位置から元来の壁面における位置を推測した。さらに、モチーフの欠損部分を類例を参照することによって補うことを試みている。

第6次発掘調査までに出土したレリーフ断片の分析から、石造建造物の壁面はいくつかのモチーフで飾られていたことが明らかにされている(39頁参照)。

1-4. 第8次発掘調査出土のレリーフ断片概要

第8次発掘調査の結果検出されたレリーフ断片は、計35点であった。これらの断片について、以下に所属壁面別に報告する。

1-4-1. 石灰岩製偽扉（ポルティコ西壁）

ポルティコ西壁面は、パネル装飾を持つ偽扉を並べたような形態をしており、各所がレリーフで装飾されていたことが明らかになっているが、今次発掘調査で出土した断片にはこれに該当することが確認されたものはないようである。

今次調査中にエレミア修道院跡の東方で検出された石材2点は、石灰岩製偽扉の断片であった。いずれもパネル装飾の一部とヒエログリフの銘文の一部を残している。1点には「g」の文字が、もう1点には「mr」の文字が判読される。

1-4-2. 「供物奉納の場面」（ポルティコ南北壁上段）

ポルティコ南北の壁面上段は、神々に供物を捧げるカエムワセト王子を描いた場面で飾られていたことが明らかになっている。この場面に所属する断片は、比較的高く彫り出された美しい高浮き彫りと身長120cm くらいの人物像およびそれに対応する供物やヒエログリフのサイズから、比較的明瞭に識別される。

第8次発掘調査の際にも、この場面に由来する計14点の断片が検出された。その多くは小断片であり、単独での情報量は少ない。その中で、AK08-O771はオシリス神の手の部分であることが特定できた。長いクロークをまとい、胸の前で両手を交差させ、笏を手にした旧知の姿勢で描写されていることが看取できる。同じようなオシリス神の手の部分は、第3次発掘調査の際にポルティコ南部から出土し、ポルティコ南壁にオシリス神の姿が描かれていたことを明らかにしている。第8次調査出土の断片は石造建造物北方から出土していることから、ポルティコ北半部の装飾であった可能性が高い。この推測が妥当であるならば、北壁面にも類似のオシリス像が描かれていたことになるであろう。AK08-A045の断片もヒエログリフの銘文サイズから、おそらく「供物奉納の場面」に由来すると推測される。

サッカーラのエレミア修道院跡東方において確認された石灰岩の大型ブロックには、男性の腰の部分が高浮き彫りで刻まれていた。描写のスタイルと彫り方から、この断片は本遺跡石造建造物の「供物奉納の場面」に由来すると思われる。右側を向いた男性は、手にアネクを持っていることから、男神であることが分かる。その後ろに描かれているのは、杖の一部である可能性が高い。これまで「供物奉納の場面」のうち神々の姿を描

いた断片が多数出土していたが、腰から下に該当する断片が欠落していて、キルトの細部表現については不明であった。この断片が発見されて、男神のキルトが縦方向のブリーツを表す線で装飾されていたことが明らかになった。また、男神の後ろの棒状の浮き彫りが杖の一部であるとする、この場面に神々が並んで描かれていたと考えられることになり、連続する神々の描写が確認された最初の例になる。この断片がポルティコのうち南北いずれの壁面に属していたか確定することは困難であるが、右を向いていることから、ポルティコ北壁に属す可能性が高い。というのは、すでに南壁面では複数の右側を向く男神の描写が含まれることが推測されていて、さらにこの男神を加えるスペースは十分ではないように思われる。

1-4-3. 「湿地の場面」 (ポルティコ南北壁下段)

ポルティコ南北の壁面下段には「湿地の場面」が描かれていたことが明らかになっている。この場面は水と水辺の動植物の中に浮かべたパピュルスのボート上で、供物卓を捧げる神々もしくはカエムワセトの図像から構成されている。この場面に属す断片は、やや浅めの高浮き彫りと水辺の描写によって判別される。

第8次発掘調査の結果、「湿地の場面」に所属する断片が計8点出土した。そのうち石造建造物北方から出土したAK08-O285とO565は、ポルティコ北壁の復原に貢献する断片である。AK08-O565には、2人の男神のふくよかな腹部と供物の一部が描かれており、第7次発掘調査で検出された供物卓を運ぶ豊穡を人格化した男神群の一部であることが知られる。第7次の時点で2組の男神群の存在が知られていたが、そのいずれとも接合し得ないこの断片の出土によって、男神群の数が最小でも3組み存在したことが明らかになった。男神群1組の幅は最小でも25cmであるため、この結果、少なくとも男神群の描写が幅75cmの壁面を占めたことが確実にになった。

AK08-O285には生命の印アंक、ロータスの花とつばみ、鳥類の頭部が描かれている。第7次発掘調査で出土した断片の描写から、これは豊穡の化身を表した男神群が運ぶ供物卓の下の部分に相当することが知られる。既出の断片のいずれかと接合する可能性が高いであろう。供物の前方に僅かに残されている曲線が前を歩く男神の腰に相当するならば、この断片によって男神群の間隔が確認できることになり、ポルティコ北壁の「湿地の場面」全体を復原するために重要な情報を与えることになる。

1-4-4. 「神々の行列の場面」 (長方形室南北壁)

これまでの考察の結果、長方形室の南北壁面には、数段にわたって身長45cm程度の、西に向かって歩く神々の行列が描かれていたことが明らかになっている。この場面に属す断片は、やや浅い高浮き彫りと神々の描写によって判別可能である。

第8次発掘調査で検出されたレリーフ断片の中には、「神々の行列の場面」に所属することが確認されたものは極めて少なかった。その中でAK08-O006は、男神のキルトの一部であることが表現から知られる例であった。この神は左を向いているため、長方形室の北壁面の描写の一部であったと思われる。

1-4-5. 「浅浮き彫り」 (再利用石材)

本遺跡から出土するレリーフのうちには、高さ1～2mm程度の浅い高浮き彫りのものが含まれており、仮に「浅浮き彫り」と呼称してきた。「浅浮き彫り」の多くは、図像のスタイルおよびヒエログリフの書法が

ら、古王国時代に彫られたものであり、カエムワセトが石造建造物を築造した際に、古い建造物の建材を再利用したために、本遺跡に持ち込まれたと考えられてきた。しばしば本遺跡の石造建造物には見られない彩色を伴うことが特徴である。第8次発掘調査の際に、「浅浮き彫り」に分類されるレリーフ断片が計7点認識された。

今次調査の特徴のひとつは、ケケル・フリーズを刻んだ断片が比較的高比率で出土したことである。最大の断片は、ほぼ完形の石材 AK08-O716である。ケケル・フリーズの各要素は幅約12cm、残存する高さ約33cmであるが、完形の高さはおそらく45cm 近かったであろう。このサイズはこうしたタイプのフリーズとしては大型である。他にも AK08-O572、O637、O782等が同じモチーフの断片であり、過去の調査でもケケル・フリーズは少なからぬ数が出土していた。これらのケケル・フリーズの理解に際して問題となったのは、それらが当該石造建造物の装飾の一部であるのか、あるいは再利用した元の建造物の装飾の一部であるのかという点であった。というのは、ケケル・フリーズの使用例は古王国時代以来長期間わたっており、本遺跡から出土した例は時に「浅浮き彫り」に分類するにはやや彫りの深いものが含まれていたためである。ケケル・フリーズを描いた最大の断片 AK08-O716は、石材の規模からみると、ポルティコ北壁に用いられていたと考えることも十分可能であった。また、多くの断片が石造建造物北方から出土していることから、これが当該建造物の壁面を飾っていたとすると、ポルティコ北壁面近辺であった可能性が高い。

ケケル・フリーズは、古王国時代以来長期間にわたって壁面装飾にしばしば用いられてきた。元来神聖な建造物の頂部の飾りを描いたものらしく、壁面全体が聖堂の内部を表す場合は壁面の頂部全長にわたって、聖堂自体の図が描かれる場合はその頂部に描かれるのが通例である。しかしながら、ポルティコ南壁の壁面装飾復原の結果、画面の頂部にケケル・フリーズが用いられていた形跡は全くなく、ポルティコにおいて壁面頂部付近全長にわたってケケル・フリーズが施されていた可能性は低い。したがって、当該石造建造物にケケル・フリーズが描かれていたとしたら、残された可能性は、ケケル・フリーズを頂く聖なる建造物がポルティコ北壁面に描かれていた可能性であろう。出土したケケル・フリーズのサイズから考えて、仮にこの石造建造物壁面にケケル・フリーズが描かれていたとしたら、かなり大型の聖堂とそれに相当する大きさの神像が描かれていたことになる。ポルティコ北壁面に該当する可能性のある断片の中には、確かに大型の人物像が含まれていた可能性を示唆するものもあるが、こうした大型聖堂の存在は、北壁面上下2段分割の構図とは相容れず、上下段にわたる構成を考える必要を生じさせる。

先にケケル・フリーズが当該石造建造物の装飾である可能性を検討してみたが、古王国時代の装飾の一部であった可能性も低くはない。古い建造物の石材をほぼ全面的に再利用して築造されたこの石造建造物の中でも、旧レリーフ装飾を持つ石材が使用された部分には偏りがあるようであり、かねてより旧レリーフ装飾の集中が認められた部分の一つがポルティコである。したがって、この可能性も十分考慮に入れて考察を進めるべきであろう。

ケケル・フリーズは時代を通じて普遍的なモチーフであるものの、そのサイズは必ずしも画一的ではないので、今後詳細なサイズの検討を含めて、ケケル・フリーズの所属を明らかにする必要がある。

1-5. 小結

第8次発掘調査開始の時点においてすでに石造建造物周辺の発掘調査は完了しており、今次調査の期間中に

石造建造物の壁面を飾っていたレリーフ断片の出土数は少なかった。したがって旧来の知見を大きく変える情報は多くはなかったが、エレミア修道院東方で検出されたレリーフ断片考察の結果、「供物奉納の場面」の詳細情報が得られたこと、「湿地の場面」に男神群の数と間隔に関する情報が加わったこと、およびケケル・フリーズの考察から大型聖堂の存在が示唆され、あるいは石材搬出地特定の手がかりを得られたことは重要な成果であったといえる。

2. ステラ及びスタンプ付き日乾煉瓦

第8次調査では、1点のステラ（AK08-O588）が発見された。石灰岩製のステラで、ほぼ完形のものである。大きさは、高さが43cmで幅28.5cm、厚さが6cm～7.3cmのものである。表面には、向かって右にトトメス4世が立ち、前述のソカリス神のステラと同じく、右手にはヘス容器、左手には灯明を持っている。王はネメス頭巾ではなく、青冠を被り、腰布を身につけている。向かって左には、プタハ神の息子であるネフェルテム（Nfr-tm）神が立っている。ステラの上部には縦書きで銘文が刻されている。トトメス4世の上部には、"*nfr nfr Mn-hprw-R^c di 'nh*" 「善き神、メン・ケペルウ・ラー、生命を与えられん。」とソカリス神のステラ（AK07-O104）と同じ銘文が刻されている。また、ネフェルテム神の上には、"*di f 'nh(w) nb 3wt ib nb Nfr-tm*" 「彼は、全ての生命と喜びを与える。ネフェルテム神。」一方、ステラの下段には、横書き2行で以下のような銘文が刻されている。1行目には、"*nsw-bit nb Bwy Mn-hprw-R^c di 'nh mi R^c*" 「上下エジプト王、二国の主、メン・ケペルウ・ラー、太陽のような生命を与えられん。」2行目には、"*s3-R^c Dhwtj-ms h^c-h^cw mry Nfr-tm*" 「太陽神ラーの息子、トトメス、ネフェル・テム神に愛されしもの。」

さて、以上のように第7次と第8次調査においては、ステラの出土数は少なかったが、最も良好な状態の2点が発見された。興味深いことに、これら2点のステラに描かれたトトメス4世は、灯明とヘス容器とを両手に持ち、一部被り物が異なるものの同一の姿勢をとっている。また王と向き合う神の図像もまた、左手にウアス杖と右手にアंकという同一姿勢で描かれている。図像だけでなく、ステラの寸法も細部に至るまで共通である。各部の寸法を比較すると次のようになる。

<ソカリス神のステラ（AK07-O104）とネフェルテム神（AK08-O588）のステラとの寸法比較(単位は cm) >

(ステラ番号)	高さ	幅	厚さ	王の高さ(肩まで)	神の高さ(肩まで)	ウアス杖	供物台
AK07-O104	43.2	28.5	6.7-8.2	25.0(20.5)	25.0(21.2)	22.5	7.9
AK08-O588	43.2	28.5	6.5-7.5	24.5(19.1)	22.5(18.6)	19.7	7.5

ステラ自体の寸法は、高さと同幅とが同一であり、ある規格に基づいて製作されていることが明らかである。また、王や神の姿勢などに共通点が多く、今後、トトメス4世関連ステラをまとめる際には極めて重要なデータを提供してくれた。

第7次と第8次調査において崩落煉瓦層を中心として、王名を押印した日乾煉瓦や封泥が発見されている。押印の中で書かれている文字が判明したものは、全て第18王朝トトメス4世の即位名であるメン・ケペルウ・ラー（*Mn-hprw-R^c*）を楕円形の枠で囲ったものであった。ヴァリエーションとしては、ケペルウの複数形を3本のストロークではなく、ケペルの文字を3つ記したものが僅かに1例含まれるに過ぎない。

3. 彩画片

3-1. 出土点数と資料化の現状

出土した彩画片は登録番号数にして第7次242点、第8次343点である。取り上げの状況としては、小片で目立ったモチーフの無い破片がまとまって出土したため、一括して取り上げたものが、第7次27点、第8次58点ある。一括取り上げたものに関しては、各破片の作業用の写真撮影は行われていない。その他にも第7次27点、第8次86点が写真撮影が行われておらず、どのような彩画片であるか把握されていないが、発掘調査後の資料整理期間の時間的制約のため目立ったモチーフの無いものを撮影対象から除外したためである。

3-2. 下地と彩色技術

彩画片は壁面の仕上げの塗り土の層が剥離し、破片となったもので、本遺構から出土したものは白色の塗り土の層から成っている。平均しておよそ5～6 mm程度の厚みがある。白色の土はおそらく石膏質のものと思われるが、正確には科学分析の結果が待たれる。強度を持たせるために、土には白色の細かい繊維が混ぜ込まれている。ほとんどの破片が1層構造で、仕上げの白色層が泥レンガの壁体に直接塗られたものか、何層か塗り土を塗った後に塗られたものかは分かっていない。

彩色技術は、古代エジプトで伝統的に行われていたテンペラ技法（顔料に媒剤を混ぜて絵具を作り、乾いた壁面に描く技法）で描かれたものと思われる。塗り方や発色に顕著な違いは見られない。色が若干くすんで見えるものがあるが、埋没時に表面が磨耗したり、泥が付着したものもあり、塗り方の違いなのか残存状態の違いなのかを判断するには、今後各破片の表面観察を行う必要がある。

3-3. モチーフの残存状況

ここでは一括取り上げされたものと、写真記録の無いものを除外した残り第7次188点、第8次199点の彩画片に描かれているモチーフの残存状況を簡単に述べる。壁面の平面部分ではなく、コーナー部分の一部が第7次に4点出土している。

モチーフの無い背景の部分と思われる白地のものが第7次23点、第8次18点となっている。また、単色で一面塗られているだけであるため、今後のモチーフの復原考察に積極的に利用できないものが、第7次43点、第8次53点となっている。

破片が極めて小片でほとんどモチーフの復原考察にあまり利用できないものは、第7次33点、第8次62点となっている。

今後モチーフの同定の対象とすべきであるが、現時点でモチーフの分かっていないものは、第7次42点、第8次23点となっている。このうちの多くが食料品、器物、ロータスなどから成る供物や貢納品などの一部と思われるが、具体的な同定はまだ行われていない。

この他にただ直線の一部が残っているものが第7次6点、第8次2点、曲線の一部が残っているものが第7次5点、第8次1点である。何らかのボーダーの一部と思われる2色以上の単色のまっすぐ帯の一部が残っているものが第7次16点、第8次3点である。

具体的にどのようなモチーフに属するものか分かったものに、天井などの装飾に良く用いられる赤地に黄色いスクロールの一部が、第7次3点、第8次9点確認された。人物像の一部と思われるものは、橙色に赤い輪

郭線のある人体の一部が第7次7点、白地に赤と青の縁飾りの付いた衣服の一部が第7次10点確認された。植物の一部と思われるものは、第7次5点、第8次6点、動物の一部と思われるものは、第7次10点、第8次6点となっている。

この他に、第6次調査から出土していた破片を含めて復原された、有翼の豹の一部と思われるものが第7次に6点、接合関係は不明だが豹の皮の一部を表したものが第7次に2点出土した。また、第8次調査に出土した16点はベス神を描いたものと考えられる。このモチーフについては次項で詳述したい。

いずれの破片も小片で、具体的なモチーフが分かったものでもモチーフの全体像が把握できるものは少ない。また、隣接するモチーフ同士の関係を示している破片は少なく、場面の復原は困難なものになると予想される。

3-4. 特徴的なモチーフ

a. 有翼豹

第6次、第7次の破片を合わせて1体の翼のある豹が姿が復原された[吉村他 2000:45]。地面のラインから頭頂部まで約46cmの高さがあり、左を向いて四肢を地面について立っている。皮の柄は、黄地に赤と黒の斑模様が入ったものでエジプトの表現様式では伝統的に豹を表すものである。翼は胴部の前脚の付け根から肩にかけての部分から生えており、上に向かって広げられている。これまでのところ他の遺構で全く同じような有翼豹が描かれた例は確認されていない。

古代エジプトでは、いくつかの動物あるいは人間の要素を組み合わせた想像上の生き物のモチーフとして、王権の象徴である、ライオンの胴に人の頭が付いたスフィンクスと、ライオンの胴に隼あるいはハゲワシの頭が付いたグリフィンとが古王国時代からの伝統のあるモチーフとして知られている[Fischer 1987:16]。スフィンクスとグリフィンともに翼を持つが、新王国時代以前には閉じた状態の翼が胴部に模様のように描かれることはあったが、通例広げた翼が描かれることはなかった[Feldman 1998: 168]。新王国時代以降も多くは翼を閉じたままである。

この他に想像上の生き物は、バニー・ハサンにある中王国時代の墓の壁画の砂漠の場面に描かれた例がある。砂漠は怪物(モンスター)の棲む世界と考えられていたようで、猪と犬を組み合わせたようなセット、グリフィン、首の長い大型の猫科の動物、サイのような象などが描かれた[Fischer 1987:16]。また、中王国時代に作られた"magic wand"と呼ばれる妊婦や新生児を守護する護符のようなものや、赤ん坊に食べ物を与える容器などに、厄除けの力があるとされた実在あるいは想像上の動物が描かれた。これらには、ワニ、亀、ライオン、蛇、首の長い猫科の動物、ライオンの頭を持った男性、グリフィンなどが描かれた[Fischer 1987:17-18]。これらの例に見られるグリフィンは、豹のような斑のある胴に、鳥の頭と翼を持っている。翼は背中から生えていて、前後に開いたように描かれるのが特徴である。

本遺構から出土した有翼豹のように、胴部側面から生えた翼を広げている表現は、新王国時代第18王朝の初めまでに、エーゲ海地域(ミノア文明圏)のグリフィンの影響によりエジプトに導入されたようである。エーゲ海地域のグリフィンは、エジプトのものとは異なり、鳥の頭に鶏冠が付いており、翼を広げている。このグリフィンはエジプトの図像表現にそのまま導入され、初期の例としては、第18王朝の創始者イアフメスの母アハヘテプの墓から出土した儀式用の斧に描かれたものが知られる[Smith 1981:fig. 216]。この影響で、スフィンクスにも胴部側面から生えた翼を広げている例が見られるようになった。第18王朝時代アメンヘテプ3世

の治世中に作られたカーネリアン製の装身具に刻まれた妃ティイの姿を表したスフィンクス[Kozloff & Bryan 1992: pl. 62]、トゥトアメンの墓から出土した上着に刺繍されたスフィンクス[Barber 1991:161]などの例がある。

このように、本遺構で確認された有翼豹の翼のスタイルは明らかに近隣地域との接触を通じて図像表現の影響を受けて生み出された表現と言える。しかし、有翼豹のモチーフが表す意味は今のところ不明である。エジプト国内にも近隣地域にも、純粋な豹の姿に翼を付けたモチーフは確認されていない。エジプトでは王権の象徴、または厄除けの意味を持った想像上の動物が描かれる習慣があり、有翼豹はグリフィンや首の長い猫科の動物などに類似する点もあるが、全くの類例が無いため、現状においてその意味を断定することはできない。

b. ベス

第8次調査で出土した16点の彩画片はベス神を表したものと思われる。ベスは小びとのようなずんぐりした体にライオンのたてがみのある頭部を持つ神で、妊婦や新生児の厄除けの神である。

本遺構で確認されたベスは肌の色が赤く黄色い斑点が付いている。目が青く、白いたてがみがあり、色鮮やかなキルトを身に付けている。また、黒と黄色のまだら模様の蛇が首の周りに描かれている。接合関係は明らかではないが、蛇の頭部を表した破片も見つかっている。ベスは蛇を寄せ付けない力があるとされ、ベスはしばしば蛇との組み合わせで描かれた。

中王国時代にも、ライオンの頭と男性の胴体を持つアハという神が描かれることがあり、これがベスの前身といわれている。ベスが、よりずんぐりとした体型の恐ろしい表情を持った姿で描かれるようになったのは第18王朝のハトシェプストの治世ころと言われている[Romano 1980:43]。また、キルトを身に付けた姿が描かれるようになったのは、アメンヘテプ2世の治世からである[Romano 1980:44-45]。従って、スタイルから見ても本遺構に描かれたベスは、第18王朝中期以降一般的になったスタイルで描かれていると言える。

ベスは妊婦と新生児を守るほか、人々の眠りを見守る役割も持っていた。また、死者が再生する際の守護の役割も持っていた。ベスは太陽神の実体化であると言われており、新王国時代以降、ウジャトの目、太陽円盤、スカラベ、ウラエウスなど太陽神と結びつけられるエンブレムとともに描かれたり、翼を持った姿で描かれたりしている[Dasen 1993:64-65]。太陽神の危険な夜の航行の際の守護の役割を持つとされている。

こうした性質からベスを表した例は多くの場合、居住空間から見つかっている。一般の人々の家（ディール・アル＝マディーナ、アマルナ）や王宮（マルカタ王宮）の壁画に描かれた例が知られている。また、枕や化粧道具などの日用品の装飾としても見られる。

神殿の装飾としてはあまり見られないが、ディール・アル＝バフリーのハトシェプスト葬祭殿の女王の誕生の場面、ルクソール神殿のアメンヘテプ3世の誕生の間の王の誕生の場面に描かれている。末期王朝以降に主神殿の付属施設として建てられるようになった、神々と王の誕生を記念した誕生殿には決まってその姿を見ることができる。

このように、ベスが描かれる場面あるいは建物は非常に限られているが、王に関わる建物で王宮以外の泥レンガの建物に描かれた例はこれまでのところ知られておらず、本遺構に描かれたベスがどのような意味を持って描かれたものかは明らかではない。可能性としては王の誕生、あるいは当時隆盛しはじめていた太陽信仰との関わりで描かれたことなどが考えられる。しかし、泥レンガの建物は残存数が限られているため、本遺構が

特異な例なのか、あるいは他にも例はあったが残存していないだけなのかも現時点では特定できない。今後、遺構の立地や形状などをふまえていくつかの可能性を吟味していく必要があるが、ベスは本遺構の性質を考えていくうえで、鍵となるモチーフと言える。

c. 人物像

第7次調査で人物像と思われる破片が17点出土した。人体部は通常エジプト人を表す橙色に赤い輪郭線のあるものであるが、エジプト人とアジア系の人物の肌色が区別されない例もあり、後者である可能性もある。衣服は、白地に赤と青の縁飾りのついたもので、アジア系の人々を描く際によく用いられるものである。

しかし、各破片は極めて断片的で、人物像の大きさ、姿勢などは分からない。

d. 植物

特徴的なものに、第8次の2点（AK08-A464, AK08-A866）が、アマルナ時代に特徴的に王宮の床などに描かれたのびのびとした花を表している。このような自然な植物の描写はアメンヘテプ3世の治世には例が知られているが、どの程度時代的に遡れるものなのかを考えるうえで貴重な資料である。

e. 動物

特徴的なものに、赤字い青い斑点のある動物を表したものがあり、第7次6点、第8次1点が確認されている。相互に接合せず、断片的で全体像は分からないが、第8次の例（AK08-A457）は猫科の動物の足の先（爪のある部分）が中に浮いた状態で描かれていることから、毛皮の状態を表した可能性が高い。文様から動物の種類を同定することはできていない。

3-5. 出土地点の傾向

出土地点については詳しい分析はまだ行われていないが、モチーフが特定できている特徴的なものは、比較的近くから出土しているようである。例えば、有翼豹と赤地に青い斑点のある動物の毛皮は第7次調査時のみ、遺構東側（グリッド0E、9E）の黄色細砂層から、人物像の一部と考えられる破片は、同じく第7次調査時のみ、遺構東側の泥レンガ崩落層から出土している。ベスは第8次調査時のみ、遺構南西の建物から少し離れたところ（グリッド9J）の赤褐色砂礫層から主に出土している。これらのモチーフは同一グリッド内でも同一の層位から出土しているようである。また、第8次に除去された溝の覆土は、他の層とは時期的あるいは性質上異なる堆積層である可能性があるが、そこから出土した彩画片は全般に色がくすんでいる印象を受ける。彩色技法の違いか、堆積状況の違いかを明らかにするには今後の表面観察が待たれる。

下地が2度塗りされているという特徴を持つ彩画片もまとめて出土している。これまでに2層に塗られていることが分かった彩画片は16点あるが、うち1点は出土地点不明、1点は遺構西側から出土したが、残りの14点は全て遺構東側から出土し、12点はベスに属している。ベスが描かれていた部分には壁の塗り直しを伴う壁画の描き直しが行われたものと思われ、崩壊後の堆積も他の部分に属する彩画片とは異なっていた可能性が指摘される。

各層位の性質の詳しい検討がまだ行われていないため、各層位に含まれる彩画片が建物から自然に剥落し堆

積したものか、人為的に投棄されて堆積したものかは分からない。しかし、同一壁面を構成していた破片が同一層位に含まれる可能性があることから、壁面の復原あるいは建物の改築や破壊の経緯を知るうえで、彩画片とその包含層の関係は重要なものと言えよう。

4. 土器（新王国時代）（図34）

4-1. 東側溝出土の土器群

丘陵頂部においては、現代における軍事基地設営のために、遺構、遺物ともに残存状況が好ましくない。出土土器の研究にあたっては、こうした残存状況は大きな足枷となる。こうした悪条件を少しでも補うべく、本稿では、コンテクストが良好と判断される土器群について、報告することとした。より全体的な記録、分類作業はその次の課題となろう。

良好と判断されるコンテクストを有する土器群に、東側溝出土の土器群がある。東側溝とは、日乾煉瓦遺構の立つ高台（あるいはプラット・フォーム）の裾に穿たれた溝を指す。調査経緯の項で言及したように、この溝がいわば濠のように日乾煉瓦の周囲を巡っていたか否かについては今のところ不明である。しかし、その覆土を観察すると、煉瓦あるいはその断片をあまり含んでおらず、従って、泥連遺構の倒壊前にこの溝が埋まった可能性が指摘される。そのため、時代的には限定された遺物群が内包されていると推測され、その内容が注目された。以下、本項では、東側出土の土器群について報告する。ただし、溝が完全に掘り上がっていない現状では、以下に示す概要はあくまで、出土遺物の一端に過ぎないことを明記しておく。

東側溝から出土した土器群については、その他の丘陵頂部出土の土器群と比較して、より器形の復原が容易であった。このことは、上述のコンテクストが良好であるという仮説を裏付けるものである。接合作業の結果、図34のような器種組成が確認された。

図34-1～12は小型～中型の碗形の土器である。日乾煉瓦家屋で多く検出された、口縁部が外湾して終結する器形はむしろ少なく、口縁が単純に終わる碗が目立つ。また、いくつかの碗形土器には口縁部に赤色顔料による縁取りが確認されている。次項で紹介する西側斜面出土の土器群に多く認められる大型（口径30cm ほど）の碗形土器は認められず、アセンブリッジに違いがあったことが推測される。

図34-13は小型の壺形土器である。

図34-14は器台と推測される土器である。いわゆるリング状のポット・スタンドであり、その上位には焼成前に穿孔が穿たれている。

図34-15, 18, 19はいわゆる漏斗状頸部壺である。

図34-16, 17は中型の壺形土器であるが、極めて特殊な器形を呈している。すなわち、胴部中位でやや絞られる他は、概ね垂直な器壁を有する。いわゆる"Drop Jar"と呼ばれる器形に近いが[Fuscaldo 1998:Fig. 2g]、やや器高が低い点に特徴がある。東側溝からはこれまでのところ、この器形の壺が3点確認されているが、3点全てに、磨研された後、赤色スリップが塗られ、表面は極めて平滑に仕上げられている[cf. Fuscaldo 1998:60]。同様の器形については、サッカーラに報告例があるが[Aston 1997:Pl. 113(49)]、表面の調整については報告されておらず[Aston 1997:86]、本遺構で出土したものとの関連は不明である。

図34-20, 21は青色彩文土器である。ともにいわゆるマルカタ・ブルーやアマルナ・ブルーと総称される彩文土器と類似した装飾形態を有しており、後述する、西側斜面出土の非常に手の込んだ装飾を持つ彩文土器とは

様相を異にしている。これらの彩文土器はナイル・シルトを用いて製作されており、器形と合わせ、一連の精緻な彩文土器とは異なった工房で作られた可能性も指摘されよう。ただし、東川溝からも、小断片ではあるが、精緻なタイプの装飾を施された彩文土器が検出されており、2つの異なったタイプの彩文土器が組み合わせられて用いられていた可能性を考える必要がある。

なお、図34-20については、同一の文様パターンを持ち、同じポット・マークが記された彩文土器が西側斜面より出土しており、興味深い。

以上、東側溝出土の土器群について概観してきたが、これまでのところ、この一群の土器は小型の皿及び中型の壺で構成されるいたと推測される。従って、葬送目的の土器群と判断することは難しく、むしろ、祭祀行為に供されたものである可能性が高いと言える。無頸壺(16, 17)や青色彩文土器(20, 21)の存在も、こうした仮説を裏付けていると思われる。

第8次発掘調査で発掘した箇所は、仮に日乾煉瓦遺構の正面が東側であると仮定した場合、その中央付近、すなわち正面玄関に相当する場所である。この地点で出土した土器群が、極めて単純な器種組成を示したことは、遺構の解釈において重要な示唆をもたらすものと期待される。

4-2. 西側斜面出土の土器群

4-2-1. 概要

第8次調査において丘陵西側斜面を発掘した際、多くの土器断片が取り上げられた。本項では、これらの土器群について報告する。ただし、出土土器群は膨大な数に上るため、発掘調査終了時の僅かな時間がこれらの土器群の観察および記録に割かれたに過ぎない。ここでは、同じく丘陵西側斜面の発掘を行なった第6次調査時の出土資料を合わせ、概観することとする。当然、全体像を十分には把握できていない現状では、以下の記述は予備的なものに過ぎないことを明記しておく。

なお、西側斜面出土の土器群は、胎土により大きく2つに大別される¹³⁾。いわゆる「ナイル・シルト」と呼ばれるナイル川の沖積土を用いた土器群と、「マール・クレイ」と呼ばれる泥灰土で造られた土器群である。前者は、砂粒の大きさ、混和材の種類や有無、多孔率や焼き上がりの硬度などによって、さらにいくつか細別されるが、西側斜面で出土する土器群は、Nile B2とNile Cに分類されるものと思われる。このうち、Nile B2は地域、時代に関わらず様々な遺跡で確認されている胎土であり[Arnold and Bourriau 1993:172]、当遺跡で出土することも不思議なことではない¹⁴⁾。Nile Cはスサを多く含む点の特徴であり、大型の貯蔵容器に用いら

13) ここでは、いわゆるウィーン・システムによる胎土分類に準拠することとする[Arnold and Bourriau 1993:169-182]。ウィーン・システムについては、記述されている内容を十分にくみ取することは難しく、出土資料の全てを包括する分類基準ではないとの批判があるものの、現状では最も支持されていることも確かである。本項では、このウィーン・システムに倣って胎土の観察を試みた、その結果を報告する。

14) ただし、それだけに多くのヴァリエーションがあることも知られており、その区別こそが重要なポイントであることは確実である。しかし、実際の資料に基づく比較考察が不可能である以上、ここでは大まかな指摘に終始せざるを得ない。今後の課題と言えよう。

れることが多いとされる[Arnold and Bourriau 1993:173-174]。当遺跡でも、主に大型の器形に用いられている胎土であるが、その器形は大型鉢形を呈することが多い。

また、後者のマール・クレイも同様に細分されているが、ここで扱う資料を構成する胎土は Marl A4に分類されるものと思われる[Arnold and Bourriau 1993:177]。同じ胎土で製作された土器群はギザからも知られており、本出土例も同様の胎土で製作されたものと推測される[Hope 1997:252]¹⁵⁾。

西側斜面出土の土器群は全般に、胎土のヴァリエーションは乏しく、ナイル・シルトとマール・クレイの差異は明確であり、比較的容易に上述の3種類の胎土に分類することができた。以下、ナイル・シルトとマール・クレイに全体を大別しつつ、特徴的な器形について報告する。

4-2-2. ナイル・シルトによる土器群 (図35~37)

まずは、ナイル・シルトで製作された土器群を概観する。

最初に挙げられるのは皿形土器であるが、大きさによりいくつかに分けることができる。

最も小型の皿形土器として挙げられるのは、口径15cm 程を測る小型の丸底皿型土器である(図35-1~6)[Hope 1989:Fig. 1c(p. 21), Bourriau and Aston 1985:Pl. 35-1]。薄手の器壁を有する例が多く、多くは Nile B2で製作されたものである。

また、やや大きめの平底皿型土器(口径27cm 程、図35-7~13)も認められる[Hope 1989:Fig. 1k(p. 21)]。この器形には、口縁が外反して終結するものとそうでないものがあるが、外反して終結する場合には、口縁部に赤色顔料による装飾が認められる場合もある。ただし、全体としては、口縁部に赤色顔料による装飾を施される例は少ないと指摘できる。この器形も、Nile B2で造られている。

図35-14は、口縁下で一度内湾した後、口縁はほぼ垂直に立ち上がる中型の碗型土器であり、第18王朝中期に特徴的な器形とされるが[Hope 1989:14]、これは同時代に限定されるという意味ではないであろう。マルカタから同様の器形が報告されているが[Hope 1989:Fig. 1p, q, r(p. 21)]、確かにメンフィス地区の第19王朝に年代づけられる墓地区よりの出土は稀なようである[cf. Bourriau and Aston 1985, Aston 1991, 1997]。

さらには、口径40cm 程を測る大型の碗も出土している(図35-17, 18)。図35-17は、胴部に突帯を有し、胴部に縄の痕が認められるが、これについても、同様に報告例がある[Hope 1989:Fig. 1l, m, n(p. 21)]。この大型皿形土器は、Nile C を用いて作られることが多い。

図35-22~24はポット・スタンドである。マルカタで同様の土器が報告されている[Hope 1989:Fig. 5d, e(p. 25)]。より単純なリング状のポット・スタンドはこれまでのところ検出されていない。なお、図35-22の例では口縁部は赤色の顔料により縁取られている。

図36-1は、口縁部に赤色顔料による彩色の施された小型の壺である。ホープが第18王朝に比定する小型の壺

15) 極めて均質なその胎土は、Marl A3である可能性をも示唆している。Marl A3は現代のケナ地方で用いられる良質の胎土との類似性を指摘されており、上エジプトで産出する土と考えられている。当遺跡出土のものが、この Marl A3に分類されるならば、1. この胎土が上エジプトより運ばれた可能性や、2. メンフィス近郊にも、この胎土を産する地点が存在していた可能性などが指摘され、興味深い。

が類似した器形を呈している[Hope 1989:14, Fig. 3b, c]。

図36-4は中型の碗或いは壺である。同様の器形は新王国時代のサッカーラよりの報告が知られる[Bourriau and Aston 1985:Pl. 35-38, Aston 1997:Pls. 115-94, 103]。

図36-7は中型の壺であり、次に紹介する大型の壺とは明らかに異なった器形を有する。これも、ホープによれば、第18王朝中葉に特徴的とされる器形である[Hope 1989:14, Fig. 3a(p. 23)]。しかし、この壺に関しては、第19王朝に比定されるほぼ同様の器形の土器が報告されており[Aston 1997:pl. 116-105]、第18王朝に限定することは不可能であろう。

図37-5は蓋と推測される土器である。マルカタより出土した同様の器形が知られ[Hope 1989:14, Fig. 4f(p. 24)]、第18王朝に比定されるものである。ただし、ホープによる報告例では、把手の直下に穿孔があり、それ故香炉に被せる目的で造られた蓋であると考えられているが、本遺跡より出土した例では、穿孔は認められない。

図37-4, 6~8は大型の壺形土器である。こうした土器は、西側斜面出土の土器群には多く含まれていたと推測される。これらの壺は、大型でありながら、外面は比較的良く撫で整形されており、外面に白色スリップが塗布される例が多いようである。

また、完形に復原された例(図37-6)を見ると、胴部が大きく張り出しているのが特徴である。後述するように、マール・クレイで造られた大型壺形土器の一群は、より細身の胴部を有しており、対照的である。これだけ胴部の張り出した例は珍しく、辛うじてマルカタにおいて同様の器形が報告されているが[Hope 1989:Fig. 5k(p. 25)]、これとても、頸部が短いという点において当遺構の類例とは趣を異にしている。今後更なる類例検索が必要であろう。

但し、ナイル・シルトでも細身の壺が造られていた可能性もある(図36-14, 37-6)。比較的細身を呈する壺形土器については今後、年代の問題も含めて、類例をあたる必要がある。

4-2-3. マール・クレイによる土器群(図38)

図38-1~3は、マール・クレイで作られた小型の碗であり、その器壁は2 mmほどにすぎない。極めてよく精製された胎土は、Marl A3をも思わせる。薄い器壁を作り出すために、良質の胎土が用いられているものと思われる。なお、これだけの薄さを呈する土器群は殆ど知られていない。

図38-5~9は、同様に良く精製された胎土で作られた小型の壺形土器である。

図38-10~17は比較的細身で、全体として繊細な様相を呈するのが特徴である。当遺跡出土の同様の土器では、頸部中程に2本~3本の沈線による文様が付されることが多い。さらに、このタイプの土器には「ポット・マーク」が刻まれる例が数多く認められるが、こうしたポット・マークは沈線文の下に刻まれることが多い。なお、図38-10は黒色のインクで描かれたものであり、図38-11は焼成後に刻まれた刻文である。

4-2-4. 西側斜面出土の彩文土器について

これまで概観してきたような無文の土器群とともに、精緻な装飾を施された、いわゆる青色彩文土器も多数出土した。ロータスの花や花弁(図39-1, 2)、あるいは菊の花(図39-3)を連続的に配したその装飾は、極めて繊細に描かれている。高度に抽象化されたその意匠は、エジプトにおける土器製作技術の一つの到達点を物

語るにふさわしい。

これらの彩文土器は、いわゆるマルカタ・ブルーやアマルナ・ブルーとして知られる、第18王朝後半に生産された青色彩文土器に比べて、より繊細な印象を見る者に与えており、系譜を異にする可能性が高い。当遺跡で出土した青色彩文土器については、ギザのスフィンクス周辺で見つかった一連の土器群の中に、その類例を求めることができる[Hope 1997:265, 267]（ホープは、これらの土器群を持って、青色彩文土器がメンフィス地区においてその生産を開始した根拠としている[Hope 1997:261]。当遺跡出土の土器群は、この仮説を補強する、あるいはより確実な資料と位置づけることが可能で、その重要性は大きいと言える。）。但し、当遺跡の出土例は、ギザ出土の彩文土器とは器形が異なっている。すなわち、ギザ出土のものは、より絞られた頸部と張り出した胴部を有する一方で、当遺跡出土ものは、全体に細身を呈し、頸部から胴部へと緩やかに連続する器形を有する点に特徴がある。

いずれにせよ、ギザ出土の彩文土器と同レベルの土器群が新たに検出されたことから、より大規模な陶工集団の存在を想定することが可能であろう。さらに、テーベ出土の同時代資料[Guidotti 1981:Tav. III]を考慮すると、同時のメンフィス地区の陶工が持っていた技術がいかに洗練されたものであったが浮き彫りにされよう。当遺跡出土の青色彩文土器は、これまで不明な点が多かった、メンフィス地区における第18王朝中期の生産活動の一端を垣間みる有益な情報と見做すことができるのである。

但し、これらの彩文土器の他にも、より写実的なモチーフを描いたものや、いわゆるマルカタ・ブルーに近い装飾を施された土器群も同時に出土している。資料整理を進め、青色彩文土器の総体を探る作業が不可欠であろう。

4-2-5. まとめ

西側斜面出土の土器群は、ナイル・シルトによるものでは、皿形や鉢形、壺形の器形が目立つ。

一方マール・クレイの土器群は、ナイル・シルトに比べ、器形のヴァリエーションに乏しい。すなわち、極薄の小型の皿形土器及び細身の大型壺が大半を占める。これらの土器に関しては、ほぼ同様の器形で、精緻な彩文を施された例が認められており、そうした彩文土器と同様の目的で持ち込まれた可能性も指摘されよう。

いずれにせよ、本稿における検討は、全体像の一端を明らかにした、いわば予察にすぎない。西側斜面出土の土器群は、後世からの混入も少なく、丘陵頂部で営まれたある一時期の人間活動を探る上で、重要な情報を含む資料であると評価することができる。それらの集成作業は、今後の重要な課題のうちの一つとなるであろう。

5. 土器（末期王朝時代）（図40～41）

5-1. 第6/7次調査出土の末期王朝時代の土器の概要

第6/7次調査出土の末期王朝時代の土器の概要については、昨年の作業報告においてまとめたが、今年度の整理作業によって、新たに資料化された土器が加わったため、それらも踏まえた、当遺跡出土の末期王朝時代の土器の概要について改めて述べたい。

これまでの検討から、いくつかの土器は大体、第26王朝から第30王朝の間、暦年代で言えば、B. C. 7世紀から B. C. 4世紀前半の間に年代づけられ、第3中間期まで遡るものやプトレマイオス朝時代まで下るものはなさ

そうであることが推測されていたが、新たに資料化された土器の中には、プトレマイオス朝時代まで下るらしいものも見られた。

新たに資料化された土器の類例が見つかった遺跡はやはり、メンフィスとサッカーラその他、東部デルタ地域のタニスやテル・エル＝マスケータなどで、上エジプトの遺跡からは類例を見つけられなかった。こうした傾向はこれまでと同じである。類例が見つからなかった土器については、他に年代決定の決め手がないため、何とも言えず、これらの土器が見つかった層に末期王朝以外の他の時代の遺物が混入している可能性も全く否定はできない。しかし、その可能性を検証する資料も持ち合わせていないので、とりあえず現段階では、図に載せた土器は全て同じ末期王朝時代のものと仮定しておくことにしたい。そして、それを前提にして、次にこれらの土器の用途の検討から、当時の丘陵頂部での人間の活動についても考えてみたい。

5-2. 第6/7次調査出土の末期王朝時代の土器の用途

図に載せた土器は、大きく食卓器、調理器、貯蔵器、特殊器に分類できる。食卓器というのは、図40、図41のそれぞれの上段の方に載せてあるような碗、鉢、皿、水差しなどである。碗には、平底で器壁がやや外反するもの（図41-1）と、平底で器壁がほぼ垂直に立ち上がるもの（図41-2, 3）とがある。図41-2のような器高の低いものは、資料化したものの他にも多数存在するが、図41-3のような器高の高いものは他に見当たらなかった。鉢には、図41-5のように丸底で単純な器形のもの、図40-8、図41-7, 8のように器壁が途中で屈折する綾付鉢（Carinated bowl）、図41-9のように断面がS字形を呈するもの、図40-2, 6のように口縁が外反するもの、図40-1のように口縁が外側へ折り返されるものなどがある。図41-6のような大型の浅い皿も末期王朝時代によく見られるようである。図40-3の水差しは、細長い頸部が垂直に伸び、口縁は外側に折り返された上に線が刻まれている。胴部は卵形になると思われる。

調理器、あるいは貯蔵器には、壺、甕などがある。これらには、図40-4, 7, 9や図41-11, 13, 15, 16のように、頸部を持たず、全体では卵形になりそうなものや、図41-12, 14のように、全体では円筒形になりそうなもの、図40-5、図41-17のように、明瞭な頸部を持ち、全体が球形に近いものなどがある。これらの土器のいくつかは、器外面の胴部が煤けて黒くなっていることから、煮炊きに使用された調理器であると判断できる。明らかに貯蔵器としては、図41-18のようなアンフォラがある。

特殊器には、トーチがある。図40-10はほぼ完形の長脚自立型トーチで、昨年報告した、同じくほぼ完形の長脚自立型トーチと比べると、口径はほとんど同じであるが、脚部の長さが5cm程短い。内面が煤で真っ黒になっていて、灯火器として使用されたことが窺える。このようなトーチは末期王朝時代に特有のものである。この他に、おそらく特殊器に分類されるものとしては、図41-10の小型壺がある。把手を持つこの小型壺は、胴部に2つの穿孔が見られ、香炉として使われた可能性がある。メンフィスに類例が見られ、B. C. 300年頃に年代付けられているため、この年代が正しいならば、プトレマイオス朝時代に当たることになる。

今年に資料化した土器で目立つのは、図40-6, 7や図41-14, 16のように、口縁に押圧装飾を施したのものや図40-8のように口縁に爪形文を施されたものがあることである。このように口縁に押圧装飾を施したものは、昨年に報告した中にも数点含まれており、これまでも散見されているが、このような口縁装飾を持つ末期王朝時代の土器の類例は今のところ全く見つかっていない。このような口縁装飾が多く見られるのは、ローマ・ビザンツ時代であるため、これらがローマ・ビザンツ時代のものである可能性も捨て切れない。

5-3. 末期王朝時代における丘陵頂部での人間活動

末期王朝時代の土器が多数出土しているにもかかわらず、それらが集中的に出土した場所の周辺で同時代の遺構が見つかっていないことが当時の人間活動を推測する上で障害となっているが、第8次調査中に0D、9D、9E グリッドにおいて、さらに広く深く発掘を進めたにもかかわらず、末期王朝時代に年代づけられる遺構は検出されなかった。従って、末期王朝時代当時の活動の舞台は泥煉瓦遺構のある小高い方にあった可能性が高いが、その小高い方も第8次調査中にほぼ完掘して、泥煉瓦遺構自体がほとんど地山まで削られていることが明らかになったため、今後、末期王朝時代の遺構が検出される可能性は極めて低く、遺構が見つからない以上、出土遺物の検討が全てにならざるを得ない。土器に関しては、周囲に何も無い砂漠の中の小高い丘の上という厳しい環境での生活に必要な食卓器や調理器、貯蔵器、灯火器などが一通りそろっているように見受けられ、あの場所で、ある程度定着した生活が営まれていたことが推測できる。あの場所にどんな人が何人くらいいて、何を生業としていたのかといった細かいことまでは判然としないが、土器以外の遺物も含めて、さらに検討を続けていく必要がある。

6. その他遺物

6-1. ファイアンス製タイル

これまでと同様に、第8次調査でも多数のファイアンス製タイルが出土した(計530点)。これまでと同様に、羽形(図42-1, 2)、丸形(図42-3)、三角形(図42-4)、菱形(図42-5)、方形(図42-6~8)といった様々な形状のタイルが出土した。さらに意図的な調整が観察されるタイル(図42-12, 13)や象眼の痕跡と判断される彫り込みを有するタイル(図42-14, 15)も出土した。これまでに見られなかったタイプとしては、約8 cm × 約16cm(残存部)を測る大型のタイルが関心を惹く。

第8次調査では、日乾煉瓦建造物の東側に残された溝の発掘を部分的に行なったが、その覆土からも、いくつかのファイアンス製タイルが検出されている。覆土よりの出土遺物は、主に土器と彩画片、タイルで構成されており、比較的に純粋な新王国時代の堆積と判断された。従って、同堆積より出土したファイアンス製タイルの総体は、新王国時代のある一時期におけるファイアンス製タイルによる装飾の在り方を探る上で極めて重要な手がかりになることが期待された。以上に基づき、特にその形状の組み合わせに着目して、観察を試みた。

日乾煉瓦建造物東側溝の発掘により出土したファイアンス製タイルは合計122点であった。このうち、半数近くが完形であり、この堆積が良好な資料を提供してくれていることを裏付けている。

溝より出土したタイルは次頁の通りである。

羽形	丸形	三角形	菱形	方形	方形 (大型)	特殊	象眼	不明	計
6点	6点	13点	9点	36点	13点	10点	8点	21点	122点

2点を除いては、ほとんどが厚さ5 mm以下(主に2~3 mm)の薄手のタイプであり、主にこうした薄手のタイルを用いて装飾が成されていたことが判明した。また、象眼の痕跡を有するタイルについては、厚さ6 mmほどを測るものが多く、象眼には厚いタイルを用いていた可能性が指摘される。

特に多く出土した形状は、方形のタイルであった。また、方形のタイルについては、細い小型のもの（例えば図42-6, 7, 8）と、より大型のもの（例えば図42-9, 11）が組み合わせられて用いられていた。この組み合わせより推測されるのは、小型と大型のタイルを交互に配する装飾である。戸口周りの装飾などを推測するのが適当かと思われる。この仮定が正しければ、日乾煉瓦建造物は、その東側面になんらかの入り口施設を伴っていた可能性も指摘されよう。あるいは何らかの偽扉や壁龕の類が設置されていたとも考えられる。後者については、トトメス4世の一連のステラとの関連も想起され、興味深い。

他の形状、すなわち、羽形、丸形、菱形などのタイルなども出土しているが、特定の装飾配列を見いだすことは難しい。出土点数が少ないこともこのことに影響していよう。ただし、これら3種類の形状のタイルがほぼ同数出土している点は、今後装飾の在り方を復原する上で、重要であろう。

6-2. ファイアンス容器

ファイアンス容器片は47点出土している。5点の口縁片以外は小片で、接合作業が進んでいないため器形を把握できる断片は認められていない。小片の中には焼成前に黒の顔料で装飾帯を描いたと思われる容器片が1点あるが、この装飾帯が容器の胴部にあたる場合、7次に出土した第26王朝期のフラスコ形容器New years's Flaskに相当する可能性も考えられる。容器片の出土点数が、6、7次に比べて減少したのは、王朝末期の遺物が集中して出土した日乾煉瓦遺構北東部から今期の発掘区が南、東へ移動したためと思われる。

6-3. アミュレット (図43-1~10)

アミュレットは断片を含めて37点出土している。ファイアンス容器片と同様に出土点数が大幅に減少した背景には、アミュレットが集中して出土した日乾煉瓦遺構北東部からその周辺部へと発掘区が移行したことが考えられる。接合作業が進んでいないため、モチーフが不明な遺物も多いが（14点）、7次出土アミュレットと同じく、様々なバリエーションをもったウジャトの眼（図43-1~4、計15点）、トキを象ったトト神（図43-10、計1点）、ホルスを抱くイシス女神（図43-6~8、計3点）が見られた他、白冠（図43-5）、タウェレット（トウェリス）女神（図43-9）、パピルスの杖を象ったウアジが1点ずつ出土している。そして1点のみ裏面に銘文あるいは装飾が刻まれたファイアンス製スカラベ片が出土しているが、残存状況が悪いため詳しくは不明である。

ウジャトの眼は出土点数こそ減少したものの、7次出土のウジャトの眼を対象に行った形状分類で認められたタイプの多くが含まれていた。その例として、第22王朝から25王朝に頻出するタイプ（図43-2）や、第25王朝にのみ見られるタイプ（図43-3）が挙げられる。これら様々なタイプのウジャトの眼は、遺跡周辺の末期王朝時代の墓地からその類例の多くが出土しているが[Giddy 1992: pls. 47-52]、各タイプの違いというものが一体何を反映したものであるかについては今後の検討課題となっている。

出土アミュレットが王朝末期のアミュレットの特徴を備えており、とりわけ近隣遺跡であるアニマル・ネクロポリスの神殿域、およびその周辺の末期王朝時代の墓出土遺物と類似しているという点については、7次その他遺物の報告で既に述べた通りである。その後、アブ・シール域ではそれ以外に古王国時代第5王朝のネウセルラー王の葬祭殿より出土した王朝末期の墓から、8次調査出土アミュレットをおよび過去の調査に出土したアミュレットと共通する形状の遺物が多く報告されていることも判明している[Schafer 1908: 116, 129]。

6-4. ビーズ

ビーズは38点出土している。全てファイアンス製で円形と管形の小型ビーズが大半を占め、出土地点の傾向はとくに認められない。

6-5. ガラス製品

ガラス製品は2点出土している。1点は胴部片と思われるが、いずれも小片のため詳細は不明である。青あるいは緑の色調で、7次出土ガラス製品と同じくグレコ・ローマ時代において主流となった吹きガラスの技法によるものと思われる。

6-6. コイン・ブロンズ製品 (図43-11~16, 図44-1~4)

コイン・ブロンズ製品は、コインが2点、ブロンズ製品が81点で、合計83点が出土している。コインは、2点とも錆落としが済んでいないため内容が不明である。

ブロンズ製品の中で形状が把握できた遺物は18点であり、その内訳はシチュラの断片(13点)、神像(2点)、矢尻(1点)、道具類(2点)となっている。それ以外のブロンズ製品は小片であると同時に、錆落とし作業も行われていないため内容が不明である。形状が把握できる8次出土ブロンズ製品中、シチュラ断片、神像、矢尻は少なくとも王朝末期に年代付けられ、これらは全て神殿などへの奉納品あるいは祭具としての機能を持ちあわせていると思われる。これらは7次出土ブロンズ製品と並んで丘陵頂部における王朝末期の活動を考える上で極めて重要な遺物として捉えることができる。

出土点数が13点と最も多かったシチュラ断片は、質量ともに7次出土分を凌いでおり、なおかつ王朝末期に典型的なシチュラのモチーフを有しているといえよう。アブ・シール出土シチュラは、口縁片が2点、胴部片が6点、底部片が5点で、錆落とし作業により断片表面に描かれているが、その中でモチーフが判別できたのは(図43-11~16)の5点である。胴部片の図43-11~13と底部片の図43-15には、様々な神がいくつかの段(レジスター)に分割された空間の中に描かれており、これらの類例としてまず挙げられるのはサッカーラのアニマル・ネクロポリス付属神殿出土シチュラである[Green 1987:66-115]。

300点近く出土しているアニマル・ネクロポリス出土シチュラは、紀元前7世紀半ばの第26王朝時代から紀元前1世紀のプトレマイオス朝の間に年代付けられるものばかりで、報告によると、シチュラの表面には天空、地上、水の世界における再生神話が表現され、具体的に次の3つの場面がシチュラ表面に主に描かれるという[Green 1987: 66]。

- ①上段：ラー神の船と(あるいは)ラー神を運ぶ祠がジャッカルによって引かれ、夜明けが暗闇の力に勝利し、太陽神がヒヒによって挨拶を受ける場面。
- ②中段：アメン神の前で供物を捧げる奉納者の場面。アメン神の後ろにはイシス女神、ネフティス女神をはじめ、メンフィスの地域神が行列をなす形で描かれる場合がある。奉納者は神々に供物を捧げることによって、神による加護を受けようとしている。
- ③下段：ホルス神がロータスの花から現れた沼沢地から誕生し、その横に乳牛と有翼スカラベが描かれる場面。これにより日常的な再生復活の様子を表現している。

これ以外に、下段にはしばしばジャッカルとハヤブサの頭部をもつ神々が跪き、腕を挙げて祈る場面の他、中段と同じく神々の行列の場面や、ホルス神の両側に有翼の女神が翼を広げてホルス神を守護する場面が描かれる場合もある。シチュラ底部は、一般にロータスの花卉文様が描かれ、先端が細くなるように形作られている。上記のようなアニマル・ネクロポリス出土シチュラとアブ・シール出土シチュラを比較した結果、いくつかの点が明らかとなった。まず、図43-11のシチュラ胴部片には、アニマル・ネクロポリス出土シチュラに認められた神々の行列を描いたと思われる段の一部（日輪を頂く神の頭部）が、最下部に認められる。しかしながら、この断片はその段の上部にさらに3段存在し、最上段には星と思われる文様が、そして中断には神か人物の座像が、下段には日輪を頂く女神が供物卓をはさんで向かい合っている場面が描かれている。この場面構成はアニマル・ネクロポリス出土シチュラには認められず、段組みにおいても最低4段存在することから、一般に3段構成のアニマル・ネクロポリス出土シチュラに比べてやや大型のシチュラに属するものと推測できる。図43-12のシチュラ胴部片には、2段からなる場面が認められ、上段には2人の有翼女神の間に女神（あるいは女性）が1人立っている場面、そして下段には右に性器を誇張したアメン神、左に日輪を頂く神（詳細不明）が描かれ、行列の場면을構成している。おそらくアメン神の前には供物と奉納者が本来描かれていたと思われる。図43-13のシチュラにも、2段からなる場面が認められ、上段には太陽神が乗った船が、下段には2人の日輪を頂く神（詳細不明）が描かれている。図43-14のシチュラ口縁片には特定の場面描写は無く、刻線のみが認められる。図43-15のシチュラ底部片には、上述のジャッカルとハヤブサの頭部をもつ神が祈る場面が認められる。これらの4つの断片中、図43-12, 13, 15はアニマル・ネクロポリス出土のシチュラと場面構成が極めて類似しているといえるが、図43-11については神々の行列場面はアニマル・ネクロポリス出土シチュラと共通した場面であるものの、その他の段に見られる場面は類例が現在のところ見つかっていない。

図43-12, 13, 15のシチュラの年代については、アニマル・ネクロポリス出土シチュラの中で最も類似している断片の年代から[Green 1987: 69, no. 165, 74, no. 173]、紀元前6世紀の第26王朝（末期王朝）として推定可能であろう。残る図43-11についても、先の図43-12と同じ場所から出土していることをふまえると、同じ年代に推定できる可能性が高い。アブ・シール出土シチュラは、丘陵頂部で検出されている日乾煉瓦遺構の北東部に全て分布している。

出土した2体の神像は、イムヘテブ像（図44-1）とオシリス神像（図44-3）である。これらの神像は、シチュラ断片とは違って王朝末期の遺物がまとまって出土したとは遠く離れた2G グリッド（表層）という場所から出土している。剃髪に胸飾り、膝丈あるいは長い丈のキルト（腰布）、膝元にパピルス紙といった特徴をもつイムヘテブ像（図44-1）は、末期王朝時代からプトレマイオス朝にかけて奉納品の一つとして製作されたものと考えられており[Ben-Tor 1997: 90]、アブ・シール出土像もそれに該当すると思われる。元来この人物の信仰は、末期王朝時代のメンフィス地域において始まり、その後プトレマイオス朝においてギリシア神アスクレピオスと同一視され、サッカーラを信仰の中心地として多くの巡礼者を集めるようになった。オシリス神像（図44-3）については、7次出土のオシリス神像とおおよそ同サイズであり、風貌も極めてよく似ている。このオシリス神像も報告こそされていないが、世界各国の博物館ではサッカーラのアニマル・ネクロポリス出土遺物として多数展示されている。

既に述べたように、シチュラ断片、神像、矢尻は少なくとも王朝末期に年代付けられ、7次出土ブロンズ製品と同様に神殿などへの奉納品あるいは祭具としての機能を持ちあわせていると思われる。こうした状況をふ

まえると、アニマル・ネクロポリス付属神殿ほどの規模には至らないものの、それと類似した施設が王朝末期において丘陵頂部に存在したと考えることもできるだろう。当時近隣に存在したアニマル・ネクロポリスの諸施設とともに、丘陵頂部の施設は北サッカーラにおける巡礼ルートの一部に組み込まれていた可能性も考えられるのではないだろうか。

残る2点のブロンズ製品中、図44-2については、現在類例を探している最中である。完形であるものの装飾は一切認められない。図44-4のブロンズ製品は、類例から地鎮具の一つとして見られる鑿のミニチュアと思われる。いずれも年代については不明である。

6-7. 骨片・石製品・アラバスター製品 (図45-1～3)

出土総点数は80点であるが、その内訳は動物骨と思われる骨片が一括遺物を含めて34点、アラバスター片を除く石製品が34点、アラバスター片が容器片2点を含めて12点となっている。

中でも石製品に含まれる遺物は多彩で、石製ニッチェ (偽扉、図45-1)、男性小像 (図45-2)、石製枕 (図45-3)、石製容器片、ゲーム用のコマ、供物卓などがその中に含まれる。いずれも石灰岩製である。

類例から年代が推定できる遺物の一つに、図45-2の男性小像が挙げられる。これは一般に'Phallic figurine'や'Naucratic figure'として呼ばれるもので、その特徴として男性が膝を前に出し、股間の性器を誇張する表現が見られる他、性器の上に置かれた楽器もしくはドラムと呼ばれる円盤形の物体を男性が両手で抱える姿で描かれ、全面が赤く彩色されるという特徴を合わせ持っている。この種の像の出土例として最もよく知られているのがサッカーラのテティ王のピラミッド東部にあったとされる「ベスの部屋 (Bes chamber)」で、そこはプトレマイオス朝期の巡礼者が性欲増進などの目的で立ち寄った場所とされている (Derchain 1981)。その部屋からはアブ・シール出土の男性小像と同種の像が数十個の単位で出土しており、それらの像が奉納品として機能していた可能性も指摘されている [Quibell 1907:12-14, pl. 31, no. 3; Derchain 1981]。アブ・シール出土男性像は、「ベスの部屋」で出土した像、およびアニマル・ネクロポリス内のアヌビエイオンにある居住地より出土した30体近くの像 [Martin 1981: pls. 25, 28 特に pl. 25, no. 1210と pl. 28, no. 1211]と大きさや形状、赤の彩色が認められる点でよく似ている。したがって、男性像は王朝末期の中でもプトレマイオス朝に年代を推定することができるだろう。

6-8. 木製品 (図45-4)

木製品は27点出土している。その中で形状が明瞭に把握できる遺物は4点で、クランプなどの建材と思われる遺物が2点含まれる。それ以外は、一括遺物を含めて全て木片で構成されている。

建材以外の2点の遺物は、いずれも通称西側斜面と呼ばれる丘陵西側の斜面 (0I) から検出された様々な石組みからなる遺構内より出土した。この遺構自体の年代については議論が分かれているところであり、出土した木製品の年代も明らかではない。しかしながら類例調査の結果から、これらの2点の木製品が本来は1個の木製の鋏、すなわち柄の部分と鋏かきの部分 (図45-4) であることが判明した。年代はさておき、これは木製品が出土した遺構の性格を考える上で一つの手がかりとなると思われる。

6-9. 泥レンガ（日乾煉瓦）および泥モルタル

泥レンガ（日乾煉瓦）および泥モルタルは31点出土しており、内訳は泥レンガが14点、泥モルタルが17点である。泥レンガはスタンプ付きのみを取り上げた。その大半はスタンプの枠部分のみであるが、3点は王名入りのスタンプ付きレンガである（別稿で扱う）。泥モルタルは、基本的に彩色面を有するもののみを取り上げた（以下「彩色泥モルタル」と呼ぶ）。7次出土彩色泥モルタルと同じくモチーフが明瞭に判るものは認められなかった。

6-10. 土製品

土製品は3点出土している。その中の1点はテラコッタ（土製像）（AK08-O118）で、出土時の保存状態が相当悪く、各断片を別々に取り上げたが、それら断片の観察から出土テラコッタが人物像、ベスの顔が描かれた板状の部分などから構成されていること、および元来は青、赤色で彩色されていたことが判明した。類例として挙げられるのはアニマル・ネクロポリス付属神殿中庭より出土したテラコッタで、紀元前3世紀から1世紀にかけて製作されたプトレマイオス朝に推定されている遺物'Phallosphorous figure'である[Martin 1981:29, no. 306, pl. 23]。このテラコッタは、ハルポクラテスが自らの誇張された性器を2人の女性、および2人のベス神にもたせているという場面を描いたもので、アブ・シール出土断片とは人物像の顔の部分、ベスの描写、なおかつ同様の彩色があるという点で共通している。しかしながら、アブ・シール断片には少なくとも2人の人物の頭部が認められることから、上記の類例にあたるテラコッタが複数個存在する可能性、もしくは別の場面が題材となっている可能性を想定する必要もあるだろう。年代については、上記類例と同じくプトレマイオス朝と推定しても現在のところ差し支えないと思われる。

6-11. まとめ

ファイアンス製タイルについては、ここ2年間の調査によって、多数の資料を得ることができた。日乾煉瓦遺構の東側の溝の中から、タイルがまとまって出土したことにより、この建物が、少なくともある一時期において、美しい青色のタイルで飾られていたことは、もはや疑いの余地はないであろう。これらのタイルは、彩画片とともに建物を飾っていたのであり、このことから、同日乾煉瓦遺構が王の活動の場にふさわしく飾りたてられていたことが判明した点は、丘陵頂部における新王国時代の歴史を考える上で貴重な手がかりを提供したと言える。

ただし、残念ながら、これまでのところタイルによる装飾形態を確定する資料を欠いている状況にある。一方で、同様のタイルの出土例は極めて限定されており、同時代資料からの想定復原は困難な状況にある。この問題を解決する上でも、今後の発掘調査の進展が待たれるとともに、これまでの資料を再度見直す必要がある。

また、王朝末期の活動を示す遺物も7次に引き続き目立って出土している。王朝末期の遺物としては、ファイアンス容器、アミュレット、ブロンズ製品、男性小像、テラコッタなどが挙げられる。全体的に王朝末期に年代付けられる遺物の出土点数は7次に比べて減少したが、王朝末期という広い年代の中で末期王朝時代（第26王朝）とプトレマイオス朝とに区別可能な良質な資料を得ることができた。ファイアンス容器の中では'New Year's Flask'と呼ばれるフラスコ形容器がそれに相当し、ブロンズ製品ではとりわけシチュラが今回末期

王朝時代に推定することができた。プトレマイオス朝に推定された遺物としては男性小像およびテラコッタが挙げられる。

このように8次出土その他遺物の整理作業の過程で、末期王朝時代（第26王朝）、プトレマイオス朝に推定される遺物を新たに検出できたことが今期の成果の一つとして挙げられ、7次出土遺物の整理作業時点よりも丘陵頂部における活動の一端がいつそう明確になってきたと思われる。シチュラやイムヘテプ像、男性小像といった奉納品としての性格を有する遺物の存在は、王朝末期において北サッカーラを中心に行われていた巡礼と丘陵頂部における当時の活動との関連性を示唆しているように思われる。しかしながら、丘陵頂部にアニマル・ネクロポリスの諸神殿に匹敵する施設があったと考えることは、関連遺物の出土点数が圧倒的に少ないため困難であろう。現時点では、アニマル・ネクロポリスの諸神殿に類似した施設が王朝末期に丘陵頂部に存在した可能性を指摘するにとどめておくが、丘陵頂部の施設が北サッカーラにおける巡礼ルートの一部に組み込まれていたことも可能性の一つとして提示しておきたい。

4. 旧石器に関する調査

王朝時代の葬祭殿の乗るアブ・シール台地は、調査の当初から、旧石器時代の遺跡であることが知られていた。全長400メートルの台丘上に、旧石器が濃密に分布する地点が A, B, C, D, D'の5地点知られている。それらは、その時代にその場所を占めて、生活した人々の諸作業の痕跡を留めている。このうち王朝時代のラムセス三世の皇子、カエムワセトの葬祭殿が建立された A 地点は、中期旧石器時代の石器製作場として、多数の石器や未製品、石屑が散乱しており、その場所が広く製作場として活用されたことを示している（図46）。しかし、原材料となるべき石材がどこから由来したのかについては、遺跡の表面調査からは何の証拠も得られなかった。台丘下のワジ面から手ごろな円礫を拾い集めて台丘上に搬入し、そこで石器の剥離作業をしたとの可能性が考えられた。ところが、王朝時代の建築物が調査されるにしたがい、地表面下の様相が判明するにつれて、旧石器時代の石材の採掘坑と考えられる遺構が複数出土した。土坑は、直径数十センチメートルほどの円形を呈し、現地表面から数十センチメートルの深さに穿たれている（図47）。土坑内部に粒度の細かく一定した白い砂層が充填する。白い砂層は他に王朝時代の遺構には関係せずに、遺構下の旧石器時代の土坑にのみ充填しており、相当に古い時代の堆積砂層であることを思わせる。砂層には他に混じり物がなく、時々壁より崩落した円礫が底部近くから検出される程度である。土坑の中位から底位にかけては、断面に自然礫層が顔を覗かせており、旧石器時代人たちは、その礫層から手ごろな円礫を抽出して、石器製作の材料としたと考えられる。実際、台丘の地表下には、第4紀に生成した礫層が堆積しており、深い所で1メートルも掘れば礫層に遭遇することを旧石器時代人たちは知っていたらしく、A 地点だけで10個以上の採掘土坑が存在すると考えられる。調査したのは、数例に過ぎないが、規模は小型の土坑である。深さは土坑の位置する微地形に左右され、浅いところもあれば、深い箇所もある。そのうち、ある土坑の底部からは、中期旧石器時代の特徴であるルヴァロワ石核が出土した。石核の表皮はパティナに覆われることなく、原礫の破断面の色調そのままを留め、遺棄後、比較的早めに砂層中に埋没したものと考えられる。通常、地表面に残された場合には、長期の風雨、日光に晒されたために、パティナを被り色調がチョコレート色に変色するのが一般である。短期間のうちに採掘土坑が埋もれたことを示している。

A 地点以外でも、多数の円礫が地表面に散布することが知られている。また、石器の分布する範囲内に重複して未加工の円礫が散見されるのも、そのような人為的な石材採掘の痕跡であるとするならば理解しやすい。

現在までにナイル河流域で発見されている旧石器時代の石材採掘土坑は、後期旧石器時代のナズレット・カーター遺跡や、中期旧石器時代終末期のナズレット・サファーハ遺跡にみただけである。それらの遺跡では、円形土坑に加えて、溝を掘削してギャラリー様を呈するものとか、トンネル坑を掘り進むような進化した形態が認められる。しかし、アブ・シールでは、単に円形の土坑を穿つだけのものであり、上記遺跡例とは様相が異なる。年代がより古い事も勘案して、そのように進化する以前の様相を留めていると考えたい。今後の調査によって、明らかにされることを期待する。

5 . Summary

A preliminary Report of the Eighth Season of Excavation at North Saqqara by Waseda University (July 31st - September 9th, 1999)

1. Introduction

Waseda University's excavation on the top of the hill situated far into the desert between Saqqara and Abusir has been carried out since December 1991. During the preceding seasons, our mission has found two main structures as follows:

- a) Stone structure ascribed to Prince Khaemwaset, measuring approximately 25 m (north-south) by 30 m (east-west).
- b) Mud-brick building, dimension of which has been estimated at 25 m (North-south) by 22 m (east-west). Archaeological data suggests that this monument could be dated to the middle of the 18th Dynasty.

While the monument of Khaemwaset had been entirely uncovered, the mud-brick building had been only partially excavated by the last season. We extended the excavation area northward and westward in order to reveal the latter building, and we worked mainly on the area around it.

We also continued to excavate the area north of monument of Khaemwaset, in order to confirm the original ground surface of the hill.

2. Excavation

2-1. Limestone pavement

One of the purposes of this season was to confirm all the details of the limestone pavement, which had been recognized only partially. During this season, full view of the pavement was made clear. This structure measures 25 m (north-south), leading to the rise of natural ground. The

structure itself was laid on the compact sand layer that was drifted by wind. Though its exact date and nature still remain unclear, scratches left on its surface suggest that this pavement was used for carrying stones of Khaemwaset's monument out of the site. Some of the objects which are dated to the Late Period might be ascribed to this structure.

2-2. Mud-brick building

In this season we extended the excavation area northward, for the purpose of investigating the north side of the mud-brick building. Since this area was thoroughly disturbed, we could not find any structural remains. However, a limestone base of column, diameter of which is 70cm, was uncovered. The base of column was not found *in situ*, but this finding indicates that the mud-brick building used to have some columns.

A mud-brick slope (or ramp) was also unearthed (Fig.3). Though its axis is parallel to the mud-brick building, this slope was laid on a collapsed layer of mud-brick building, i.e. this slope was constructed after the mud-brick building had collapsed. The nature of this slope remains unclear, but it seems to have been used as a route for carrying stones out of the site.

During the cleaning of drifted sands on which the limestone pavement were laid, we also found the deep 'moat' beside the mud-brick building. This moat measures 2 m wide and 1.5 m deep, and was clearly dug parallel to the mud-brick building. At the bottom of the moat the bedrock has been cut with great effort. It is uncertain whether this moat surrounded all sides of the building or not, because limited area was excavated by the end of this season's work. The next season's work will give us all the details of the moat, which will be crucial for determining the character of the mud-brick building.

2-3. Original landform

The excavation area was also extended northward for the purpose of acquiring knowledge of the original landform. After the thick drifted or disturbed layers were removed, an undulating landform appeared. The mud-brick building was constructed on the top of the steep natural ground, and moreover an edge of this building was artificially cut to rise building itself higher than surroundings, as if it was intended to be built on two-stepped terrace.

It is assumed that this building was very impressive when it stood up on the top of the hill.

The presence of the mud-brick building might have inspired the construction of Khaemwaset's monument. More investigations in view of the original landform will offer a lot of useful suggestions about the history of the utilization of this hill in the future.

2-4. West side of the limestone outcrop

During the 6th season, a huge number of objects were uncovered from the west cliff of the hill. These objects seem to have been thrown down from the mud-brick building and therefore are clearly related to the mud-brick building. We continued the clearance of the west side of the hill in order to obtain more information concerning the mud-brick building.

No structural remains were uncovered in this area. However, suggestive data concerning the mud-brick building were obtained: a lot of faience tiles and fragments of painted plaster have been picked up. Though their original position is unclear, it is evident that walls of the mud-brick building were decorated with these materials. It can be safely said that these kinds of elaborate decoration are appropriate to King's monument.

2-5. Summary of this season's excavation

As a result of this season's excavation, major architectural remains on the top of the hill has investigated on the whole. The most notable findings are as follows: firstly, new data concerning with mud-brick building was added, secondly, some information about original landform was obtained. This season's work brought us more advanced data about the circumstances of the hill during the New Kingdom.

The next major stage of our investigation is to reconstruct buildings, taking an original view of the site into consideration.

3. Investigation outside of the site

Besides the field work mentioned above, we carried out comparative studies of other monuments built in Saqqara. During this research, we found some limestone blocks west of the causeway of Unas. A detailed examination suggested that these blocks could have been building materials of Khaemwaset's monument.

The finding place of these blocks is corresponded to the edge of the monastery of Jeremias.

It came to light that building materials of the monument of Khaemwaset were reused in the area beyond the Step Pyramid. J.E.Quibell has already reported that a lot of materials from New Kingdom monuments were reused in the monastery of Jeremias, and our site is also not an exception.

These blocks were recorded for the further examination.

4. Finds

Recorded objects found in this season amounted to more than 2400 in number. Because these objects are now under study, a short summary of finds will be given below.

4-1. Stela

During the excavation, a finely curved stela depicting Tuthmosis IV was found. Tuthmosis IV is offering burning incense and pouring a libation to the God Nefertem. Similar stelae mentioning Tuthmosis IV have been found in our site. These stelae can be compared with the collection of similar stelae from Giza reported by Selim Hassan. Thus far, our findings would be the second group in Memphite area.

4-2. Stamped brick and mud sealing

Four stamped bricks and two mud sealings on which the name of Tuthmosis IV have been excavated. These objects could be strong evidence that Tuthmosis IV was active on the top of the hill. Besides, a series of stelae and elaborate blue-painted pottery sherds are also supporting evidences. Though Tuthmosis IV is famous for the so-called 'dream stela' at Giza, he also left his footprint in North Saqqara area.

4-3. Painted plaster

A large number of fragments of painted plaster were uncovered, especially from the west side of the hill and from the soil that filled up the 'moat'. Though each fragment is small, some motifs can be identified: zigzags, scrolls, checkers, plants and animals. It is of great interest that traces of re-painting are recognized. We expect that detailed examination will bring a clue to

discriminating some stages of constructions during the New Kingdom.

4-4. Faience tiles(Fig.8)

More than 500 fragments of faience tiles were excavated during this season. On the basis of its distribution(they are concentrated around the mud-brick building), we may consider them as decorative materials for the mud-brick building. Though tiles of various size and shape were uncovered, the most remarkable type of this season is a medium-thick type, thickness of which measures about 5mm. They were mainly uncovered from the fill of the 'moat'.

4-5. Blue-painted pottery

A huge number of pottery sherds have been picked up during the excavation. Some of them are 'blue-painted' pottery, made of Marl clay or Nile silt.

Marl clay pottery is decorated with geometrical or floral patterns. The former is composed of various motifs, such as zigzags, hieroglyphs, bead patterns and small petals. The latter floral pattern is larger and more realistic.

On the other hand, decorations found on the surface of Nile silt pottery are chiefly series of overlapping or tapering petals. These are roughly painted on the whole, contrasting with Marl clay decoration.

Blue-painted vessels above-mentioned were unearthed from the context which can be dated middle 18th Dynasty. Elaborate blue-painted ware began to appear from this period on, and so we may be able to consider that there were two or three types of blue-painted decoration at its beginning.

<参考文献>

- Allen, S.J.
1982 'Chapter 3: The Pottery', in K.L.Wilson, ed., *Cities of the Delta, Part II: Mendes*, Malibu.
- Arnold, Di.
1992 *Die Tempel Ägyptens*, Zürich.
- Arnold, Do. and Bourriau, J.
1993 *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein.
- Aston, D.
1991 'Pottery' in M.J.Raven ed., *The Tomb of Iurudéf: A Memphite Official in the Reign of Ramesses II*, London.
1997 'The Pottery' in G.T.Martin ed., *The Tomb of Tia and Tia: A Royal Monument of the Ramesside Period in the Memphite Necropolis*, London.
- Bailey, D.M.
1988 *A Catalogue of the Lamps in the British Museum III: Roman Provincial Lamps*, London.
- Baines, J.
1985 *Fecundity Figures*, Warminster.
- Ben-Tor, D.
1997 *The Immortals of Ancient Egypt*, Jerusalem.
- Bising, F.W.
1905 *Das Re-heiligtum des Königs Ne-woser-Re*, Berlin.
- Bourriau, J. and Aston, D.
1985 'The Pottery' in G.T.Martin ed., *The Tomb-chapels of Paser and Ra'ia at Saqqara*, London.
- Brissaud, P.
1987 'Repertoire préliminaire de la poterie trouvée à San el-Hagar,' *CCE* 1.
- Brissaud, P., V.Carpano, L.Cotelle, S.Marchand, L.Nouaille and C.Veillard,
1987 'Repertoire préliminaire de la poterie trouvée à San el-Hagar (2^e partie)', *Cahiers de Tanis I*, Paris.
- Bryan, B.M.
1991 *The Reign of Thutmose IV*, Baltimore and London.
- Coulson, W.D.E.
1996 *Ancient Naukratis II: The Survey at Naukratis and Environs, Part I*, Oxford.
- Dasen, V.
1993 *Dwarfs in Ancient Egypt and Greece*, Oxford.

Derchain, P.

- 1981 'Observations sur les Erotica', in G.T.Martin, *The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara: The Southern Dependencies of the Main Temple Complex*, London: 166-170.

Donadoni, A.M. et al.

- 1988 *Il Museo Egizio di Torino: Guida alla Lettura di una Civiltà*, Novara.

Dunand, F.

- 1990 *Catalogue des terres cuites greco-romaines d'Egypte*, Paris.

Egyptian Museum of Turin

- 1988 *Egyptian Civilization: Daily Life*, Torino.

El-Sawi, A.

- 1979 *Excavations at Tell Basta: Report of Seasons 1967-1971 and Catalogue of Finds*, Prague.

Engelbach, R.

- 1915 *Riqqeh and Memphis VI*, London.

Feldman, M.H.

- 1998 *Luxury Goods from Ras Shamra-Ugarit and their Role in the Internatoinal Relations of the Eastern Mediterranean and Near East during the Late Bronze Age*, unpublished dissertation presented to the Department of Fine Arts, Harvard University. Cambridge, Massachusetts.

Fischer, H.G.

- 1959 'Pottery', in R.Anthes, ed., *Mit Rahineh 1955*, Philadelphia.
1965 'The Pottery', in R.Anthes, ed., *Mit Rahineh 1956*, Philadelphia.
1980 'Kopfstütze', in *Lexikon der Agyptologie Bnad III*, Weisbaden, pp.686-693.
1987 'The Ancient Egyptian Attitude Towards the Monsterus', in A.E.Farkas, et al. eds., *Monsters and Demons in the Ancient and Medieval Worlds*, Mains., pp.13-26.

Freed, R.E. et al.

- 1999 *Pharaohs of the Sun: Akhenaten, Nefertiti, Tutankhamen*, Boston.

French, P.

- 1988 'Late Dynastic Pottery from the Berlin / Hannover Excavations at Saqqara, 1986', *MDAIK* 44.
1992 'Chapter 6: The Pottery', in L.Giddy, ed., *The Anubieion at Saqqara II: The Cemeteries*, London.

French, P. and H.Ghaly

- 1991 'Pottery chiefly of the Late Dynastic Period from excavations by E.A.O at Saqqara, 1987', *CCE* 2.

Friedman, F.D

- 1998 *Gifts of the Nile: Ancient Egyptian Faience*, London.

Fuscaldo, P.

1998 'A Preliminary Report on the Pottery from the Late Hyksos Period Settlement at 'Ezbet Helmi (Area H/III, Strata D/3 and D/2)', *Egypt and the Levant* VII, pp.59-69.

Giddy, L.L.

1992 *The Anubieion at Saqqara II: The Cemeteries*, London.

Gomàa, F.

1973 *Chaemwese, Shon Rameses II. und Hoherpriester von Memphis*, Weisbaden.

Green, C.I.

1987 *The Temple Furniture from the Sacred Animal Necropolis at North Saqqara 1964-1976*, London.

Guidotti, M.C.

1981 'Ceramica dipinta dell'epoca di Tutmosi IV a Gurna', *Egitto Vicino Oriente* IV, pp.95-110.

Hashad et al.

1972 'Rb/Sr isotopic age determination of some basement Egyptian granites', *Egypt. J. Geol.*, vol.16, no.2, pp.269-281.

Hassan, S.

1953 *Excavations at Giza* vol.VIII, Cairo.

Holladay, P.G.

1982 'Chapter 4: The Pottery', in J.S.Holladay, ed., *Cities of the Delta, Part III: Tell el-Maskhuta*, Malibu.

Hope, C.

1989 *Pottery of the Egyptian New Kingdom: Three Studies*, Melbourne.

1997 'Some Memphite Blue Painted Pottery of the Mid-18th Dynasty' in Phillips, J. ed., *Ancient Egypt, the Aegean and the Near East: Studies in Honor of Martha Rhoades Bell*, Vol. II, San Antinoo, pp.249-286.

Jeffreys, D.G. and Smith, H.S.

1988 *The Anubieion at Saqqara I: The Settlement and the Temple Precinct*, London.

Kitchen, K.A.

1979 *Ramesside Inscriptions*, Vol.II, Oxford

Komorzinski, E.

1959-60 'Sechs Reliefbruchstücke von einem Tempel Rameses'II. in Wien', *Archiv für Orientforschung* 19, pp. 67-78.

Kozlof, A.P and Bryan, B.M.

1992 *Egypt's Dazzling Sun. Amenhotep III and his World*, The Cleveland Museum of Art.

Lucas, A.

1989 *Ancient Egyptian Materials and Industries*(4th ed. by J.R.Harris), London.

Manniche, L.

1987 *Sexual Life in Ancient Egypt*, London and New York.

Marchand, S.

1994 'Tanis. La céramique d'un bâtiment de la XXX^e dynastie', *Bulletin de Liaison du groupe international d'étude de la céramique égyptienne* 18.

Martin, G.T.

1981 *The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara*, London.

Muller-Winkler, C.

1987 *Die Agyptischen Objekt-Amulette*, Freiberg.

Nagel, G.

1938 *La céramique du Novel Empire à Deir el Médineh*, Cairo.

Paice, P.

1987 'A preliminary analysis of some elements of the Saite and Persian period pottery at Tell el-Maskhuta', *BES* 8.

Peet, T.E. and Woolley, C.L.

1923 *The City of Akhenaten Part I*, London.

Petrie, W.M.F.

1886 *Naukratis I*, Chicago.

1894 *Tell el Amarna*, Warminster.

1906 *Hyksos and Israelite Cities*, London.

1909a *Memphis I*, London.

1909b *The Palace of Apries (Memphis II)*, London.

1917 *Tools and Weapons*, London.

1927 *Objects of Daily Use*, London.

1935 *Shabtis*, London.

Petrie, W.M.F, Mackay, E. and Wainwright, G.

1910 *Meydum and Memphis(III)*, London.

Quibell, J.E.

1907 *Excavations at Saqqara: 1905-1906*, le Caire.

Ricke, H.

1939 *Der Totentempel Tuthmoses' III; baugeschichtliche Untersuchung*, Beiträge zur ägyptischen Bauforschung und Altertumskunde, Heft 3, 1 Hälfte.

Romano, J.F.

1980 'The Origin of the Bes-Image', *BES* 2: 39-56.

Schafer, H.

1908 *Priestgraber und andere Grabfunde vom ende des Alten reiches bis zur Griechischen Zeit vom Totentempel des Ne-User-Re*, Leipzig.

Schlögl et al.

1993 *Uschebti*, Wiesbaden.

Schneider, H.D.

1977 *Shabtis*, Leiden.

Scott, G.D.

1992 *Temple, Tomb and Dwelling: Egyptian Antiquities from the Harer Family Trust Collection*, San Bernardino.

Said, R.(ed.)

1990 *The geology of Egypt*, Rotterdam.

Seipel, W.(ed.)

1993 *Götter Menschen Pharaonen 3500 Jahre ägyptische Kultur. Meisterwerke aus der Ägyptisch-Orientalischen Sammlung des Kunsthistorischen Museum Wien*, Wien.

Smith, W.S.

1981 *The Art and Architecture of Ancient Egypt(Revised with additions by W.K.Simpson)*, New Haven and New York.

Spencer, A.J.

1996 *Excavations at Tell El-Balamun:1991-1994*, London.

Yoshimura, S. et al.

1999 'Waseda University Excavations at North Saqqara: A Preliminary Report on the fifth season, July-September 1997', 『エジプト学研究』 第7号, pp.5-28.

2000 'Waseda University Excavations at North Saqqara: A Preliminary Report on the sixth season, July-September 1998', 『エジプト学研究』 第8号(in press)

高宮いづみ他

1995 「レリーフブロックからの壁面装飾の復元考察」 『エジプト学研究』 別冊第1号、pp. 8-29.

吉村作治他

1998 「早稲田大学第4次アブ・シール丘陵頂部発掘調査概報」 『ヒューマンサイエンス』 vol. 10, No. 2, pp. 117-130.

1999 「早稲田大学第5次アブ・シール南丘陵頂部発掘調査概報」 『ヒューマンサイエンス』 vol. 11, No. 2, pp. 93-107.

2000 『エジプトを掘るーそれをめぐる様々な学問分野ー』、第14回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会

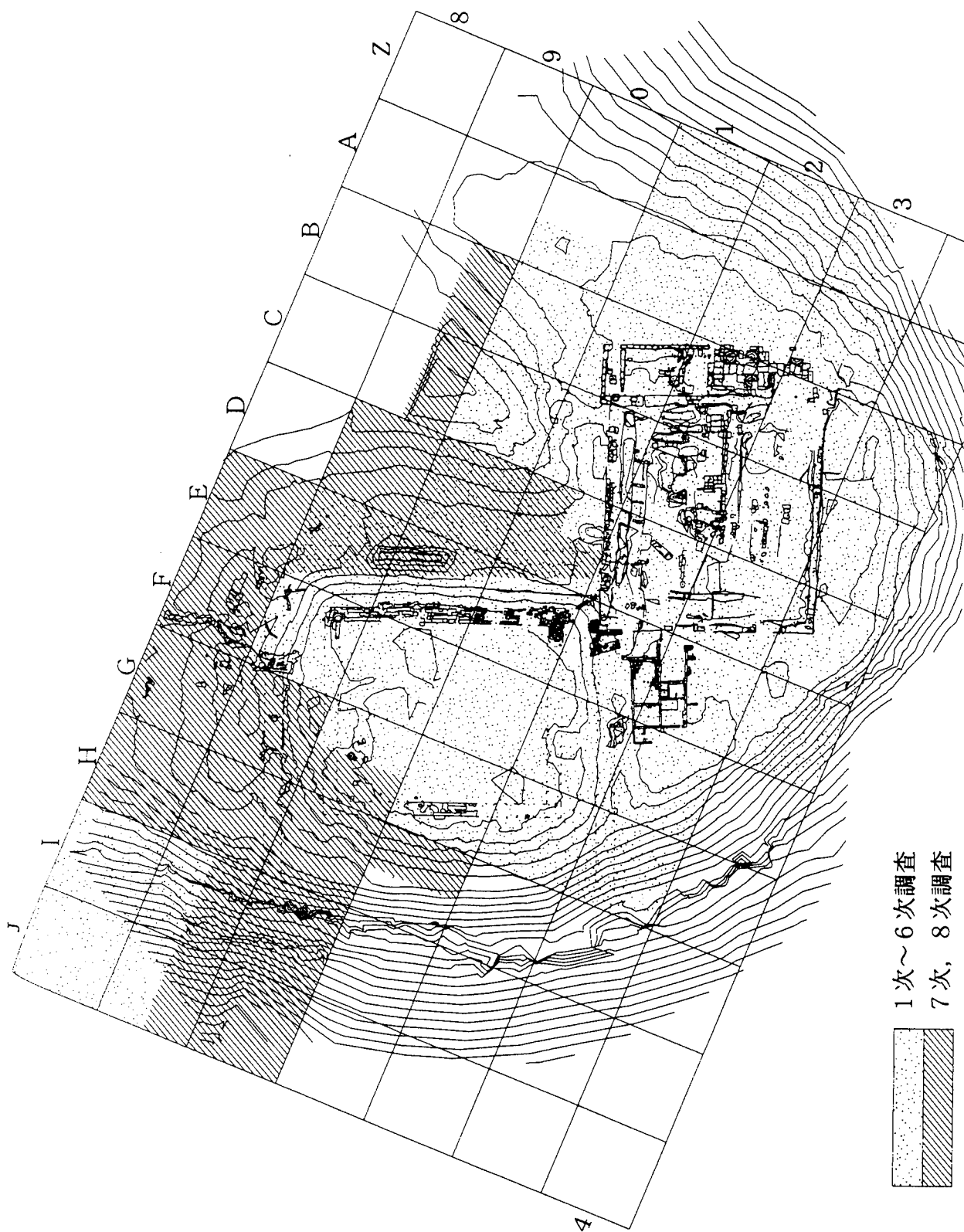


図1 発掘調査区

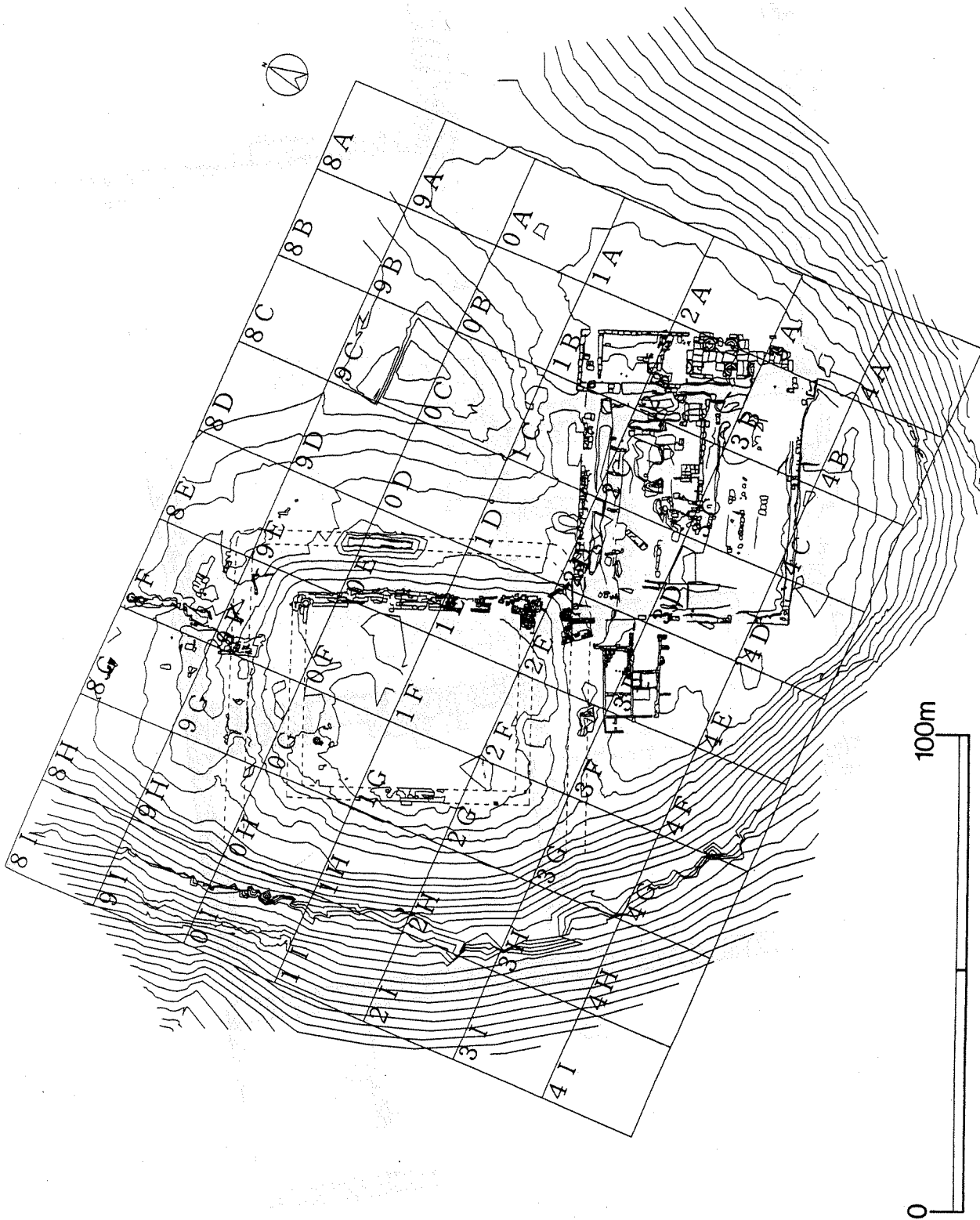


图2 遺構平面図

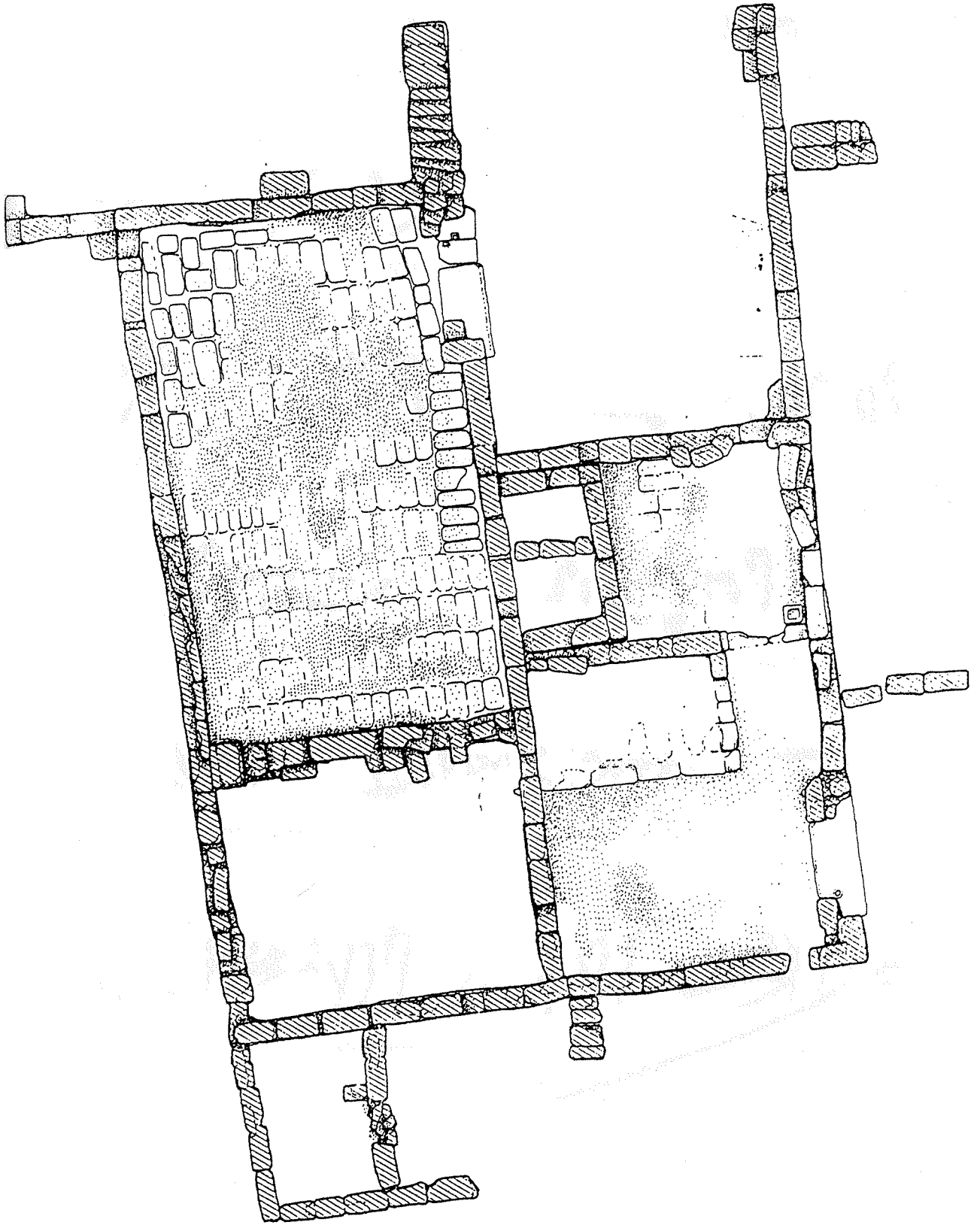


图3 日乾煉瓦家屋平面図

AK07-O863

AK07-A010

AK07-A085

AK07-A333

AK07-A334

AK07-A501

AK07-A220

AK07-A507

AK07-A617

AK07-A591

AK07-A642

AK07-A643

AK07-A650

AK07-O841

図4 インスクリプション

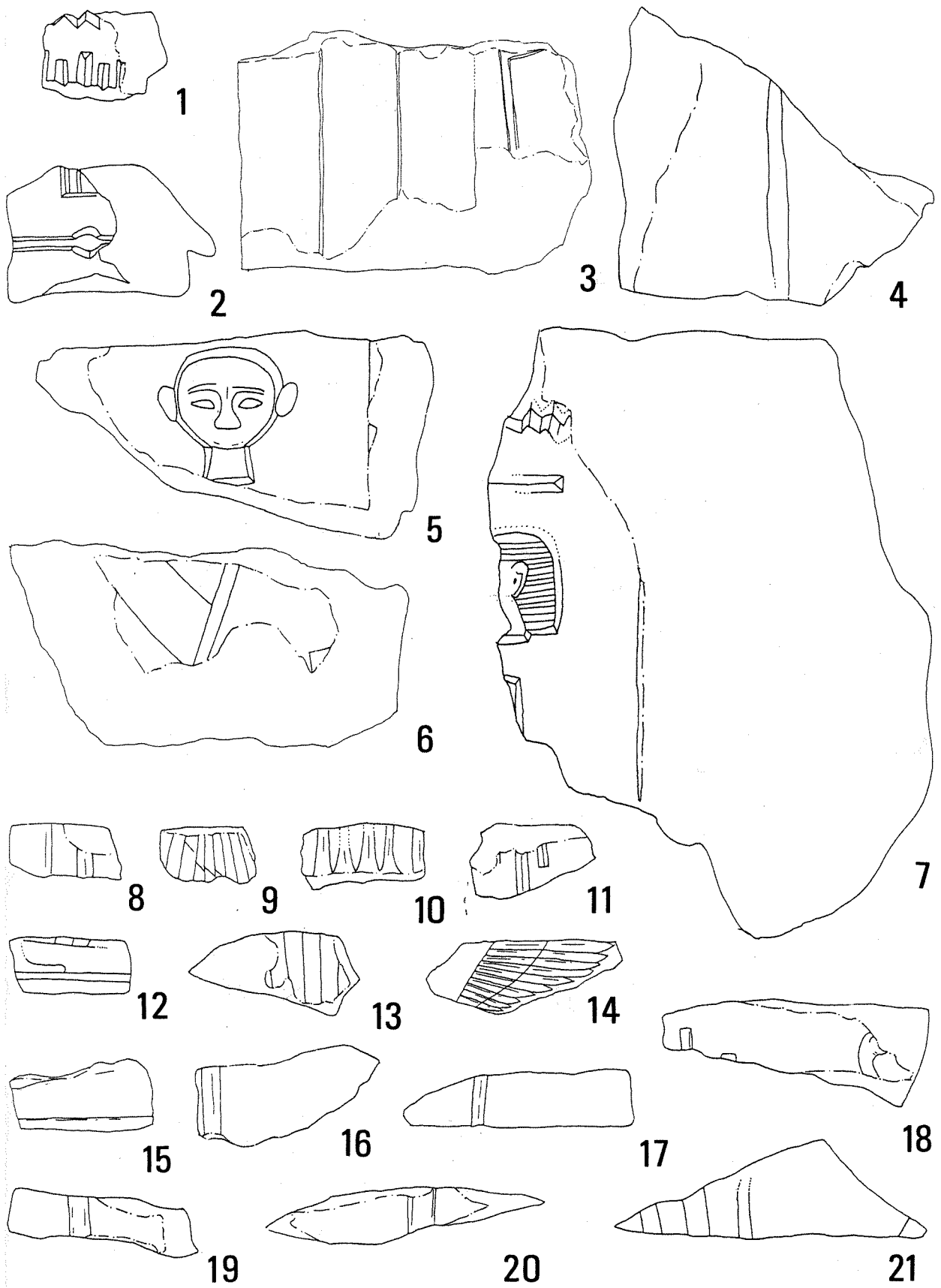


図5 第7次調査出土レリーフ<1>

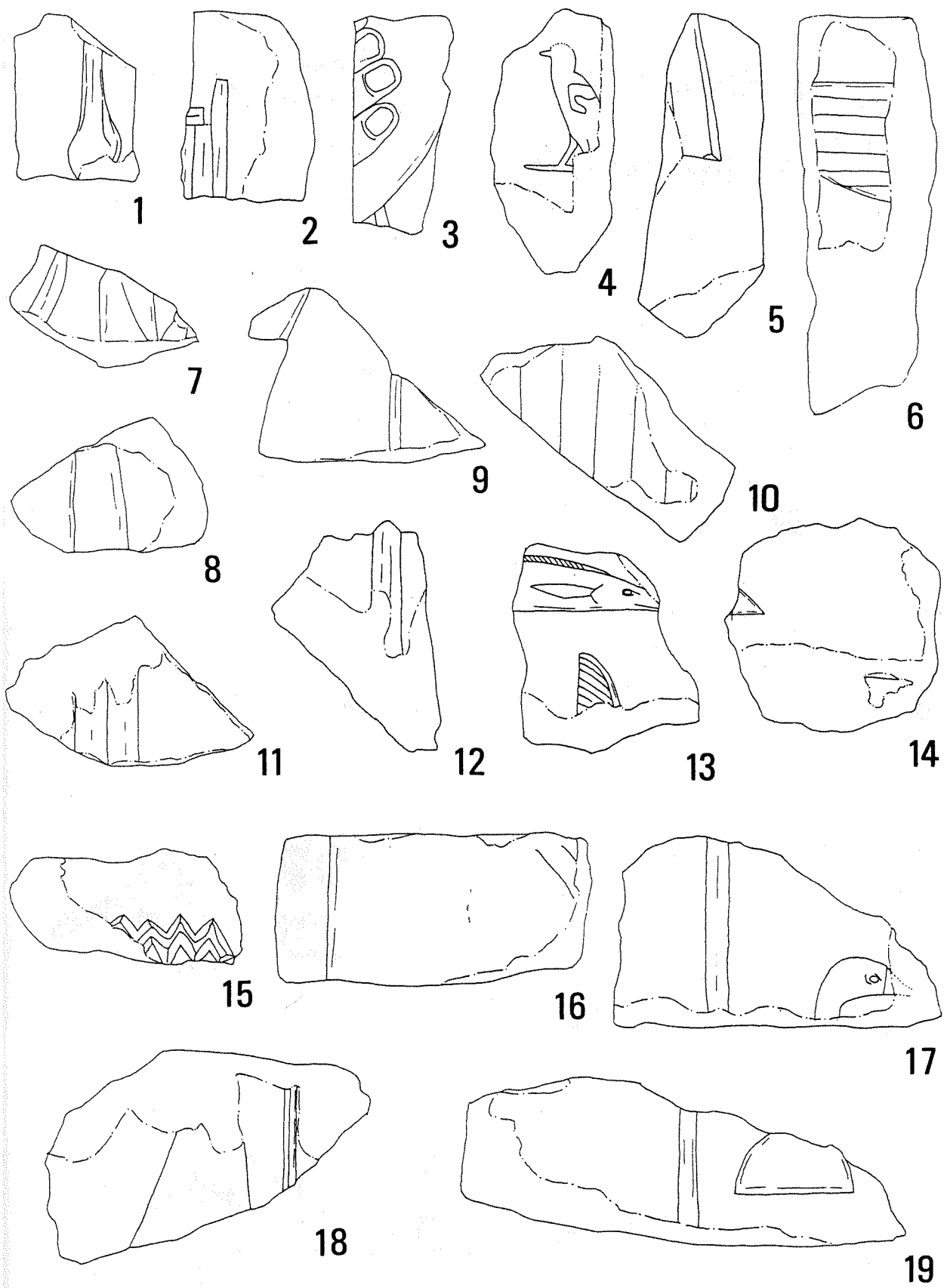


図6 第7次調査出土レリーフ<2>

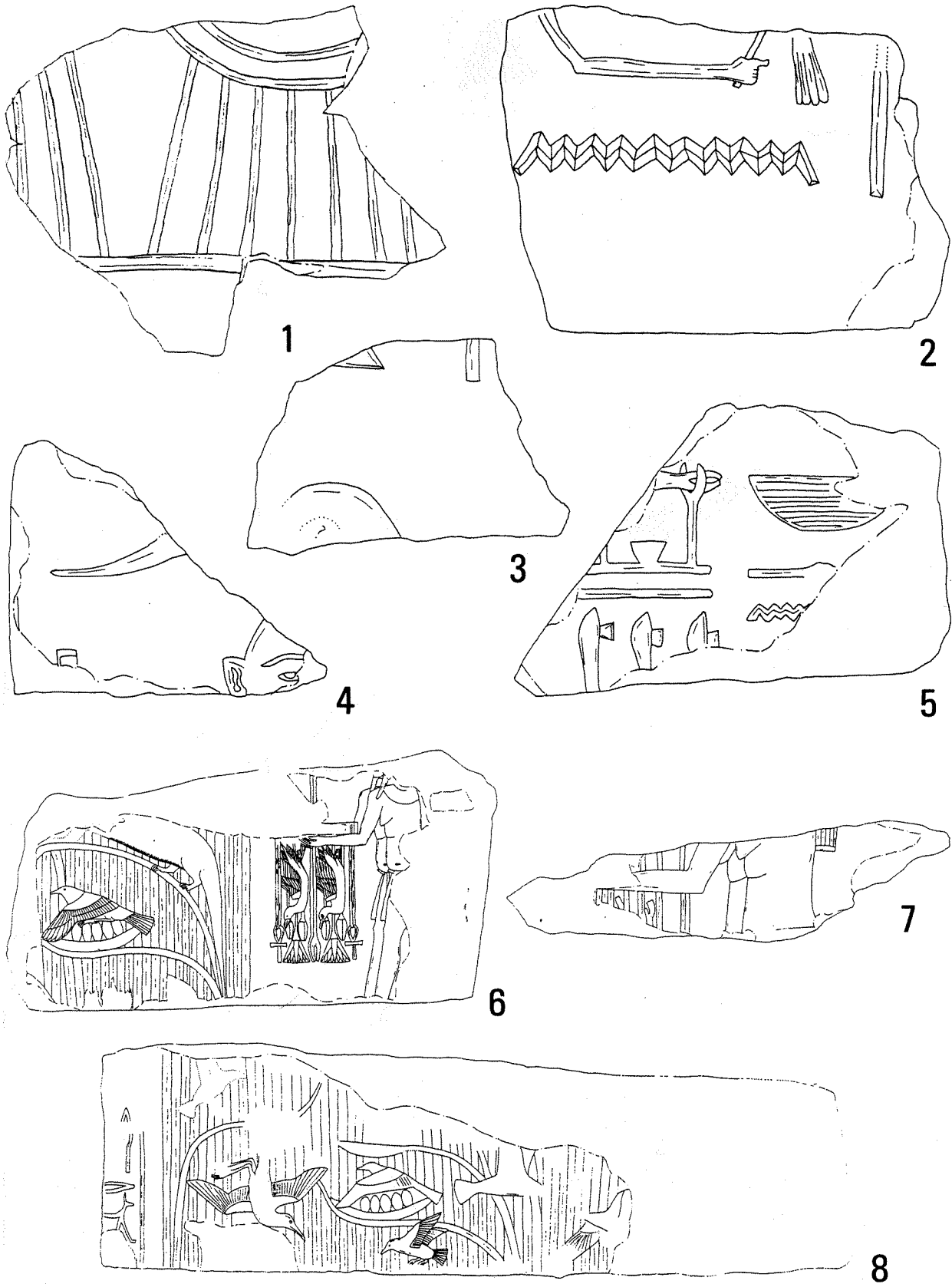


図7 第7次調査出土レリーフ<3>

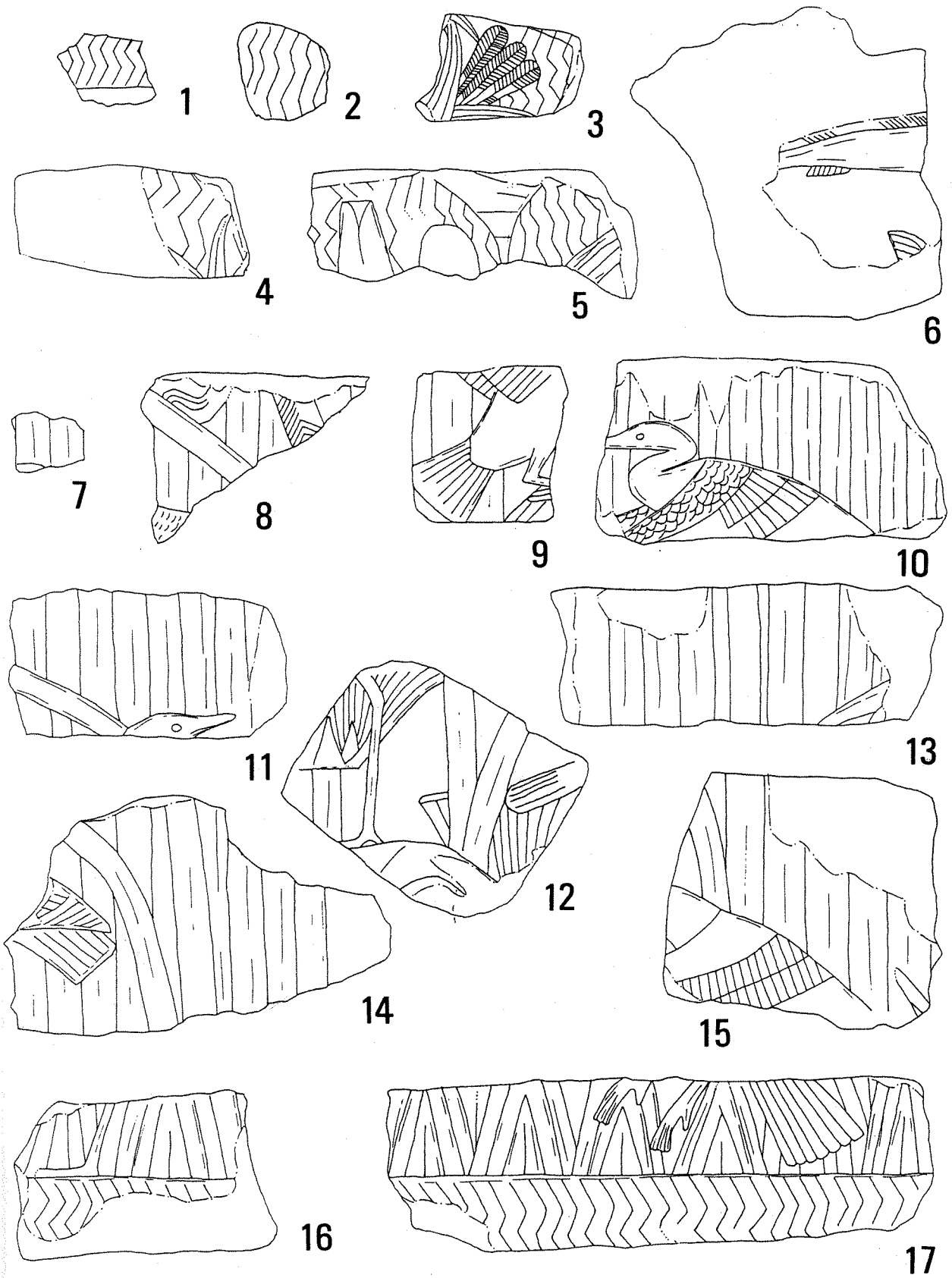


図8 第7次調査出土レリーフ<4>

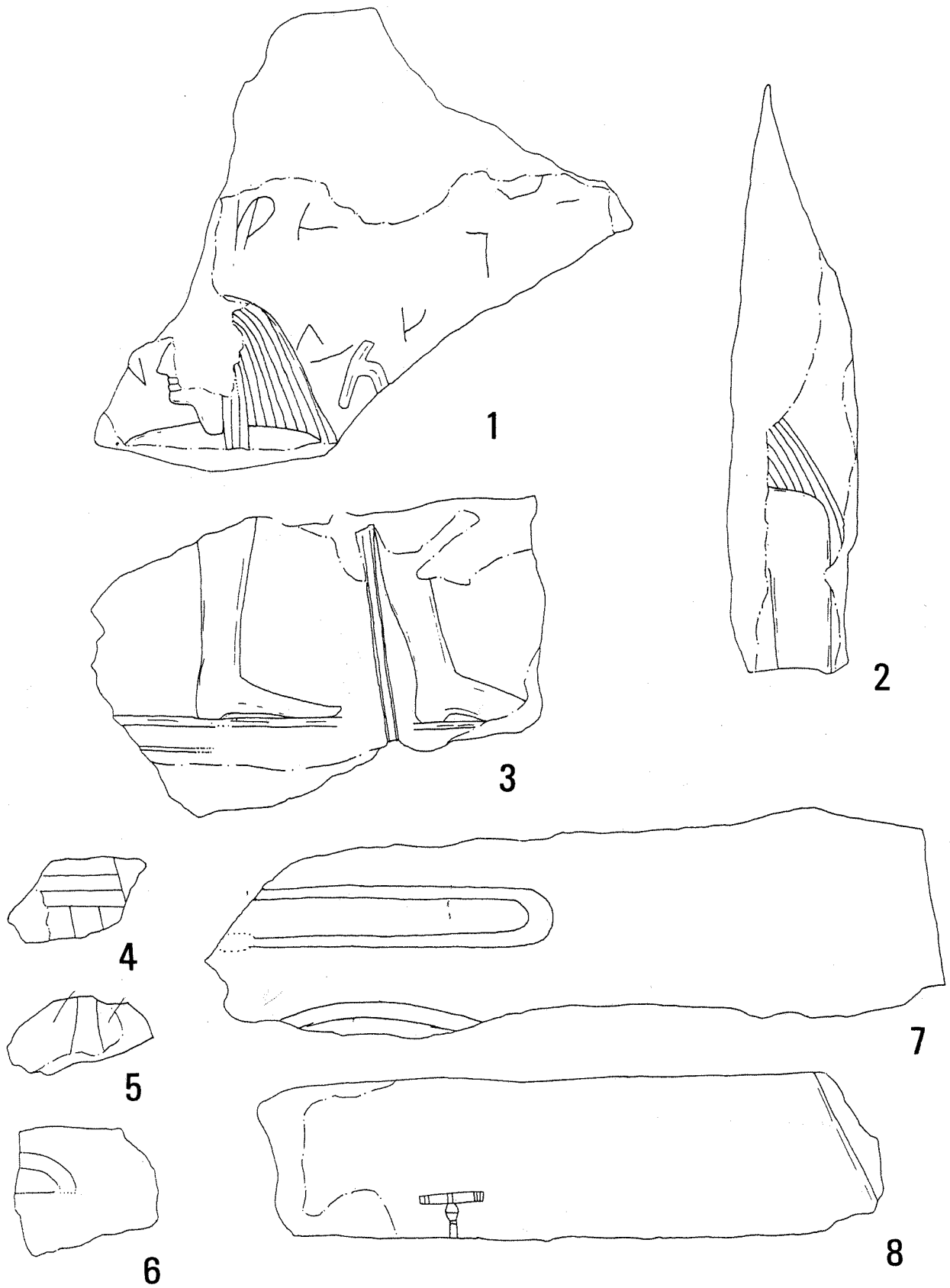


図9 第7次調査出土レリーフ<5>

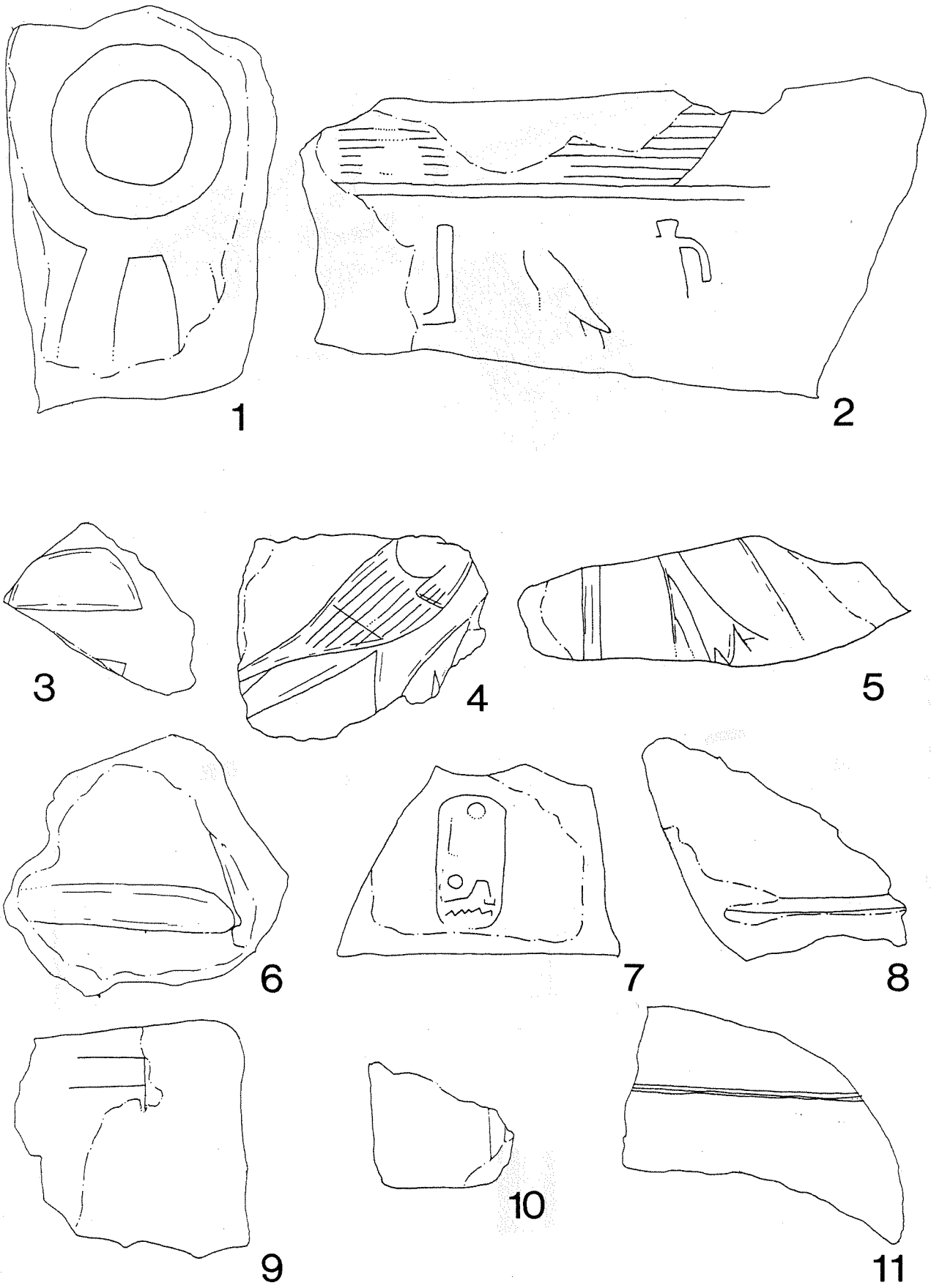
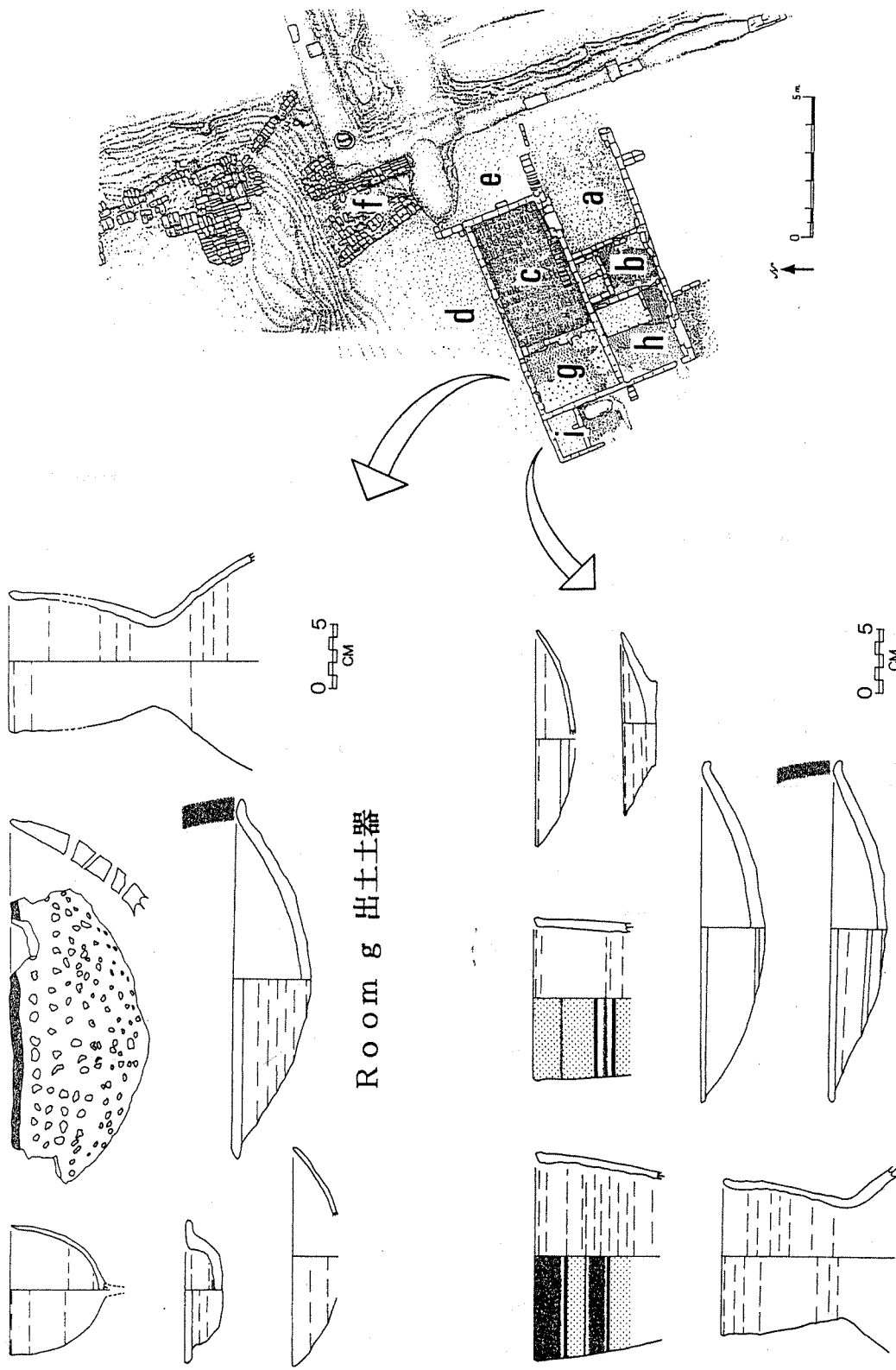


図10 第7次調査出土レリーフ<6>



Room g 出土土器

Room i 出土土器

図 11 日乾煉瓦家屋出土の土器

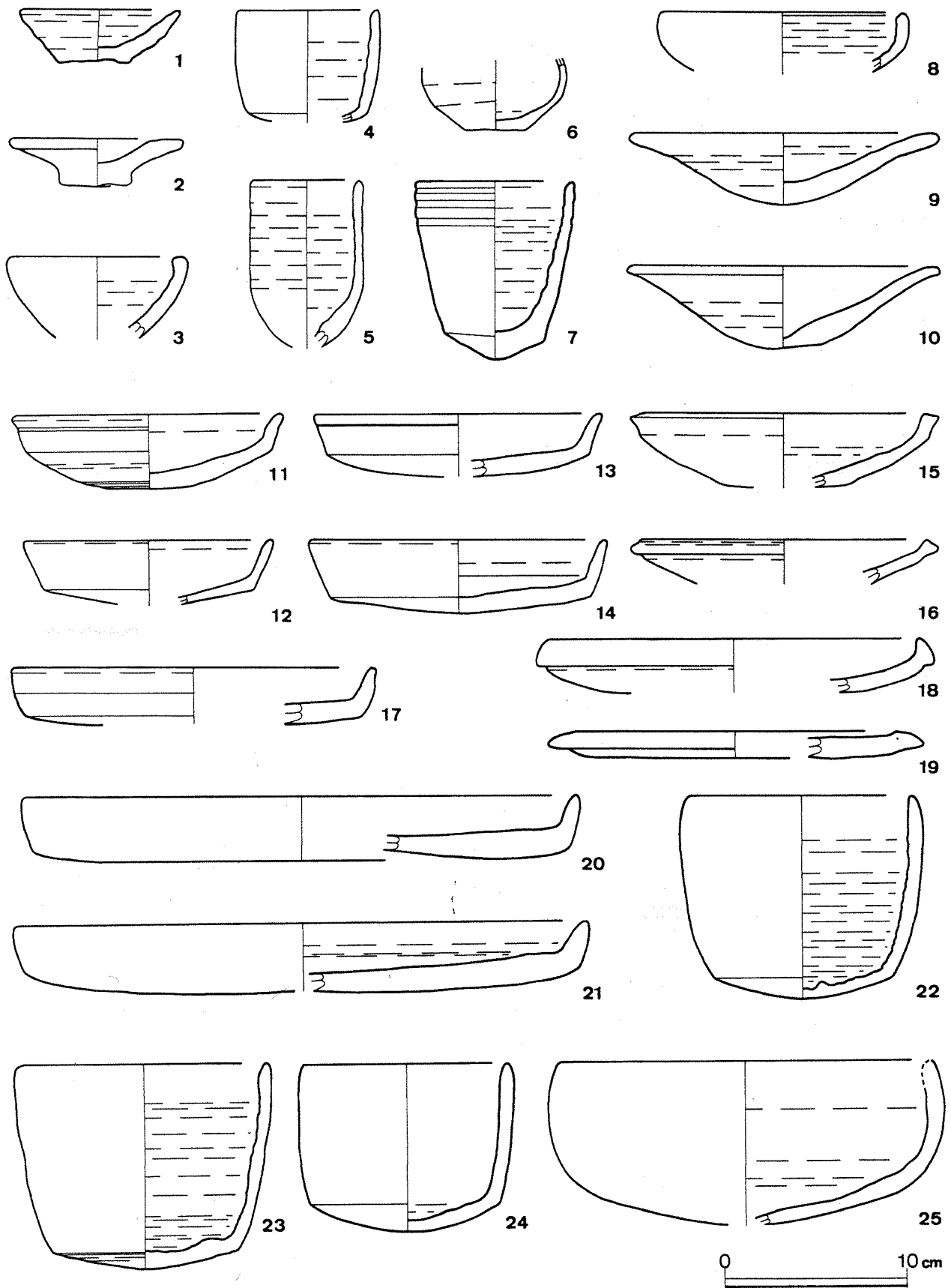


図12 末期王朝時代の土器<1>

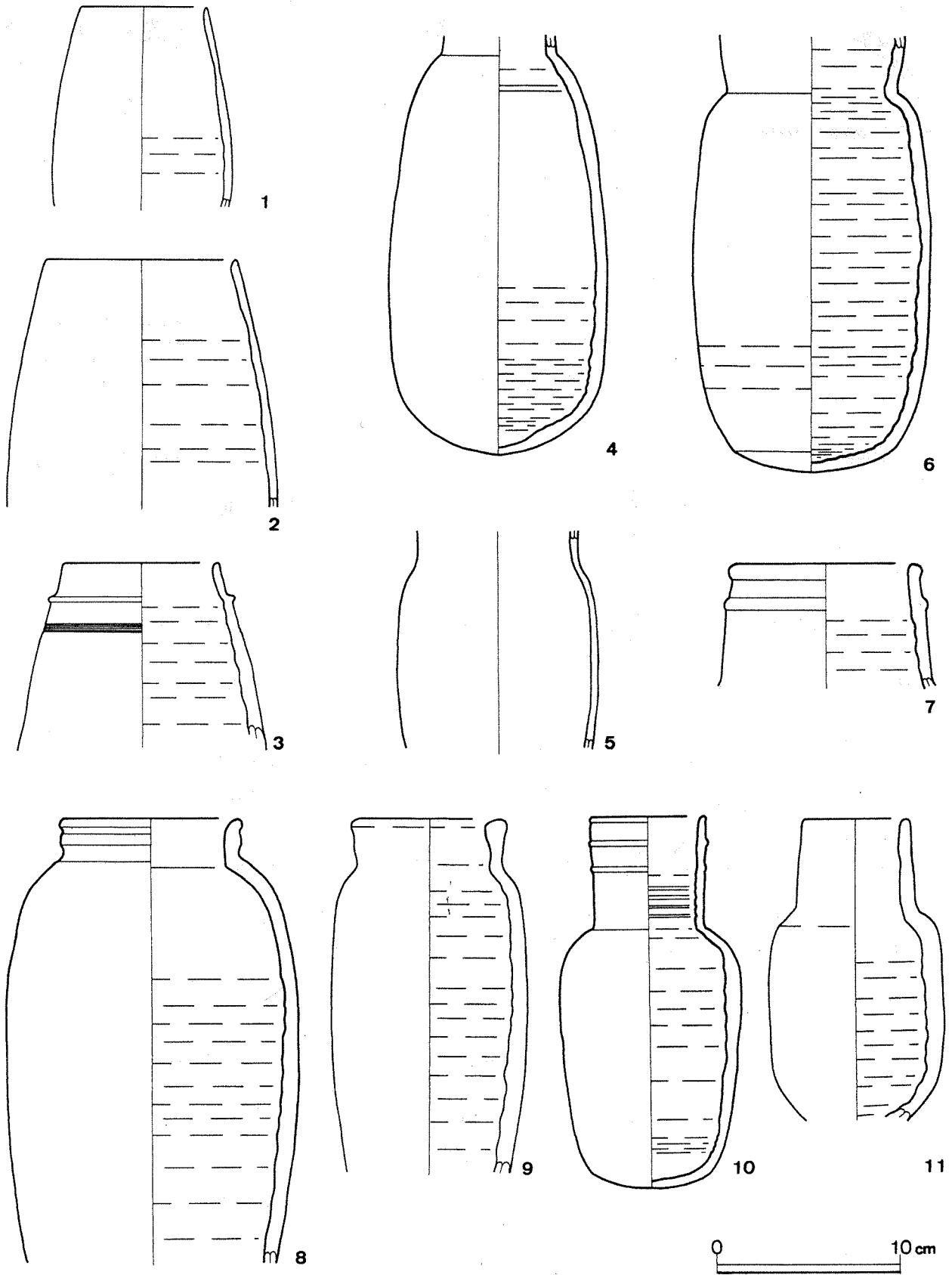


図 13 末期王朝時代の土器< 2 >

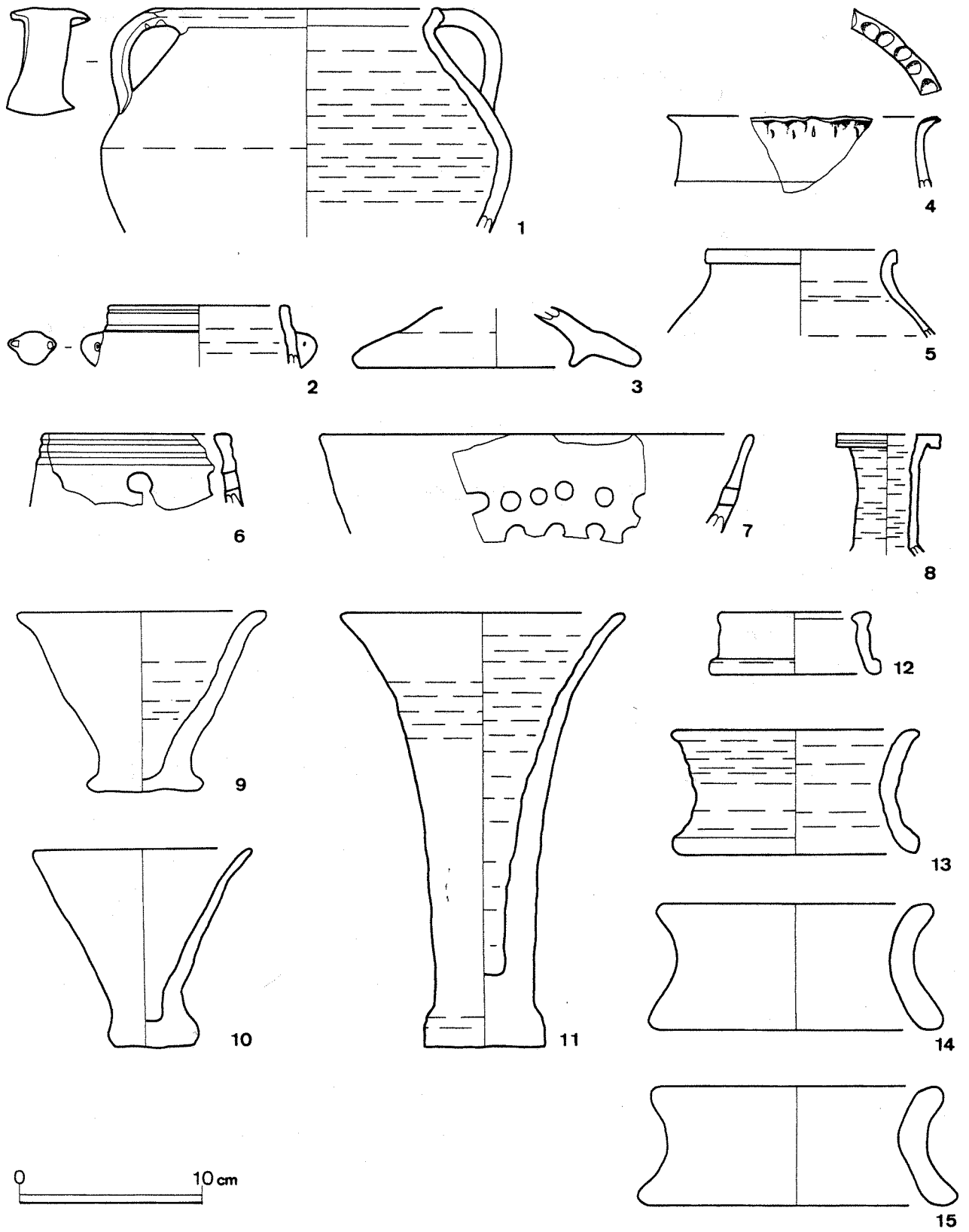


図 14 末期王朝時代の土器< 3 >

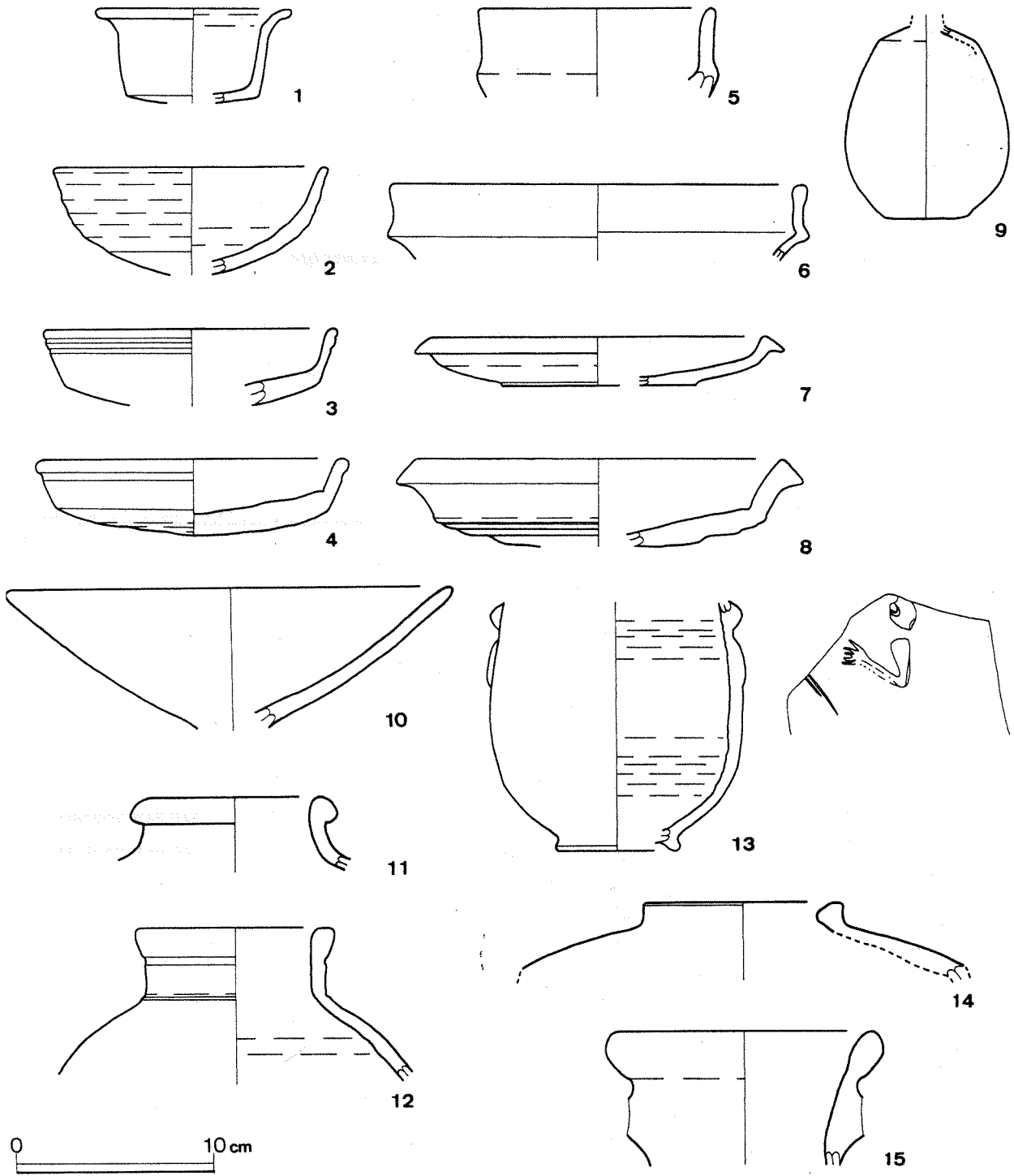


図 15 末期王朝時代の土器< 4 >

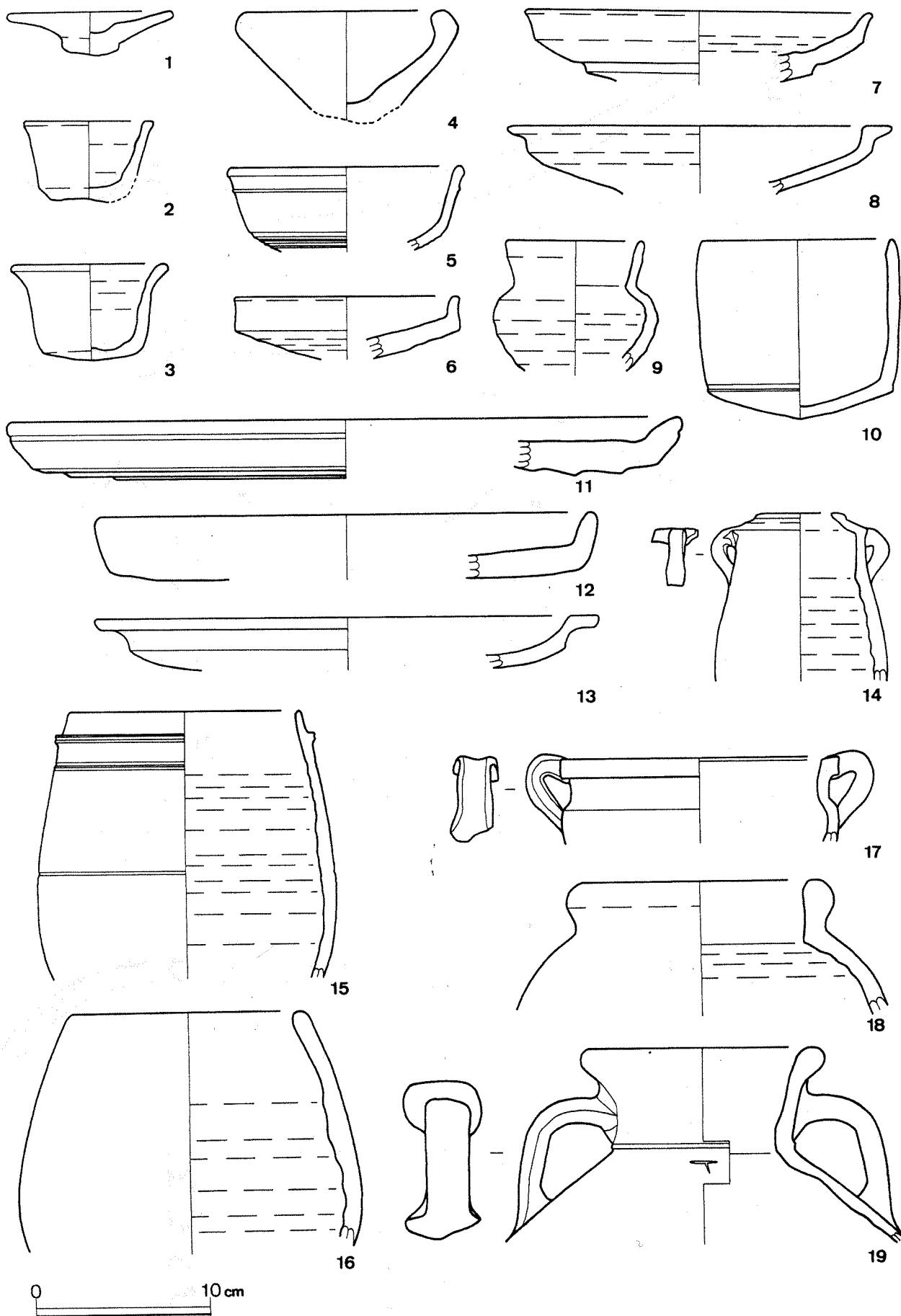


図 16 末期王朝時代の土器< 5 >

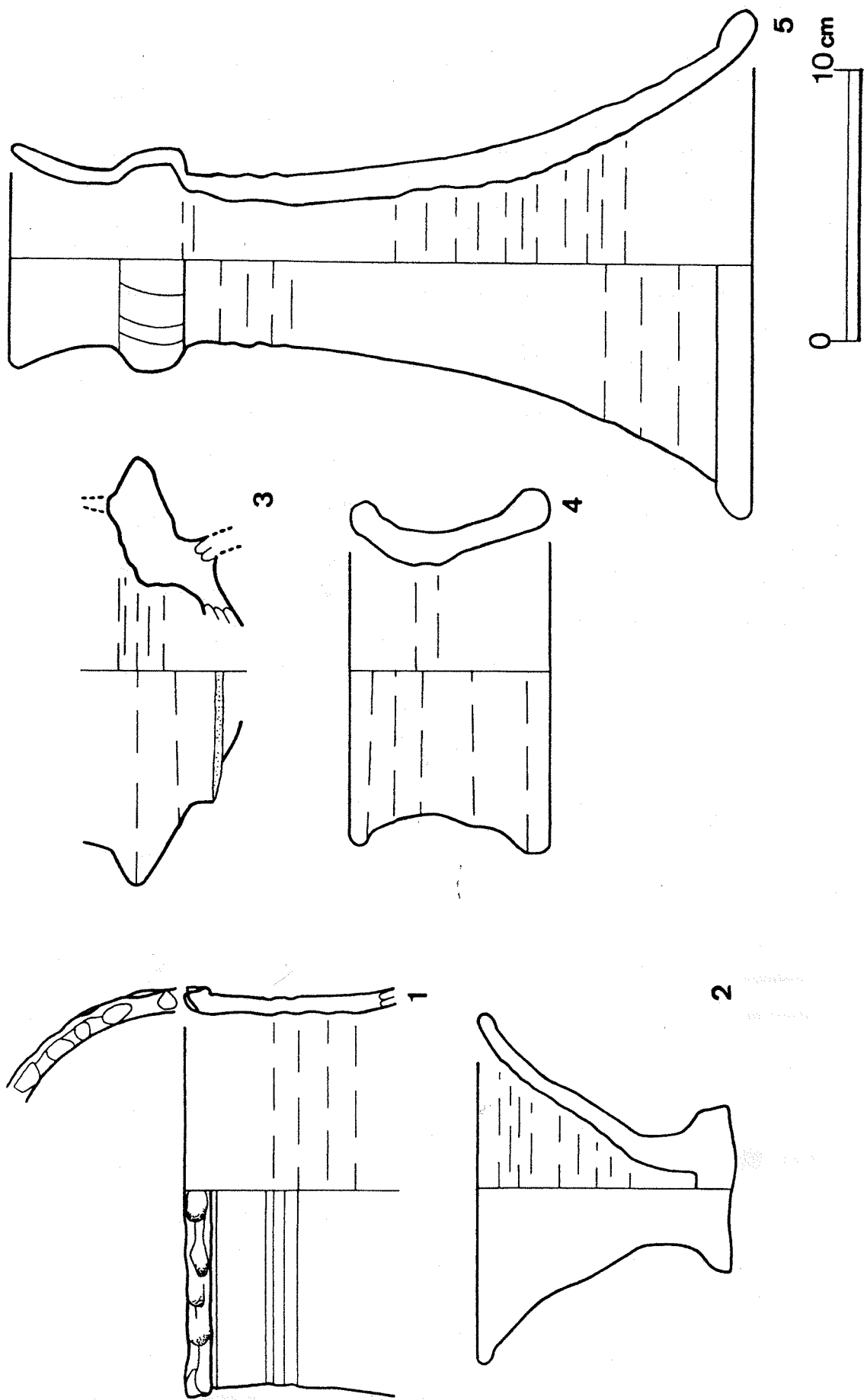


图 17 末期王朝時代の土器<6>

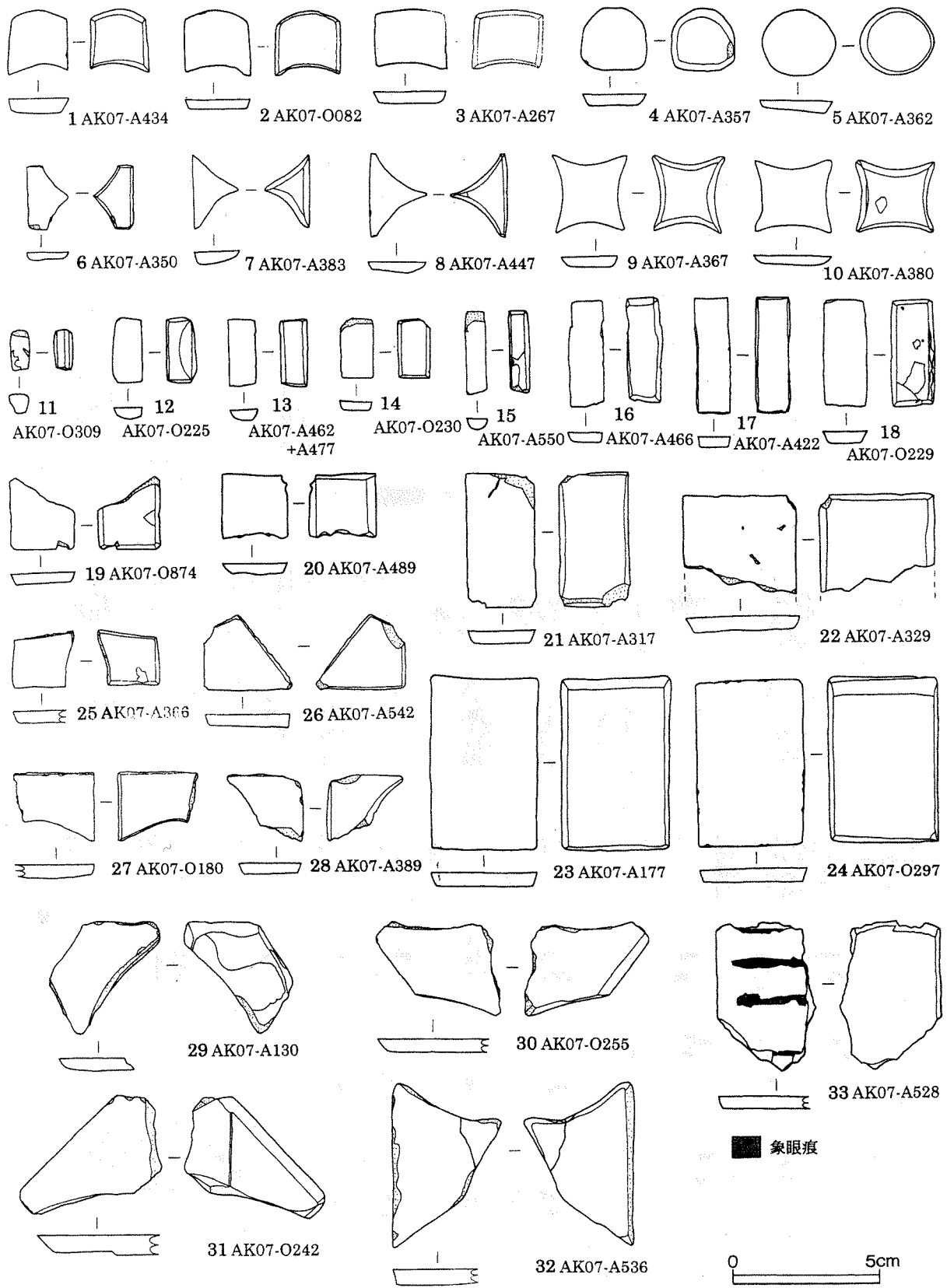


図 18 7次調査出土のその他遺物<1> (ファイアンス・タイル)

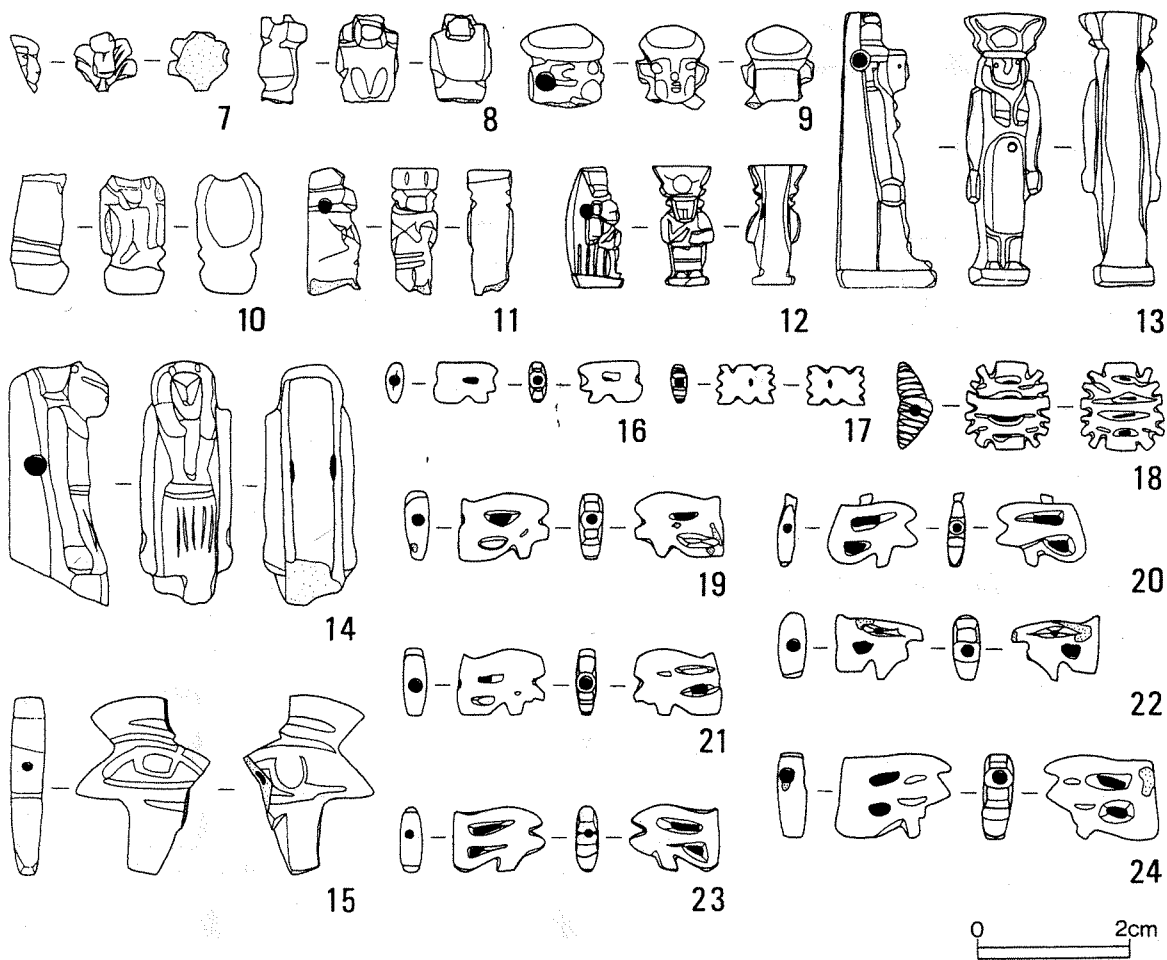
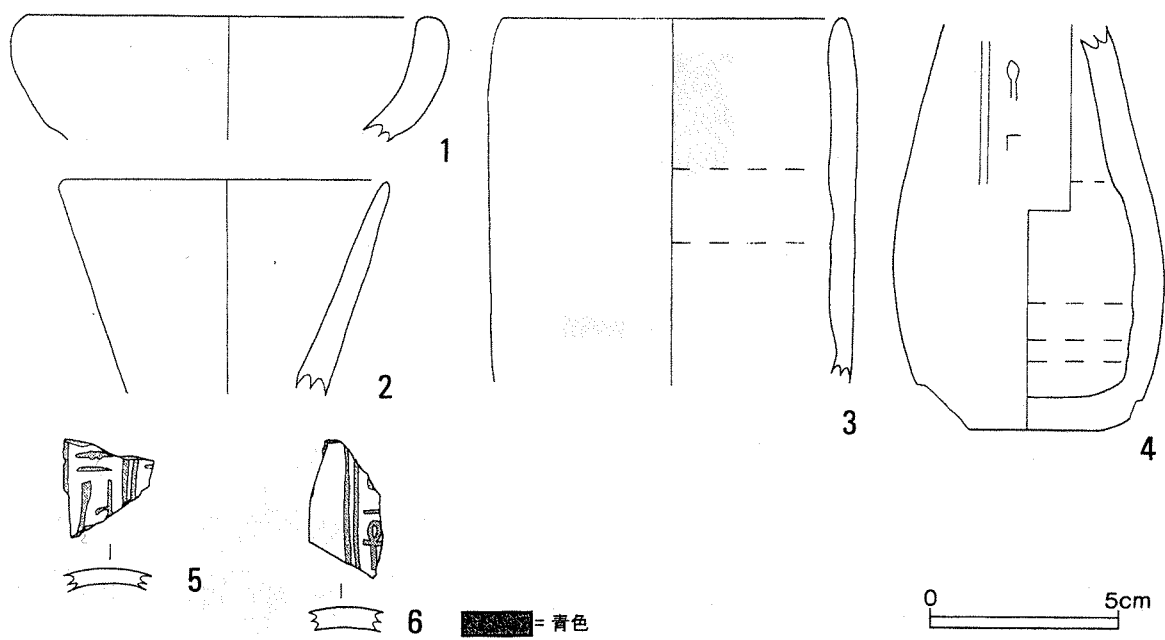


図19 7次調査出土のその他遺物<2> (ファイアンス製品)

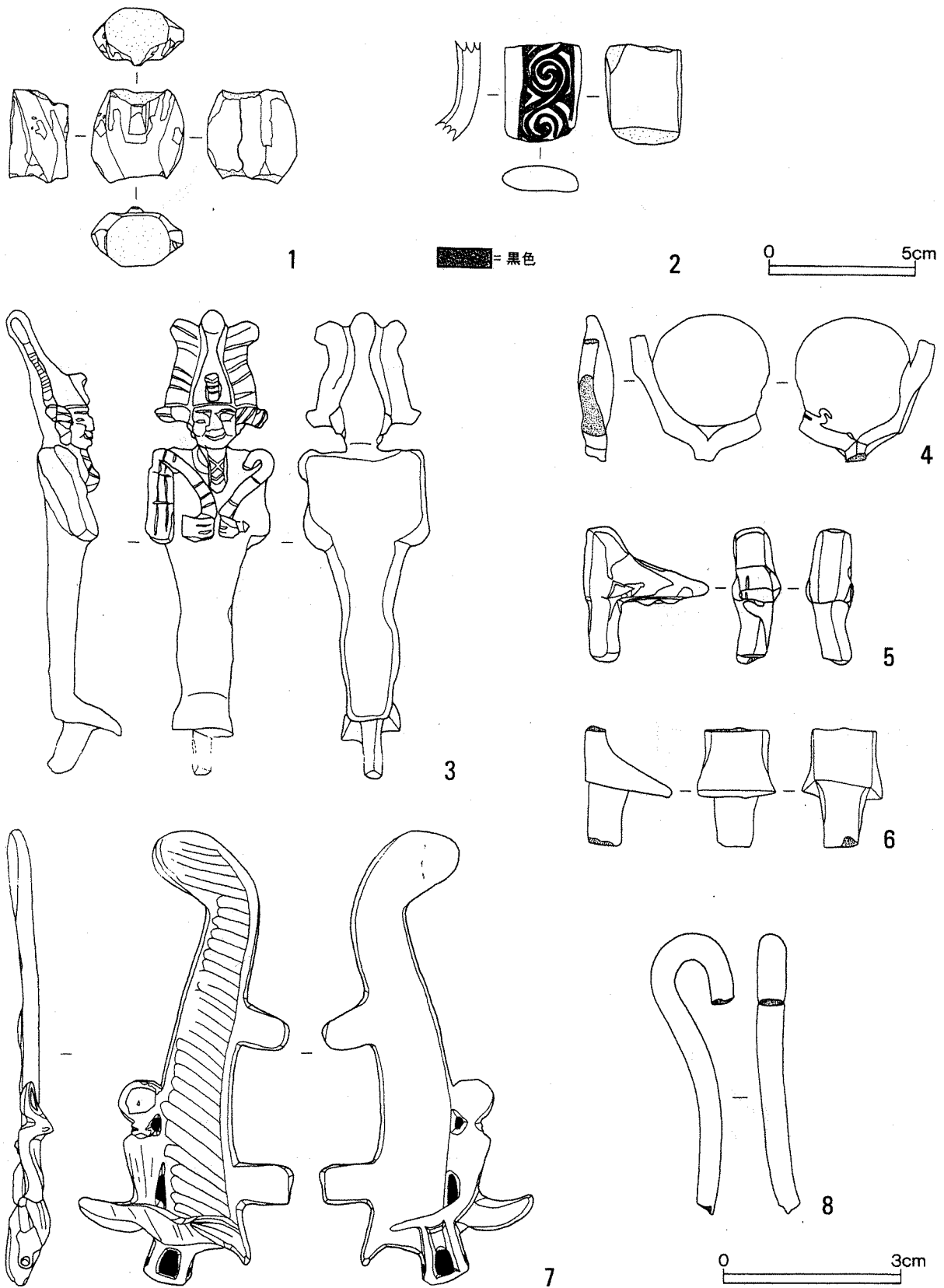


図 20 7次調査出土のその他遺物<3> (ファイアンス製品・銅製品)

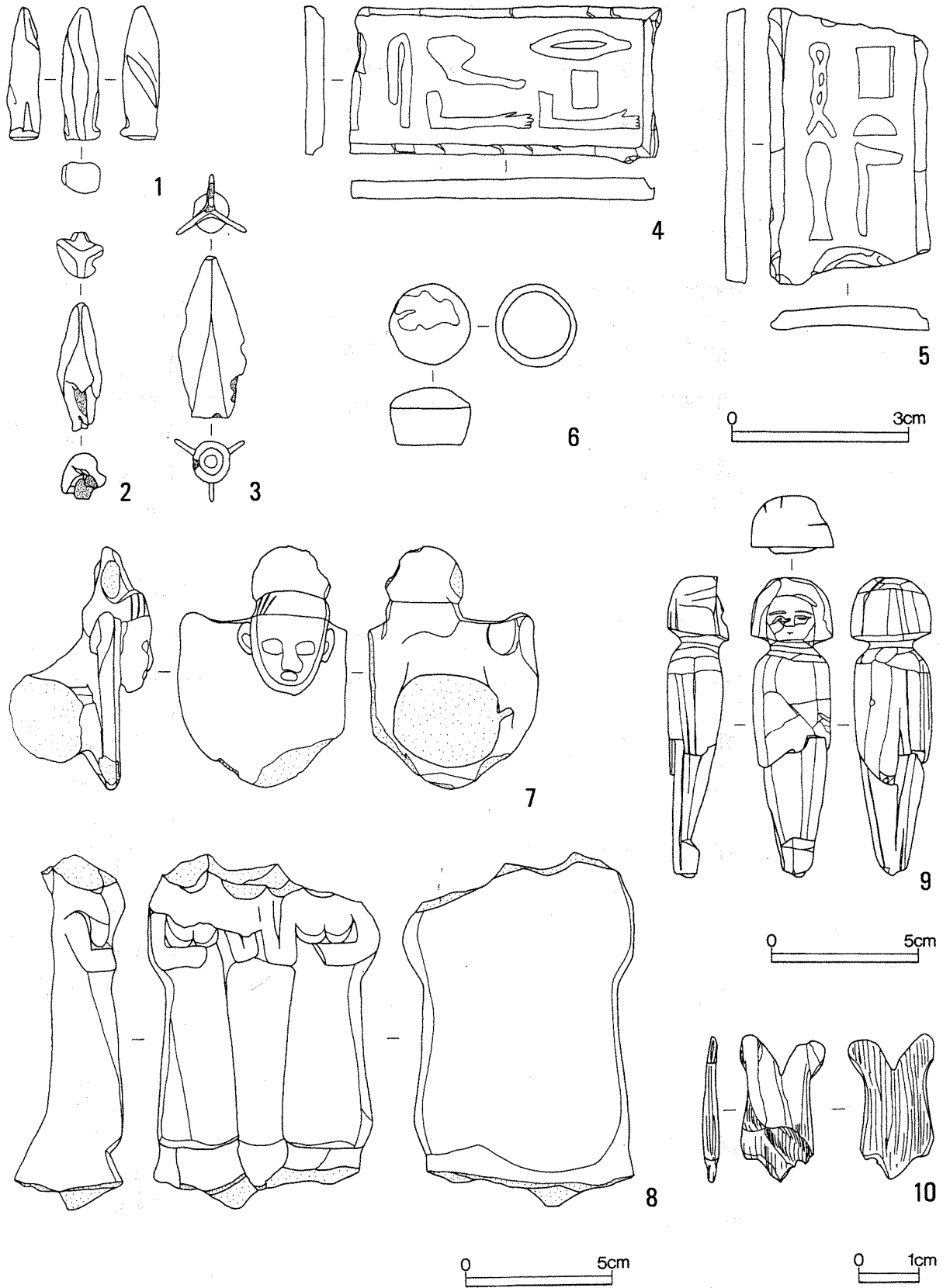


図 21 7次調査出土のその他遺物<4> (銅製品・土製品・木製品)

Locality	遺跡内石材										Abu Sir					Tura					Helwan			Mokattam				
	灰白色 wackest.	白灰 wackest.	色 wackest.	含貨幣石 rudst.	含貨幣石 rudst.	含貨幣石 rudst.	灰 wackest.	色 wackest.	I	L	M	T1	T2	T3	T4	T5	10	11	1	2	4	5	6	7	8			
	few	rare	rate	barren	barren	barren	rate	rate	barren	rate	rate	barren	very rare	very rare	common	few	common	very rare	rate	few	few	few	barren	rare	barren			
<i>Calcidiscus cf. protoannulus</i>																			1									
<i>Chiasmolithus cf. consuetus</i>																			2									
<i>Chiasmolithus spp. (rim)</i>														1					1	2								
<i>Coccolithus eopelagicus</i>																				2								
<i>Coccolithus cf. fenestratus</i>																				1	10							
<i>Coccolithus cf. obrutus</i>																				6	7	15	3		2			
<i>Coccolithus pelagicus</i>																				6								
<i>Cribrocentrum reticulatum</i>																				2								
<i>Cyclarcolithus floridanus</i>																				4	10	43			24			
<i>Discoster burbadensis</i>																				2	36	20	71	79	21			
<i>Discoster nodifer</i>																				56	54							
<i>Discoster saipanensis</i>																				1								
<i>Ericsonia formosa</i>																												
<i>Neococcolithes dubius</i>																												
<i>Pontosphaera cf. desueta</i>																												
<i>Pontosphaera cf. enornis</i>																												
<i>Pontosphaera cf. multipora</i>																												
<i>Pontosphaera cf. plana</i>																												
<i>Reticulofenestra samoburovii</i>																												
<i>Reticulofenestra cf. scrippsae</i>																												
<i>Reticulofenestra spp. (small)</i>																												
<i>Sphenolithus predistans</i>																												
<i>Sphenolithus moriformis</i>																												
<i>Thoracosphaera sp.</i>																												
<i>Holococcolith</i>																												
Total	111	62	30						18	15				103	77		207	79	109	112	110			55				

図 22 アブ・シール南丘陵頂部遺跡より出土した石材一覧

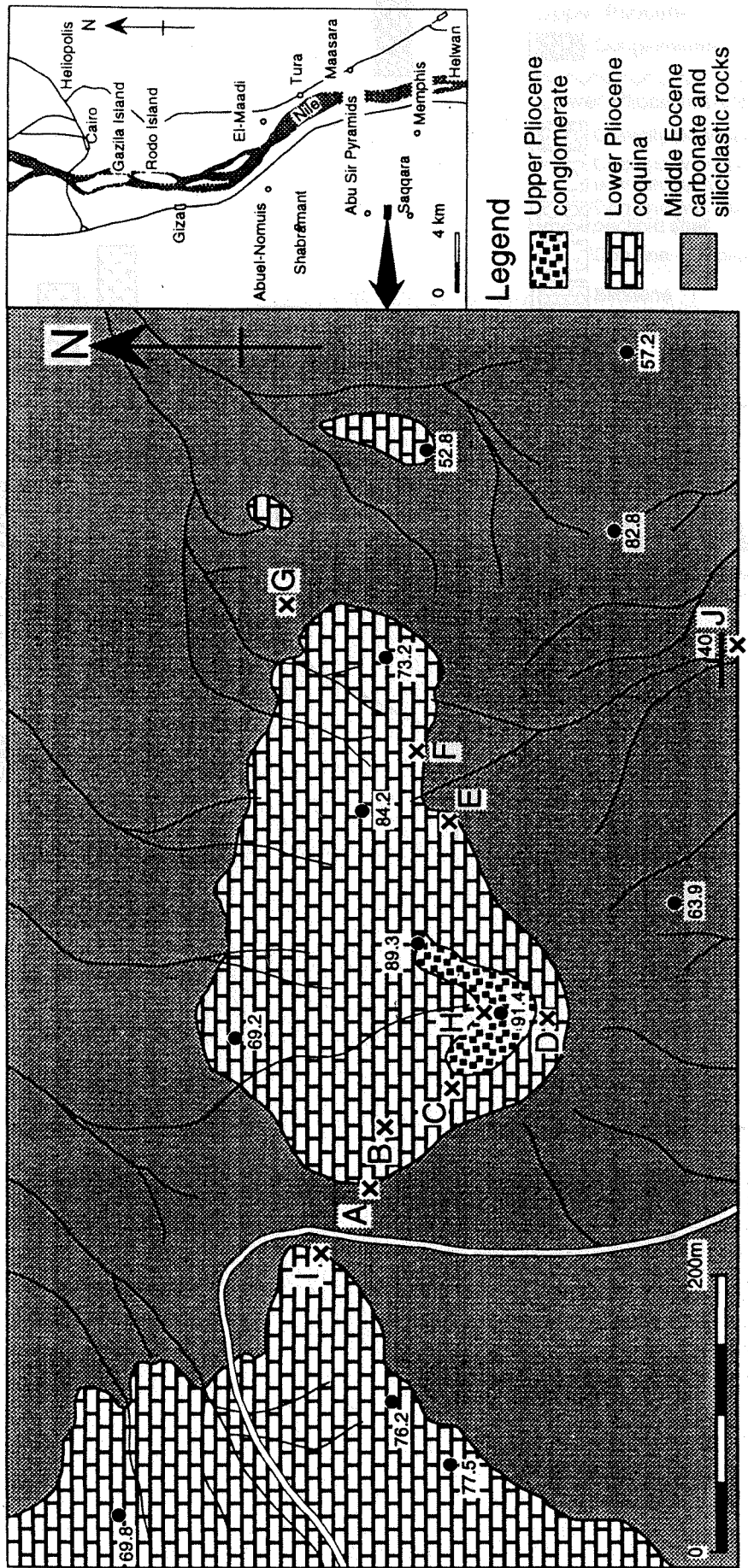


図 23 アブ・シール南丘陵頂部遺跡周辺の地質図

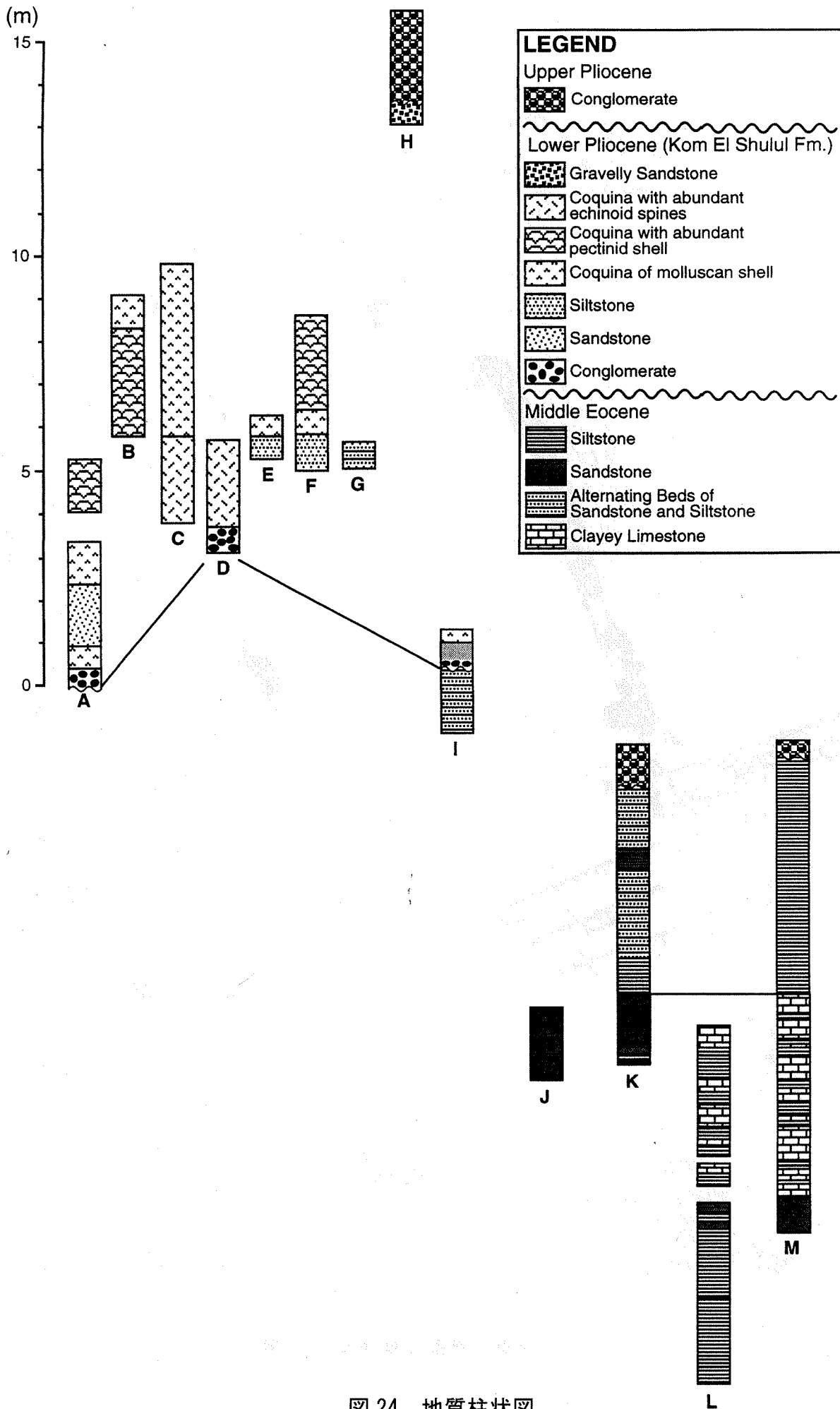


图 24 地質柱状图

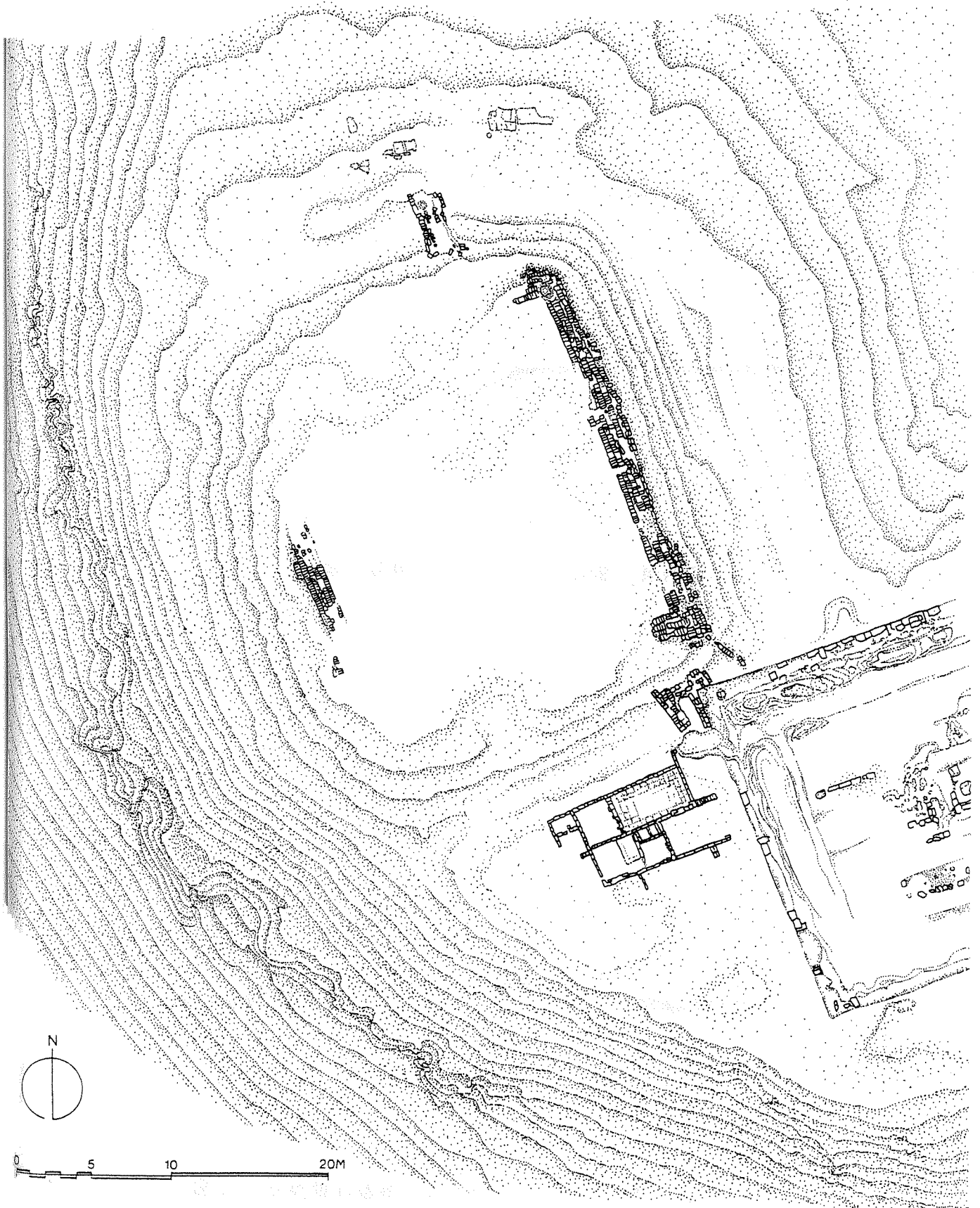


图 25 日乾煉瓦遺構平面図

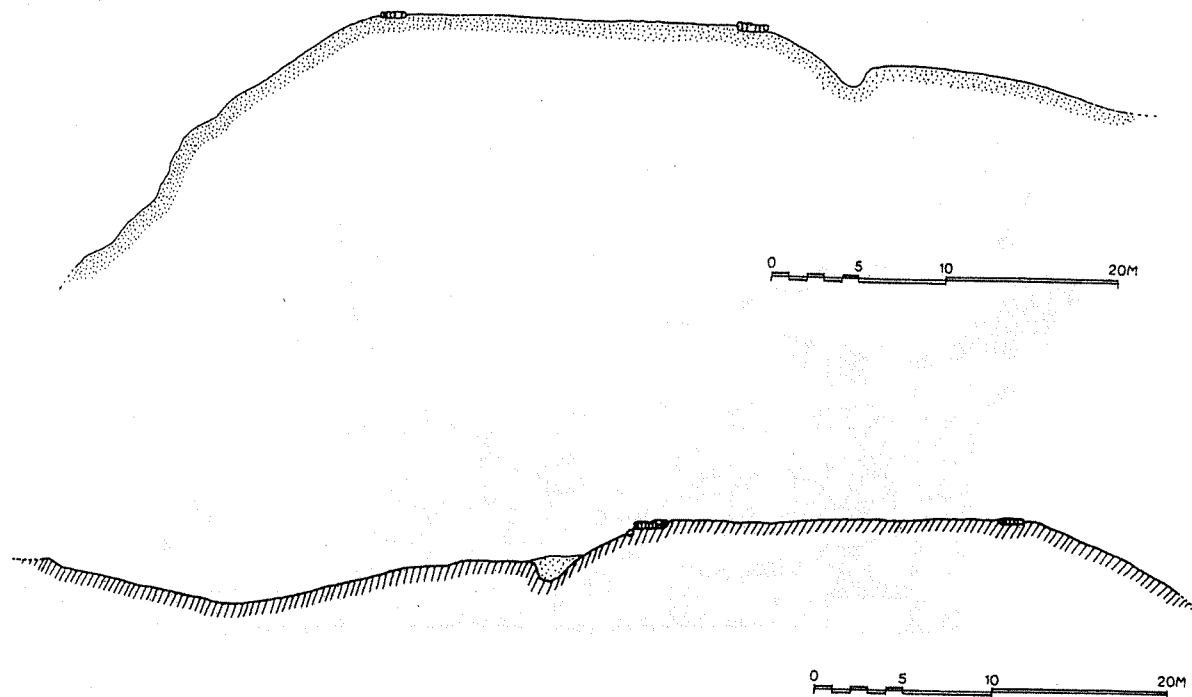


図 26 日乾煉瓦遺構・エレベーション図（東西方向）

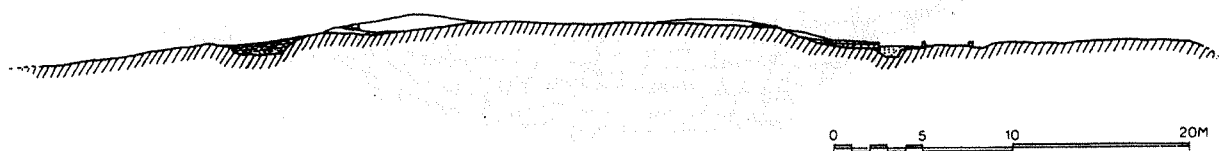


図 27 日乾煉瓦遺構・エレベーション図（南北方向）

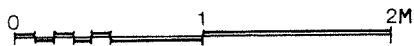
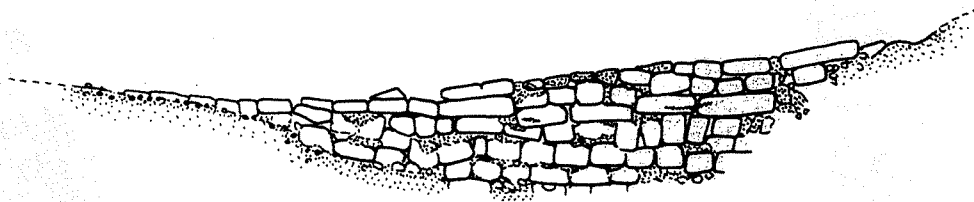
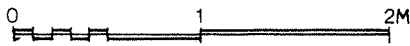
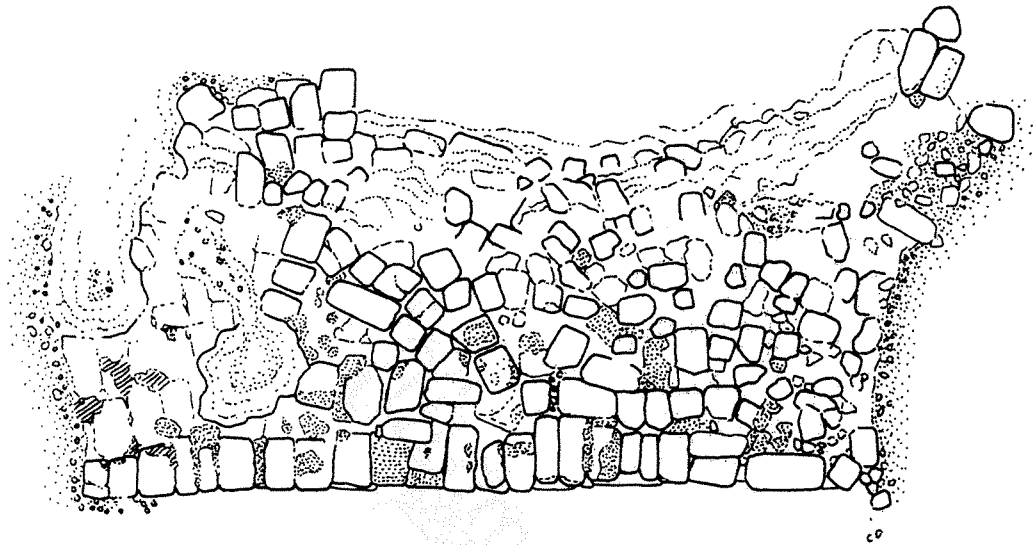


図 28 日乾煉瓦で作られたスロープ

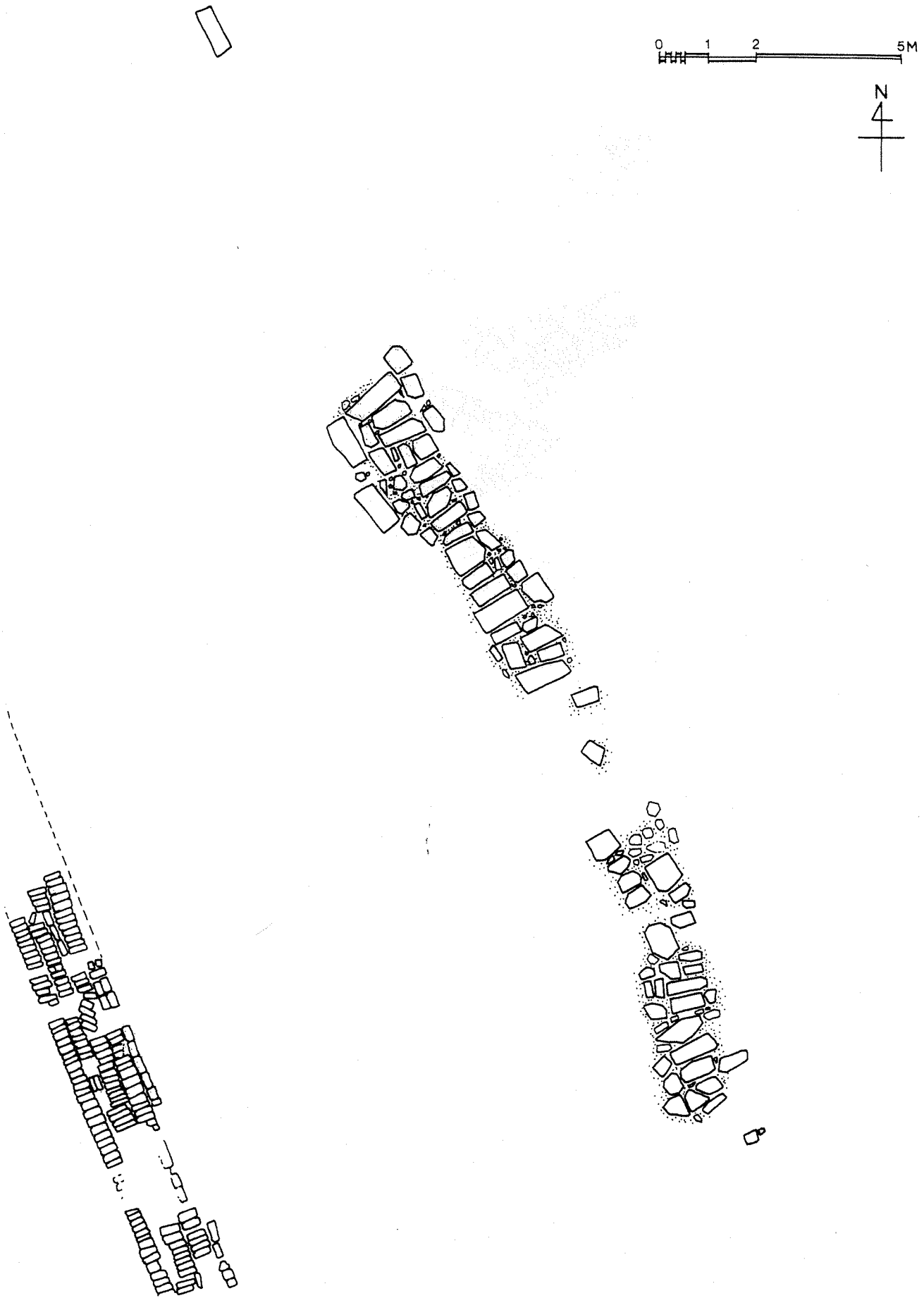


図 29 ペイブメント平面図

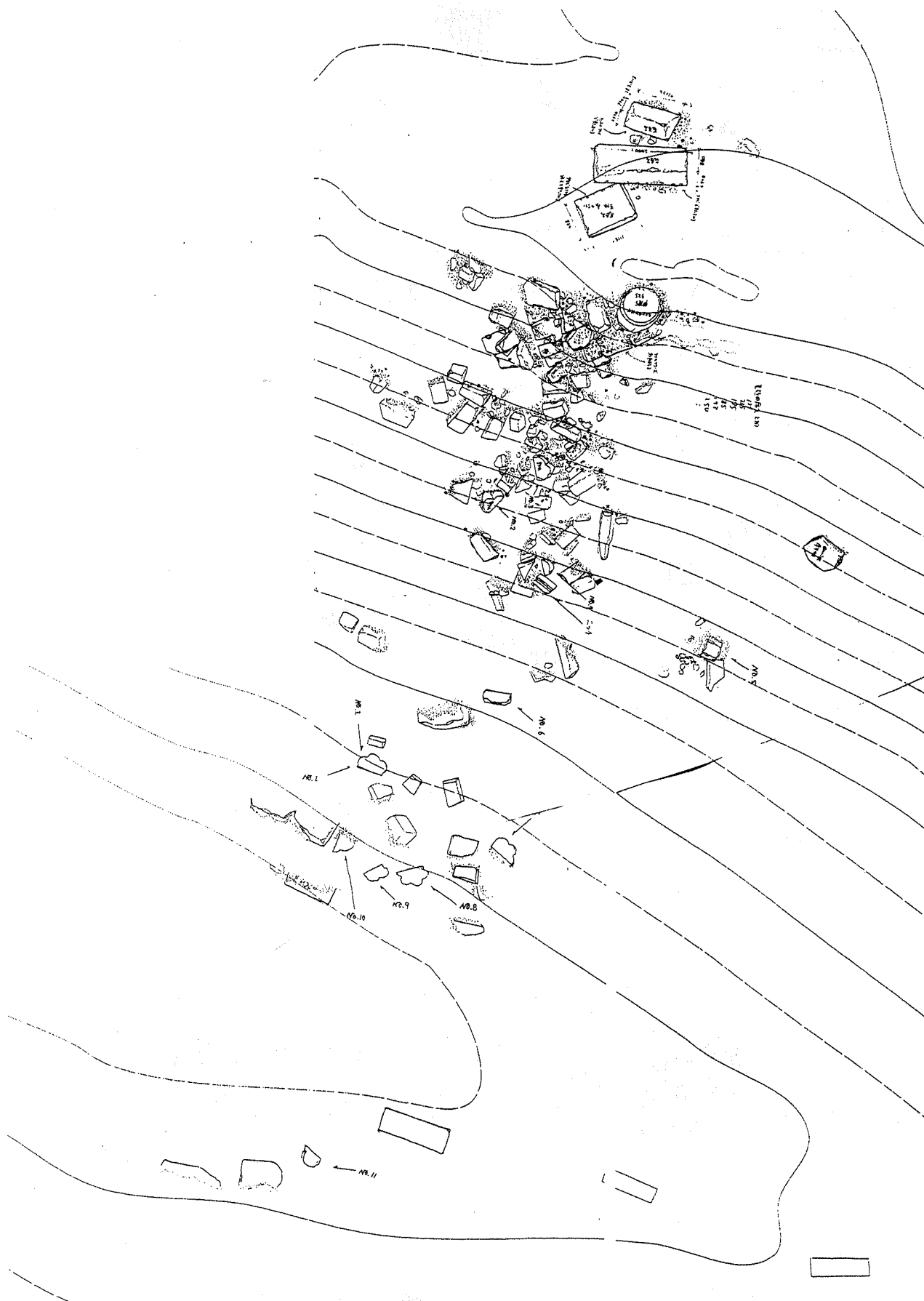


図 30 当遺跡より持ち出された石材の分布状況

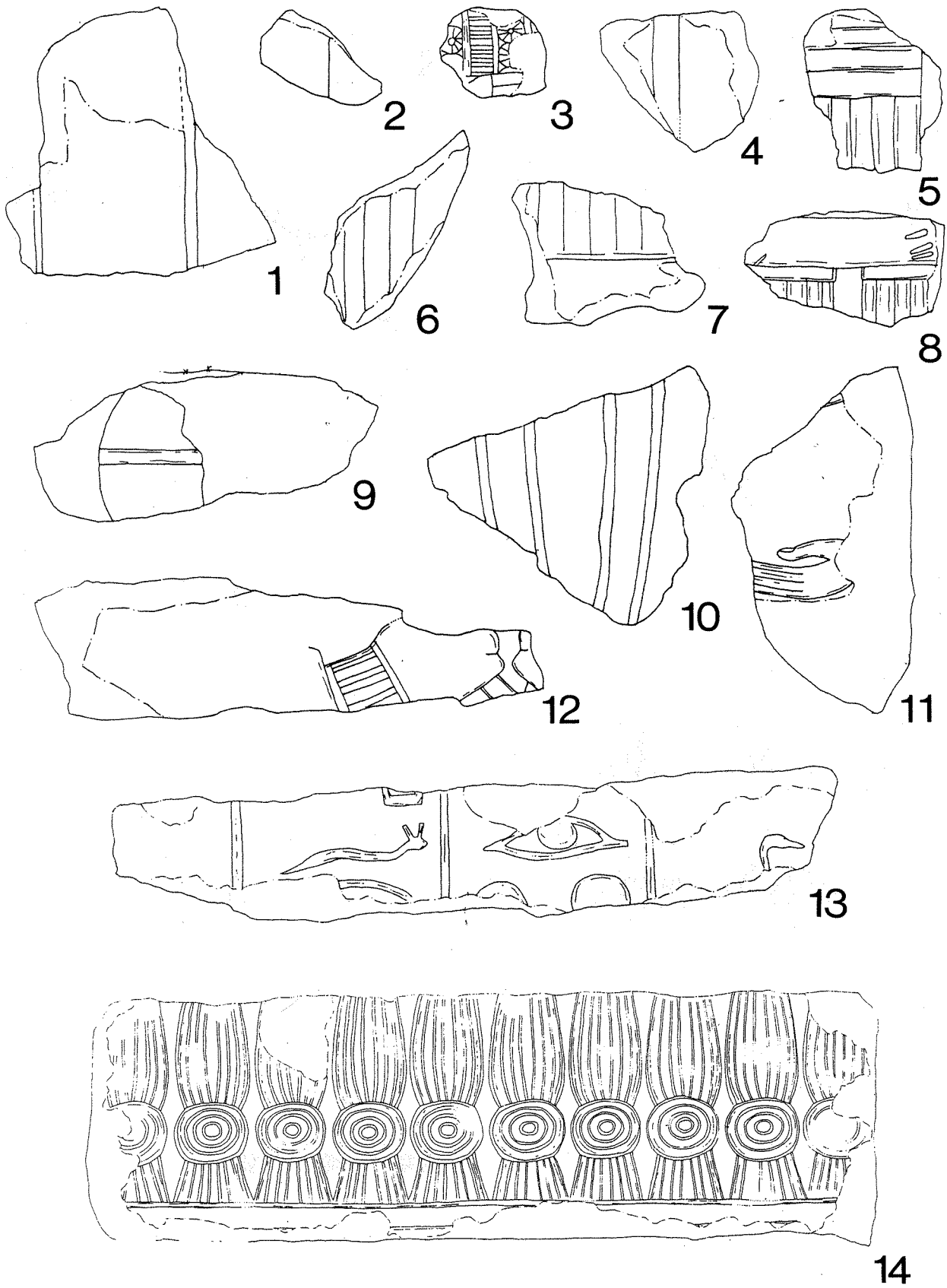


図 31 第 8 次調査出土レリーフ<1>

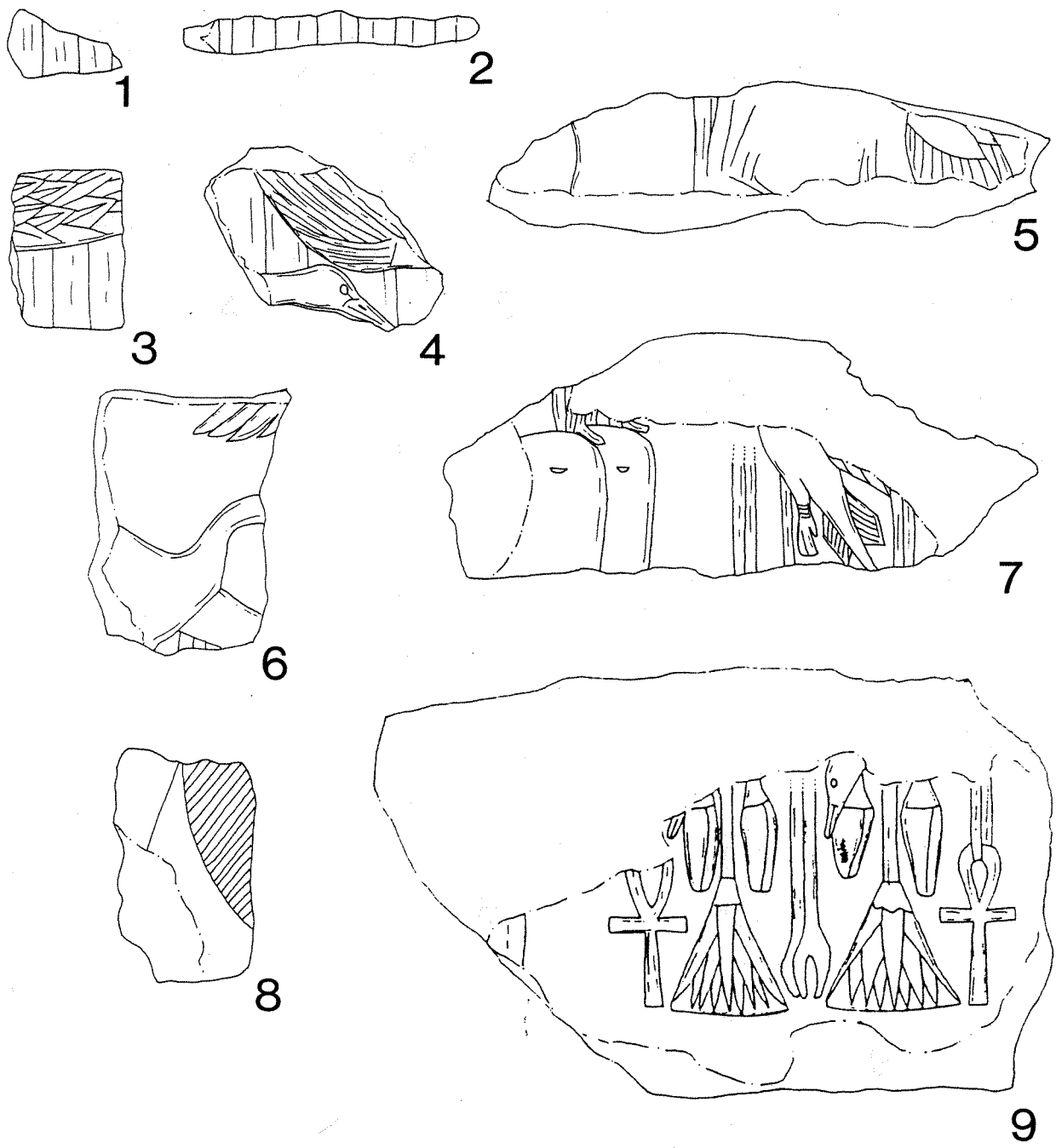


図32 第8次調査出土レリーフ<2>

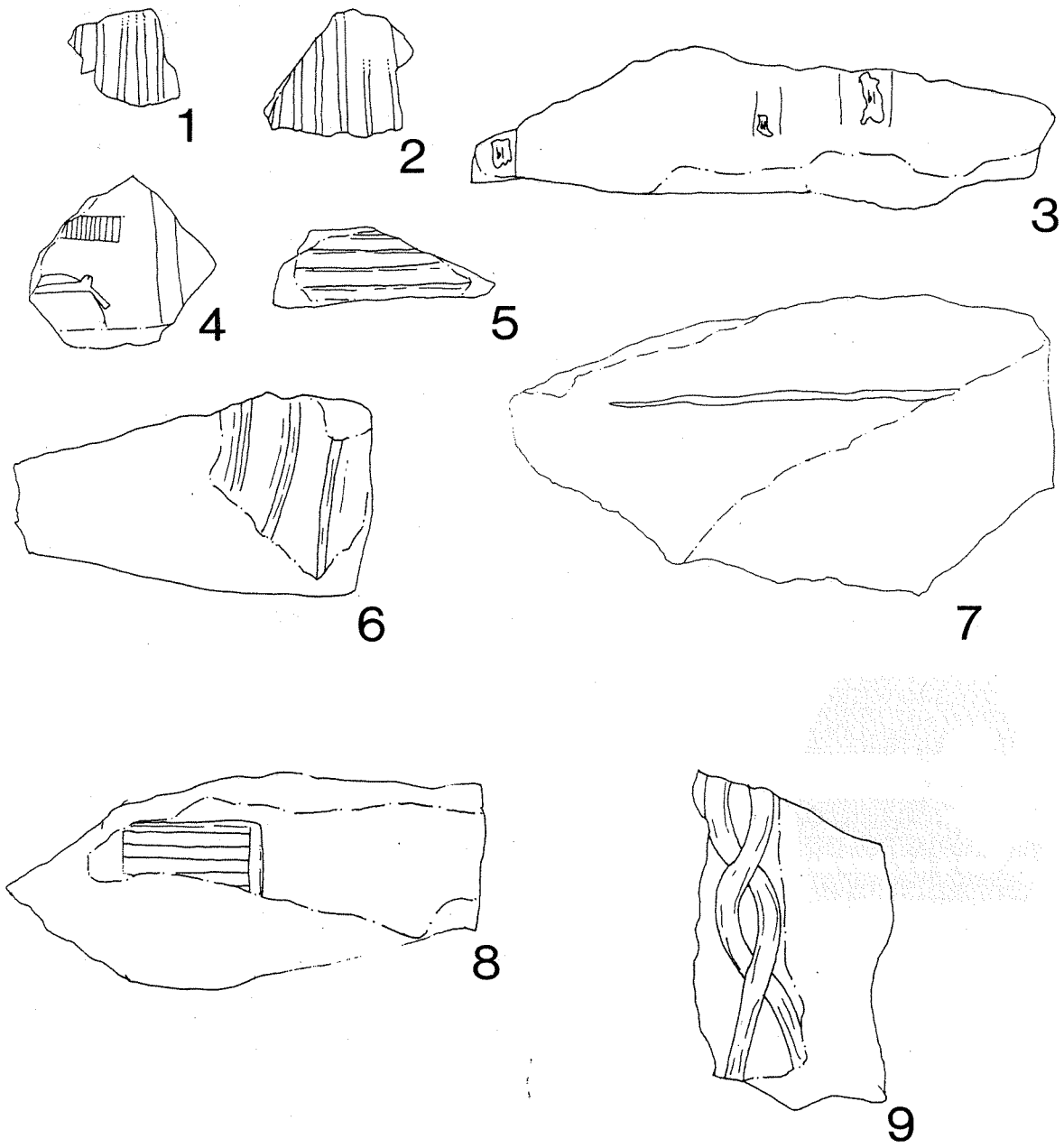


図 33 第 8 次調査出土レリーフ< 3 >

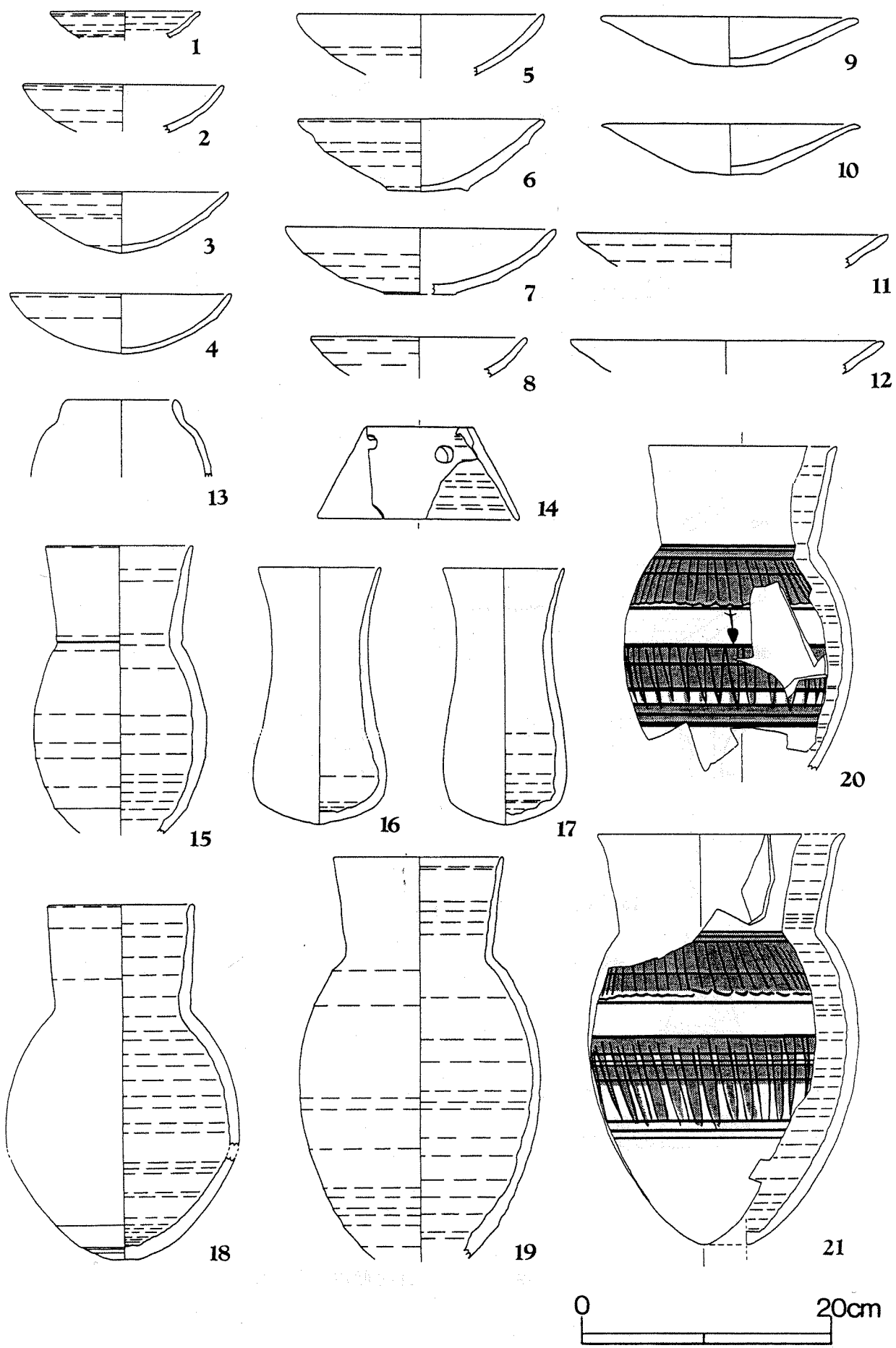


図 34 東側溝出土の土器

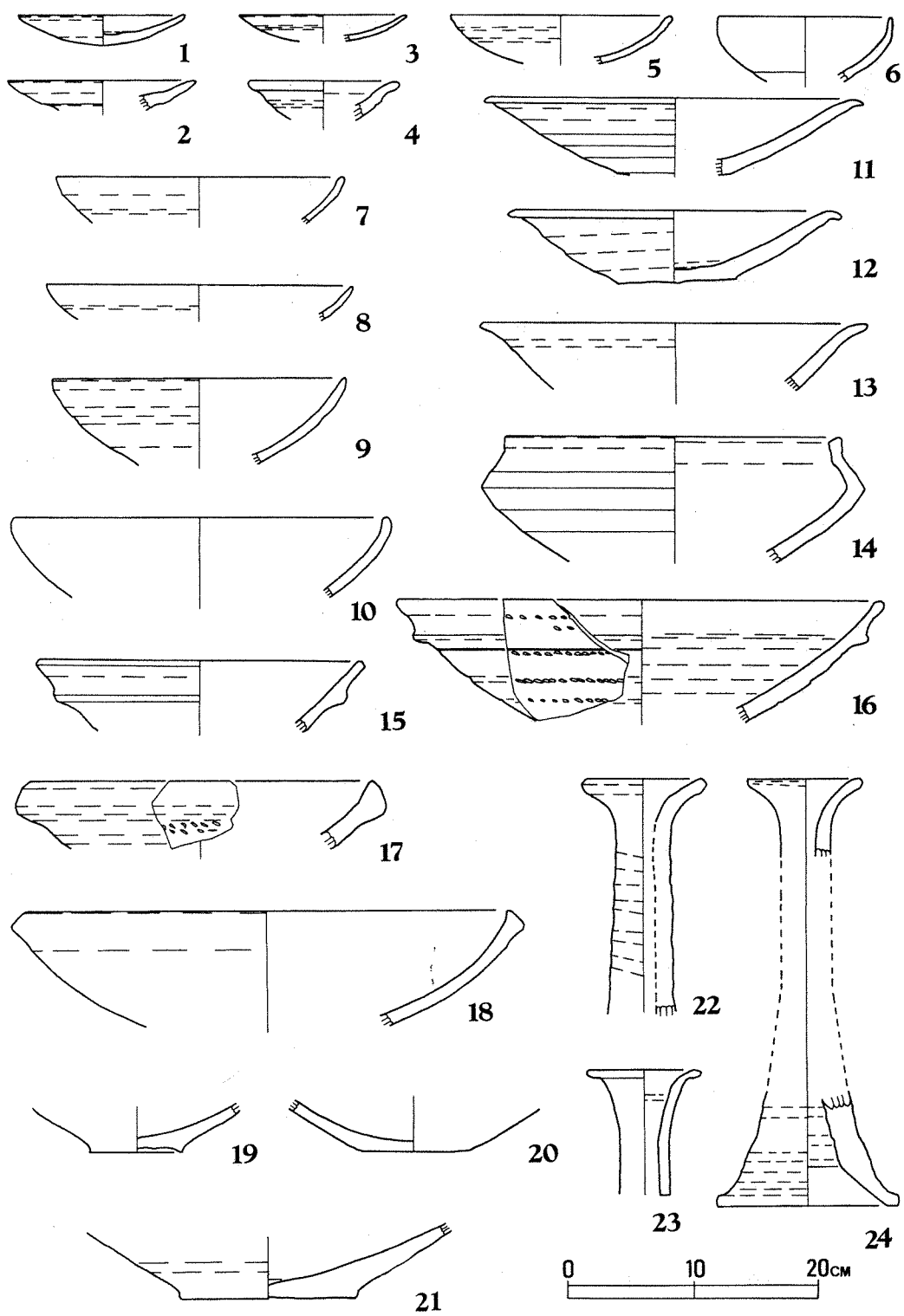


図 35 西側斜面出土の土器<1>

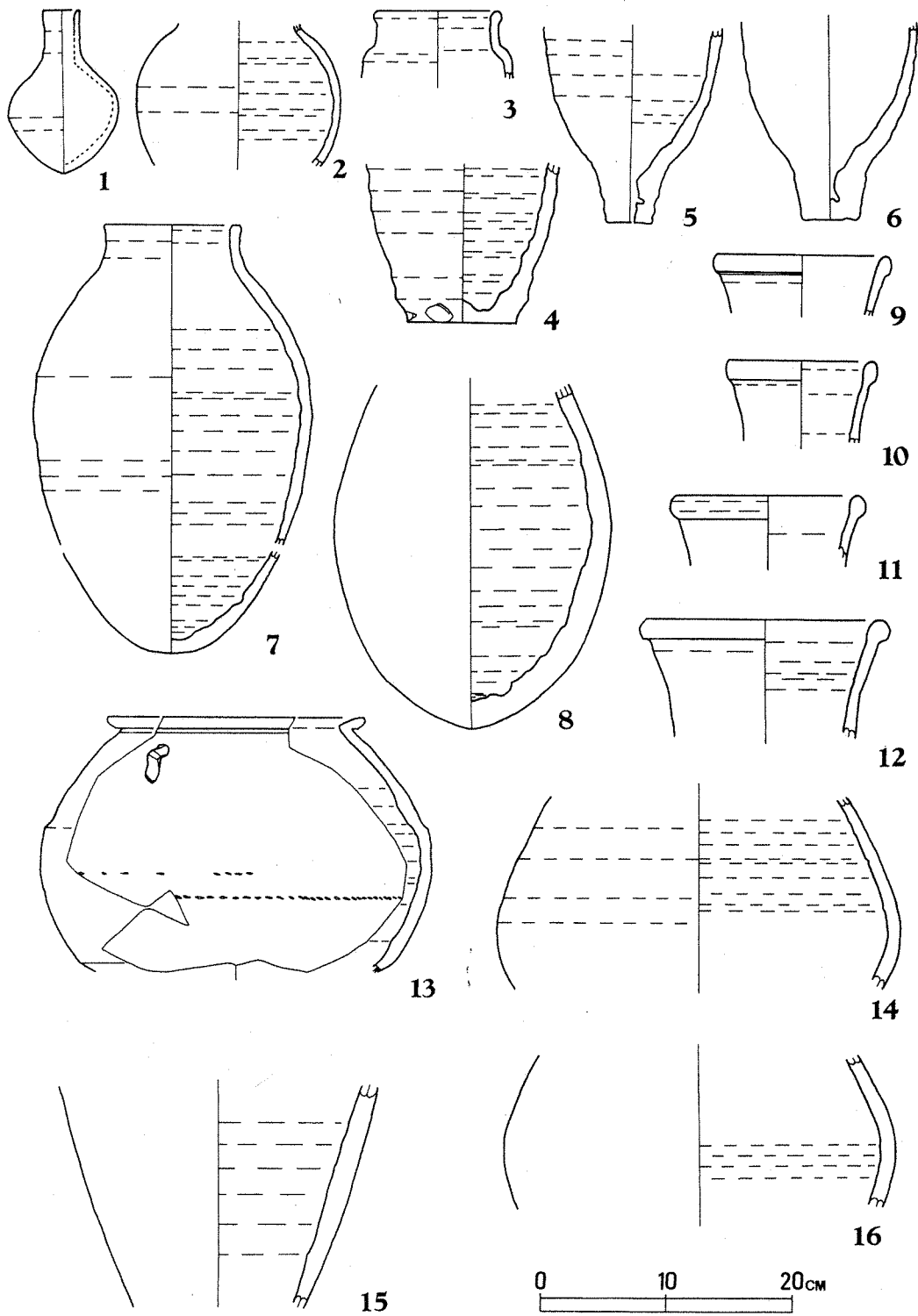


図 36 西側斜面出土の土器< 2 >

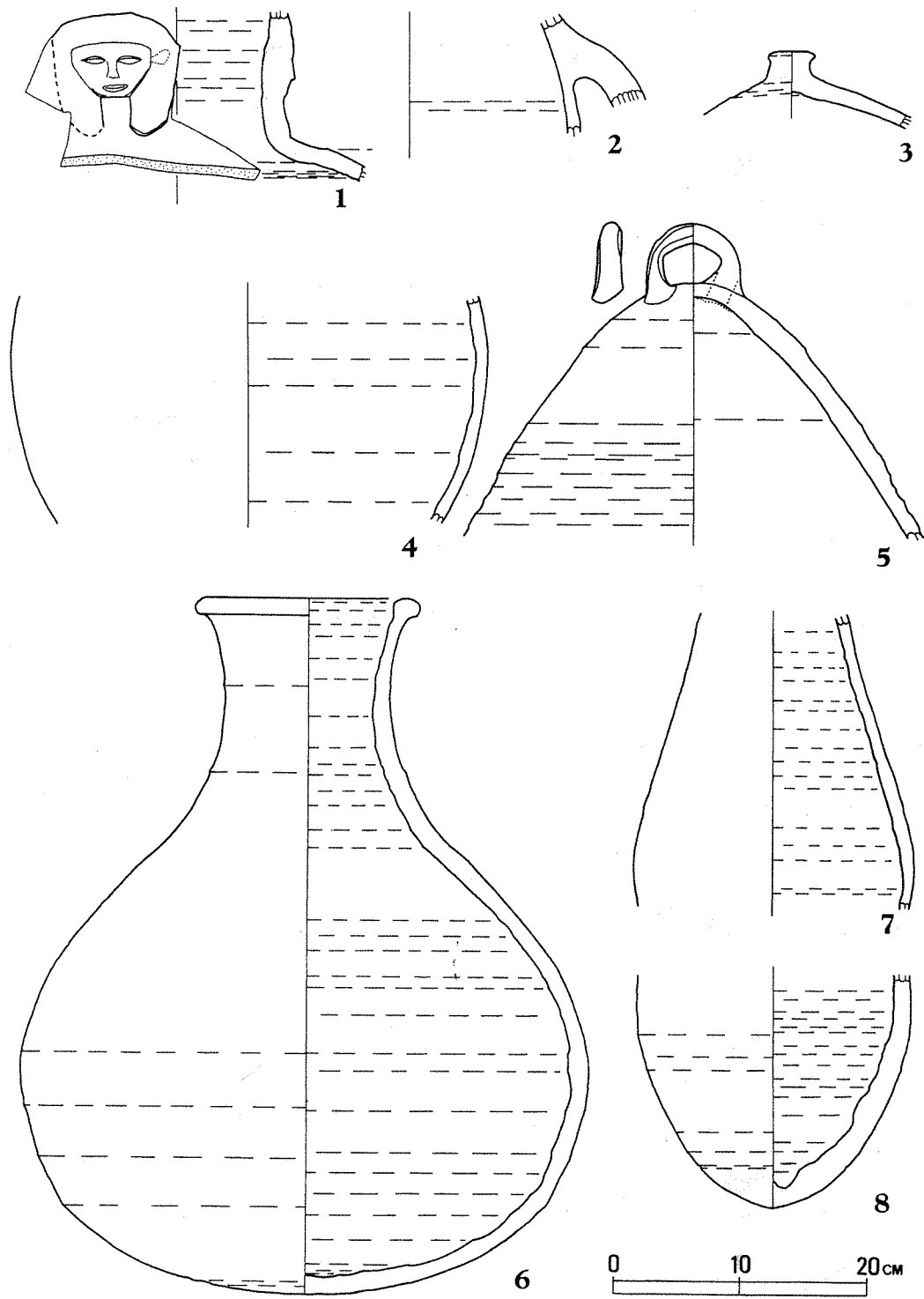


図 37 西側斜面出土の土器< 3 >

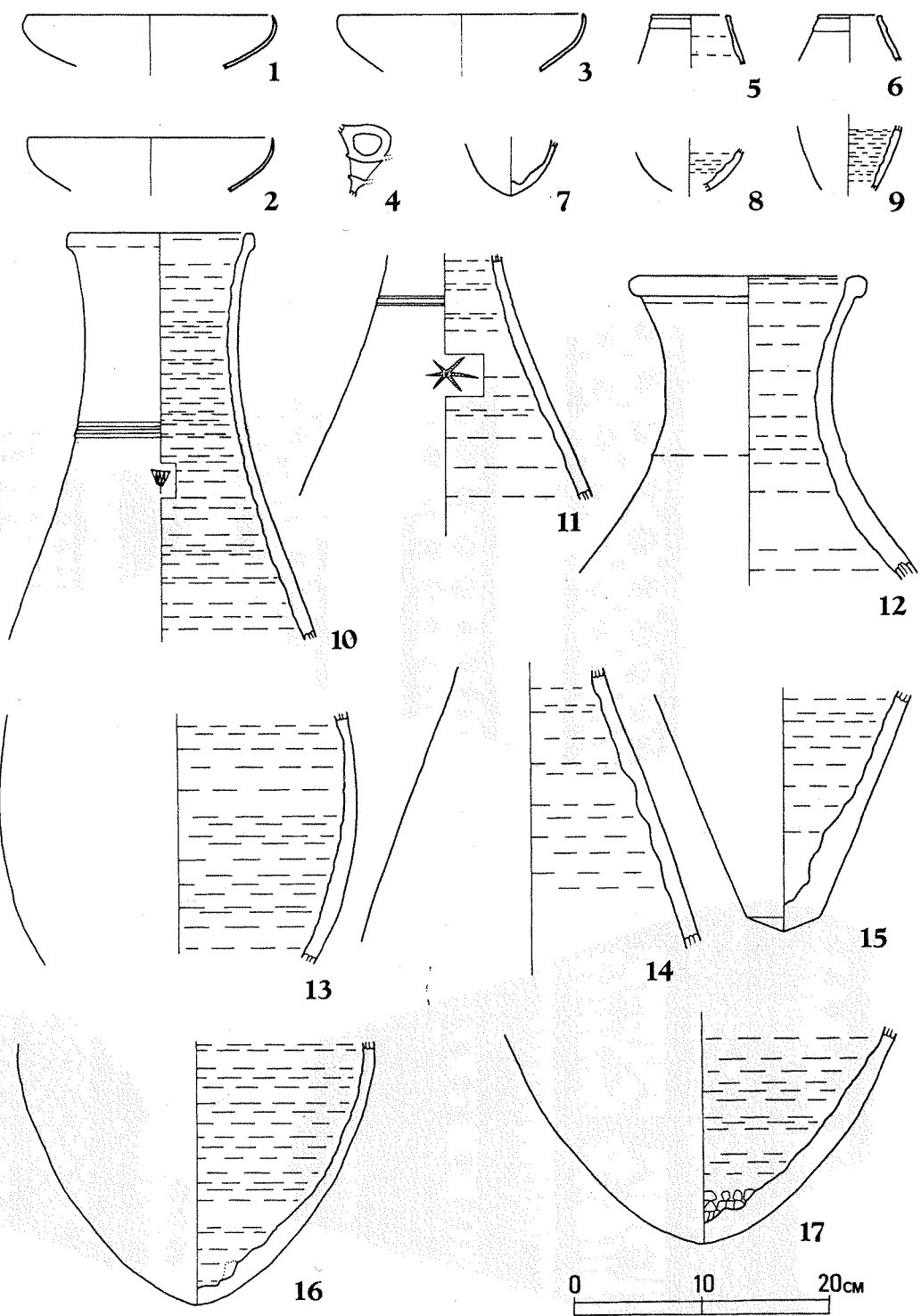


図 38 西側斜面出土の土器< 4 >

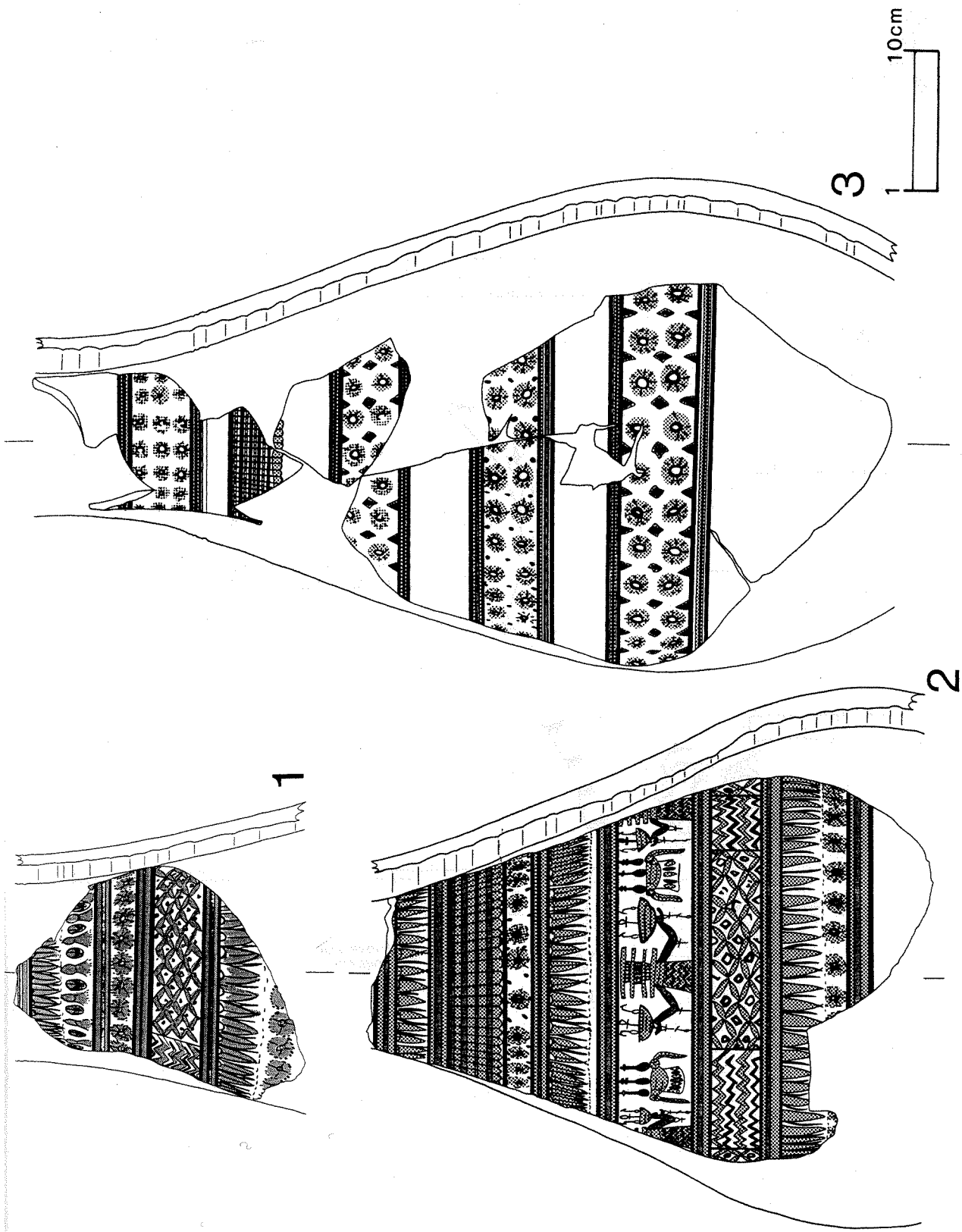
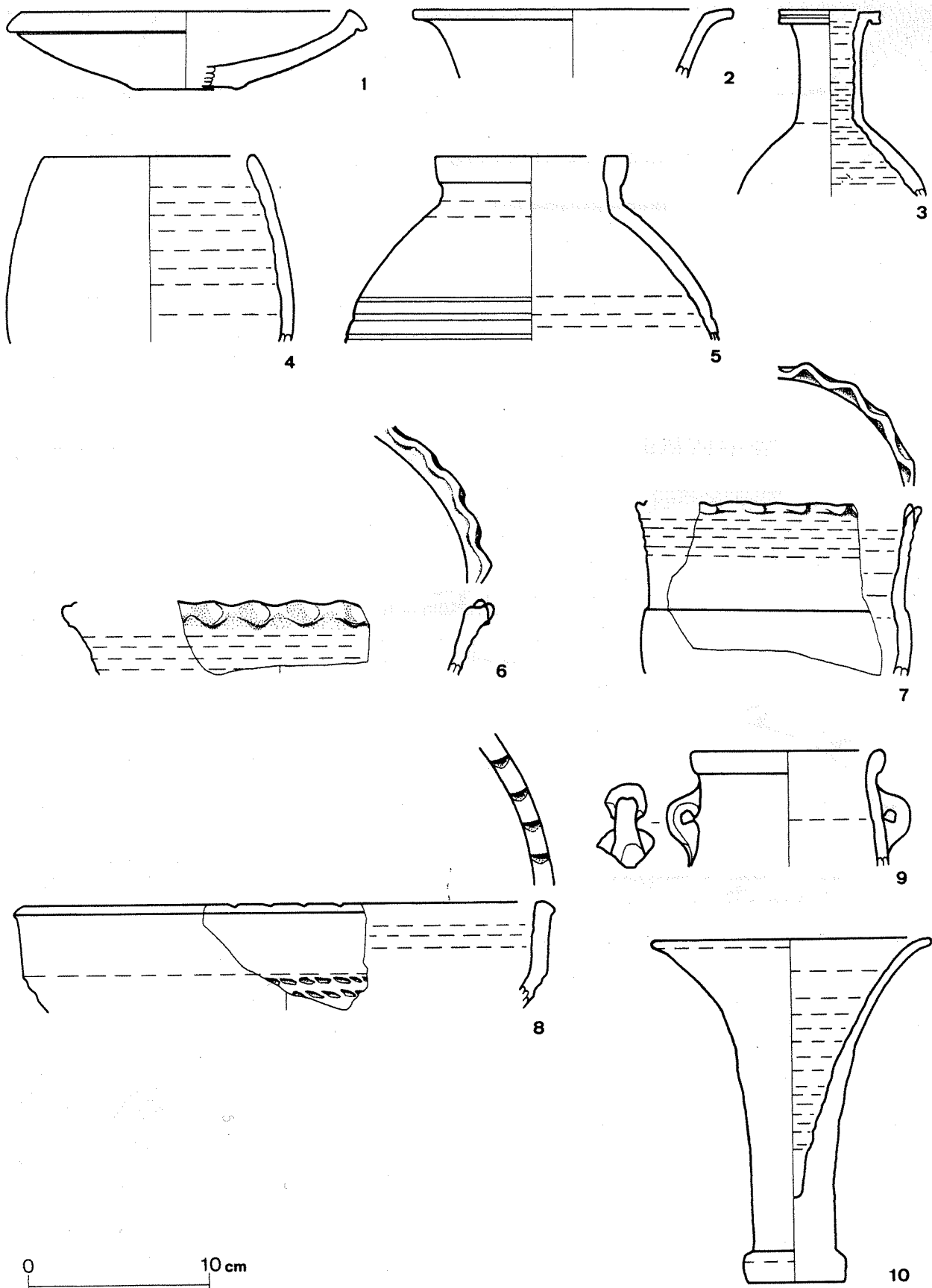


图 39 西側斜面出土の彩文土器



0 10cm

図 40 末期王朝時代の土器<7>

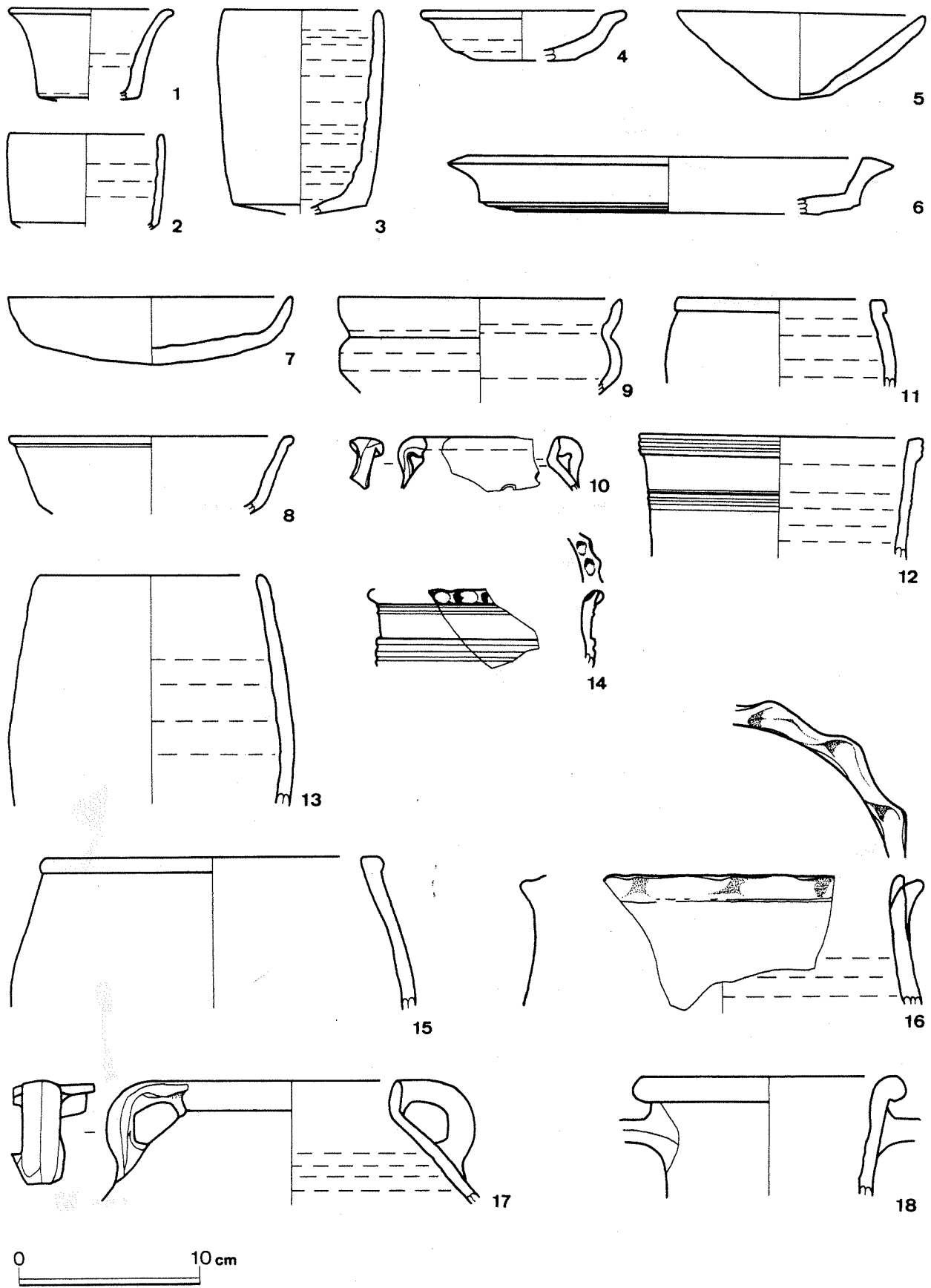


図 41 末期王朝時代の土器< 8 >

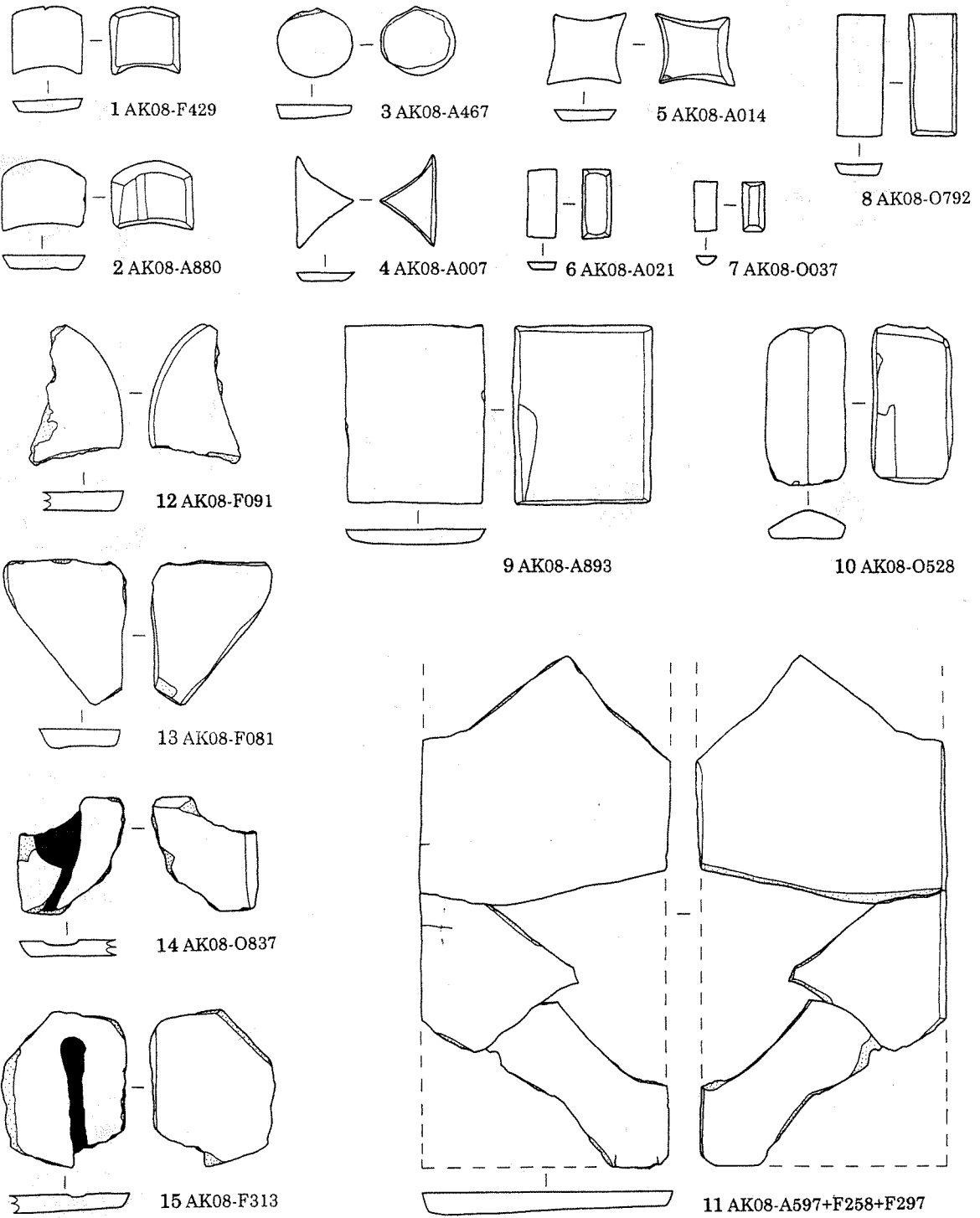


図 42 8次調査出土のその他遺物<1> (ファイアンス・タイル)

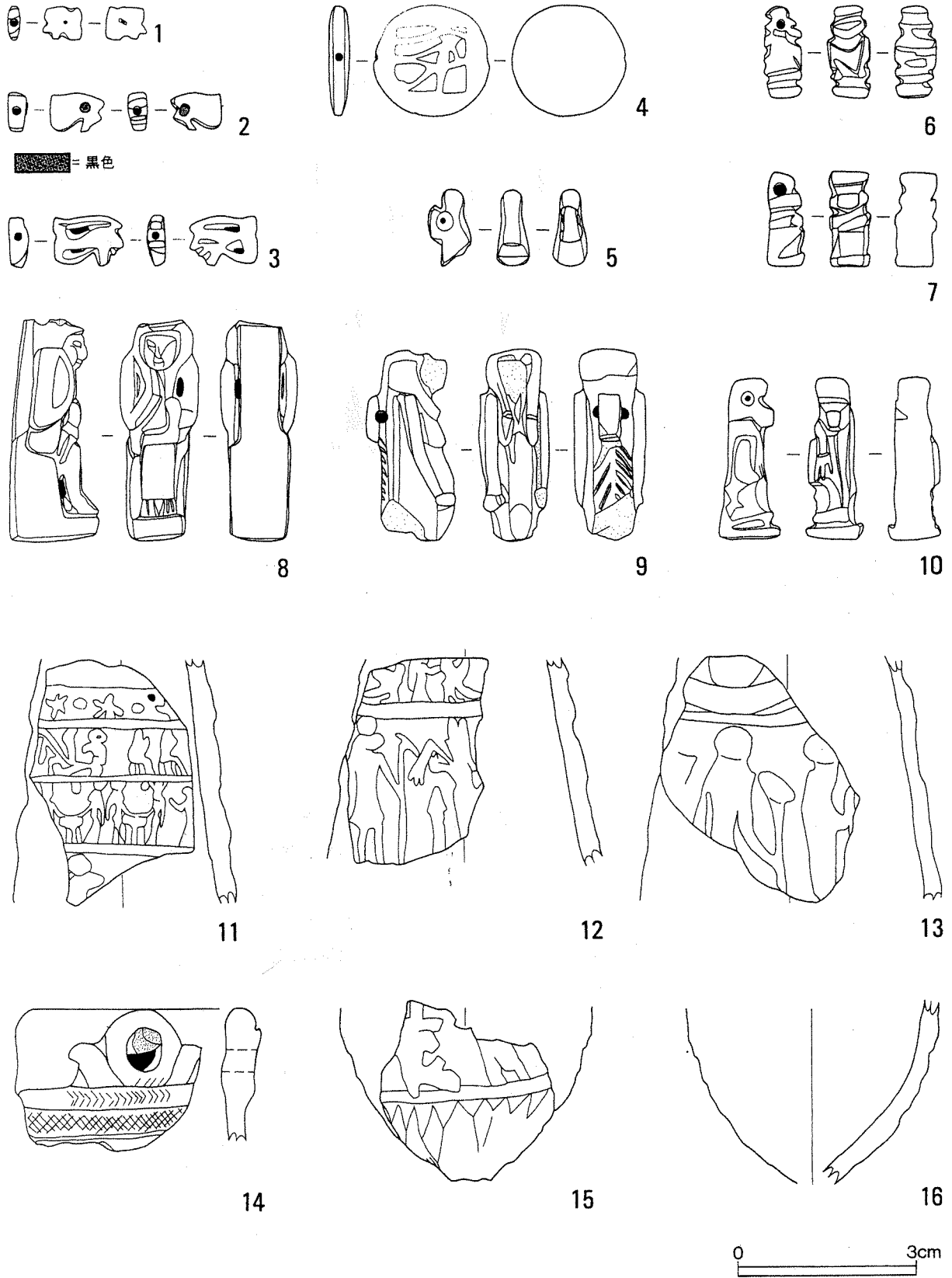
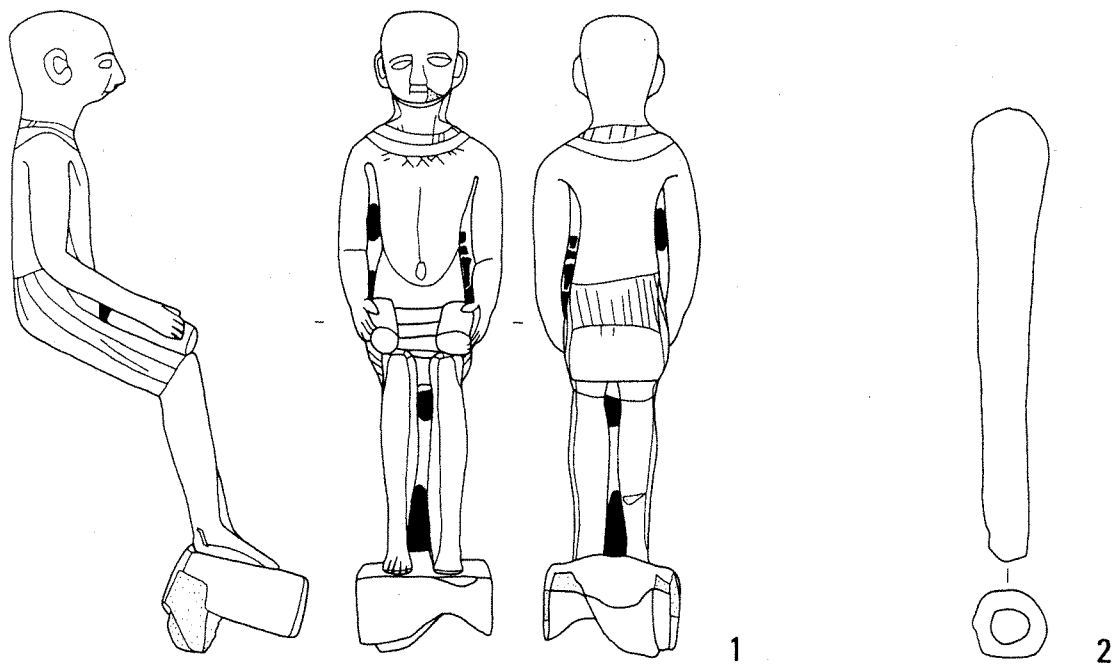
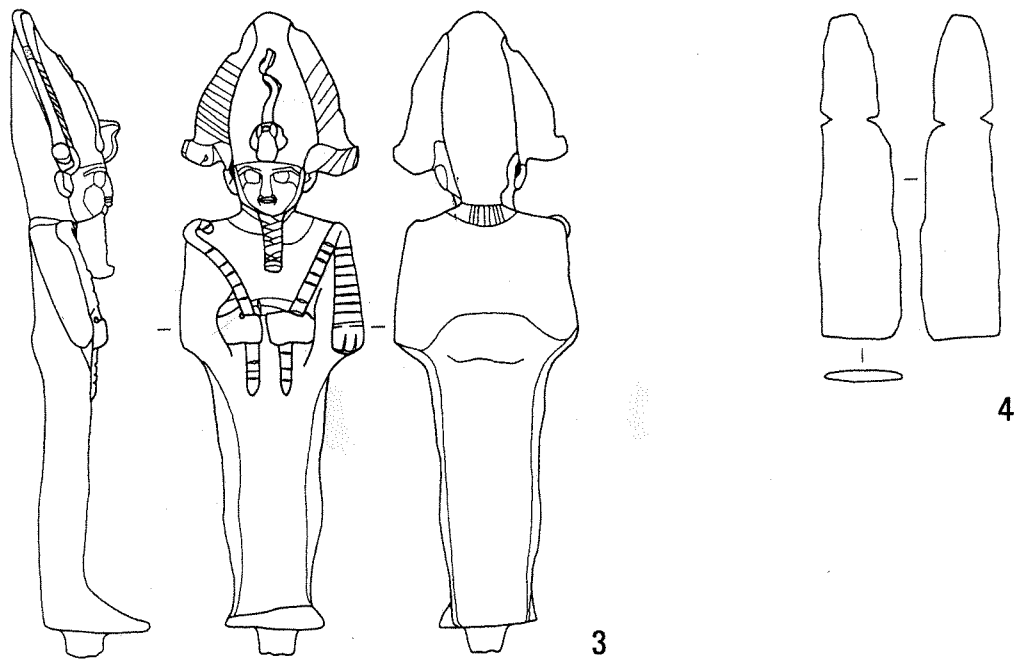


図 43 8次調査出土のその他遺物<2> (ファイアンス製品・銅製品)



(2のみ1/2スケール)



0 2cm

図 44 8次調査出土のその他遺物<3> (銅製品)

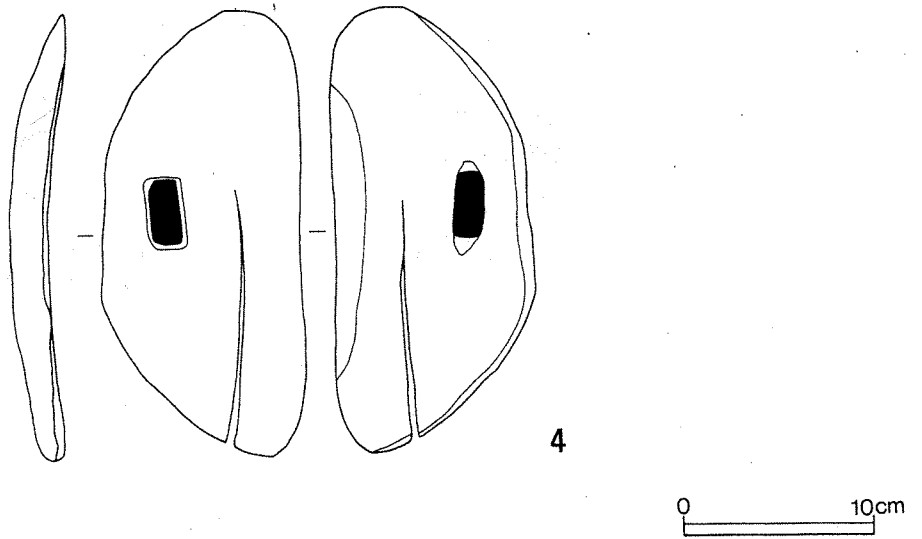
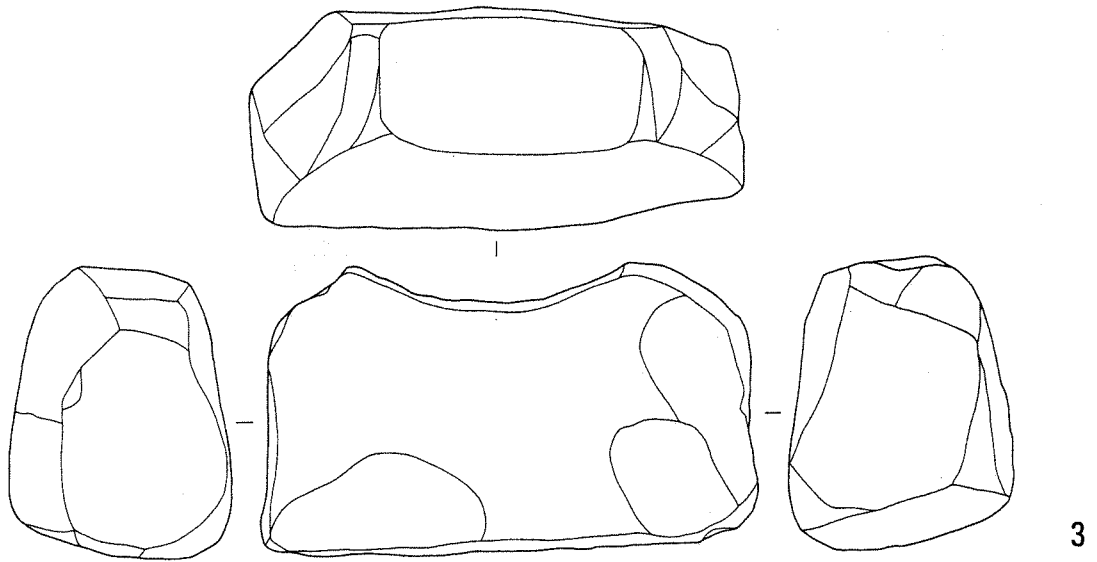


図 45 7次調査出土のその他遺物<4> (石製品・木製品)

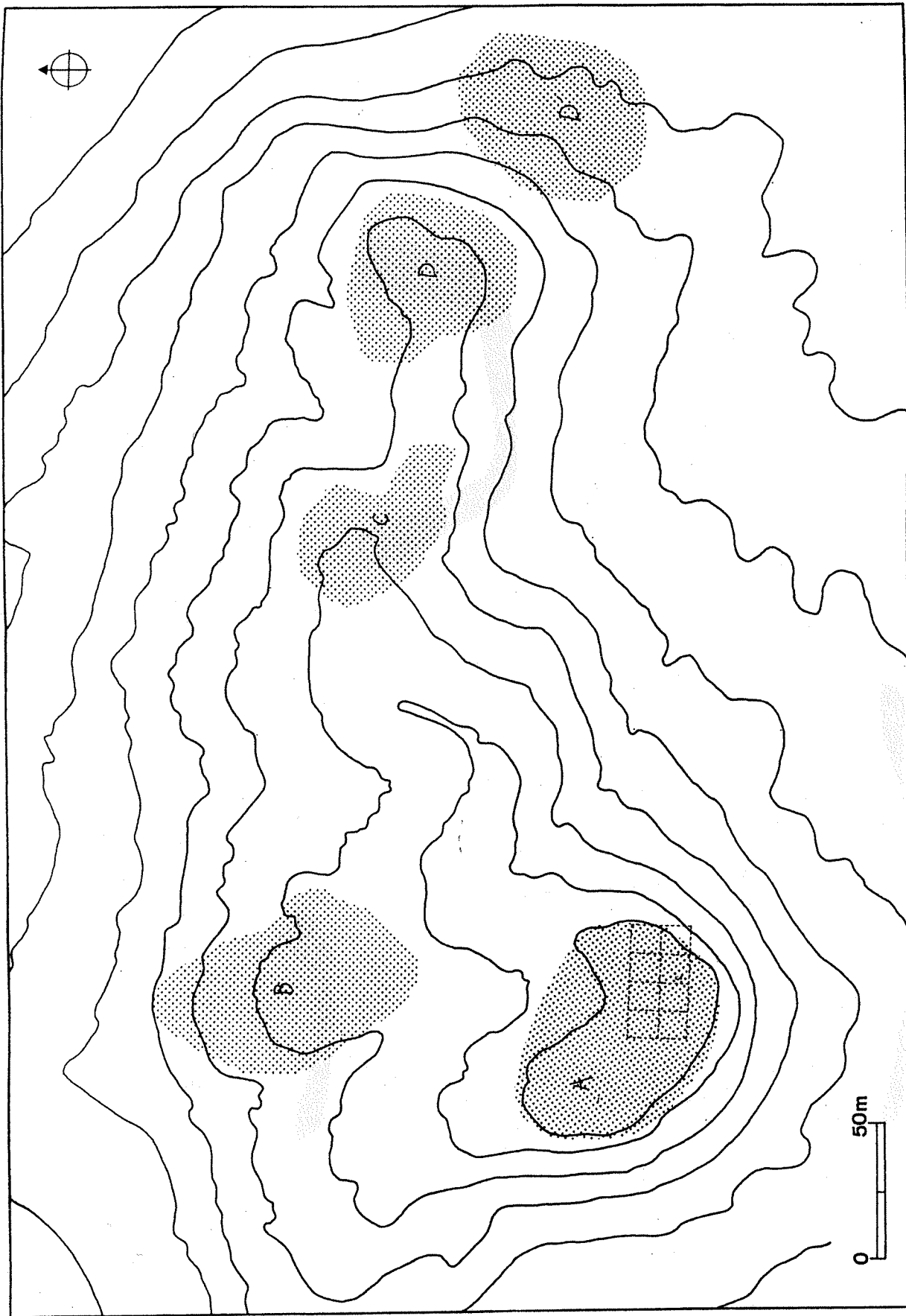


図 46 丘陵頂部周辺の旧石器分布地点

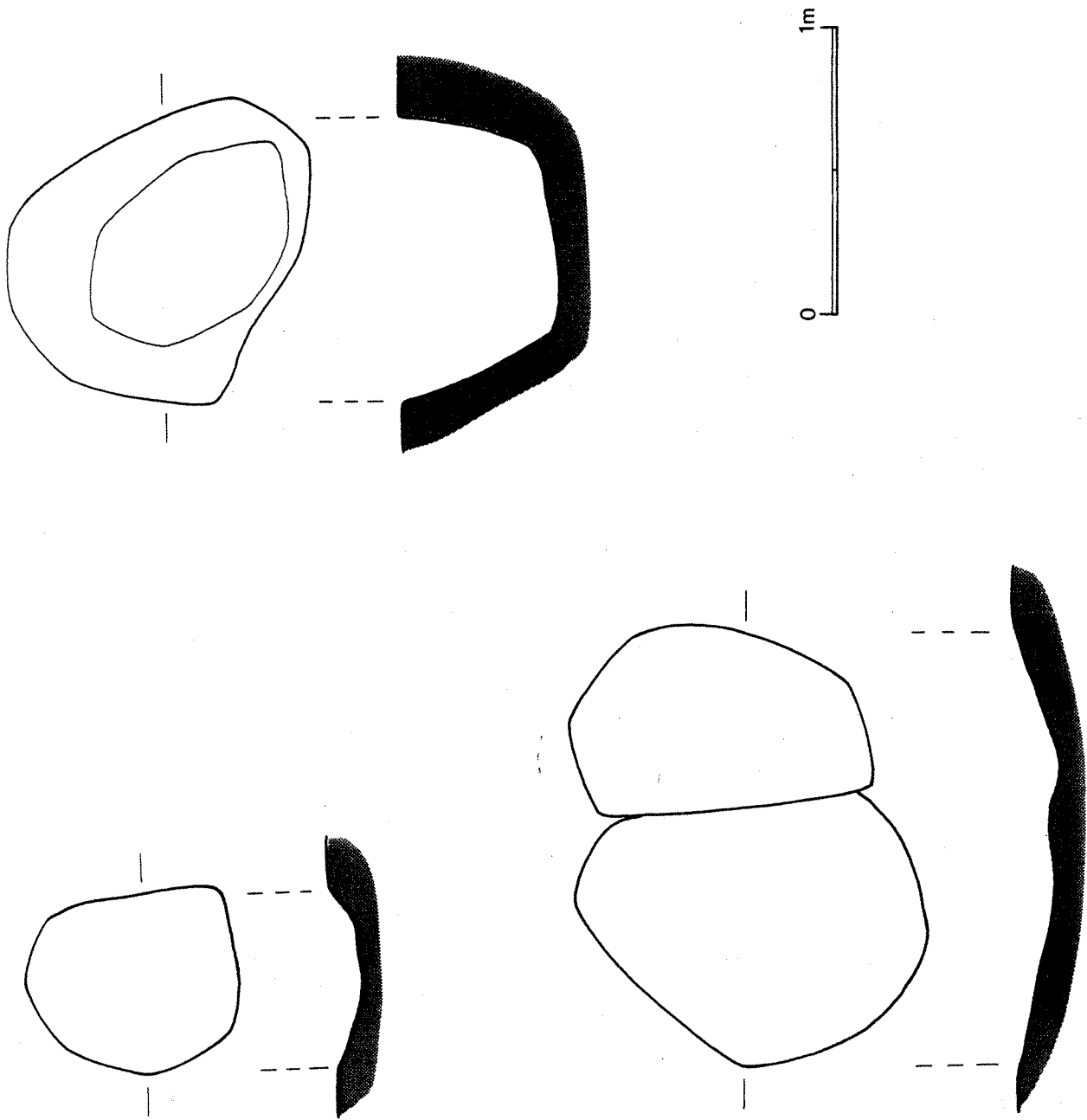


図 47 丘陵頂部で見つかった採掘坑